
ノブ、ずるいやん

奈備 光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノブ、ずるいやん

【Nコード】

N5402H

【作者名】

奈備 光

【あらすじ】

伝承に彩られた隠れ里に起きた連続殺人。聞き耳頭巾の継承者の少女が語った言葉とは。

建築家とその若い恋人がおぞましい事件を解こうと奮闘します。それぞれに思惑を持って集まった都会人と、村人との攻防の根底にあるものを突き止め、新たな事件を未然に防ぐことができるのでしょうか。

建築家生駒延治と自称歌手のプータロー三条優がコンビを組む長編

ミステリーシリーズ3。

(シリーズ物ですが、当然のことながら1からお読みくださる必要はありません)

プロローグ

プロローグ

くりのきからすな
くりのきからすな
おいしこいし
みずのたまつた
はりのあなをば
とおoryんせ
やまあらしは
たくみのゆめ
せんのがあきや
おぎぶをあてよ

山奥の隠れ里。老人ばかりが目立つ村。

移り住んだ綾に、歌い継がれた遊び歌を教えてくれる子供はもう誰もいなかった。

アマガハラノは今朝見たときは印象を全く異にしていた。すがすがしい朝の光の中で隈取のある細い葉を風になびかせていた笹原には、すでに山の影が落ち、徐々に彩度のない世界に入っていたころとしていた。

どこことなく不気味で、しんと静まりかえっていた。

踏み込むことを躊躇するかのようにアマガハラノの入口で立ち止まった者達を、固い意思で阻止しようとしているかのように、クマ

ザサの葉はさらりとも動かなかった。

西脇が叫ぶ。

朝、あれだけ呼びかけてみたのだ。いまさら声が返ってこようとは誰も期待していない。

「さ、行ってみましょう。もう一度、栗の木のところへ」
道長が促した。生駒たちは歩き出した。

「栗の木には行き着けないかも知れないけど」

時折、西脇がうめき声をあげる以外、誰もが黙りこくっている。半日ほどもたって、人がこんなところにひとりでいるはずもない。むなしい行為……。

空気の冷たさがそんな思いを募らせた。

生駒は振り返って笹原の中からも見えそうな大きな木を探した。万一、笹原の中で迷ってしまったては困る。目印を確認したのだった。そして列の最後を歩きながら、別のことを考えた。改めて栗の木の伝説のことを。

しかし今は空想に耽っているときではない。思いなおし、振り返って目印の木が見えていることを確かめた。

西脇と仙吉が踏み分け道の両側の笹を掻き分け始めた。

これだけクマザサの密生した中をしらみ潰しに調べるといのは、気の遠くなる作業だ。しかも陽はすでに西に傾き、陽の光は笹の中央まで届いていない。無数の薄暗い小さな空間を闇雲に覗いていくようなものだ。

しかし生駒も優も道長も、それぞれの持分が決められたかのように笹を掻き分け始めた。そうしながら徐々に笹原の奥へ分け入っていった。

かなり長い時間そうしていたように思う。

「道が狭くなっていると思わない？」

優がつぶやいた。

誰も返事をしなかったが、朝、笹を切り倒し、かき分けて作った道が狭まっているのを生駒も感づいていた。

もしやこのアマガハラノの結界は活きているのではないかと思い始めたとき、ついに道長が声を上げた。

「あ」

仙吉と西脇がいっせいに振り返った。

「ここ」

笹が不自然に倒れていた。

笹が脛の辺りで刈られているのだが、それがまとまって根元から折れている。何度も踏みつけられたかのように。

そのこと自体はおかしなことではないが、倒れている方向が踏み分け道に平行ではない。

「誰か、ここで転んだかしら」

道長が努めて冷静に言ったが、その声が消えないうちに、西脇が笹の屏風に猛然と頭ごと突っ込んだ。

頬にすっと血が流れたが、かまってはいない。

「あっ！」

次の瞬間、西脇が声をあげたときには、だれもが最悪の事態を覚悟していた。

「これは！」

笹が両側に押し倒されて、細いトンネルのような空間が開いていた。上からでは一面の笹原のように見えるだろう。しかし笹の茎は明らかに折り曲げられ、人かあるいは大きな獣が通った跡のように一筋の狭い空洞ができていた。

西脇が飛び込んでいく。仙吉が後に続く。生駒も。

西脇の悲痛な叫び声がこだました。

再び響く声。もう、悲鳴だった。

男は、クマザサの密生する藪の中に、細い獣道のような空洞の突き当たりに、冷たくなって転がっていた。

なにものかから身を守るかのように、体を丸めた格好で。

背中から流された血は赤いTシャツに沁みこんで、すでに黒く乾いていた。

またひとつ、悲鳴がこだました。

振り返ると、ユウが顔色を変えていた。

「道が消える！」

笹原がじわりと動いたかのように、今通ってきたばかりの道が笹に覆われようとしていた。

「まずい！」

このままでは山奥の笹原の中に取り残されてしまう。夜が迫っていた。

西脇を引きずるようにして、五人は原っぱの入口に向かって駆け出していた。

「携帯ストラップは！」

「だって、写真撮ることないと思ったから！」

ユウは先頭を駆けていく。

「大事なときに！」

「あーん、手が切れた！」

恐ろしいことが起きていた。あの事件からちょうど一年後、狂気がひとつ、あるいはふたつ、村を覆う大気を震わせていた。

屋敷の大広間の襖は開け放たれ、人々が押し黙って座り込んでいた。高熱を発して寝込んでしまったものもいる。

てんでバラバラバラに座った人々は、白々とした蛍光灯の元で、警察からのなんらかの連絡を待っていた。

部屋の隅の座卓には折り詰め弁当が積まれていたが、まだ誰も手をつけていなかった。

重苦しい座敷の隅で、生駒にはこの村を訪れた昨夜からの出来事を反芻することしかできなかった。

蛍が……。

第 1 章 「サヨ伝説」

「あ、光った」

昼間の蒸し暑さがうそのように、谷間の空気は冷たさを帯び始めている。まだ短い葦の葉が風にそよいでいる。

田の蛙がいつせいに鳴きだしたが、人の気配を異変と感じたのか、ぴたりと鳴き止むとあたりは再び静まりかえった。

瀬の音がこだまし、静寂を際立たせる。

生駒延治は優が指さす先を見透かした。木々の暗い枝下あたり。徐々に迫る夕闇。

さつきまで泳いでいた無数のおたまじゃくしやイモリの姿は、もう判然としない。空はかろうじて青さを保っていたが、深い山に囲まれた小さな村にはいつしか闇が降り、蛍がつかのまの乱舞を始めようとしている。

緑がかった小さな白い光が、林の暗がりのスーツと横切って消えた。

「よかった。ひとつだけでも見ることができて」

優がうれしそうな顔を見せて、軽やかにせせらぎ沿いの小道を駆けてくる。

大きくウェーブした長めの髪が揺れる。広がりつつある薄い闇の中で、レモン色のシャツがほんのりと光っているように見えた。

「あ、こっちにも」

生駒はこわばった膝をさすりながら立ち上がった。振り返ると、目の前で白い点がぐっと力を込めたように強く光った。そして力を抜くように消えた。

「ふたつ見られたな」

「あ、ノブ、いいやん」

「ん？」

生駒の墨色のTシャツの脇腹に白い光がとまっていた。そっと両手を添えると、光は難なく手の中に収まった。

「見せて」

「ほら」

危険を察知したように、先ほどの悠長な光り方ではなく、アラームのように激しく点滅している。

「逃がすよ」

手を開き、ふっと息を吹きかけると、蛍は光を発したままゆっくりと飛び立った。

「蛍ってさ、死んだ人の霊って言わない？」

「そう？」

「さっきの蛍。ノブの知ってる人かもよ」

「うへっ」

「ハハ、ビビッてる」

「しょうもないことを」

ひとつの記憶が蘇ってくる。一年前、川に身を投げて死んだ娘……。

「ほらほら、気にしてる」

「しつこいな」

生駒は橋を見上げた。あの日、あの橋の上で、娘は谷を渡る風に長い髪をなびかせていた。

「さ、行こうか。そろそろ時間や」

「なんか、あまり気乗りしてないみたい」

「まあな」

「声が暗い」

「メンバーがなあ」

屋敷に人の気配はなかった。

サヨ伝説

江戸時代の末期のことである。世が動乱の期を迎えることになる少し前の時代。

これまで鉄の統率を誇っていた幕府の力にほころびが目立ち始めていた。

日本各地で社会変革の萌芽が、長い冬を越した草々が雪解けとともに動き始めるように、さまざまな形で表れ始めていた。それは折から襲った飢饉をきっかけとする農民の暴動の形を取ることもあったし、下級武士のクーデターという形を取ることもあった。また、幕府の目を盗んで藩が独自に開発した鉱山での苛烈な労働に耐えかねた農民や罪人が起こした暴動、というような形を取ることもあった。

そして争いに破れたものたちは、山中深く逃げ込み、隠れ里を築いた。しかし彼らが落ち着いたところは耕作に適さない深い山の中で、自給自足の暮らしを営むことができない。おのずと彼らは周辺の村々を襲い、食料や生活に必要な品を略奪することによって生計を立てることができなかった。

この地域にもそんな隠れ里があった。

しかしどの村の長も山賊退治を藩に掛け合うことをしなかった。それと引き換えに、藩の役人がなにかにつけてちらつかせている街道の普請を村に押しつけて来ることを恐れていたのである。

しかも役人は、万一その山賊の討伐に失敗したときに自らの職責を失うことを恐れ、その約束を反故にする懸念もあるからだった。村としても、山賊に襲撃されてもそれは一時的なものであり、延々と続く負担や働き盛りを普請の現場に奪われるより、まだましだっ

ただ。

そんな不穏な時代の出来事である。

ある新月の夜、ひとりの若い女が、庄屋の屋敷において両親や一族のものと別れの杯を交わしていた。傍らに、五穀を詰めた小さな袋、提灯、菅笠といった旅装束が調えられていた。

普通の旅でないことは、女が白装束に身を固めていることからわかる。屋敷の奥にある、村人の信仰厚い岩代神社の神及び山ノ神に、今年の豊作を祈願する貢物として出立しようとしていたのである。

当時、この村は現在と同じように小さな村で、度重なる山賊の略奪に加え、数年来続いた飢饉によって困窮を極めていた。

もはや神仏に頼るしか残された道はない。人身御供の娘はもう戻ってくることはない。神に召されて天に昇るのだ。そしてこの村には神のご加護が下されるだろう。これが最後の選択肢である。村の長老である采家の筆頭、久次郎が村人に説いた。

村人はその言葉を疑うことはなかったし、たとえ疑いを持ったとしても、村全体の生死に関わる決定に反対することは許されなかった。

これに先立ち、屋敷の裏には木戸が設けられていた。神社へは娘ひとりが向かわねばならない。誰も人身御供を追うことがないよう、また、恐れた娘が舞い戻ることがないようにするために。

娘の名はサヨ。歳は十六。

久次郎の一族、分家である忠八の娘であった。

はたして、宵闇が迫るころ、時ならぬ横笛の音が山中から聞こえてきたときを見計らって、サヨは裏木戸をくぐった。そしてゆっく

りと振り向くと見送りの両親たちに深く頭を下げた。

ごうごうと音を立てて燃え盛るかがり火に照らされて、サヨの白い顔に朱色の影が踊っていた。

サヨは頭を上げると、もう誰の顔も見ることなく、毅然として前を向き、真っ暗な木立の中に足を踏み出していった。

死出の旅路の供をするように、装束の肩に蛍がとまっていた。その放つ光が三度も明滅しない間に木戸は硬く閉ざされ、屈強の男共がその扉を固めたのである。

久次郎はサヨを送り出した夜、まんじりともすることなく朝を迎えた。一番鶏が鳴き、空が白み始めるとき、寝ずの番をしていた男に木戸を開けさせ、誰も追ってくるなど言い置いて神社に向かった。久次郎は村おさであると同時に神社の神主も兼ねていた。村の代表であり、まとめ役であり、村人の生死を分けるさまざまな決め事を実行する立場にあった。

屋敷と神社とは五町と離れていない。しかし久次郎はなかなか戻ってこなかった。

日が昇りきり、空気が暖められて、山あいには川霧が発生する時刻になっても姿を見せなかった。

久次郎の妻、ギンは気が気ではなかった。久次郎はサヨの姿がないことを確かめるとすぐに戻ってくるはずなのに、戻りが遅すぎる。しかし居ても立ってもいられなくなったギンが、とうとう息子の義助を岩代神社まで見にやらせたのは、もう陽が天空の中央に差し掛かってからのことであつた。

しかし義助は屋敷を出るや否や、すぐに戻ってきた。
「たいへんだ！」

ギンを先頭に、久次郎の郎党が木戸を駆け抜けていった。
そして彼らが見たもの。それは鮮血に染まったむくろだった。

うつぶせに倒れた久次郎。

その亡骸の下で、サヨの着ていた白装束に血が染み込んで不気味な文様を描き出していた。

久次郎は木戸からほんの一町ほど離れた山道の途中で死んでいた。
木々に囲まれ、一段と薄暗い曲がり道。

岩代川の瀬の音があたりにこだましていた。
すでに無数のハエが、久次郎の顔や腕のいくつもの無残な切り傷に群がっていた。

ギンはその場で、久次郎が切り殺されたことを居合わせたものたちに口止めた。そしてすぐに村の若い者を動員し、村から出る街道や間道を走らせるよう指示を出した。夜の間、木戸は閉ざされていた。しかし、森の中を抜けて逃げ出してくることはできる。

サヨを探せ！

ギンは久次郎の亡骸を屋敷に持ち帰り、新しい衣服に着替えさせて庭からよく見える座敷に安置した。

ギンは焦っていた。村人たちがサヨを追っていたが、もうすでに相当の時間が経っている。もう陽が傾きかけていた。

探し出すのだ。なんとしても陽のあるうちに。

そして予定通り、神社に向かわせるのだ。

しかし、なかなかサヨは見つからなかった。

ギンは考えた。

サヨは今まだ、木戸の向こう側のどこかに隠れているのではないか。

そこでギンは木戸の外側を屋敷に沿って注意深く歩いた。

そして見つけた。屋敷を取り囲む板塀の一部が破りとられていることを。

母屋の床下に隠れていたサヨが捕らえられたのは夕刻になってからである。

サヨを守るように枯れ草が体を覆っていた。もとより、その草はサヨを隠すために事前に持ち込まれていたものである。そして引きずり出されたサヨは、自分のものではない男物の着物を身に着けていた。

サヨは、直ちに久次郎の血糊が染み込んだ白装束を再び着せられ、今度は采家の一族の中から選ばれたふたりの屈強な男に付き添われて神社に引き立てられていった。

男の手にはサヨを縛りつける縄があった。

まもなく、吾一という村の若者が庭に引き立てられてきた。サヨが着ていた着物の持ち主である。

吾一は自分がサヨを逃がしたことを認め、サヨを愛する思いがさせたことであり、夜が来ればふたりで村を抜け出すつもりであったと白状した。

夜、ギンは村人を屋敷に集めた。

庭の中央には急ごしらえの柱が立てられており、裸にされ、両手を頭上高く縛り上げられて宙吊りにされた吾一がいた。

見せしめの儀式が始まった。

神への供え物を奪った村の大罪人である。この吾一の行いのせいで、神はお怒りになり村の長老、久次郎には死が下された。村人全員の祈りをこの男に背負わせ、死をもって神のお怒りを鎮めるのだと宣言した。

まず、ギンが笹のように細い竹の槍を手にした。

先が鋭く削り出されている。それを力任せに、ギンを見据えていた若者の顔面に突き立てた。

グワツと声をあげる吾一。

槍は右目を突き刺していた。

ギンの顔面に血しぶきが散った。

ギンはそれを拭おうともせず、第二の竹やりをサヨの父、忠八に持たせた。

吾一は忠八を睨みつけた。左目には怒りがみなぎっていた。

忠八が近づくと、吾一があらん限りの声でサヨの名を叫んだ。今や神社のどこかに縛りつけられているであろう恋人の耳に届けとばかりに。

忠八は怖気づいて、吾一の前で竹槍を構えたまま、立ち尽くす。

逆上したギンは忠八の腕を掴むと、自分の体ごと吾一に押し被さった。よろめいた忠八が吾一の体を離れると、持っていた槍は若者の左脇腹を貫いていた。

再びあたりに血が飛び散った。

こうして、采家の男どもが一巡し、続いて村の男が誰ひとり余すところなく吾一の体に槍を突き立てたころには、夜はすっかり更け、月が西の空に移っていた。

何十本もの細い竹槍を全身に突き立てられ、もはや目も見えず、血まみれになっても、吾一はまだかすかな息の中でサヨの名を呼んでいた。

ギンが庭の巨岩を示し、この上に罪人を、と命じた。

地面から柱が引き抜かれ、吾一の体が揺れた。その反動で鈍い音をたてて右腕が肩からちぎれ、吾一は左腕だけで柱にぶら下がった。女どもの悲鳴が夜の庭に響く。

岩の上に柱ごとごとりと投げ出された吾一。

多くの材木が放り上げられ、やがて吾一の体は見えなくなった。血が平石から滴り落ち、石の根元に生えている青しその葉を赤く染めていく。

吾一の父、喜三郎は、采家の男たちに両脇を抱えられて、この惨劇の一部始終を見ていた。

母はその場にうずくまり、一心に経を唱えていた。

ギンはかがり火の中のたいまつを一本引き抜くと、喜三郎に押しつけた。

こうして吾一は体中に槍を突き立てられ、生きながらにして焼き殺された。

七度生き返り、八度死んだといわれた惨劇であった。

そして、サヨの家族と吾一の家族は、川向こうの耕作に適さない急な斜面に移住させられ、その地を開墾するように命じられたのである。

たった二軒の集落。それが東村の起こりである。

しかし娘を差し出すという、この神への貢物の儀式は、それ以降、途絶えた。

数年来の豊作が村を潤したからであつた。

そして繰り返して襲ってきた山賊の姿もぴたりと影を潜めていた。

山中に鉱脈が見つかり、鉱山を開発しようとする藩の手によって山賊は討伐され、降伏したものは鉱夫として雇い入れられたからである。

食い詰めた農民の中にも鉱夫として山に入つたものがあつた。

しばらくして村にひとつの噂が広まつた。

久次郎が村を救うために考え出した神への貢物の儀式は、真つ赤な嘘だったというのである。山賊との密約だったというのだ。

久次郎が山賊と結んだ密約とは、三年おきに村の娘を差し出す代わりに村が襲われることを免れるというものだったという。久次郎は、村人の信仰の厚い岩代神社の神及び山ノ神に豊作を祈願する貢物として娘を差し出すと偽つたのである。

村人の不審をかわすため、最初の人身御供となる娘は采家の一族から選ばれた。それがサヨである。

やがて、村人の前に姿を現したある人物によって、その決定的な証拠がもたらされることになった。

そして屋敷では、村人の、特に東村の忠八、喜三郎の家族の怨念の象徴となっている庭の巨岩に土を掛けて埋めてしまったのである。

第 2 章 「佐吉の物語」

笹原で死体を発見し、逃げ帰った前の日の夜。

屋敷に人の気配はなかった。

古臭い庭園灯がひとつ、旧家のたたずまいを白々と照らし出している。

屋敷は夜気に晒され、昼間とは違う顔を見せ始めている。

あらゆるところから光が追い出され、闇に支配された幾多の部屋。かつてこの家に住んだものたちの、あるいは古びたさまざまな道具や黒光りする無骨な柱や梁、そして建物そのものに宿っているなものかの気が、徐々に濃厚になっていくようだ。

「あそこやね、会場は」

母屋の裏はまさに深山の景。巨木が立ち並ぶ斜面が圧倒的なボリュウムで迫っている。木々はすでに色を失い、黒い大きな塊となって視界の前に立ちはだかっている。

その手前、ふたつのかがり火が雑草の生えた小さな広場に赤い光を踊らせ、斜面に口を開けた岩穴に訪れる人をいざなっていた。

「それでは、私からお話するとしますか。並み居る先輩方を差し置いて、にわか仕込みの聞きかじりを披露するのは少々気が引けますが」

坂井と名乗った男が扇子をばたつかせた。

「あら、先輩方ってどういう意味？ あなたは久米さんの次にお年を召されておられるんじゃないかった？」

背筋を伸ばし、膝を崩して座っている小柄な女性がしわがれた声

を出した。

「いやいや、この村にまつわることを語るという意味では、私はまったくの門外漢でして」

坂井はだっぷりと太った足を腕の力を借りて動かし、胡坐を組み直す。焼酎の水割りを口に含むと体に似合わぬ細い声で話しだした。

京都丹波地方のある山間の村、大西村。

平家落人の集落だという説もある。狭い谷あい三十数戸の民家が集まっているだけの、なんの変哲のないさびれた村である。

わずかな田や畑を耕し、山の幸を採取しながら生き延びてきた人々の子孫が住む。初めてここを訪れた人は、村人が今なお自給自足的な暮らしを営んでいるのではないかと思うことだろう。

まだ京に都があつた古い時代。村は山裾の街道から遠く離れていた。人ひとりが通るのがやっとで、しかも知つたものでなければ間違わずに行き着くこともままならない細い道で結ばれていた。

道は村を突き抜けると行き止まりとなり、さらに奥に進もうにも、深い山中の迷い道となつて余人が入り込むのを拒んでいた。

大西村は、旅人はおろかりの人々にもほとんど知られていない隠れ里であつた。

ある秋の日のできごとである。

佐吉というきこりのせがれが山の中で芝栗を拾い集めていた。朝霧が滴となつてチガヤの葉先にとまり、少年の脛を濡らしていた。

「ブオオオオオオー」

突然鳴り響いた異様な音に、佐吉は飛び上がった。

なんだ！ なんの鳴き声だ？ 近くだぞ。

息をひそめて、ぱっとその場にうずくまると、注意深く音のした

方をうかがった。しかし、なにも動くものはない。リョウブやシャラの枯葉が、時折吹く弱い風に巻かれながらゆっくり落ちてくるだけ。目に映るものは、村人が獅子岩と呼ぶ白い巨岩が透明感のある淡い日差しに照らされて、ぼんやりとした輪郭を木々の間から覗かせているだけだった。

「坊主」と、頭の上から野太い声が降ってきた。

佐吉は横ざまに倒れこむようにして振り向き、いつも腰につけている短剣に手をやった。

「驚かせたようじゃな」

すぐ後ろに、白い麻の衣に身を包んだ大男が立っていた。

男は獣の皮でできた大きな前垂れの上に長く太い数珠を下げ、額には不思議な形をした黒い頭巾をつけていた。

佐吉は村から外へ出たことがない。百人ばかりの村人以外、人の姿を見たことがないのだ。

自分を見下ろしている男の見慣れない装束や、その大男ぶりに気おされて、尻を浮かせながら後ずさる。

男の伸ばし放題の黒い髭が再び動いた。手に持った長い鉄杖の輪飾りがジャラジャラと音をたてた。

「この地には、神のおわします麗しい気が満ちておる！」

男はそう言い放つと、滝音のする方に目をやった。そして再び佐吉を見据えると、静かな声で言った。

「村に帰って、長に伝えるがよい。御神を奉る準備を始めておくようにと」

男の目がほころんだ。

「栗を拾っておったのか。ならば、よいところを教えてやろう。驚かせた詫びじゃ。ついてまいれ」

と、さっと身を翻し、先にたって歩き始めた。

見たこともない大きな巻貝を背負っている。佐吉はためらった。

今なら逃げられるか。あっ！

男の姿がフツと消えた。と、次の瞬間、地面よりはるか上、梢の間に浮かぶように立って、佐吉を見下ろしている。

空中を飛んだのか……。

とても逃げ切れる相手ではない。

佐吉は観念した。

鉄杖が佐吉を促すように鳴り響く。

佐吉は駆け出した。男のいる方に向かって。

まるで強い力でぐいぐいと引き寄せられるかのように。

駆けに駆けた。どこをどう走ったのかわからない。獅子岩さえ見えておれば位置が知れるが、もはや周りにはしるべとなるものはなにもなかった。いつしか、見たこともない山の中を、男の姿を追って駆けていた。

やがて佐吉は不思議な感覚にとらわれた。駆け上がることなどとてもできそうにない大きな岩や急な斜面を、佐吉の細い足がいとも軽々と越えていく。

大きな木の根元に潜り込んだかと思うと、せせらぎを飛び越え、沼地の水面を蹴って走る。

笹の生い茂る藪を突っ切り、大きな岩が層を成すガレバを走り下る。

眼前の光景がめまぐるしく変化する。足の裏は確かに地面を蹴っているが、飛んでいる感覚に近い。

佐吉はいつしか心地よい興奮に包まれていた。

と、男が立ち止まったのが見えた。

佐吉は突き進んでいく。男の姿がみるみる大きくなる。

辺りの景色が一変した。

大きな空が視界に入った。鷹が悠然と飛んでいる。

そのとたん、佐吉の体は林の中に忽然と現れた草原に投げ出されていた。

男は息を切らせている佐吉を振り向こうともせず、草地の中央に向かってゆっくり歩いていき、無造作に鉄杖を頭上に振りかざす。

佐吉は立ち上がった。

「さあ、この場所に名前をつけるがよい」

佐吉は自分の口から出た言葉に驚いた。

男の問いは全くの突然に発せられたものだったが、すでに答えを考えていたかのように自信を持って自分の口から出た言葉に。

「神の庭！ アマガハラノ！」

男の口元が笑った。

鉄杖が地面に突き立てられた。

輪飾りの音が草地にこだました。

「よろしい」

男は鉄杖を引き抜くと、佐吉の腰に付けた麻袋の中から最もよいと思う栗の実をひとつ埋めるように命じた。

「誰にも言うてはいけない。来年の実りの時期に、おまえがこの地を探し出すまでは。ただし、豊かな実りを確かめた後は、おまえの

植えた木を村人全員のものとして大切にせよ」

そして男は、この地を見つけようとするときには必ず不動明王のお力を借りるのだ、決して闇雲に探していけないと、佐吉に言い聞かせた。

佐吉は屈みこんで栗の実を杖の穴に落とし、土を掻き集めた。土は軟らかく温かみがあり、素手でも難なく掬い取れた。

「目をつぶれ」

佐吉は言われたとおりにした。

滝の音が遠くに聞こえていた。

「来年にはもう実がなるのですか」

そう言ってしまうてから、佐吉は疑いを持ったことを後悔した。

周りの空気が張り詰めるのを感じた。体をこわばらせる。しかし男はなにもいわなかった。

じっと目をつぶったまま立っていた。

体のこわばりが徐々に緩んできた。

やわらかい風が吹いてきて、着物の裾を動かしていった。

せせらぎの水音が意識に昇ってきた。

時が経ち、佐吉はそつと目を開けた。

すると、目の前に獅子岩があり、鼻先が岩に触れんばかりに立っていた。

男の姿はもうどこにもなかった。

その日のうちに、村人たちが急ごしらえの木の祠を持って獅子岩まで登っていった。

すると傍らの石の上に、朝にはなかった不動明王像が置かれてあった。紫の頭巾を被った背丈八寸ほどの石像。その傍らにはあの鉄

杖が突き立ててあった。

「うむ。ここじゃな」

村長がむらおや跪き、手を合わせた。佐吉も山伏が印を残してくれていたことに安堵して、大人達に倣って地面に膝をつく。

「食うものに困りませんように」

村人は獅子岩とその脇の石をせせらぎの水で拭った。持ってきた祠を石の上に据え、せせらぎの水でこねた土で固定した。不動明王像を中に安置し、白い器に盛った雑穀を供えた。

そして再び跪き、山伏が現れるのを待った。

夕闇が迫ってきた。

フワリと空気が動いた。

次の瞬間、一陣のつむじ風が沢を駆け下りていったかと思うと、鉄杖は跡形もなく消え失せていた。芳ばしい甘さのある香りを残して。

後に岩代神社と呼ばれるようになる祠が、石造のものに造り直されたのは、季節が一巡してからのことである。

佐吉が神の庭・アマガハラノと名づけた草原の栗の木が、わずか一年で驚くべき成長を遂げ、今まで見たこともない大きな実をたわわに成らせていることを村人が知ってからのことである。

坂井が禿げ上がった頭をハンカチで拭った。そしてピンク色の派手なポロシャツの襟元を広げる。中に扇子の風を送り込みながら、「その祠が、この村の奥にあるお宮さんの由来となったものです」と、話を締めくくった。

一瞬の間が空いた。坂井が困ったような顔をして焼酎のグラスに手を伸ばした。

今の話は作り話には違いない。坂井自身の創作なのだろうか。あるいは昔から村に伝わるものかもしれない。いずれにしろ、生駒はいい話だと思った。

拍手がおきた。

「いやあ、よかった!」

今夜のホスト、久米荘一だ。

「おもしろい!」

と頷きながら、ひととき大きく手を叩いた。

「お粗末な限りで、久米さんのご期待に添えましたかどうか。それに、今日、神主さんが見えになることを知っていましたら、他の話を用意してきましたのに」

坂井は恥じたように目を伏せ、扇子を閉じて床の上に置いた。

岩穴。

十畳ほどの広さをもつ円形の部屋。

生駒達は岩牢などと呼んではいたが、かつてどんな用途で使われていたのか定かではない。

床には今風のデッキ材が敷き並べられているが、壁や天井には昔の人が穿ったノミの痕をそのまま残してある。隅に置かれたポールスタンドの光に照らし出されて、むき出しの赤い岩が複雑な陰影を見せていた。

振り返ると入口がポツカリと黒い口を開けているのが見える。外はすでに暗く、夜の冷気が山の本々の間から流れ出している頃だが、中は蒸し暑い。

「ロウソクにしようかと思ったんだけど、いくらなんでも薄暗いだろ」

久米が入口に眼をやった。かがり火の明かりもポールスタンドの光も、その力を弱められ、そこには小さな闇が居座っていた。

「さあ、さあ。食べながら話そう。無粋な中年男の手料理だが」
車座になって座り込んでいる老若男女に、ホスト役が大きな身振りで勧めた。

床の上にじかに置かれた立派なトキノキの厚板。その上に、涼しそうなガラスの器に盛られた生ハムや、枝豆や豆腐のサラダなどが並べられている。

「ビールや焼酎やジュースなんかはいくらでもあるから。あ、道長先生、ワインもあるよ」

先生と呼ばれた女性が、それまで見据えていた坂井からようやく視線をはずして、久米に優しい目を向けた。

「老人といわずに中年男というところがこだわりね」

「ウハハハ。そりゃそうだろ。まだ六十九なんだ」

頂きますと、道長が豆腐サラダを小皿によそう。

「男の人が作ったにしてはおいしそうね」

しかし、それを口に入れる前に坂井に声をかけた。

「今のお話、どこで仕入れてこられたの？ それとも坂井さんの創作？」

どことなく棘がある。

坂井春雄。

年齢は六十を過ぎたあたり。多くの土地や建物などを持つ資産家だ。大阪の中央区で不動産業を営んでいると聞く。

恰幅がよく、しゃれた腕時計をしている。先ほどの話しぶりからみても世慣れた男という印象を受けるが、そんな坂井が狼狽するほど、道長の問いかけは追及調だった。

道長佐知子。

年齢はよくわからない。黙々と作業している背中を見ているときなどはとうに六十は過ぎていると思うが、気分がいいときの晴れやかな表情は四十代後半に見えたりもするのだ。

京都市北部にある女子大の教授だと久米から紹介されていた。本人からは、郷土歴史家だと訂正されていたが。

道長とは以前、生駒はこの屋敷でなんとか会ったことがある。思ったことをすぐ口にする女性である。

華奢で小さな体に溜め込んだエネルギーを気ままに放出するように、厳しい言葉を連発する。しかも頑固な理論派ときているので、久米がもてあますシーンを何度も目にしたものだ。

本人に悪気はないのだろうが、口調がきつすぎて周りのものがどぎまぎしてしまう。

ただ美しい人ではある。自分がときとして迷惑な存在になっているということにさえ気がつけば素敵な女性なのに、と生駒は思っていた。

「いや、ま、そんなもんですかな」

と、坂井がごまかした。しかし郷土歴史家の先生は許さない。

「岩代神社の縁起については諸説ありますが、最も信頼できるのは、この采家のお屋敷に残されていた古い文書に記載されているものです。それによると」

道長は言葉を切り、久米に顔を向けると、

「あら、ごめんなさい。今日は私の講義じゃないって、さっき釘を刺されたばかりだったわね」

と、笑顔を見せた。

笑うと、急に幼い顔になる。短い髪はあちこち跳ね上がり、てんでばらばらになっているようだが、よく見ると凝ったセットがしてあり、微妙な色合いの何種類もの髪染めがその独創的な髪形に彩りを添えている。

細かい花柄模様の濃紺のシャツが活動的で理知的な道長に良く似合っていた。

「ハハハ、そう。道長教授のご講義はまた後日拝聴するとして、今日は蜚が飛ぶ宵の余興ということで」

久米は会が始まってから笑顔を絶やさない。

今日の会とは、村の由来やこのあたりの風物などについて、知っていること、想像したこと、感じたことなどを自由に発表しあおうという趣向で久米が開いたものだった。

ファックスで送られてきた案内状には「岩穴座談会」とあった。

場所は、村の古くからの名士である采一族の屋敷。

会場はここ、屋敷裏の岩穴部屋。

久米莊一とは、現代絵画に凝っている自称画家。

元はといえば、国土交通省のそれなりの役職に就きながら、好きで始めた絵画である。以前からまずまずの絵を描くと生駒は思っていたが、退職後はぐっと腕を上げ、個展なども開くようになっていく。

少し変わった経歴を持つ新進の画家として雑誌や新聞などで紹介されることもある。

いわば、著名人の仲間入りを果たそうとしているのだが、本人はそれがうれしくてたまらないようだ。

また、金銭的にも余裕があるのだろう。形だけどこかの財団法人の理事などしているのかもしれない。自宅は大阪の箕面に邸宅を構えているが、東京や福岡にもアトリエとして使う部屋を持っているという。そのひとつとして、この屋敷も借りているのだ。

「これ、おいしい!」

優がマグロのカルパッチョにパクつき、頬を膨らませた。

「いやあ。そう言ってくれるとうれしい。野菜は仙吉さんの畑で作

られたものだよ。肉や魚は、彼が町で買ってきてくれたものだが」
「久米先生のご注文はなかなか細かくて」

と、生駒の斜め前に座った男が笑った。大葉仙吉だ。生粋の村人である。

生駒は改めて座を見回した。

和やかな空気が満ちていた。

始まる前に危惧していたほど、堅苦しい雰囲気ではない。

男が八人、女がふたり、少女がひとり。

生駒にとって親しい顔ばかりというわけではない。一番奥の正面には威厳たつぷりに久米が座り、その右隣りには西脇利郎という中年男。続いて橘文雄と娘の綾。数年前に村に移り住んだという農家だ。生駒の向かいには道長佐知子。入口に近いところに地元農家の大葉仙吉と並んで座っている。

久米の左手には采健治という若い宮司が座っている。続いて大阪の資産家、坂井春雄、木元勝と名乗る若者。そして生駒と三条優だ。久米にとっては親しいメンバーらしい。今日の会に向けて厳選した諸兄なのだと、会の案内状にはしたためてあった。

三条優だけが久米にとって新顔だ。生駒が優に、次回この屋敷に行くときには連れていくと約束させられているのを知った久米が、今回はぜひお連れしてください、と言ってくれたのだった。

四十代半ばを過ぎた生駒が、二十過ぎの優を恋人だと紹介するのは気が引けた。自分が代表をしている設計事務所のスタッフだと紹介しておいた。現実にはちょっととしたスケッチなどを描いてくれたり、現場視察に付き合ってくれたりするのだから、まったくの嘘というわけではない。

優が生駒の前の空っぽの小皿にカルパッチョをよそった。

「おいしいわよ。ノブも食べたら？」

しかし優は、食べるものを口に入れたとたん、そんな自分の仮の立場はさっさと忘れて、いつものように生駒をノブと呼んだ。

「仲がいいんですね。社長さんとスタッフさん」と、道長が朗らかに笑った。

「次は俺が」

と背筋を伸ばしたのは、日に焼けた四十前後の男だ。

生駒はこの男と始めて会ったとき、人に言えない仕事でもしていて、この村に逃れてきて居ついたのではないかと、勝手な想像を抱いたものだ。

二年ほど前、久米に誘われてこの屋敷に来るようになったところ、橘文雄という農夫であると紹介された。東京から移り住んだという。橘が自分の畑で採れたものだといって、キュウリやトマトを屋敷に届けにきたときのことだ。三人で昼食の弁当を食べながら、久米が生駒に話題を振ってくれた。建築雑誌の新作に生駒が設計した住宅が紹介されたことを話せという。生駒は簡単な自己紹介をし、その住宅について話し始めたのだが、ものの二分も経たないうちに口を閉じてしまった。

橘は、聞く気はないという態度で箸を動かし続け、庭を眺めていたかと思うと、チラッと品定めでもするようなぶしつけな目で生駒の口元あたりを見たのだった。

それからというものの、なにを考えているのかわからない得体の知れないこの男が、なぜこの村に住むようになったのか、なぜ久米と親しくするようになったのか、不思議でしかたがなかった。

筋肉質の体軀を活かして久米のために力仕事をしている橘の姿を見かけることはたびたびあったが、生駒から声をかけることはめったになかったし、かけられることもなかった。

その橘が娘の綾に、にやりと目配せして話し始めた。

蛭は神秘的ではかない虫である。

春、桜の咲く季節、雨の降る夜。川の中で過ごしていた幼虫がいつせいに岸に上がってくる。

幼くはあっても尻に立派に光を灯しながら。初めて目にする地上の光景に驚く様子もなく、やわらかい土を目指して一時間に数十センチのスピードで着実に這い進む。行軍すること数時間。

ころあいの地点に到着すると、すぐさま土の中にもぐりこむ。土繭を作り、サナギとなるのだ。

そして約五十日後、六月初旬。

次々と羽化する蛭。

残された生は十日ばかり。

その最後の命を精一杯使って、交尾を果たして死んでいく。

人間が目にする蛭の乱舞は、交尾相手を求める舞。

異性を追う強烈な欲求に突き動かされた晴れがましい宴。

それを見る人間は風流を感じ、団扇片手にのどかな面持ちでいたとしても、この小さな虫にとっては一世一代の最後の生の営みなのだ。

ところで、乱舞さなか、人に近づいてくる蛭がある。これはその人の先祖の霊だといわれることがある。

淡い光の点滅は、それほど霊的な色彩を帯びており、人の心に思いついた故人の記憶を呼び起こさせるのだろう。

単に美しいという印象や懐かしいという感傷だけではない。

その乱舞がどれほど華やかなものであったとしても、どこことなく畏れに似た感覚をも持つものなのだ。

その感覚は、夏が近づいてくるとき特有の、草いきれの沸き立つ山間の川岸、というシチュエーションがもたらしているというだけではない。

残照が消え東の空に星が瞬き始めるといふ、どこことなく不安な時間帯がもたらしているというだけのことでもない。

放つ光の軌跡が、見る人の予測ではまったく計りしれないからでもない。

人の目には、単なる小さな昆虫の肉体の一部としてではなく、黄緑がかった白い光そのものが、その点滅そのものが、意識を持った生き物であるかのように見えるからなのだ。

しかし蛍は、この村ではあまり好かれてはいない。むしろ縁起のよくない虫だといわれている。

この虫が光りながら近づいてきて、万一体にとまられると、よくないことがその人の身に降りかかるといわれている。

こんな言い伝えがある。

昔、蛍が舞うある夜のこと。

村長の使いが、一軒の農家を尋ねてきた。娘を神への捧げものとして差し出すようにとの言付けだった。

期日は明後日。蛍の舞が最も激しさを増す時刻に、娘をひとりで岩代神社に参らせるようにとのことだった。もちろん、神への供え物として差し出された娘が、二度と村人の前に姿を見せることはない。

蛍が舞う季節が近づくと、年頃の娘を持つ親は、まさか今年が神へ貢物を差し出す年でありませんように、またうちの娘がその役を仰せつかりませんように、と祈った。

いつしか、村人は岩代神社に寄りつかなくなった。
山仕事をするものが通り抜けるだけで、境内もお社も荒れ果てた。
そして、その忌まわしい風習が消えた後も、蜚は縁起の悪いものであるという印象だけが村人の心に残ったのだった。

「うーむ」

久米は拍手をしなかった。

橘の話は会にふさわしいテーマだったし、理路整然とした話しぶりでもあったが、聞いて気持ちのいい話ではなかった。

坂井の栗の木の話に出てきた麗しき神に泥を塗るような話でもあった。

今度も道長が感想らしきものを口にする。

「後半はまた想像のお話かしら？　なかなかうまくできたお話のようでしたけど」

橘はニヤリと笑っただけで、道長の挑発にまったく関わるつもりはないようだ。ヨレヨレになった綿の短パンから突き出た毛むくじやらの脛を搔きながら、もう一方の手で焼酎をぐつとあおった。

「違います」

はつきりとそう応えたのは少女だった。よく通る声が岩穴に響き渡った。

橘の娘、綾。

今年の春、小学六年生になった少女。

長身に幼さが残る顔立ち。短めの髪を両耳の後ろでくくっている。
白いブラウスに色褪せたスリムなブルージーン。
ありきたりな服装だが、一瞬間の間、生駒は同じような服装をここ

で見たことがあるという感覚にとらわれた。

道長が少し驚いたように綾を見つめ、言葉の続きを待った。

「これです」

綾が膝元の袋から取り出したものは、くすんだ紫色の布に包まれていた。

「それは？」

手の平の上で布を広げてみせる。出てきたのは茶色の麻糸で織られたもの。

「頭巾なんです」

「ほう」

久米は興味津々だが、父親があわてた。

「そんなもの、早くしまえ」

綾は声にならない小さなため息について父親の言葉に従った。

ただそれだけのことだったが、場はなんとなく肩透かしを食らったような気分になった。作り話なのかという道長の質問は宙に浮いたままだ。

生駒は橘の話を反芻した。蜚にとまられたものに不幸が訪れるというくだり。

穏やかならぬ話だ。信じるわけではないが、うれしいはずもない。もしや、さっき優とふたりで蜚を眺めているところをこの男に見られていたのではないか。

無精ひげを溜めた肉の落ちた頬に、大きな傷跡。彫りの深い顔に引いた細い目。

感情の読めないこの目で物陰から観察されていたのだとしたら、気持ちのいいものではない。

時刻は午後9時を回ったあたり。

岩穴の中には柔らかい光が満ちていたが、屋敷を、そして村を包む深い山々の稜線は、既に暗い空と溶け込んでいた。空には星もな
く、今にも降り出しそうな黒雲が流れていた。

第 3 章 「蜚」

「さあ、さあ。食べながら話そう。無粋な中年男の手料理だが」
車座になって座り込んでいる老若男女に、ホスト役が大きな身振りで勧めた。

床の上にじかに置かれた立派なトチノキの厚板。その上に、涼しそうなガラスの器に盛られた生ハムや、枝豆や豆腐のサラダなどが並べられている。

「ビールや焼酎やジュースなんかはいくらでもあるから。あ、道長先生、ワインもあるよ」

先生と呼ばれた女性が、それまで見据えていた坂井からようやく視線をはずして、久米に優しい目を向けた。

「老人といわずに中年男というところがこだわりね」

「ウハハハ。そりゃそうだろ。まだ六十九なんだ」

頂きますと、道長が豆腐サラダを小皿によそう。

「男の人が作ったにしてはおいしそうね」

しかし、それを口に入れる前に坂井に声をかけた。

「今のお話、どこで仕入れてこられたの？ それとも坂井さんの創作？」

どことなく棘がある。

坂井春雄。

年齢は六十を過ぎたあたり。多くの土地や建物などを持つ資産家だ。大阪の中央区で不動産業を営んでいると聞く。

恰幅がよく、しゃれた腕時計をしている。先ほどの話しぶりからみても世慣れた男という印象を受けるが、そんな坂井が狼狽するほど、道長の問いかけは追及調だった。

道長佐知子。

年齢はよくわからない。黙々と作業している背中を見ているときなどはとうに六十は過ぎていると思うが、気分がいいときの晴れやかな表情は四十代後半に見えたりもするのだ。

京都市北部にある女子大の教授だと久米から紹介されていた。本人からは、郷土歴史家だと訂正されていたが。

道長とは以前、生駒はこの屋敷でなんとか会ったことがある。思ったことをすぐ口にする女性である。

華奢で小さな体に溜め込んだエネルギーを気ままに放出するように、厳しい言葉を連発する。しかも頑固な理論派ときているので、久米がもてあますシーンを何度も目にしたものだ。

本人に悪気はないのだろうが、口調がきつすぎて周りのものがどぎまぎしてしまう。

ただ美しい人ではある。自分がときとして迷惑な存在になっているということにさえ気がつけば素敵な女性なのに、と生駒は思っていた。

「いや、ま、そんなもんですかな」

と、坂井がごまかした。しかし郷土歴史家の先生は許さない。

「岩代神社の縁起については諸説ありますが、最も信頼できるのは、この采家のお屋敷に残されていた古い文書に記載されているものです。それによると」

道長は言葉を切り、久米に顔を向けると、

「あら、ごめんなさい。今日は私の講義じゃないって、さっき釘を刺されたばかりだったわね」

と、笑顔を見せた。

笑うと、急に幼い顔になる。短い髪はあちこち跳ね上がり、てんでばらばらになっているようだが、よく見ると凝ったセットがしてあり、微妙な色合いの何種類もの髪染めがその独創的な髪形に彩りを添えている。

細かい花柄模様の濃紺のシャツが活動的で理知的な道長に良く似合っていた。

「ハハハ、そう。道長教授のご講義はまた後日拝聴するとして、今日は蜚が飛ぶ宵の余興ということで」

久米は会が始まってから笑顔を絶やさない。

今日の会とは、村の由来やこのあたりの風物などについて、知っていること、想像したこと、感じたことなどを自由に発表しあおうという趣向で久米が開いたものだった。

ファックスで送られてきた案内状には「岩穴座談会」とあった。

場所は、村の古くからの名士である采一族の屋敷。

会場はここ、屋敷裏の岩穴部屋。

久米荘一とは、現代絵画に凝っている自称画家。

元はといえば、国土交通省のそれなりの役職に就きながら、好きで始めた絵画である。以前からまずまずの絵を描くと生駒は思っていたが、退職後はぐっと腕を上げ、個展なども開くようになっていく。

少し変わった経歴を持つ新進の画家として雑誌や新聞などで紹介されることもある。

いわば、著名人の仲間入りを果たそうとしているのだが、本人はそれがうれしくてたまらないようだ。

また、金銭的にも余裕があるのだろう。形だけどこかの財団法人の理事などしているのかもしれない。自宅は大阪の箕面に邸宅を構えているが、東京や福岡にもアトリエとして使う部屋を持っているという。そのひとつとして、この屋敷も借りているのだ。

「これ、おいしい!」

優がマグロのカルパッチョにパクつき、頬を膨らませた。

「いやあ。そう言ってくれるとうれしい。野菜は仙吉さんの畑で作

られたものだよ。肉や魚は、彼が町で買ってきてくれたものだが」
「久米先生のご注文はなかなか細かくて」

と、生駒の斜め前に座った男が笑った。大葉仙吉だ。生粋の村人である。

生駒は改めて座を見回した。

和やかな空気が満ちていた。

始まる前に危惧していたほど、堅苦しい雰囲気ではない。

男が八人、女がふたり、少女がひとり。

生駒にとって親しい顔ばかりというわけではない。一番奥の正面には威厳たつぷりに久米が座り、その右隣りには西脇利郎という中年男。続いて橘文雄と娘の綾。数年前に村に移り住んだという農家だ。生駒の向かいには道長佐知子。入口に近いところに地元農家の大葉仙吉と並んで座っている。

久米の左手には采健治という若い宮司が座っている。続いて大阪の資産家、坂井春雄、木元勝と名乗る若者。そして生駒と三条優だ。久米にとっては親しいメンバーらしい。今日の会に向けて厳選した諸兄なのだと、会の案内状にはしたためてあった。

三条優だけが久米にとって新顔だ。生駒が優に、次回この屋敷に行くときには連れていくと約束させられているのを知った久米が、今回はぜひお連れしてください、と言ってくれたのだった。

四十代半ばを過ぎた生駒が、二十過ぎの優を恋人だと紹介するのは気が引けた。自分が代表をしている設計事務所のスタッフだと紹介しておいた。現実にはちょっととしたスケッチなどを描いてくれたり、現場視察に付き合ってくれたりするのだから、まったくの嘘というわけではない。

優が生駒の前の空っぽの小皿にカルパッチョをよそった。

「おいしいわよ。ノブも食べたら？」

しかし優は、食べるものを口に入れたとたん、そんな自分の仮の立場はさっさと忘れて、いつものように生駒をノブと呼んだ。

「仲がいいんですね。社長さんとスタッフさんと、道長が朗らかに笑った。」

「次は俺が」

と背筋を伸ばしたのは、日に焼けた四十前後の男だ。

生駒はこの男と始めて会ったとき、人に言えない仕事でもしていて、この村に逃れてきて居ついたのではないかと、と勝手な想像を抱いたものだ。

二年ほど前、久米に誘われてこの屋敷に来るようになったころ、橘文雄という農夫であると紹介された。東京で消防士をしていたが、この村に移り住んだという。

橘が自分の畑で採れたものだといって、キュウリやトマトを屋敷に届けにきたときのことだ。三人で昼食の弁当を食べながら、久米が生駒に話題を振ってくれた。建築雑誌の新刊に生駒が設計した住宅が紹介されたことを話せという。生駒は簡単な自己紹介をし、その住宅について話し始めたのだが、ものの二分も経たないうちに口を閉じてしまった。

橘は、聞く気はないという態度で箸を動かし続け、庭を眺めていたかと思うと、チラッと品定めでもするようなぶしつけな目で生駒の口元あたりを見たのだった。

それからというもの、なにを考えているのかわからない得体の知れないこの男が、なぜこの村に住むようになったのか、なぜ久米と親しくするようになったのか、不思議でしかたがなかった。

筋肉質の体軀を活かして久米のために力仕事をしている橘の姿を見かけることはたびたびあったが、生駒から声をかけることはめったになかったし、かけられることもなかった。

その橘が娘の綾に、にやりと目配せして話し始めた。

蛭は神秘的ではない虫である。

春、桜の咲く季節、雨の降る夜。川の中で過ごしていた幼虫がいつせいに岸に上がってくる。

幼くはあっても尻に立派に光を灯しながら。初めて目にする地上の光景に驚く様子もなく、やわらかい土を目指して一時間に数十センチのスピードで着実に這い進む。行軍すること数時間。

ころあいの地点に到着すると、すぐさま土の中にもぐりこむ。土繭を作り、サナギとなるのだ。

そして約五十日後、六月初旬。

次々と羽化する蛭。

残された生は十日ばかり。

その最後の命を精一杯使って、交尾を果たして死んでいく。

人間が目にする蛭の乱舞は、交尾相手を求める舞。

異性を追う強烈な欲求に突き動かされた晴れがましい宴。

それを見る人間は風流を感じ、団扇片手にのどかな面持ちでいたとしても、この小さな虫にとっては一世一代の最後の生の営みなのだ。

ところで、乱舞さなか、人に近づいてくる蛭がある。これはその人の先祖の霊だといわれることがある。

淡い光の点滅は、それほど霊的な色彩を帯びており、人の心に思いつきとなった故人の記憶を呼び起こさせるのだろう。

単に美しいという印象や懐かしいという感傷だけではない。

その乱舞がどれほど華やかなものであったとしても、どこことなく

畏れに似た感覚をも持つものなのだ。

その感覚は、夏が近づいてくるとき特有の、草いきれの沸き立つ山間の川岸、というシチュエーションがもたらしているというだけではない。

残照が消え東の空に星が瞬き始めるといふ、どこことなく不安な時間帯がもたらしているというだけのことでもない。

放つ光の軌跡が、見る人の予測ではまったく計りしれないからでもない。

人の目には、単なる小さな昆虫の肉体の一部としてではなく、黄緑がかった白い光そのものが、その点滅そのものが、意識を持った生き物であるかのように見えるからなのだ。

しかし蛍は、この村ではあまり好かれてはいない。むしろ縁起のよくない虫だといわれている。

この虫が光りながら近づいてきて、万一体にとまられると、よくないことがその人の身に降りかかるといわれている。

こんな言い伝えがある。

昔、蛍が舞うある夜のこと。

村長の使いが、一軒の農家を尋ねてきた。娘を神への捧げものとして差し出すようにとの言付けだった。

期日は明後日。蛍の舞が最も激しさを増す時刻に、娘をひとりで岩代神社に参らせるようにとのことだった。もちろん、神への供え物として差し出された娘が、二度と村人の前に姿を見せることはない。

蛍が舞う季節が近づくと、年頃の娘を持つ親は、まさか今年が神へ貢物を差し出す年でありませんように、またうちの娘がその役を

仰せつかりませんように、と祈った。

いつしか、村人は岩代神社に寄りつかなくなった。山仕事をするものが通り抜けるだけで、境内もお社も荒れ果てた。そして、その忌まわしい風習が消えた後も、蜚は縁起の悪いものであるという印象だけが村人の心に残ったのだった。

「うーむ」

久米は拍手をしなかった。

橘の話は会にふさわしいテーマだったし、理路整然とした話しぶりでもあったが、聞いて気持ちのいい話ではなかった。

坂井の栗の木の話に出てきた麗しき神に泥を塗るような話でもあった。

今度も道長が感想らしきものを口にする。

「後半はまた想像のお話かしら？　なかなかうまくできたお話のようでしたけど」

橘はニヤリと笑っただけで、道長の挑発にまったく関わるつもりはないようだ。ヨレヨレになった綿の短パンから突き出た毛むくじやらの脛を搔きながら、もう一方の手で焼酎をぐっとあおった。

「違います」

はつきりとそう応えたのは少女だった。よく通る声が岩穴に響き渡った。

橘の娘、綾。

今年の春、小学六年生になった少女。

長身に幼さが残る顔立ち。短めの髪を両耳の後ろでくくっている。白いブラウスに色褪せたスリムなブルージーン。

ありきたりな服装だが、一瞬間の間、生駒は同じような服装をここで見たことがあるという感覚にとらわれた。

道長が少し驚いたように綾を見つめ、言葉の続きを待った。

「これです」

綾が膝元の袋から取り出したものは、くすんだ紫色の布に包まれていた。

「それは？」

手の平の上で布を広げてみせる。出てきたのは茶色の麻糸で織られたもの。

「頭巾なんです」

「ほう」

久米は興味津々だが、父親があわてた。

「そんなもの、早くしまえ」

綾は声にならない小さなため息について父親の言葉に従った。

ただそれだけのことだったが、場はなんとなく肩透かしを食らったような気分になった。作り話なのかという道長の質問は宙に浮いたままだ。

生駒は橘の話を反芻した。蛍にとまられたものに不幸が訪れるというくだり。

穏やかならぬ話だ。信じるわけではないが、うれしいはずもない。もしや、さっき優とふたりで蛍を眺めているところをこの男に見られていたのではないか。

無精ひげを溜めた肉の落ちた頬に、大きな傷跡。彫りの深い顔に引いた細い目。

感情の読めないこの目で物陰から観察されていたのだとしたら、気持ちのいいものではない。

時刻は午後9時を回ったあたり。

岩穴の中には柔らかい光が満ちていたが、屋敷を、そして村を包む深い山々の稜線は、既に暗い空と溶け込んでいた。空には星もなく、今にも降り出しそうな黒雲が流れていた。

第 4 章 「ギンバエ」

「次は僕が」

宮司が口を開いた。年齢は三十路に入った頃だろう。村人には珍しく、さほど日に焼けておらず整った顔立ちをしている。

生駒はこの男にも会ったことがある。ちょうど一年前、久米のアトリエの新築工事の地鎮祭でのことだ。祭場に宮司として登場したのが、この男、采健治だった。

あの日起きた出来事は、脳裏に鮮烈に焼きついている。その記憶に伴ってこの男の印象も残っているのだ。しかしこの男の残像は、あの事件の舞台装置のひとつである、ピカピカした若葉色の狩衣をまとい、烏帽子をつけた宮司の姿としてであり、生身の人間である健治の印象としてではない。

今夜の健治はクリーム色のサマーセーターに白いスラックスをはいて、窮屈そうに長い足を折り曲げている。胸ポケットから携帯電話のストラップが覗いているが、この山奥の村には電波は届かない。ライトバンに商売道具の祭壇などを積み込んで走りまわるときなどには重宝するのだろう。

久米が健治を、このあたり一帯の神社を統括する宮司で、もちろん大西村の岩代神社の宮司でもあると、改めて紹介した。

「お忙しいんでしょう」

と、道長も声をかける。

「いえいえ。各神社で年に数度の祭礼があるくらいで。最近は婚礼もないし、地域全体がどの業界も不景気ですから」

そう応えて、ざっくばらんに分けた豊かな髪に手をやった。

「僕がする話は、皆さん、もうよくご存知でしょうし、西脇おじさんや仙吉さんの方が適任ですが、一応分担ということで話をさせてもらいます」

八重歯が覗く笑顔で堅苦しい前置きをした。

健治は西脇利郎や大葉仙吉と同様、この屋敷の本来の持ち主である采家の一族である。健治から見れば、ふたりは父親の従兄弟にあたる人物ということになるらしい。

健治がメモを取り出した。

「おっ。そんな準備までしてきてくれたんですか。それは恐縮です」
久米が健治の手元を覗き込もうとした。

「あっ、いえ。ポイントを書いてきただけです。言うことを忘れるといけないので。僕はすぐにあがってしまうたちなんですよ」

「まあ」

嫌味に聞こえなくもない道長の声に、健治はせっかく書いてきたメモをポケットにしまいこんでしまった。

采家。

母屋の建物は間口十二間、奥行き六間。上手背面に角座敷を突出させた形式を持つ入母屋造りで屋根は茅葺き。周囲のひさしは本瓦葺き。平屋ではあるが棟が高く、軒下に連続した明り取りの小窓があることで、広い屋根裏部屋があることを示唆している。すなわち、周辺の農家とは明らかに異なる形式をもち、良質で洗練された意匠を有している建物である。

間口のほぼ中央に玄関があり、両側に広縁のある座敷が連なっている……と、健治は各部屋の説明を始めた。

道長が健治の話に割り込んだ。

「お屋敷の各お部屋に私たちで名前をつけたのよ。主な部屋だけね」
道長は健治の長話に一区切りをつけようというのだろう。

「玄関の正面はカラの間。なにもないから。向かって左は舟底の間。

襖に船の絵が描いてあるから。その奥が松の間。お庭に立派な五葉松があるでしょ。その横の裏庭に面した部屋が仏の間。以前、お仏壇があったのね……」

順に説明していくのだが、これとて生駒には馴染みの名前で、新味のある話ではない。

「そして一番広い座敷が鶴の間。今、久米さんが寝ている部屋よ。反対側の角座敷、千寿さんが暮らしてらした部屋が塔の間。そして増築部分が奥座敷。佳代子さんがいた部屋ね。離れはというと、手前から単純に前の間、中の間ときて、奥の座敷が鮎の間。どう？ 分りやすいでしょ」

道長はこれで健治の長い解説を終わりにしたいようだ。

「なかなかいい感じじゃないですか。なんだか、料亭みたいですけど」

「フフ。いつのまにかそう呼ぶようになったのよ。片付けなんかをするとき、呼び名がないと不便だったから」

健治は頷くだけだ。

「そうそう、昔のお台所は若い人たちは飯炊き土間なんていって、新しいキッチンとは区別して呼んでたわ」

久米もただ頷いている。道長の話の腰を折るのは気が引けるのだろう。

「それ以外にも奴隷部屋とかお仕置部屋とか拷問部屋とか、小さい部屋にも変な名前をつけておもしろがっている連中もいたけど。あ、そうそう、ここはなんて言ってたか、ご存知？」

「いえ」

「岩牢」

道長はフフと笑って、生駒に流し目を送ってきた。あからさまに首を回して、この話には飽きたわね、というサインを出している。

しかし、健治はそれに気づかない。再び話し始めてしまった。

屋敷の建物は、国の重要文化財として登録されるという話も出たことはあるが、他人に出入りされるのは困るというって断ったといわれている。府の調査では母屋の屋根裏から古い天井板が見つかった。幅三十三センチ、長さ百五十センチ、厚さ六センチほどの杉板で、「寛保元年酉卯月 采清衛門西村 大工久吉削之」と墨書されていた。つまり、一七四一年の陰暦四月に西村の采清衛門が施主となり、大工の久吉がこの建物を建てたということである。

坂井が生あくびをかみ殺した。

そうやく場の気分を察したのか、健治の声のトーンが変わった。

「久米さん、今日拝見したら、畑が少し復活していますね。僕が小さいころにはあそこにゴマなんか植えられていましたね。中庭で乾かして、種を落として。そんな光景を思い出しましたよ」

「いやあ、見よう見まねです。畑なんていえるほど立派なものじゃありません。仙吉さんに教わりながら、菜っ葉なんかを植えてみただけのことです」

ようやく健治の自慢話は終わりだ、と思ったが、まだそうではなかった。この若い宮司は村で作られていた主な作物についての説明を始めたのだ。

生駒は健治の話から関心が薄れていった。

代わりに蘇ってくるのは昨年の出来事。さつき螢が服にとまったとき心に浮かんだ断片的な残像が、まだ心の隅に留まっていたのだろう。健治の横顔を眺めていて、あのときの心境も甦ってきたのだ。

そして気がついた。

明日の朝で、あれからちょうど丸一年になる……。

母屋の前庭の奥、アラカシの木立を抜けると比較的まとまった平地がある。かつては鶏小屋などがあつたらしいが、今はまったくの

空き地で、湿りけのある土にガマやチガヤなどがまばらに生えているだけだ。周りをコナラやクヌギなどの落葉樹に囲まれ、あたかも林の中の広場のようで、母屋や離れとはまた違った雰囲気を持つところ。

よく言えば、流行の別荘地のような雰囲気だといえる。しかし、陰気だと感じる人もいるだろう。それは取り囲んでいる林がまったく手入れもされないままに放置されているためであって、下枝を払い、樹形を整え、不要な幼木などを抜けば、見違えるように明るく気持ちのいい林になるはずだ。

生駒はその土地に久米のアトリエを設計したのだった。

一年前のあの日、空き地に紅白の幕が張り巡らされ、仮設のテントが設営されていた。

生駒は祭場に並べられたパイプ椅子の最前列に、かしこまって座っていた。

左隣には工事を請け負う六島建設の森口所長、右隣には中央の通路を挟んで施主である久米荘一、その右隣には来賓の町会議員が座っていた。後方には、西脇利郎や大葉仙吉、そして坂井や道長も座っていたと記憶している。

地鎮祭は六島建設の営業担当者の司会で始まった。

「祝詞奏上。皆様、ご起立ください」

宮司である健治のよく通る細い声が式場に流れ始める。

「此れの所をいつのいわさかといわひ定めてをき奉る、掛けまくも……」

祭壇がしつらえられ、酒や野菜が供えられている。宮司は腰を半ばかがめるようにして、巻物に書かれた文章を読み上げた。

久米が頭を垂れて祝詞に聞き入っていた。

「かしこみかしこみまほさく……」

久米は二メートル近くもある巨漢で、一見痩せ型に見えるが実は肩幅も広く骨太で、引き締まった体をしている。髪はいつも通りきれいに七三に分け、真っ白なジャケットを着こなし、こういう晴れの場では特に存在感が際立つ。並んで立つと、もともと華奢な体型のくせに腹だけが中年太りしてしまった生駒がどうしようもなく貧弱に見えてしまう。

「この度、久米荘一が新しいアトリエを六島建設が請負ひ建てむとして、此の所の荒草木根を刈除き大石小石を拾ひならして、今日のいく日のたる日にしもことしずつめ祭を慎み敬ひとりおこなはむと……」

祭壇の周りを大きなギンバエが飛び回っていた。

このハエ一匹が羽音を唸らせているだけで、行事の奥ゆかしさが損なわれていた。司会者がどうにかハエを式場から出そうと、時々手で追おうとするが、ハエはますます激しく飛び回り、神経を逆撫でする音をたて続けていた。

「四方祓い！」

宮司は神前から切麻きりぬさを恭しく取り上げると、紅白の幕から一旦退場する。

数日来降り続いている雨が祭場のテント屋根を重たげにたわませ、雨粒がテント地の上をツーツと流れている様子が内側からも見えた。

現場用の仮設クーラーがブーンという騒々しい音をたてていたが、テント内の気温はぐんぐん上がっていく。蒸し暑い。生駒は締め慣れないネクタイを少し緩めた。

列席者の頭の上を相変わらずハエが飛び回っていた。

六島建設の現場担当者がヒノキの折敷に白手袋を載せて運んできた。それを久米、生駒、森口の順に取っていく。

宮司が戻ってきて着席した。

「刈初め（かりぞめ）の儀！」

ここからが本番。地鎮の行事である。

「設計事務所、有限会社アーバプラン、代表取締役、生駒延治殿」司会の声に従って立ち上がり、神前に進む。宮司の手から忌鎌を受け取り、金幣に向かって一礼。傍らに設けられた盛砂の前に立つ。そしてゆっくりとした動作で前屈みになり、細い透明なプラスチック容器に差し込まれた草を左手で掴んだ。

「えい、えい、えーい！」

鎌を左から、右から、左からと順に振り、刈る所作をして草を引き抜いた。草はごく普通の茅で、奉書で巻かれ紅白の水引で結ばれてあった。

生駒はそれを盛砂の横に置こうとした。が、そこにハエが止まっていた。そして、ふと、この場に不似合いな臭いを鼻腔の奥に感じた。草を置くとハエはまた飛び立ち、羽音をたてた。

「穿初め（うがちぞめ）の儀！ 施主、久米荘一殿」

久米の巨体が立ち上がると、祭壇の前が急に狭くなったように感じた。しかし緊張しているのだろう。宮司から忌鍬を受け取った久米は、あわてたようにパタパタと足を動かし、盛砂の前に立った。顔が紅潮している。生駒は、世慣れた久米でも緊張することがあるのだと、少しおかしかった。付き合い始めて十年ほどになるが、初めてかすかな優越感と親近感を持った。久米はぎごちなくガバツと前かがみになると、大きな掛け声をかけて勢いよく鍬を盛砂に突き立てた。

ザクリ。

打ち水をされて湿った砂が、鍬の刃の形を残してきれいにえぐり取られた。ザクリ。

久米がかき出した砂が生駒の引き抜いた草にかぶさった。そして三度目。

ザク。

鍬が硬いものにあたったかのように、一瞬砂の中で止まった。久米が手首で鍬を返し、強引気味に砂を掘り取った。

「あっ」と、隣に座っている森口が小さな声をあげた。

掘り取られた穴の中から転がりてたもの……。

鼻腔に先ほどの異臭がまた入り込んでくる。

「ぎゃ！」

久米が鍬を投げ出し、のけぞって大きく一步後ろに下がった。

腐ったものの臭いがさらに強くなる。ハエが狂ったように飛び回る。

森口がさっと立ち上がった。

屈みこんでその黒いものを確認するやいなや、白手袋をはめたままの手でおもむろに砂を掻き分け始めた。

手がかすかに震えていた。

「申し訳ございません！」

「盛砂に異物が入ってしまいました！」

ぴょんと立ち上がり、振り向きざまに森口は言う、盛砂を出席者の目から隠そうとするかのように両手を広げた。

白手袋の指先に赤黒い染みがついていた。

「皆様！ 地鎮祭は一時中断させていただきます。いま一度、控え室のほうにお戻りください。不手際、まことに申し訳ございません！」

と、ほとんど叫ぶようにいった。

生駒はそのときすでに腰を浮かしていた。森口があらわにした黒い物体を見て、それがなにかをすでに理解していたのだ。

乾いた血が黒い毛に絡みついた猫の頭部。

砂の粒が痛々しく張りついた眼球。

わずかに開いた口から覗いた小さな白い牙の硬く緻密な質感が、獣の無念さを如実に表しているかのようだった。

宮司、すなわち采健治は立ち上がりざまにパイプ椅子を後ろに倒していた。そして盛砂の異物を食い入るように見つめていた。

その目には恐怖と驚きが貼りついていていた。

生駒も同じような顔をしていたことだろう。真っ青になって祭壇の前に立ち尽くしている久米の肩を抱くようにして、式場を出ようとした。

目の隅に、健治が森口を押しつけるようにして盛砂に駆け寄っていく姿が映った。そしてその直後に健治が取った行動。

このときの印象が、生駒の健治への第一印象、すなわち「奇異な行動をとることもある要注意人物」という印象の元となっている。

そのときの健治の行動とは、猫の首をもっとよく見ようと、地面に手について屈み込んだのだった。

まるで生臭い匂いを嗅ごうとでもいうように顔を近づけて。

祭壇の前には脱げた浅沓あさぐつが転がっていた。

岩穴では健治の話が続いている。あがり症という言葉とは裏腹に、話すことが苦にならない性格のようで、独壇場が続いていた。

「久米さんにこの屋敷を借りていただくことになって、村に活気が出てきました。久米さんがおいでになる週末には、今日のようにお知り合いの方を連れて来られるし、その皆様が、なんと言いますか、勢いのある人ばかりで、村に新しい風が吹いてくるような感じがします」

健治はそういつて久米や生駒たちをを持ち上げてから、祖父の姉にあたる老婆の話を始めた。采千寿という九十四になる女性である。久米が借りるまではこの屋敷の当主であったが、今は、原田の町に建った老人ホームで暮らしている。

久米はその老女が好きなときに屋敷に帰ってきてひとときを過ごしてもいい、と申し出ているという。

「久米さんのお心遣いには本当に感謝しています。それで今年になってから二度ほど、婆さんを屋敷に連れてきました。やはり自分の家はいいんでしょうね。その後しばらくは元気になるそうなんですよ」

さすがに健治の話に飽きたのだろう。久米が注文をつけた。

「ねえ、健治さん。神主さんなんだから、神社の由来なんかは？」

さつき坂井さんからもおもしろい話が出たけど

「そうですね。でも、正直にいうとあまり知らないですよ。岩代神社も僕の管轄には入っているんですが、出番がほとんどないものですから。それに最近なんです。跡を継げということでサラリーマンを辞めて帰ってきたのは」

と、無邪気に笑った。

「妹の真美が大葉さんのところへ嫁に行きましてね。寂しくなった両親にむりやり呼び戻されました。ハハ」

ようやく健治の話が終わった。橘が露骨に吐息をついた。

久米は興が乗ったのだろう。酔いもまわってきたらしく、ピシッと分けた白髪交じりの頭の生え際まで真っ赤になっている。

「不動明王をお祭りしたというのが最初の起源か」

満面の笑みをたたえて、張りのある声を出した。

「ということは寺院になるはずだが、神社とは。昔のことはよく知らないが、神も仏も、それほどはっきり区別はされていなかったということかな。ところで坂井さん、その山伏が現れたというのは、いつごろのことでしょうか」

坂井が話の冒頭に、京に都があった頃だと言ったことをすでに忘れてしまっている。しかし、さあ、と坂井は首を捻る。

久米はひとり勝手に得心したらしく、大きく頷いた。

「その山伏は神業としか言いようのない術を会得していた。もしかすると役行者えんのぎやうじやではないかな」

道長が小さく鼻を鳴らした。歴史家としては承服できかねるといいたいのだ。

坂井の物語は平安時代以降だ。平家落人の村だという説もある。役行者では時代が合わない。霊力によって何百年も生きたというのなら話は別だが。

しかし、資産家であり著名人である久米をあえてたしなめるものは誰もいない。しかも久米は性格なのか、長く中央官庁の役職を勤めたものが身につけるものなのか、どんなときでも自己中心主義を貫く男なのだ。

「ふうむ」と、今まで黙っていた西脇利郎が口を開いた。

「左吉が行者に会ったのは、岩代神社の左手の山道の途中ということですか？」

坂井は首を捻っただけだが、西脇が身を乗り出した。あからさま

に久米の関心を買おうとしていた。

「今もその山道にあります。廃れてはおりますが」

久米の目が好奇心に輝き始めていた。

「しかし、はて、その栗の木のある原っぱってのは、どこのことかな……」

西脇の自問に、道長が口を開いた。

「でも、もう栗の木は枯れたんじゃないの？」

「ええ、千年以上もの寿命はないでしょうが……」

西脇利郎。

この五十過ぎの日に焼けた男は地元工務店を経営しているが、細々と林業も続けているらしく、山のことは詳しいという。

「しかし、行者さんが念を掛けなすった木のことです。今も実を成らせていても、不思議なことやないかもしれません。えっと、なんでしたかな。アヤノコ……？」

坂井が口を開く前に、道長がスパリと訂正する。

「神の庭アマガハラノ」

「そうそう。それです！」

と、西脇は角刈りの頭を威勢よく振った。

この男、なかなか抜け目のない目つきはしているが、どこことなく生気に乏しい。

精一杯ぎつくばらんさを装っているが、理知的な印象を受けないことでそう感じるだけのことかもしれない。

ただ、この蒸し暑い中、ただひとり黒いジャケットを羽織っていた。岩穴座談会への参加も営業活動の一環という意識があるのだろう。

久米のアトリエ工事では、六島建設の下請け業者として名を連ね

ていた。地鎮祭の会場設営はこの西脇の会社が行ったものだった。猫の首事件は彼の不手際ではなかったのだろうが、六島建設からはもちろんその費用は支払ってもらえなかったはずだ。

しかも結局は、工事全体が中止になっている。運がなかったといえどそれまでだが、それしきのことでも、零細な工事業者にとってはダメージとなったことだろう。

その点では、生駒はこの営業スマイルの男になんとなく同情してしまうのだった。

「それがどこなのか、明日にでも探しに行ってきますか……。お、そや！ 皆さんもいかがです？ ご一緒に！ ご都合がよければ」西脇がひょうきんな顔を作って座を見回した。

「行くわ」

驚いたことに、真っ先に賛意を表したのは道長だ。作り話であると決めつけておきながら、やはり歴史家の先生ではある。

久米はもちろん行く気満々。生駒もその気になった。優の目も輝いている。

西脇が上機嫌で提案した。

「それじゃ、朝飯を済ませてから」

「うむ」

「八時ごろに出発するということはどうです？」

久米が頷くのを待って、ますます声を張り上げた。

「それにしてもおもしろいことになってきましたな！ その佐吉という子。それからどうなったんです？ さぞかし、村で鼻が高かったやろうし、その立派な栗の分け前も一番多かったことでしょうな」やおら背筋を伸ばす。

「おっ、待てよ。そうか！」

羽織っていたジャケットを脱ぐと腕を組み、ふんぞり返った。自分の思いつきが気に入ったようだ。

「佐吉の、さという音は、采家のさの音と同じですな。これはもしかすると」

さすがに頓珍漢だろう。

健治がフツと笑った。しかし西脇の饒舌はおさまるところか、あらぬ方へと展開していく。

「全国にある栗の産地の木は、佐吉の栗の木が種木になったものかもしれませんな。それで采家は途方もない財を成したと。違いますやろか」

「ハハハ。ありえます」

久米が受けてやったというように、手を叩いた。

蛍の舞う夜。

岩穴の中で行われる酒会での話題。

想像を膨らませた思いつきの新説披露に名を借りた営業トーク。

浅薄さに倦んで、生駒は興味がなくなってきた。

思考は再び一年前のあの日に戻っていく。

地鎮祭は延期になった。

震え上がった久米はパニック状態になった。六島建設の森口としては、翌日にでもやり直しを申し出たいようだったが、いつのまにか施主である久米の姿が現場から消えてしまった。

困った森口が、宮司である健治に何度も頭を下げた。しかし健治は建設会社の不首尾を責めるわけでもなく、上の空というふうで、バケツの中の猫の首をいつまでも見下ろしていたかと思うと、誰かを探すかのように辺りを見回すのだった。

地鎮祭が中止なら、生駒には屋敷にとどまる用はなかった。

工事上のことで六島建設の担当者と打ち合わせることはあったが、

とてもそんな状況ではない。

直会なおらいのために用意されていた折り詰めと缶ビールを受け取って、とりあえずはと母屋の縁側に腰を落ち着けたのだった。

大葉仙吉が暖かいお絞りを持ってきてくれた。

いつも久米やその来客の世話をしてくれる村の農夫だ。久米や生駒は「仙吉さん」と名を呼んで親しみを込めている。

仙吉は特にその日は地鎮祭ということで、雨の降る中を、朝早くから門の前や庭の掃除をしたりして張り切っていた。

「生駒先生、えらいことになりましたなあ」

軒下に立ったまま、その言葉とは裏腹に、仙吉は目じりに皺を寄せていつもの人懐こい笑顔をみせた。

歳は五十七だという。しかし頭はほとんど禿げ上がり、なんとなく曲がった背のせいですいぶん老けて見える。無精ひげを生やした頬はこけ、節くれだった手が長い貧乏暮らしを物語っていた。ただ、農作業で鍛えられた体は生駒よりよほど健康的な色をしていて、痩せた腕に秘められた怪力を時として見せてくれるのだった。

「あの猫は？」

話好きな仙吉と話題に困ることはない。それにずいぶん親しくもなっている。

生駒は気になっていることを聞いてみたのだが、これにはさすがの仙吉の顔も曇らせた。

「野良猫ですがな。佳代子さんがかわいがってるやつでんな」
「へえ。佳代子さんの猫か……」

宅見佳代子。

以前から采家に住み、今は久米の留守を預かるお手伝い兼管理人のようなことをしている若い女性だ。

いわれてみれば、佳代子が庭で黒い猫に餌をやっている姿を見かけたことがあった。

「そういえば、今日は佳代子さんを見かけませんね」

地鎮祭の手伝いをしている村の婦人たちの中に、佳代子の姿はなかった。

「そうでしたか？　そこらにいるんじゃないですかな」

仙吉はちよつと首を傾げ、

「ビール、冷えたんを持ってきましたわ」と、立ち去っていく。

生駒の眼の前には、がらんとした庭がある。その中央に据えられた大きな平石が雨に濡れている。

地鎮祭の列席者はもうほとんど引き上げてしまって、なんとなく空虚な雰囲気だ。生駒もそろそろ退出したいと思ったが、ビールを口にしてしまったからには、しばらくここで酔いが醒めるのを待つしかない。

仙吉がトレイに缶ビールを載せて戻ってきた。

「久米さんはどちらに？」

「はあ。車で出かけられましたけど」

「え？　どこへ？」

「さあ」

「いつ？」

「あのことがあってすぐに……」

久米は慌てふためいて逃げ出してしまったのだろうか。

「猫の首にびっくりして？」

「はあ……」

咎めるような生駒の問いかけにあいまいな相槌をうちながら、仙吉がビールを差し出した。

たかが野良猫の首ひとつ、と言いかけてやめた。仙吉が、

「なかなか久米先生も微妙な立場ですからなあ」と、口にしたらだった。

久米はこの村にとっては部外者である。

生駒の目にも、まだ久米が村に溶け込めないでいることがわかった。

久米がそう努めていないというわけではない。村人が久米をまだ受け入れていないのだ。

都会から来た羽振りのいい画家。しかも元は中央の国家公務員。村人にとっては、どう付き合っているのか、まったくわからない存在なのだろう。

久米が連れてきた都会人という意味では生駒も同じだ。生駒にしても、村人が向けてくる刺すような視線を感じたことは、一度や二度のことではなかったのだ。

そんな中で、村の誰かが久米に嫌がらせをしたとしても、それほど不自然なことではないのかもしれない。

久米は村人のそんな敵意を敏感に感じ取って、とりあえず今日のところは退散しておこうということなのかもしれない。

「それにしても、いたずらにしてはあくどすぎますよね。地鎮祭の盛砂の中に死んだ猫の首ってのは」

「まったく、けしからんですなあ」

仙吉がビールに手を伸ばした。

「どこのどいつの仕業かわかりませんが。あの六島建設の森口という所長、部下に相当嫌われているんじゃないですか？」

なるほど、そういう見方もあるのかもしれない。

しかし生駒は、仙吉が村人を嫌疑の外に出すため、矛先を六島建設内部に向けたのだらうと思った。

地鎮祭の準備は昨日から始められていたが、盛砂自体は今朝早く作られたものだ。

作ったのは西脇工務店が雇った職人だが、誰も盛砂に近づけなかったかというとうでもない。屋敷には多くの人が出入りしていた。工事業者の社員に混じって仕出し屋や久米が呼んだ遠来の来賓などもあった。しかし、そのほとんどは村人である。久米は多くの村人を招待していたし、手伝いに来ていたものも多かった。

猫の首を盛砂に入れたのは村人に違いない。

敵意の強さを感じる。

生駒はそう思い始めていた。

仙吉は雨が上がったといって、庭の片隅で草抜きを始めている。善良なだけがとりえの腰の低いこの男にそんな意見を披露しても、そんなことはないだろうとあいまいな笑みを浮かべるだけだろう。

第 5 章 「権現さんと握り飯」

「なんだか変な話ばかり」

道長が西脇を睨んで、次々と繰り出す久米へのおべんちやらを牽制した。

ただ、おべんちやら合戦のおかげで場はくだけたものになっていた。

普段から物静かな木元までもが顔をほころばせて久米の豪気を持ち上げている。披露する話も、久米に愛想をふりまく気もない生駒や優は聞き役に徹していればよかったが、根っから社交的なことの好きな優は始終にこやかで、料理にばくついでは久米を喜ばせていた。

優は酒の酌をするわけでもなく、料理を取り分けたりするわけでもないが、隅に座っている人が取りやすいように料理の皿の向きをなにげなく変えるといった気遣いをみせていたし、なによりも人の話を表情豊かに真剣に聞いている態度が、場を盛り上げるのに一役買っていた。

時折、木元が優にももの言いたげなまなざしを向けている。生駒は少し誇らしかった。

「じゃ、私も言い伝えめいたお話をしましょうか。いえ、実話ね。

私がまだ子供だったころ、そうね、昭和三十年ごろ。この村は今より活気があって、子供もたくさんいたわ」

道長が語り始めた。

「猪背川が大きく蛇行しているところがあるでしょ。ほら、バス停より少し下。府道脇に一坪ほど石の柵で囲ってあるところがあるの。

お気づきになったかしら」

首を縦に振るものはいなかったが、仙吉だけは、ははあ、あの話だなというように口元をほころばせた。

戦争が終ったころ。

日本全体が貧しかったが、村の生活はひとときわ厳しいものだった。山間に散在する小さな田畑で作物を育て、細々とした林業だけが産業である村が裕福であろうはずがなかったが、中でもトキの家はからきし貧乏だった。

トキはいつも腹をすかせていた。ただ、体が丈夫で、よく働く娘だった。学校には行かず、かといって奉公に出されるわけでもなく、来る日も来る日も親を助けながら重い鍬を背負って畑に出ていた。

ある夕方、川に仕掛けておいた魚とりの罟を見にいった。三尾のヤマベがかかっていたが、両親と兄の分はあっても自分の分はない。意気消沈して家路を急いでいたときのことである。

パタツと立ち止まったトキの目は、道端の石の上に釘付けになった。そこには、真竹の皮が敷かれ、まだ温もりのある握り飯が置かれてあったのだ。

トキは握り飯をじっと見つめた。米の粒が光っている。

これほど大きな、しかも白い米だけの握り飯はここ数ヶ月も口にすることがない。

あたりには葦が生い茂り、トキの体をすっぽりと覆い隠している。やがてトキは握り飯の前にしゃがみこんだ。そしてその魅力的なものに見入った。

ただ、そのときはまだ誘惑と戦っていたわけではない。していいことと悪いことの区別はついていたし、なにより、人のものを盗んだ後の咎めの厳しさも知っていたからである。取って食ってしまお

うとは思っていなかった。

が、もの欲しさに見つめていたことは間違いない。腰につけた袋のヤマベが臭っていた。

あ、とトキは小さな声をあげた。

黒い羽を持ったゴミムシが石をよじ登ってきた。そして一直線に竹皮を目指して進んでいく。

ゴミムシは反り返った竹皮の下に一旦は姿を消した。しかしすぐに、その縁に細い足を引っ掛け、取りついたかと思うと難なく体を翻し、竹皮の上面に姿を現した。

握り飯はもう間近だ。ゴミムシの動きが速くなったような気がした。

次の瞬間、トキは握り飯を手に使っていた。

みすみすこんな虫けらに渡してなるものか。

握り飯を見つめた。そして、さっと自分の口に持っていた。

が、握り飯は口には入らなかった。

「痛ッ！」

突然襲ってきた強烈な痛みに身をよじった。握り飯を掴んだ腕が、何者かの強い力で締め上げられていたのだった。

トキは見た。

得体の知れない毛むくじらの手が己の腕を掴んでいるのを。

獣の前足。葦の茂みの中から伸びた腕。

異様に細長く、茶色い硬い毛に覆われている。

四本の汚れた鉤爪が不気味な光沢を見せながら、トキの痩せ細った腕に食い込んでいた。

あまりの苦痛に、トキは幻影を見たように思った。
都会に出て、立派な仕事についた自分の姿を。

が、一瞬のうちに幻影は掻き消え、腕から滴り落ちる血の色に
ののくと同時に、握り飯を取り落とした。

と、腕はすかさず開放され、獣の手は握り飯を空中で掴むと、葦
の茂みの中にザッと引きこめられた。

トキはようやく我に返って叫び声をあげた。

その日からトキは村の有名人になった。

不名誉な出来心が発端ではあったが、「権現さん」を初めて実
際に拝んだ人として。

権現さんとは齢を重ねた狸が変化へんげしたもので、猪背川の葦原に住
んでいると村人に古くから信じられていた。月に一度、村人が供え
物をしており、その月は采家の番で、珍しく米の握り飯が供えてあ
ったのだった。

「トキが握り飯をくすねようとした道端の石。それがその石柵で囲
まれた中にある石なの」

猪背川に流れ込む小さな谷に設けられた幅十メートルほどの砂防
ダムの横。緑色のネットフェンスを張り巡らしたコンクリートの建
造物のすぐ隣。妖怪が人の前に姿を現すような霊的雰囲気のかけら
もないところだ。

生駒の疑問を察したからではないだろうが、道長は解説を付け加
える。

「4、50年ほど前のことかな、若狭方面に抜ける府道が今の場所
に開通したの。川の向こう側、斜面の中腹にね。そのときに橋も新
しく架け替えられたわ」

仙吉が小さく頷いている。

「今の話は、まだ村への本道が川のこちら側の岸边を通っていた頃のこと。細いグネグネ道でね。ちょっと大雨が降ると沢の水が溢れて冠水してしまった。そうなると村は孤立状態。それで府道が向こう側に通ったときに昔の道は廃道になったの。護岸として改修されたのね」

「ほお」と、久米が相槌を打った。

「あたりの景色は一変。権現さんの石も向こう岸の府道脇に移されたということなのね」

「権現さんは川のこっち側にいるのに、お供え物を載せる石だけ動かしたの？」

綾がもつともな疑問を口にする。

「そうよねえ」

道長が朗らかにいう。

「私も変だと思うわ。でも、しかたなかったんでしょね。改修で葦原もろともなくなってしまったんだから。権現さんは今ごろ、どうしているかなあ」

道長が座を見回しながら笑った。

「実は、皆さんも権現さんの姿を目にしているかも、よ」

「へえ！」

愉快そうな声がいくつかあがる。

「私も？」と、優もチーズを取る手を止めた。

「ええ、あなたもよ」

ニヤニヤして聞いていた仙吉が、ますます相好を崩している。

「フフ、実はね」

道長がワインを口に含んで、仙吉と目を合わせた。

「トキの話を元にして、権現さんの石像が作られたのよ。腕しか見なかったのに全体をどう想像したのかなんて言いっこなしよ。でも

実際にその姿をトキが見たことで、存在が証明されたわけ」

「ほう！」

「そして、村ではちょっとした権現さんブームが起こったのね。そのお供え物の石の横には権現さんの石像がお祭りされることになった。私が中学生だった時分には、あそこにまだ石像があったわけ」

道長がまたワインを口にした。

「でも今はない。さて、権現さんはどこに行ったのでしょうか！」

道長はここで話を切って、再び一同の顔を見渡した。

仙吉が相変わらず笑っていたが、もうひとり、綾がにこりとした。

「はい、綾ちゃん。知ってるのね」

「ううん」

と、綾は首を振ったが、ますます笑顔が大きくなる。

「はい、答えは？」

道長に促されて、綾は上機嫌で答えた。

「このお屋敷の庭です」

「じゃーん！ ご名答！」

「ほほう！」

久米は万歳するような格好で拍手だ。

「このお屋敷の庭にある石像がそれ。砂防ダムができたときに、勿体ないということでこの屋敷に来てもらったというわけ。はい、これで私の話はおしまい。仙吉さん、間違ってませんでしたよね」

唐突に呼びかけられて、仙吉が、

「えっ、ええ、もちろん。さすが先生、そのとおりです」と、むせた。

「おっ、仙吉さん、どんどんやってください。いつも本当にお世話になってます。さあ、さ」

久米が焼酎の瓶を仙吉の前に突き出して、グラスの中身を空けてしまえと促した。

久米は昨年の猫の首事件以来、村の行事や集まりに可能な限り顔を出すようにしていたし、顔だけでなく労力や金を出すこともいとわなかった。その先導をしてくれるのが仙吉だ。久米にとって仙吉は身の回りの世話をしてくれるというだけでなく、村と繋がるための大切なコネクターなのだ。

道長が村の言い伝えを話している間、健治はこれといった反応を見せずに黙って聞いていた。

あの事件からちょうど1年……。

猫の首をあくことなく眺めていた健治……。

生駒はふと、佳代子と健治の關係に思いを馳せた。

昨年の事件は、猫の首だけでは終わらなかったのである。

地鎮祭翌日の昼過ぎ、悲しいニュースが大阪の生駒のオフィスにもたらされたのだった。

受話器の向こうから聞こえてくる六島建設の森口の声が緊張していた。

「久米先生が屋敷に戻られているかもしれないと思ひまして、今朝も行ってみたんです。すると、手前の府道で人だかりができてまして……」

「はあ」

「聞きましたら、人が流されていると言ひんです。先日来の大雨で川が増水してましてね。見ると、女の人引き上げられようとしてるところでした。ひと目見て、もう死んでいるとわかりました」

「村の人ですか？」

「はあ、まあ、お手伝いさんだとかなんとか」

「えっ！」

「私も驚いてしまつて。というより、心配になつてきましてね。つまり、その、久米先生の行方が。あのう、生駒先生はご存知ありま

せんか？」

「ちよっと待ってください。あ、いえ。久米さんの居所は知りませんよ。それより、溺れた女の人、なんという人ですか？」

「さあ、ええっと……そうそう、宅見さんとか」

実際に見たわけではないのに、佳代子が猪背川の淵に浮かんでい
る光景が生駒の脳裏をよぎった。

白いブラウスにピンクのフレアスカートをはいた佳代子が、増水
して濁った猪背川の波になぶられながら漂っていく……。

死因は溺死。

川の水を大量に飲んでいたらしい。

村の数キロ下流、瀬の岸に佳代子は打ち上げられていた。いつも
身につけていたブラウスにフレアスカートといういでたちで。

サンダルだけが「生」を求めるかのように、数キロ下った下流に
浮かんでいたという。

「困りましたなあ。道長先生に権現さんの話をされてしまうと。わ
しの出番がなくなってしまうましたがな」

仙吉は目尻の笑い皺をいっそう大きくしながら、久米が焼酎をな
みなみと注いでくれるのを受けた。

「あら。私がこのお話以外になんの話ができますの？」

道長は自分の短い話が受けたことでご満悦だ。

「そりゃあ、村の歴史やこの采家の話なんかをしていただけるもん
だ」

「村の歴史なんて、堅苦しいお勉強のような話になりますよ。江戸
時代の代官の名前なんかを挙げてみてね」

「それはそれで、まあ……」

仙吉は怖気づいたように、とたんにあいまいな口ぶりになる。

「それに、お屋敷の話は健治さんがされましたし。一族の話を皆さんがおられる前で私がするのは、ちょっとね」

「いいじゃないですか。僕も聞きたいな。言い伝えみたいなものとか、ないんですか？」

と、健治も道長を促した。

「言い伝えですか？」

「ええ。ぜひ」

道長の目が一瞬きらめいたが、やはりやめだと思い直している。

「あまり詳しくは知らないから。というより、言い伝えなんてたいていの場合、本質は簡単なひと言だけでしょ。つまり、この家がいざというときにはちゃんと助けてくれるものがあるとか、その秘密は采一族のものだけが代々ひとりずつ伝え聞くことになっているとか。そんなような話。坂井さんのように、上手に肉付けして話すのは苦手だから」

「とんでもない。さっきの権現さんの話、とっても迫力ありましたよ」と、優が囁す。

「だめだめ。おだてたって」

生駒もつられて道長の説得に一枚加わった。

「采家を助けてくれるものっていうのは、なんですか？ 権現さん？ それとも不動明王？」

「さすが生駒さん。常識派ですね。おっと、言い間違い。良識派！ こういう話をする、と、すぐ、金の延べ棒だとか真珠や瑠璃の詰まった行李なんて想像する人がいるのよねえ」

「なんだ。違うの？ 私はてっきり！」

優が大げさに口を尖らせてみせた。

「小判がごくごく？ 残念でした。仏様とか、山の神様って答える人の方が長生きすると思うわよ。三条さんも気をつけなきゃ。それ

にお金のことばかり考えていると生駒シャチョオに飽きられるわよ」

「ほへえ？　ちょっと待ってよ！」

「ハ！　変なことを！」

優と生駒の抗議に、「ね！」と、道長が笑った。

「それに祟りがあるかもよ」

「げ！」

「フフ。采家の人しかそれを手に入れることができないって。それも、いざというときだけ。しかも自分の欲のためにはいけないの。もし、それが守られなければ……」

「うへー」

「ありがちな話だけどね」

道長はそこで話を打ち切り、ガーリツクトーストを口に入れて、おいしいと久米を褒めた。

第 6 章 「老婆」

「もっと他には？」

会話を楽しんでいるときの癖で、久米がしきりに手の指を揉んでいる。

「そうねえ。正直にいうと、あまりいい話がなくて。なにしろ近郷一番の庄屋さんでしょ。昔話ってだいたいが、弱い立場の村人が大金持ちの庄屋さんを懲らしめるっていう話だから」

「そういやそうかな。どう？ 他の人は？」

久米が健治や西脇に顔を向ける。

「うーん、そうですねえ」

道長の権現さんの話に、西脇が当然のように尾ひれハヒレをつけてくるものだと思っていたが、唸っているばかりだ。健治にしても仙吉にしても黙り込んでいる。やはりこれは采家の秘密ということなのだろう。どこことなくシラツとした雰囲気になった。

その微妙な空気を揺らすものがあつた。

「采家の呪われた歴史とか？」

そう口にした若い男の顔は笑っていたし、軽い調子で場に投げたのだ。笑いを取ろうとしたのかもしれない。

しかし間が悪かった。今までほとんど黙っていた人物が唐突に口にする言葉としてはストレートすぎた。

木元勝。

猪背川を下ったところにある原田という町で、レンタルビデオ店を任されているという二十一の男だ。

まあまああのルックスを持っているのだが、どうしてここまで太れるのかと思うほど肥えている。腹回りはとうに百五十センチは超え

ているだろう。前から見ても横から見ても、干しダコのような菱形をしている。

しかし運動神経はいいようで、身のこなしはすばやい。

ただ、一番の特徴はほとんどしゃべることがないということだ。いろいろな場面に顔は出してはいるものの、常に仲間の輪から外れたところにいるような人物。無口は悪で社交的なものは善という短絡的な判断をするわけではないが、生駒は木元とは親しくなれそうにないと思うようになっていた。

若者が期待したであろう反応を誰も見せなかった。

多くのものが虚を突かれたように啞然とした顔を見せたただけだ。ただ道長が口ごもって、それは……、と言ったきり黙り込んでしまったところを見ると、案外、的を射ている部分もあったのかもしれない。

采家。

代々大西村の名代を務め、下の原田の町を含めたこの地域一帯の名家。

生駒は縁もゆかりもないが、少し変わった立場で親しみを持っている。

久米に誘われてこの屋敷に出入りするようになって、采家の人たちがこの屋敷でいきいきと暮らしていた名残を目にし、実際に手にとって触れていたからだ。

いや、名残というほど美しいものではない。むしろ悲しき証拠というべきかもしれない。

久米からアトリエの設計を打診された二年ほど前。

まだ屋敷の中は千寿が住んでいたときのまま、ありとあらゆる生活道具などが残されていた。久米の要請に応えて、知人達がボランティアとして屋敷の清掃や草刈などを手伝っていた。

集まっていたのは、生駒の他に久米が行きつけの飲み屋の主人や、塗料メーカーの社員、絵画教室の生徒、取り巻きの婦人連中、画廊の主人といった人たち。生駒はそこで道長や坂井と知り合ったのだし、村人である仙吉や橘や綾と出会い、顔見知りになったのだった。

庭の片隅に積み上げられている不要な材木をドラム缶の焼却炉で燃やす。納屋の中のを、農協に引き取ってもらうもの、あるいは専門業者に引き取ってもらうもの、ごみに出すものとして分別し、所定の場所に運ぶ。日曜日ごと、そんな作業に汗を流していた。

大勢の人間が大阪や京都から行楽気分で屋敷に参集し、めいめいが思いつくままに体を動かしていた。誰かが誰かの役割を決めるわけでもない。自分ができるといふだけのルールでも、前向きに行動する気持ちのある人だけが集まるという環境の下では、それなりに機能するものだ。唯一の暗黙の了解は、生駒ら中年グループはかつてこの屋敷に住んだ人たちの生活空間の整理や片づけを担当し、比較的腕力のある若者たちは、中高年組が空っぽにした不要なたんすや食器棚を裏の空き地まで運び出す、といった分担にしようということだけだった。

この屋敷の主は、采^{チズ}千寿という。

千寿が使っていた部屋は、母屋の右の端にある小さい方の角座敷と部屋続きの寝室、および廊下を隔てた八畳間。後は簞笥部屋、そして玄関脇の茶の間だけ。

つまり塔の間、竹筒の間、石像の間とその周辺の小諸室いうわけだ。

これらの部屋と佳代子が使っている奥座敷、そしてふたりが主に過ごしていたリビングやキッチン完璧なまでにきちんと整頓され、千寿や佳代子の潔い人柄が表れているようだった。

しかしそんな千寿や佳代子も、他の家人達が残していった暮らし

の残滓までは手が回らなかったのだろう。あるいはそのままにしておきたかったのかもしれない。

屋敷中が、まるで一家の資産を食い散らかしたかのような荒れようだった。

おそらく何十年もの間、片付けたり、ごみを出したり、といったことはなかったのだろう。

高価そうにみえる置物や着物などが無造作に開け放たれた段ボール箱の中から溢れ、埃にまみれていた。

ありとあらゆるものに染み付いた体臭が、いつしか、ものが朽ちてゆくときにわずかに発する埃まじりの土のような臭いに取って代わられていた。

破れてゴキブリの卵が張り付いた紙袋や、ネズミの巣作り材料にされて粉々の切れ端になった枕カバーなどが乱雑に詰め込まれている押入れ。

山積みになって埃をかぶった贈答品の箱。もはや持ち上げることさえできないほど腐ってしまった無数の木箱。子供の描いた絵やノートが詰まった底の抜けたスチール缶。

一昔前の勉強机が、ガラスの外れた窓から入り込んだツタに半ば覆われながら、かろうじて原形をとどめていたりした。

歴史民芸博物館に収蔵されていそうな用途不明の木製道具などもあるところと散乱していた。

まるで、住人が神隠しにあって忽然としてなくなった後で泥棒に入れられ、その状態のまま何十年もの月日が流れ、やがて廃墟になってしまった、そんな状態だった。

生駒は箱や押入れや筆筒を開けるたびに、口にあてがったマスクの圧着具合を確かめずにはおれなかった。

昔の大家族制が完全に崩壊し、高齢化が究極まで進んだ村。

とり残されたものは、大きな家族を収容した家という入れ物。

そして、かつての家人たちの残滓の中でぼつねんとたたずむ老人。そんな光景は日本全国いたるところで目にする。

生駒にとって、采家の屋敷はその象徴のような存在だった。

ただ、もうそんな情景も今は思い出話でしかない。

今の屋敷は完全に片付けられ、最後はプロの清掃業者の手によって磨き上げられている。あのころの面影をとどめているのは庭と蔵の中だけ。庭は、久米が自分でこつこつ造り直して楽しむということだったし、蔵は手をつけないでおくということだったのである。

岩穴の中には気まずい空気が流れた。「采家の呪われた歴史とか？」などと口走った木元は、目を伏せて、おずおずとジークパンの尻ポケットから押しつぶされたタバコの箱を取り出した。ライターを探してほかのポケットに手をやる。気を利かせた仙吉が自分の百円ライターを取り出す。ライターにはパーラーハラダと、街のパチンコ店の名が印刷されていた。

木元が手を出そうとしたとき、

「ここは禁煙」と、道長がぴしゃりと止めた。

木元の居心地がますます悪くなった。のそりと立ち上がると、ライターを受け取って岩穴から出ていく。それにつられるように橘も立ち上がった。

生駒はふと思った。木元がこの岩穴座談会にふさわしいメンバーなのだろうか。おもしろい話を持っているのかもしれないが、あの無口だ。久米はあの男になにを期待したのだろう。

久米が和やかなムードを取り戻そうとしていた。満面の笑顔を作

って仙吉に視線をあてた。

「じゃ、そろそろ仙吉さん」

仙吉が話す番だ。いよいよ、生粋の村人の登場だ。この村に住み続けている男からどんな話が聞けるのか、と生駒も興味を持った。

生駒はこの屋敷の本来の主である千寿に会ったことはない。しかしその老婆の寝所を片付け、押入れの隅から下着を引きずり出し、筆筒の引き出しを片端から開けて中身を放り出したものとしては、千寿に奇妙な親近感を抱いていたし、この屋敷に住んだ人々の生の歴史を聞いてみたいとも思っていた。

ところが、久米は、

「采家の呪われた歴史とか」と、座り直したのである。

木元がその言葉を口にしたときには慥然とした表情を見せた久米だが、今になって、さもおもしろいという顔で仙吉を促す。また手の指を揉んでいる。道長も団扇を動かし、隣に座った仙吉に風を送ってやり始めた。

さすがに仙吉は困った顔をして久米に目をやり、

「ちよっとそれは……」と、尻込みした。

失礼な話である。

仙吉の祖先の話である。それを呪われたなどというのは、悪ふざけとしかいいようがない。しかも、それを仙吉の口から話せとせがんでいるのだ。

采家の郎党である仙吉や西脇、そして健治が気分を害してもいい場面ではあった。胡坐をかいた西脇の膝が貧乏ゆすりを始めたのは、そんな気持ちを表していたのかもしれない。

しかし仙吉は困り果てたように、しきりに顔を手で擦っているばかり。

ようやく久米が柔らかい声をはりあげた。

「仙吉さん。すみません。いいんですよ。失礼なことをいいました。僕が村のことを何でも知りたいなどと変な注文をつけたものですから、皆さんに気を使わせてしまって。いえ、軽い、お気楽な話でいいんです。お集まりいただくのに、なにかテーマがないといけなかなと思ったものですから。仙吉さん、どうぞお気楽に」

久米が高らかに今更ながらに吐いた台詞は、呪われたなどと失礼な督促をしたことを詫びたのか、無理に話をさせようとしていることを詫びたのかわからなかった。

ただ久米はそれで気が済んだようにますます陽気になって、酒を注いで回った。やがて橘や木元が戻ってきたのを見て、新しい焼酎の瓶を立て続けに開けた。

「仙吉さん、今年は豊作かしら」

道長がワインの色を確かめるようにグラスをかざしながら話題を変えた。

「は？ さあ、どうですやろか。まだ、田植えをしたばかりなんで、なんとも……」

「井戸は？」

「あっ、そういうことですかいな」と、仙吉が久しぶりに目じりの皺を深くした。

「どうでしょうかなあ。最近、あんまりそのことは言わなくなったもんで」

「そう。残念ねえ」

と言いながらも、道長はほっとしたような顔を見せている。

「ねえ、ねえ、あのときって、子供たちにヨモギ餅が配られてなかった？ そんな記憶があるんだけど」

「ああ、そうでしたなあ」

「どういう話？」

久米がしびれをきらして尋ねる。

「私、じらしてた？」

「ああ」

「フフン。聞きたい？ 私ばかり話しすぎかなと思って」

「いいから、いいから」

久米と道長がじゃれあっている。

ふたりの関係とはどういうものなのだろう。古い付き合いだとか聞いたことがないが、彼らが自然体で接するときの様子は、単に知人と表現するだけでは言い足りないような気がする。と生駒は感じていた。

「じゃ、仙吉さんから」

道長が笑みを浮かべて仙吉に話を譲った。口火を切る水先案内をしてやったということなのだろう。

仙吉に視線が集まった。

「村の真ん中に井戸がありますんです。昔から不思議な井戸やといわれてましてな。今年が豊作やと、かすかな湯気を上げるんですわ。時期は田植えの前、春の彼岸の頃ですな。朝早く日の出の時刻になると、ほのかなふわとした湯気を。んー、湯気というより、霞が漏れ出るといの方がいいですかなあ。ま、そういうことですな」

仙吉が顔を擦って、自ら頷いた。

「で、その日は村の行事ということで、少しだけ食べたり飲んだりもしましてな。村の子供たちにとっては、ちょっとしたお祭りやっただんですな」

仙吉の話はそれだけだった。

話好きだが、決して流暢な口ではない。果たして質問攻めにあうことになる。

「ほう。それは水温とか気温に関係してるのかな」

「さあて。わしにはようわかりません。井戸から水蒸気が発生するならそういうことなんでしょうけど。それでなぜ豊作なのかは……。ま、昔はそういう言い伝えもあったということです。今はそんなこと、誰も信じちゃおりませんけどな」

「当たっていなかった？」

「さあ、どうですよ」

「なにしろ、私たちが子供だったころのことなので、よく覚えてないわ」

などと、仙吉と道長が交互に答え始める。生駒も質問に加わった。
「井戸は今、どうなっているんです？」

「蓋をしています。年末だけですな。蓋を取るのは。餅つきのにき。今は井戸そのものが使われなくなってますんで」

「どこにあるんです？」

「そりゃ、村の広場ですがな」

「広場？」

「集会所のあるところ。ほら、道が広がってますでしょう」

「集会所のところ？ あそこが？」

「ハハハ。村ではあれでも広場というんです」

「井戸なんかありましたっけ」

「ね、生駒さん。明日、見にいきましょう」

道長がにっこりと提案した。

「仙吉さん、蓋とってみてもいいんでしょう？」

「蓋？ そりゃあ、いいでしょう。単に木の板を上に乗っけてあるだけですから」

いつもの道長は人の神経を逆撫をするようなことを言うが、今日は今のところ朗らかだ。自分が場の中心になったときには一気に輝きを増す。上手に会話を裁き、コントロールする。そんな人だ。

井戸の話題が一段落した。

「道長さんもこの村の方だったんですね。知りませんでしたよ」

そういった生駒に、道長が瞳を光らせた。優が道長のグラスにワインを注いだ。

「ありがたい。そう。故郷って気持ちはあるわ。でも、昔々に一家ごと出て行ったから、もう記憶のかなたね。親戚もないし、知っている人も誰もいないし」

「そうなんですか」

残念ながら生駒が出した話題は、これ以上広がりがなかった。

生駒はわずかに疲労を感じた。改めて岩穴に集う面々を見渡してみた。

大げさに言えば、坂井には嫌悪感、橘には漠然とした不安、木元とは距離を保っておきたいという気持ち、道長には近寄りがたい、あるいは構われたくないという思い。そんな感情を持ちながら、いつものように自分中心の久米と狭い部屋の中で夕食を共にするのは、いくら和やかであっても、神経がじわりと疲れていくようだった。

会話に少し間が空いた。ちょっとした中休み。

めいめいが料理に箸を伸ばし、口を動かしている。

メザシをかじりながら、ぼそりと西脇が口を開いた。

「ところで久米先生。例のアトリエの新築工事。もうまったくない話なんでしょうかねえ」

「ああ。もうそのつもりはありません」

久米のはっきりとした応えに、西脇はフウツと鼻から息を吐き出す。

「しかし、せっかくこの屋敷をお借りになったわけですし、生駒先生のすばらしい設計図もできあがっているわけで……」

西脇が視線を寄こしてきたが、生駒としては無関心を装うしかない。設計者がとやかく言う話ではない。

「もったいないことですなあ。この岩穴で絵を描かれるとしても、納屋を改装なさるとしても、なにかと不都合があるんじゃないでしょうかねえ」

アトリエ工事を諦めきれないのだ。

「いえ。絵なんぞはどこでも描けます」
と、久米はそっけない。

「そりゃあ、先生の腕前のことですから、そうなんでしょうけど。しかしやはり、その場の雰囲気やそれなりの設備なんかも重要なじゃないかと、素人ながらに思うんでございますけどねえ」

この回りくどいねちこさが、彼の営業スタイルなのかもしれない。ただ、久米がアトリエの新築を断念した理由、つまり佳代子があるな死に方をし、猫の首が地鎮祭をぶち壊しにしたことなど、とうに忘れてしまったかのようなものの言い方だとも言えた。

久米がそのことでどれほど苦痛を味わったのか、ということにも関心がないのかもしれない。

久米が不機嫌にならねばいいが、と生駒は案じた。しかし、これに反応したのは久米ではなく、小学五年生の少女、綾だった。

「おじさんは佳代子おねえさんが死んで、悲しくないんですか？」
西脇がまぶたを瞬かせた。

そして目を剥き、綾を睨みつけた。

しかし綾はひるむどころか、驚くべきことを口にした。

「いくら連れ子だからって、佳代子おねえさんはおじさんの娘ですよ！」

少女の鋭い声が岩穴の中で反響した。
そして静まりかえった。

久米が目をせわしなく動かして、綾と西脇を交互に見た。坂井も

道長も扇子の動きを止めた。健治が口をぱくつかせ、ぴたりと西脇に目を据えた。仙吉さえも口を半ば開け、中のものを見せていた。

「こら、綾、つまらないことをいうな」

橘が慌ててたしなめたが、綾は頬を紅潮させて西脇を睨みつけたまま。

導火線についた火がちりちりと燃えているような短い沈黙。

「かわいそう」

それを破ったのはまた綾だった。

「私、佳代子おねえさんに誰にも言うなって口止めされてたんだけど」

西脇が腰を浮かせた。

「言っていいことと悪いことが」

「佳代子おねえさん、あんなに優しい人だったのに、おじさんは仕事のことしか考え……」

「なにをいうか！」

「だって、そうでしょ！」

久米が両手を広げ、エスカレートしそうなふたりに聞かせるために、落ち着いた声を出した。

「それは知らなかった。まあ、采さんの遠縁の人だろうとは思っていたが、西脇さんの娘さんだったとは」

「いえ、籍は入っておりますね。妻の連れ子には違いありませんが」

綾がまた噛みつく。

「おねえさんはおじさんに嫌われているって、悲しんでいたんだよ！」

「悲しんでなぞおらん。むしろ……」

西脇が言葉を飲み込んだ。

「むしろ、なんなの！」

「ここで働けるようになって喜んでいただろ」

「おじさんら家族と他人のふりをして？ うれしいはず、ないじゃない！ おねえさんは一所懸命、おばあさんのお世話をしてたけど、でも寂しかったんだよ！ 私もここへ来たとき、最初はひとりぼっちでとっても寂しかった」

綾の声が震えていた。

「せっかくお友達になれたのに……。あんなふうになんて死んでしまつて……。なのに、他人事みたいにお葬式もしてあげないなんて……」
「ふん」

私生児が、と言いかけて西脇はさすがに口が滑ったと思ったのか、あわてて咳き込むふりをした。

「なんてこと……」

綾の言葉はそれ以上、声にならなかった。

代わって声を荒げたのは健治だった。

「自殺したにしろ殺されたにしろ、そんな言い方はないでしょう！」

「殺されたんじゃない。自殺だ。自業自得……」

「誰が自殺したなんてことをまともに！」

健治がいきなり立ち上がった。

道長が色めきたち、久米も聞き捨てならないと思ったのか、三人が同時に声をあげた。

「どういふことですか！」 「それは言い過ぎでしょう！」

たじろいだ西脇が、

「せん……」と言いかけて言葉を飲み込んだ。

「なんと！ そういうことだったのか！ あんたは！」

と、健治が叫んだが、その声は途中で消えた。

突然、聞きなれない声がした。

岩穴の入り口から流れてきた、しわがれた重々しい声。

短い言葉が部屋にいる全員の耳にはっきりと届いた。

「た　た　り　じゃ」

全員がぎょっとして振り向いた。

老婆がひとり。入り口を少し入ったところに腰を下ろしていた。いつからそこにいたのか、岩穴の中のものたちが凍りついたように見つめる中、老婆は彫像のように動かない。

かがり火が逆光となって小さな体の線がくっきりと浮かび上がっていた。

「どちらさんですか？」

ようやく久米が問いかけた。

「さっきの権現さんの話も、アマガハラノの話もおもしろかったぞ。村の年寄りなら誰もが知っている話じゃ」

老婆は久米の問いには答えようとせず、そういつて口を開けて笑った。

振り乱した白い髪を載せた頭が揺れた。

そして濃い緑色の着物の袖をすっと上げ、曲がった指を誰に向けるともなく差し出すと、再び告げた。

「崇りじゃ」

あまりに芝居じみて、映画の中でしか聞いたことのない言葉……。

しかし、夜、こんな山奥の岩穴の中で耳にすると、赤い炎を上げているかがり火を背にしてうずくまっている老婆の口から繰り返し聞かされると、意味を持ったひとつの言葉としていやおうなく胸に沁み込んでくる。

恐怖心が湧いたわけではない。叫びだしたい衝動が生じたわけでもない。

雨に濡れる苔のように、生駒の胸は妙に平静だった。それでも視線は老婆に釘づけになっていたし、視界は狭まり、ぽっかりと開いた岩穴の入口と老婆の姿だけがクローズアップされているような錯覚にとらわれた。フワリと、幻想の世界に引き込まれたような気分がした。

「ちょっと！」と、久米が腰を浮かせた。

明らかに狼狽し、瞳は潤み、怯えの色があった。

猫の首を掘り出したときに見せた色に似ている。

助けを求めるように部屋の中を見回したが、老婆に何者かを質そうとするものはいない。

久米が矢も盾もたまらず立ち上がったとき、また老婆の口が動いた。

「利郎」

視線が一斉に西脇に向かう。

「周りのことに気を配れ。いよいよ、采家のものとして、おまえの務めを果たすときじゃ。よいか」

西脇が口をぽかんと開けたが、たちまち苦りきった顔になる。

「綾よ」

老婆は次に少女の名を呼んだ。

「はい」

綾に視線が移動する。

「話してあげなさい。呪いの話を」

「え、私が？」

綾は驚いたようだったが、もっと驚いたのは父親の方だ。

「綾！ やめなさい！」

そう言われた綾は父親を睨みつけると、さっと立ち上がった。

「私、もう帰る」

老婆の前を足早に通り返ぎ、出て行く綾。

娘を追って橘もあわただしく久米に札を述べて出ていってしまった。

と同時に、老婆も姿を消した。

第 7 章 「一夜明けて」

亡骸はすでに猪背川の淵を離れ、流れに乗って橋の下をくぐって
いこうとしていた。

ちょうど一年前、佳代子の亡骸がそうであったように、清らかな
波に頬をなぶられながら。

集落を貫く一本の道が、民家の間をうねうねと登っていくと、や
がて家並は途切れ、右側に視界が開けて猪背川を眼下に見ることに
なる。

道路から川面まで二十メートルはあろう。蛇行した川が淵をなし、
透き通った水が、ここだけはときとして緑や青に見える。

猪背川の溪谷越し、向こう正面にはヒノキの植林が大きな斜面を
見せ、その裾にわずかな田畑が貼りついている。

道は山裾の小さなひだを回り込む。ますます細く急勾配になり、
アスファルト舗装が滑り止めに丸くスタンプされたコンクリートに
変わり、それさえもいよいよ途切れてその先は山道となる。

采屋敷はそんなところにある。

立派な自然石を積んだ石垣が巡り、イタビカズラが貼り付いて田
舎びた趣を醸し出している。

石垣の上には珍しいトキワマンサクの生垣や板塀が二千坪ほども
ある敷地を取り囲んでおり、この屋敷が地域有数の格式を備えてい
ることを知らしめている。

石段を二十段ばかり登ると、間口二間ほどの門にたどり着く。茅
葺きの屋根をもつ立派なものだ。ただ、築後長い年月を経て、材木
は痩せて節が抜け落ち、触れると年輪の皺を指に感じる。

門をくぐり、まず目につくのは大きなタブの木である。その木を中心にして、かつては立派な庭園が造営されていたのであろう。たくさん石に囲まれた窪地は水景の跡であろうし、姿の崩れたサルスベリの木が赤味を帯びた立派な景石に寄り添っている。

傍らには、野放図に伸び放題となったナンテンの茂みがあるし、大猿か小熊か判然としない一抱えもある石像がうずくまり、それに隠れるようにして石灯籠が恨みがましく苔むした姿を覗かせている。欠け落ち、沈み込んで列の乱れた白御影の敷石が、そんな庭園の跡を貫くように、訪れる人を母屋へと導いている。

その向かい、前庭にでんと座った大きな平石を隔てて、離れが建っている。

生駒はその建物の中座敷で目覚めた。

寝覚めはそれほどいいものではなかった。飲み過ぎで頭が重い。しかも神経を少しずつ磨り減らすような昨夜の断続的な緊張のおかげで、疲れが残っていた。

縁側に出て外の空気に触れると幾分すっきりして、晴れ渡った空に向かって深呼吸をした。

「いい天気になったね」

「ああ」

「山登り、行くんかな？」

優がぐずぐずと布団を畳んでいる。

「そりゃ、予定通り行くやろ」

「ふうー」

「行かないのか？」

「行くなって」

昨夜、少女の堪忍袋の緒が切れたとでも言うべきいさかいと、そ

れに連なるちよつとした事件が起きた。

直後、激しい雨も降り出した。岩穴の中は瞬く間に蒸し暑くなり、興が削がれてしまった座談会は、一気に湿っぽい会になってしまった。

もう誰も村の歴史やこの屋敷、あるいは采家のことをおもしろく紹介しようとするものはいなくなり、残りの時間は焼酎やワインのビンを空にすることに専念したのだった。

岩穴に現れた老婆。

「祟りじゃ」、などと芝居がかったことを言い捨てて消えた。

この屋敷の持ち主、采千寿の妹、奈津だという。戦争で連れ合いをなくしてからというものの、嫁ぎ先から村に戻ってきて畑を耕しながらたったひとりで生きてきたという。

岩穴座談会が始まった頃の心地よい雰囲気は完全に失われた。

木元はやたらと岩穴の入口まで出てタバコを吸っていたし、健治は電話を借りるといって母屋に行ったりきりなかなか戻って来なかったりした。

久米は不機嫌な顔を隠そうとせず派手なため息をついたり、急に必要以上に甲高い笑い声をたてたりした。することが乱雑になり、上等のシルクのシャツを自分の手料理で汚したりした。そしてぞんざいな言葉遣いで周囲に酒を勧めたりもした。

それでも生駒は久米に同情した。久米は今をときめくプライド高き芸術家なのだ。その彼が村に溶け込みたいと、西脇や仙吉や健治を招いて催した会なのである。

その気持ちは、あろうことか屋敷の本来の持ち主である千寿の妹のぶしつけな言動によって、打ち砕かれてしまったのだ。

腹立たしさというより、挫折感というべきかもしれない。

やがて会は自然解散という風になり、仙吉が台所を片付けてくると席を立ったのを機に、順々に岩穴を出て行き、生駒と優も、寝室として用意されていた離れに引き上げたのだった。

それでも久米は、生駒が起きてきたときにはすでに朝食の用意を整えていた。

庭にある大きな石の周りに真新しい樹脂製のガーデンチェアを並べ、石の上にはさわやかな花柄のテーブルクロスが広げられていた。ハムや果物やサンドイッチなどが、品のいいバスケットに盛り付けられていた。

縁側で歯を磨きながら庭を眺めていると、すでに道長と坂井が食事始めているのが見えた。

仙吉は家で済ませてきたのか、コーヒークップを手にして、少し離れたところで佇んでいる。大きな格子柄のワークシャツにベージュの綿パン姿。準備万端、山行きの格好だった。

「朝からご馳走みたいやな」

「食欲ないよお。いつもこんな調子？」

「だいたいはな」

「久米さんって、変わってるよね。お金持ちは動かないのかとってたけど」

「ああすることを楽しんでるんや」

飲み物を運んできた久米が生駒に気づいて手を上げた。生駒も歯ブラシを口に突っ込んだまま軽く頭を下げる。

「なに着ていくん？」

「なになって、Tシャツしか持ってきてない」

「また、黒いやつ？ 山登りに合わへんのとちがう？」
「そか？」

優は真っ青なキャミソール姿だ。

「お、おい、それだけ？ 寒いかもしれないぞ」

優の豊かなバストが強調されて、目のやり場に困る。きっと木元の目を釘付けにするだろう。

「これ羽織るねん」

と、放り出してあった白いウインドブレーカーを摘みあげる。

「いいもの、持ってきてたんやな」

生駒はなんとなくほっとした。

庭に出て行くと、道長が昨夜の残像を断ち切ろうとするかのように、晴れ晴れとした笑顔を振りまいていた。

「いい天気になりましたね！ よく眠れましたか」

「まあまあです」

「いいわね！ ふたりともお若くて！」

生駒はそう言われるほど若くはない。四十半ばにもなって独身を通しているが、それは単に相手に巡り合わなかっただけのことだ。優ともそれなりにいい関係を保ってはいるが、結婚する相手として考えたこともない。

ふたりがひとつの部屋で並んで寝たことを、道長はいいわねと言ったのだろうが、これはやはり嫌味だと受け取っておこう。

「先生もまだお若くて澆刺とされてますよ」

道長とて、若いなどと言われて喜ぶような女性ではない。

優はそう言ってさりとてお返しをしたのだろう。

普段から優の寝起きは良くない。朝っぱらから陰悪ムードか、と生駒はひやりとしてしまう。

まだ、七時半だった。

「それにしてもすごい雷だったわね」

しかし、道長はそういつて優の攻撃をするりと受け流した。

「ちょうど僕が風呂に入っている最中に停電したんですよ」
嫌味の応酬より天候の話題の方が、この場にふさわしい。

「いやあ、びっくりしましたよ！」

昨晚の停電は長く続いた。

都会ではすぐに直ることが多いが、こんな山奥では復旧も後回しになるのかもしれない。

ただ、生駒は言わなくてもいいことも口にしてしまった。

「真っ暗な中でも、結構自分の体は洗えるもんですね」

「お相手の体は洗えないけど？」

たちまち道長がまた見え透いた鎌をかけてくる。

「あれ、ひとりで入りましたよ。ジュンバンに」

生駒は木元、優、生駒、健治という順に入っただと説明したが、弁解くさかったのか、道長は、

「顔、洗った？」などと、子供に言うような嫌味を返してきつつ、
「水が冷たくて気持ちよかったでしょ。やっぱり違うわね、井戸水は。二日酔いがうそみたいに飛んでいったわ」

と、両手で頬を押さえた。

こんなとき、道長は年齢よりずっと若くみえる。そんな仕草も似合う可愛い人なのだ。

しかし騙されてはいけない。

案の定、次の一手は、

「朝食はちゃんととらなくてはだめよ」だ。

「おはよう！ いい天気になったね。はい、熱いやつ」

久米がコーヒーのいい香りを運んできた。

「今日の予定だけど、昨晚の約束どおり、八時になったら出発だ。

西脇さんの案内で」

「ええ」

「伝説のアマガハラノを探しに。そんなに遠いところじゃなかった

らしいね」

優が素直に頷いている。

「どっちにしろ昼前には戻って来て、昼食の後は自由解散」

「わかりました」

「体力と時間に余裕があれば、僕の畑仕事を手伝ってもらえると助かるけど」

生駒は優と顔を見合わせた。

まあ、どちらでもいい。たいした予定はない。

「考えといて。あ、道長先生、足元は大丈夫？」

道長はきれいなラメ入りの真っ白なスニーカーを履いていた。

「道なき道に行くということになるかもしれないよ。昨夜の雨でぬかるんでいるかもしれないし」

「そうねえ」

「長靴を貸そうか。女性用もあるから。お、そうだ、麦わら帽子や軍手なんかも用意しないといけないな」

「でも、私はこれで結構よ」

と、道長が断るのに手を上げて応えながら、久米は母屋の裏手に消えた。

橘文雄、綾の親子がやってきた。道長がふたりにも声をかける。

「朝食は済まされましたか。綾ちゃん、ヨーグルトなんか、いかが？ イチゴもあるわよ」

綾はこくりと頷いたが、遠慮したのか、父親に倣って離れの縁側に腰を下ろした。

「こちらにいらっしやいよ」

「ううん。ここでもいい」と、首を横に振る綾。微妙にかたくなな態度。

昨夜のことがまだ尾を引いているのかもしれない。道長がイチゴを取り分け、アップルジュースとコーヒーを持って行ってやった。

「皆さん、おそろいですな」

西脇が屋敷に入ってきた。

首に巻きつけたタオルを解いて、額の汗を拭う。半袖のグレイの作業服に汗のしみができていた。

また道長がテーブルサービスを仕切り始める。

「朝早くから、汗だくになっておられますな」と、坂井が話しかけた。

「なんとか滝の上の方へ行けそうです」

西脇はさっぱりとした笑顔をしている。昨夜のやり取りは心のどこかにきれいにしまいこんでいるようだ。

「目的地までは行きませんでした」

「へえ。見に行っておられたんですか」

「ハハハ。昨夜、ああは言ったものの、一応、前もって、ルートだけは確認しておこうと思いましたが」

「こんなに朝早く？ それはどうもご苦労さまでした」

「いえいえ。立ち往生でもしたら、面目丸つぶれですから。それにご婦人方を危険な目に合わせるわけにはいかんでしょう」

「それはどうも。で、どうでしたの？ 栗の原っぱは見つかりそうでした？」

「さあ。途中で引き返してきましたから。あ、紹介させてください」

西脇は後ろで突っ立っていた若者を手招きし、一同の前に引き立てた。

「私のせがれでして、恭介といいます。今日は皆さんとご一緒させていただきます。二十になりたての若造ですが、荷物持ちとして使ってってください」

顔つきは大学生くらいだが背丈はミニサイズ。父親と並んでいる

様は、ブリとイワシだ。

どんぐり眼のイワシが激しく瞬きし、ぺこりと頭を下げた。派手な縞模様のついた赤いTシャツの裾で手を拭い、目の前の椅子にヒョイと座った。

事前踏査に付き合わされたことによる疲れなのか、見知らぬ大人たちと山登りに行く羽目になったことに腹を立てているのか。

いずれにしろ、おもしろくもないという顔をしていた。

「皆さん、リュックサックなんかお持ちじゃないでしょう。恭介が皆さんの分も持っていますから。大きなリュックを担いできてますんで」

確かに恭介は、背丈と不釣り合いなリュックを背負っていた。

「あら。私はこれで行こうかと思っているんですけど」

と、道長が平石の上に置いた真っ白なショルダーバッグを掲げてみせた。

「だめだめ。上等な鞆がいったんにアウトになってしまいますがな」「そお？」

「それにそういうものじゃ、疲れてしまって歩けなくなってしまいます。貴重品以外、持っていくものは恭介に預けてください」

「よかった。助かります。じゃ、私は飲み物と食べるものをお願いしようかな。あとはこれがあるから」

と、ウェストポーチを見せた。道長もラフな服装をしている。薄い麻の長袖シャツにブルージーンズを履いていた。

「はい。じゃ、三条さんは？」

「ありがとうございます。でも、私は生駒社長に持ってもらいますから」

「もう、ばれてるって」

西脇が笑って、石のテーブルについた。

「ご馳走ですな。さ、おまえも頂きなさい」

「うん」

黙って座っていた恭介が、父親の許しが出るや否や、飛びつくようにして道長の前に細い腕を伸ばした。

サンドイッチをふたつ掴むと、まとめて口に入れた。

そして次の瞬間、生駒は啞然とした。

恭介は「ミルク!」と、命令するように父親に言ったのだった。

父親は紙コップを取り、パックの牛乳を注いでやる。恭介はそれを一気に飲み干すと、口の周りの白い泡を拭おうともせず、再びサンドイッチに手を伸ばす。道長がバスケットを恭介に押しやったが、今度はもう一方の手でバスケットを掴んだ。

綾が恭介を睨みつけていた。

ところが西脇はそんな息子にかまわず、道長が入れたコーヒーをすすっている。

「久米先生はもう起きておられるようですね。健治や木元さんは?」
と、なにごともなかったかのような口ぶりだ。

恭介の動きに視線をあてながら道長がいった。

「まだ寝てるみたいね。生駒さん、申し訳ないけど、起こしてきてくださる?」

昨夜、木元が離れの前の間、生駒と優が中の座敷、健治は縁側を通ってトイレや浴室を通り越した突き当たりにある奥の座敷、鮎の間で寝たのだった。

縁側から声をかけると、木元が伸びをするうなり声が聞こえてきた。まだ寝ていたのだろう。再び声をかけ、おはようございますという返事を確認してから奥の座敷に向かったが、健治の返事はなかった。

しばらく待ったがやはり声がない。入りますよと断って襖を開け

てみると、部屋には誰もいなかった。

布団はもぬけの殻で、紺色のボストンバックが部屋の隅に置かれてあるだけだった。

振り返ると、道長や仙吉と目が合った。優は恭介に話しかけられて愛想笑いをしていた。

久米が配ってくれたペットボトルや軍手や草刈鎌などを身に着け、出発の準備は整った。

リュックサックなどに腕を通し、大阪に帰るという坂井を見送った。ホステス相手に下品で好色なアプローチを繰り返しているような「はげジジイ」の典型男が参加しないのはいいが、代わりに何をしでかすか分からない恭介という若者が加わった。

生駒は今日もまた持続的な緊張感を強いられる山登りになるかもしれないと、かすかに気が重くなっていた。

「アマガハラノ調査隊、では、しゅっぱーっ！」

久米の陽気な声が庭に響いた。

第 8 章 「廃れた神社」

結局、健治は姿を見せなかったが、急用ができたのだろう、行くつもりなら追いかけてくるのでは、ということになった。

屋敷の前で舗装は途切れ、裏の空き地で車は通行止めとなる。ここを過ぎると、人ひとり通れるだけの山道だ。ところどころに石畳が敷かれてある、ほぼ平坦な道だ。

一行は賑やかに歩を進めた。明るい雑木林を抜けるとヒノキの植林の暗がりに入り、しばらくすると再びコナラ林に入る。谷は狭くなり、やがて小川を左に見ることになった。瀬のたてる水音が耳に心地よい。

歩き始めて二十分。いよいよ溪谷は狭まり、あたりの景色は照葉樹林下の薄暗く湿り気を帯びたものに変化した。

やがて小さな石の鳥居が目に入った。

柱状の御影の切石を組み合わせただけのもので、コケやシダがまわりつき、古色蒼然とした趣。柱の根元にセメントで補修した跡があるが、これさえも雨に洗われ、風に削られて骨材が露出していた。砂利の抜け落ちた小さな穴には土が溜まって雑草が生えていた。

境内はところどころ石畳が敷かれてあるが、おおかたは雑草が密生していて、荒れ果てた印象を受ける。

中央辺りだけが少々広がりを持ち、黒い土が露出している。

拝殿の跡だろう。束石が見える。神事が行われた形跡なのか、煤けた木切れが散乱していた。

「岩代神社です。ここらで小休止としますか」
と、西脇が傍らの石に座りこんだ。

見上げれば、いつのまにか周囲には急峻な山肌が迫っている。正面、梢越しには、ひときわ目立つ高さ百メートルはあろうかという崖が望めた。

「まさか、あれを登るんですか！」

優の言葉は道長の不安も代弁していたのだろう。眉間に皺を寄せで見上げている。

「ちゃんとルートは考えてありますよ」

「じゃ、あそこを登るんじゃないんですね」

「ハハハ。たぶんあの向こう側ですよ。アマガハラノは。あ、しまった。ロープを持ってこなかったな」

「ええっ」

「ま、大丈夫でしょう。誰も足を滑らせて落っこちるなんてことはないでしょう」

西脇は茶目っ気たっぷりにそう言うのと、リュックサックからペットボトルを取り出した。

あたりに点々と転がっている岩や石は、一様に緑色を帯びた黒々としたぬめりをまとっている。

数万年の間に幾度となく起こったであろう土石流によって押し流されてきた大小の岩石群。

その最も奥に鎮座する大岩には注連縄が巻かれ、手前には高さ一米ートルほどの石の祠に一对の白い陶製の燭台。祠の中には、磨耗し、もはやお姿を想像するだけとなったしまった不動明王が祭られていた。

「あれが獅子岩と呼ばれているものでして」

仙吉が教えてくれた。白い岩だ。確かに横を向いた獅子の頭に見えなくもない。

注連縄は朽ちかけ、ささくれだってスカスカになり、すでに無数の小昆虫の住処となっている。

岩代神社は室町期の創建だと伝えられている。大西村の最奥の采家の屋敷から、猪背川の支流、岩代川というせせらぎを一キロメートルほど遡った溪谷の只中にある。祭神はコシキヌカタメヒコノミコト他。ご神体は獅子岩と呼ばれている岩そのもの、及びその奥にある滝だという。拝殿は昭和初期に火災で消失しているらしい。

「ねえ、滝のところを通るんですか？」

遠くに水の落ちる音が聞こえ、滝の存在を知らしめていた。

「いえ。この谷から離れて、あっちのほうへ」

と、西脇が指先を動かす。祠の前で沢を渡り、左手の斜面を登っていくらしい。

「じゃ、滝は？」

「通りません」

「残念やなあ。もう少しここで休憩してます？　滝、すぐでしょ。

ノブ、見に行かない？」

立ち上がった優を、西脇があわてて止める。

「あ、だめだめ」

「行けません。道がないんで。それに遠いです」と、仙吉もいう。優が食い下がった。

「でも近くまででも行ってみない？」

「やめてください」

仙吉の声はハツとするほど強い口調だった。

「そうか。神聖な場所なのね。ごめんなさい」

首をすくめた優をとりなすように、久米が話題を変えた。

「ところで仙吉さん、お嬢ちゃんが返って来てるそうですね。スキューバダイビングをされているとか」

「そうなんですが。でもなんでそれを？」

「タクシーの運転手が話してくれたんですよ」

仙吉が相好を崩した。

「ハハハ。山の子ですからなあ。かえってああいうことに興味があるんでっしゃろ」

そんな調子で最初の休憩は始まった。

西脇は行楽気分でゆっくり行くつもりらしい。なかなか出発の声をあげなかった。久米は境内を散策しながら写真を撮っているし、橘は草むらに積み上げられた石を足で動かしながらタバコをふかしている。恭介はタオルを溪流に浸し、しきりに顔や腕を拭いている。仙吉は道長と言葉を交わしながら、持参した手元箒で祠の前を掃き清めている。

巨体を揺らして木元が近づいてきた。優はさりげなく生駒に話しかけてきた。

「あさつての打ち合わせの件ですが」

「そうだな。朝一番の新幹線の切符を買っておいてくれるか」

あまりに臭い芝居に噴き出しそうになるが、木元は結局なにも言わずに引き上げていき、所在なげにぶらつき始めた。

生駒が木元を胡散臭い奴、と思っている理由とは……。

こんなことがあった。

まだ屋敷が荒れ放題だった頃。ある日、生駒は久米のボランティアとして、古い台所に残された食器を、そこらに転がっている木箱に入れていた。

箱はかつては収穫したナスやトマトなどを入れたものであろうが、今はもう泥がこびりついていたり底が抜けかけていたりした。箱ごとすべて廃棄する。横では、橘と木元が食器棚や流しの下から調理用具や使いさしの洗剤などを引きずりだして分別していた。箱が一

杯になると仙吉が裏の空き地まで運んでいく。

橘が軽口を叩いた。

「やれやれ。際限がないな。いつになったらこのボランティアは終わりになるんだ？ うへ！ この皿、なにかこびりついてるよ。気持ちわるー。おい、木元、おまえの部屋もこんなじゃないのか？ スロットばかりやってないで、そろそろいい娘でも見つけたらどうだ」

「大きなお世話」

木元は顔も上げず、ぶっきらぼうに応えた。

「この村一番の美人なんかはどうだ？ なんなら、俺から親父に聞いてみてやろうか？」

橘も普段は無口だが、口を開けば人を見下したようにものを言う。しかし生駒の反感を知っているのか、話しかけてくることはまずない。このときも三人は機械的に手を動かしながら、かれこれ一時間も黙ったままひとつの部屋の中にいたのだ。

橘が木元に軽い嫌味を言ったのは、単調な手作業を紛らわしたいということだけではなく、息が詰まってきたのだろう。

しかし木元の反応は意表をつくものだった。なにも言わずにのそりと立ち上がると、手に持っていた土鍋を木箱の中に叩きつけたのだ。

派手な音をたてて粉々に割れ、破片が床に飛び散った。

「おい！」

と、橘が咎めたときには、木元はすでに部屋から出ていこうとしていた。

「待て！ こら！」

振り向きもしない。

入れ替わりに仙吉が台所を覗いた。飛び散った破片に気づいて怪

訝そうな顔をした。

「木元さんが飛び出して行っただけ……」

橘が珍しくばつが悪そうに引きつった笑いを見せた。

「なんでもないんだ。あいつは……」

とりあえず木元の弁解を試みようとした。木元は中学出で、そのことに劣等感を持っていて……。

「仙吉さんところの彩香ちゃんが入学したとき、三年生だったんじゃないかな。町に中学はひとつきり。顔を合わすことはよくあったんだろう。あいつの父親は大工で、このお屋敷の親戚がやっている西脇工務店の下請け職人として働いていたんだ。けど、貧しくて高校には行かせてもらえなかったらしい」

あまり効果的な弁解になっていない。仙吉は困惑顔だ。

「うちの彩香がどうって……」

「いえね。あいつの口から、彩香ちゃんの名前を聞いたことがあるっていうだけのことで……」

仙吉は戸惑っていたが、こんな話題でも繋がなくてはと思うのが彼らしい。

「橘さんと木元さんはどういう関係なんです？」

「あいつが店長をやっているショップに行くことがあってね」

「はあ」

「それで、まあ、話をするようになったんです」

仙吉はまだ腑に落ちないようだが、とりあえずは頷いている。

「根はいいやつなんだけど、なんだかいつもびくびくしているみたいだね。で、こういう手伝いでもすれば、あいつの世界も広がるんじゃないかと思って誘ってやったんです」

バイクの音が遠ざかっていった。木元は帰ってしまったのだ。

「もう来ないかもしれないな」

橘はそういったが、次の日曜日にも何事もなかったかのように木

元は屋敷にやって来たのだった。

生駒はそれ以来、木元ともできれば距離を置くようにしていたのだった。

恭介も近づいてきた。同じ手は使えない。今度は優は、ずっと生駒の腕を取った。

しかし恭介はかまわず話しかけてきた。ただし、生駒に。

「しゃれたナップザックですね。山登り、されるんですか？」

「少しはね」

「僕のなんて見てくださいよ」

と、大きなリュックサックを持ち上げてみせる。

「ほとんど何も入ってないのに、こんなに重い。しかも、でかいから扱いにくくて」

生駒は笑ってみせた。しかし朝食のときの印象が残っている。

「滝へは行けないですよ。行き止まりにしてあるんです。近づくこともできない。それに、行ってみる価値はないと思いますよ」

恭介の行動は子供じみていたが、言うことはまともなようだ。

「いいのよ。ちょっと言ってみただけだから」と、優が微笑んだ。

「栗の木の原っぱ、アマガハラノっていうんですか、本当にあるんでしょうか」

「あつたらおもしろいよね」

「はい。なんだかわくわくしますよね」

恭介が腕を大きく前後に振って走る仕草をした。考えていることや言うことはしっかりしているのに、アクションが大きすぎてちぐはぐな感じを受ける。そんな人かもしれない。優や綾より小さい体に収まりきれないエネルギーを、もてあましているだけなのかもしれない。

綾がせせらぎに半分浸かった岩に腰掛けて、足をぷらぷらさせて

いた。恭介をやり過ごし、生駒と優は綾の隣に腰掛けた。

「ね、綾ちゃん。昨日のあれ、なにやったん？ 見せてくれようとしたもの」

綾は優をチラッと見たが、プイッと顔をそむけてしまう。

生駒は綾と何度も話したことがある。といっても話が合うはずもないから、雲の形がミッキーに似てるとか、セミの上手な捕り方などといった他愛もない話で綾の気を惹こうとしただけのことだったが。そんなときの綾は、小学五年生の女の子にしては珍しく、そんな子供じみた話題に丁寧に応えてくれるのだった。

しかし今は、かたくなな態度で他人を拒んでいる。

なにを話そうかと生駒が考え始めたとき、優に先を越された。

「鳥の声を聞ける頭巾やったりして」

見る間に綾の顔がほころんでいった。

優は上手い。よくそんなものを思いついたものだ。見事に綾の気持ちを抱んだ。生駒も、

「それって日本昔話の聞き耳頭巾やな」と、繋いだつもりだった。

しかし、綾はすんなり、「そうよ」といったのだ。

生駒は思わず、へ？ と反応しそうになったが、優はすかさず「いいんだー」と返す。

「おねえさん。どうして分ったの？」

「なんとなく、そうかもって。とつてもいわくありそうやったもん」

「へえ！ おねえさん、すごい！」

「なんで？ すごいのは綾ちゃんやん。世にも珍しい聞き耳頭巾を持ってるなんて！」

「ううん。ちょっと借りてるだけ」

綾は一気に上機嫌だ。でも、こんなことをいう。

「ねえ、聞き耳頭巾って昔話にあるの？」

やっと生駒の出番だ。

「むかーしむかし、あるとても貧しい山奥の村に……」

貧しいが正直者の家族が住んでいました。

山神様にお参りの帰りに手に入れた古ぼけた頭巾は、木や鳥や動物たちの話し声を聞き分けられる不思議な頭巾でした。

ある日、強欲な庄屋の娘が病に倒れます。その病はどんな医者も治せないほど重く、娘の命は日一日と細っていくのでした。

庄屋は困り果て、娘の病気を治してくれたものは婿にすると言い出しました。そこで正直で働き者の若者が聞き耳頭巾で鳥や木の話聞いてみると、庄屋の庭の大きな石を動かすと良いということです。早速若者は庄屋にそう申し出ます。その石は絶対に動かしてはならぬという言い伝えが庄屋の家にはあったのですが、娘の命には代えられません。

そこで石を動かしてみると、なんとそこから豊かな湧き水が溢れ出し、今まで水不足で困っていた村の畑や田んぼの隅々まで水がいきわたったのです。それまで、庄屋は大切な水を独り占めしていたということだったのです。

しかし、娘の病気はピタリと治りました。若者と娘は結婚し、幸せに暮らしましたとさ。

「へええー。すごい、すごーい！」

綾が手を叩いて喜んだ。

突然、後ろから道長のするどい笑い声が聞こえた。

「昨日の橘さんの話は、聞き耳頭巾で綾ちゃんが聞いた話の受け売りってことね」

聞かれていたのだ。

それにしても相変わらず神経質なもの言いだ。こんな少女にそこまで挑戦的である必要はないだろうに。この歴史家の大学教授は、

いわゆる言い伝えや昔話のような出所のあいまいな情報に過敏に反応する。せつかくの楽しい雰囲気は台無しだ。

綾の反応が気になったが、案の定、

「そうです」と言いつつ、ムツとしたのだろう。顔がほてっていた。道長も大人気ないと思い直したのか、声音が急に優しくなる。

「すごいわねえ」

道長はさらに口を開きかけたが、結局はなにとも言わず、微妙な笑みを綾に投げて、自分の失礼さを取り繕った。

あなたは本当にその頭巾でいろいろなことを聞くことができるの？ とでも言いたかったのだろう。しかし道長は、それに対して綾が、はいと明確に答えることを恐れたのだ。

優がまた綾に話しかけた。

「何が聞こえるん？」

「木とか鳥とかの話」

綾は優には完全に心を許したのだろう。声音まで違う。

「へえ、すごいやん！　ねえ、ねえ、誰にでも使えるん？」

「ううん」

「練習しても？」

「練習も必要だけど、もともとできる人とできない人があるみたい」

綾はサンタクロースを信じているような年頃ではない。

聞き耳頭巾という不思議な道具が実際に存在すると信じているのだろうか。あるいは、そろそろ信じられなくなってきている段階なのか。いや、そうではないだろう。存在しないというのは大人の分別くさい勝手な思い込みであって、綾はごく自然に信じているのだ。優と話している綾に、ぎごちないところや不安なところ、あるいは恥じた様子など、これっぽっちもない。道具の力、あるいは自分の力をごく自然に受け止めているのだ。

綾を大人として扱うのか、まだ子供として扱い、迎合してあげべきなのか。その分岐点に立つことになるのがいやで、道長は黙り込み、優と綾のやりとりをただ聞いている。いまにも綾が、冗談ですって！　と言うのを期待して待っている沈黙なのかもしれない。

「聞き耳頭巾って、本当にあったんやなあ」

生駒は言った。

優だけに孤軍奮闘させておくわけにはいかないと考えたからではない。思わず心から出た言葉だった。

聞き耳頭巾は魔法がかけられた道具ではない。未来から来た不思議で便利な道具でもない。

ただ単に、人が自然の声を聞こうとするものだ。この世には心を揺り動かす、反対に心を落ち着かせるものはいくらでもある。身の回りにもたくさんあるのだ。聞き耳頭巾はそういったもののひとつなのだろう。

これをかぶれば、心の中が絹のシートを広げたように平坦で穏やかになり、精神や感覚が周りの自然と同化し始め、やがて木や鳥の声のひとつやふたつ、聞き分けられるようになるかもしれないではないか。

なんとなくそう思ったのだった。

驚いたことに、道長も、

「そうよねえ」と、ごく自然に応えたのだった。

「大人になると、そういうものって、ついつい作り話だと思っちゃうけど。ね、綾ちゃん、今日は持ってきた？」

生駒はなんとなくうれしかった。しかし同時に、付き合い難い人だと改めて思った。

綾は聞き耳頭巾を持ってきたという。しかし、見せてはくれず、いくつかの話をしてくれた。

木々や鳥や昆虫や森にすむ動物たちの世界で起こった出来事。バス停横のエンジュの木が病気になったわけ。樹種ごとの勢力争いの話。水の流れが少しずつ変化しているわけ。

いわば、里山の自然の摂理や生物層における現象を、人間の側からみた知識としてではなく、自然の生き物たちの噂話として平易に語っているといってもいいだろうか。

「ね、ね、後で見せてくれる？」

優が眼を輝かせていった。

「うん」

「木って、どんな話をするんだろ。試してみてもいいかな？」

「いいよ。でも、それはまた今度。人が少ないときに。それに木の話聞くには夜中でなくちゃ、効き目はないんだよ」

「やっぱりー」

「鳥なんかは昼間でもいいけど」

生駒は、昨夜の老婆が口にした祟りや呪いのことを聞いてみたかったが、綾のあのときの反応を考えるとためらわれた。

それでも、

「木や動物の噂話じゃなくて、村の人たちのおもしろい話は？」と水を向けると、綾は困った顔をした。

「それは言っちゃいけないことになってるんだ」

「どうして？」

「だって、みんな内緒にしてる話だもん」

「あ、そうか。そうやね」

「でも、昔話なら話せるよ。昨日の晩、久米のおじさんにあてられたらしようと思ってた話だけど」

「へえ！　どんな話？」

「聞き耳頭巾で聞いた話じゃないよ。人から聞いた話」
「うん」

「昔、この村の奥にもうひとつの隠れ里があったの。その村の人たちはとても乱暴者ぞろいで、あちこちの村から食べるものや着るものを奪って暮らしていたんだって」

いわゆる山賊だと綾はいう。

「村といっても掘っ立て小屋を集めただけのものなの。人目から逃れるために、いつも山の中を移動していたんだって」

「七人の侍って映画、知ってる？　あれに出てくる山賊みたいなものかな」

さあ、と綾は首を捻った。

「大西村もその標的になったわけやね」

「うん。食べるものや着るものだけじゃなく、女もかどわかされたんだって」

綾のきわどい表現に意表を突かれて、思わず噴出しそうになった。

「で、どうなったん？」

「さあ。これでおしまい」

生駒はこれから登っていく山道を目でなぞっていった。

いよいよ本格的な登りに差し掛かる。道は木立の間を抜けると小さな尾根を巻き、その先は見えない。

と、そこに小さな人影が現れた。山から下りてきたようだ。

「あ、あれ」

人影も、神社に群れる人々に気づいて立ち止まった。

「奈津さんや」

「えっ、どこ？」

綾が振り向いた。しかしすでに奈津の姿はなかった。

ようやく西脇の出発の聲がした。

第 9 章 「絶壁の向こう」

上り坂が続く。滝の上の方へは大きく迂回することになるらしい。先ほどまでより歩調が少し速い。先頭をゆく西脇が、時々振り返りながら後に続く一行を気遣った。

「佐吉が山伏に出会ったのは、このあたりかな」

木々の間から、うつそうとした緑の中で白さを際立たせている獅子岩がまだ見えていた。

佐吉が山伏と会ってから一千年ほどのときが流れていることになる。佐吉が見た景色と生駒が今見ている景色はほとんど変わってはいないだろう。植生は変化しているかもしれないが、景観としての骨格は同じはずだ。岩はそのままの姿で何千年もあの場所に座り続けているのだ。

「わあ、この木、真っ赤！」

優が感嘆の声をあげた。

「ナツツバキ。通称、シャラの木」

生駒は梢を見上げた。空は晴れ渡り、トンビが輪を描いて飛んでいた。

「祇園精舎に出てくる木？」

「いや。もともとインドにあるシャラとは違う木」

「へえ。あ、これも？」

「それはリョウブ。幹は赤っぽいけど、少し違うやろ」

「生駒先生。よくご存知ですな」

と、西脇が前から声をかけてきた。

「少しは。たまには造園の設計なんかもしますから」

最後尾にいた恭介が、これはイヌシデ、これはアベマキと、手当たりしだいに指差し始めた。生駒も負けじと知っている限りの木の

名前を挙げた。

「そんなに覚えられない！」

優が楽しそうな悲鳴をあげた。

しかし、やがて遊びも尽き、聞こえてくるものは、靴が湿った土を踏みしめる音と荒い息遣いだけになった。耳に届いていた水の音も聞こえなくなった。

生駒の額や胸はもちろん、体中から汗が噴き出していた。Tシャツが背中に張りついている。歩きにくい石ころだらけの道に汗が滴り落ちた。

谷から吹き上げてきた風が木々を揺らし、火照った顔にかすかな冷気を吹きつけながら通り過ぎていった。

一行は西脇を先頭に、黙々と足元を見ながら歩いていた。生駒が服を脱ぎたい、裸になった方がましだ、と思い始めたとき、前を行く優の足が止まった。

「ほう！」と、久米の驚きの声があがった。

目を上げると、視界が開けていた。

大西村の集落が眼下に見えていた。緑の中に茅葺や瓦葺の屋根がかたまっていく。猪背川が大きなS字を描いて流れ、ちょうどその中心に橋が架かっている。水面が日光を浴びて金属的な輝きを見せた。

幾重にも層をなす緑深い山々の懷で、村ははるか昔から今のような姿で佇み続けてきたのだろう。

「屋敷はどれかな」と、久米が手庇を作る。

「ここからは見えないですな。すみません。山裾にありますから。ちようどこの真下辺りでしょう」

引率者として申し訳ないと思ったのか、西脇が謝った。

「皆さん、ペットボトルに口をつけてください」

綾がリュックを開けたのを見て、休憩を促す。

「でもすぐに出発しますよ。もう少し登っていくと道が途切れてしまいます。その辺りまでは山菜取りなどに使っているんでしょ。うな。なんとか人の通った跡があるんですが、その先はもう、それこそ藪の中ですよ」

再び歩き始めた。

屋敷を出てから自然に出来上がった隊列の順序は今度も守られた。前に行く優の足取りは軽い。こういうとき、生駒は年齢差を思い知らされる。

西脇の予告どおり、道は徐々に狭くなり、やがて道というより踏み跡程度のものとなった。そしてその踏み跡さえも草に覆われて、ときとして判然としなくなる。

そんな道を西脇率いるアマガハラノ調査隊は突き進んでいく。

「厄介ですなあ」

久米のぼやきとも興奮のつぶやきともつかない息切れした声が聞こえてくる。

一行のスピードがぐんと落ちている。腰のあたりまである草をかきわけながら、のろのろと進んでいたが、ついに止まってしまった。

「失礼。ちょっと間違えました。そうそう、こっちや」と、西脇が藪を回り込む。

恭介が、ほいほいと掛け声をあげながら、列の横から草を漕いで追いついていった。列が再び動き始めた。

綾が話している。

「この道って、昔は馬も通れる道だったんでしょ？」

「馬が？」と、応えているのは久米だ。

「うん。山賊はこの道を通って村に攻めてきたんだと思う」

「山賊？ そんなのがいたのかい？」

橘が綾の言葉を横取りするように割って入った。

「それにしても、この先が思いやられますね」

綾が昔話をすることを快く思っていないのかもしれない。

藪を抜けたところで隊列がまた止まった。

「こんなところで休憩か？」

橘が怪訝そうな声をあげた。

「息が切れたでしょう。ちょっとだけ休憩」

狭い草地だった。恭介が草の中に座り込んだ。

仙吉が久米を気遣った。

「先生、大丈夫ですか？」

久米は荒い息をしながら顔を紅潮させてはいたが、大丈夫だといって、膝の屈伸をしてみせようとした。

「無理しちゃだめですよ」

と、道長が言うやいなや、案の定、久米はよろめいて傍らの石に手をついた。体格に似合わず、体力はないらしい。

その点、中年太りの西脇や痩せた仙吉の方は、なんともない顔をしている。さすがに山育ちだ。

「ほら。足がガクガクになっているときに、そんなことしちゃだめですよ」

道長が久米の腕を取ってやる。

「道長先生は元氣があるね」

「そりゃそうですよ。高校時分には陸上部で、今もジョギングとスイミングは欠かさず」

「そりゃ、負けるわけだ」

「あれ、この石、何か文字が刻んであるわ」
道長が屈みこんで石の表面を覗き込んだ。人の腰ほどの立石が草むらの中に立っていた。

「読めないわねえ」

文字は風化して判別できない。だが人の手で掘りこまれたいくつかの文様が描かれているのは確かだ。

突然、生駒は悪寒がこみ上げてくるのを感じた。寝不足がたたったのか、めまいがした。

「二日酔い？」

優がタオルで風を送ってくれる。

「いや。ちよつと立ち眩み」

そう言いながら、生駒は違う感触を持っていた。山の中で時々感じるようなあの感覚だ。

なにものかが近くにいる……。

物の怪の存在を皮膚が感じ取ったときの嫌悪感。

胸の中に小さな気泡が沸きたち始め、すつと意識が遠のくような……。

この石碑の周辺には、悪い気が立ち込めている。

そう感じた。

妖怪変化や魑魅魍魎の類がどこからか自分たちを伺っている……。そんな気がして思わず周りを見回した。

生駒は自分に靈感があるとは思っていないし、霊的なものの存在をまともに信じているわけでもない。

しかし、今のような感覚には素直に従っておくのが賢明だとも思っていた。つまり、すぐに立ち去ること。そして妙な化け物にとり憑かれることのないよう、気持ちを強く持っていること。隙を見せてはいけないということだ。

あたりは複雑な小地形が幾多のひだを作っていた。急な斜面が日光を遮り、木がうっそうと茂っていて薄暗い。

折り重なるようにして倒れた朽ちた木々。何千年にもわたって転げ落ちてきて堆積した大小の岩石。それらすべてを包み込む草や苔。無数の岩や朽木の暗い隙間に溜まった冷たく湿った空気……。

「気持ちの悪いところね」と、道長が立ち上がった。

「早く通り過ぎよう。さ、西脇さん」

久米も歩き出した。

しゃがみこんでいた恭介が、よしきたというようにぱっと立ち上がり、ふたりを追い越すと先頭に立って猛スピードで林の中の草むらにわけいった。

「おい、恭介、もっとゆっくりいけ！」

西脇が怒鳴った。

「気持ち悪いかなあ。涼しくていいし、小人が出てきそうなところやけどなあ」

と、優はチョコレートをもうひとつ口に入れようとする。

「さ、行くぞ」

生駒は優をせかし、リュックサックを背負いなおした。

一行は動き出した。

「そういや、奈津さんを見かけなかったな」

「そうね」

「奈津さんがどうしたって？」

久米が聞いてきたが、説明はしなかった。目の隅に気になるもの

が映ったからだ。

木立を透かしてみた。

草むらの奥、灌木の林に囲まれたひとときわ暗い一角に、大きな祠が佇んでいるのが見えた。

祠は周りをシダで覆われ、相当古いもののようにだ。

運動場の片隅や工場の敷地で見れば、小さなごみ置き場に見えたかもしれない。それほど簡素な造りの建造物だった。

「祠か……」

生駒は心の中でつぶやいた。

綾がちらりと振り向く。言葉となって口から出ていたのかもしれない。

「自然の力は偉大だってことだね。人が作ったものでも、自然はじつくりした力でいつの間にか、元に戻してしまうんだね」

久米が綾に話しかけている。

「自然の力ではどうしようもないものは、プラスチックと原子力だけだって」

「うん、そうだね。綾ちゃんは自然の力と人間の力と、どっちが強いと思う？」

「自然、かな」

「台風とか地震とかね。でも凶暴なのは人間だよ。人間が文明というものを手に入れてからというものの、自然は潰され続けてきた。とくに西洋文明は……」

綾に向かってたいそうな話をしている。振り返ると、優がにやりと笑いかけてくる。

「やっぱり似たもの同士ね」

「ふん」

しかし久米の講演も長くは続かなかった。急な登り坂が続き、た

ちまち久米の口は呼吸するだけで精いっぱいになってしまった。

時折、進路を確保するために振るうナタや草刈鎌の音が聞こえてくる。木の根を跨ぎ、枝をくぐり、大小様々な草木を掻き分けて登っていく。ときには狭い日の当たる湿地や草地に出ることもあったが、大半は木々が生い茂る斜面をジグザグに登っていくことになった。しかも道なき道の勾配はいよいよきつくなり、しまいには地面から突き出た木の根や蔓などを掴んで、体を持ち上げることも多くなった。

さすがの優からも息遣いが聞こえるようになってきた。久米はもう限界のようだ。前の人とかなり間隔が空いている。

それでも仙吉は別格だ。ぴたりと生駒の後ろについてくる。息も上がっていないし、汗もほとんどかいていない。

「さすがですね」

「そりゃそうですね。毎日毎日、こんなところを荷物を持って登ったり降りたりしてるんですから」

と、爽やかに笑う。

「この道も通ることがあるんですか」

「いいや。こんなところまで来るのは初めてですな。わしの畑は川向こうやから。それこそ栗なんかもそう」

「へえ。栗園もあるんですか」と、優が前を向いたままいった。

「ええ。そんなたいそうなもんじゃありませんけどな。一応、少しは出荷もするんですがね。あまりいい値はつきません」

「ねえ、仙吉さん。観光栗園、金を取って栗拾いさせるやつ。あれって、儲かる？」

振り向いた優に仙吉が最高の笑顔を見せた。

「お嬢さん。わしにも儲けさせて欲しいもんですよ。情けないことに、わしの栗畑はずいぶん山の中にありましてな。誰も好き好んで

そんなところまで登ってきてはくれません」

「軽四とかで、送り迎えしてあげればいいんじゃない？」

「いや、車なんか入りませんがな。こんなようなところを歩いて登っていくんです」

「たいへんですねー」

「栗だけやありません。畑なんかも山の中ですわ。ま、車が入ればもっと楽なんでしょうけど、油もいるし保険にも入らにゃならん。元が取れませんわな」

「息子さんは？ たまには手伝ったりしてくれないんですか？」

生駒も会話に加わった。

仙吉の息子自慢は有名だ。長男は大阪のミナミで居酒屋を経営し、次男は精密機械の会社に勤めているらしい。

「いやあ。親の甲斐性がないことを恨んでいるのか、このところトンと村には帰ってきりません」

「お店にまだ行けてなくて申し訳ないんだけど」

覗いてやってくれと仙吉から頼まれていたのだった。

「ええ、ええ。それが、ああいう店は素人にはなかなか難しいようで……」

そういつて仙吉は顔を曇らせる。

「そうかもしれませんねえ」

そんな言葉を交わしながら、生駒は胸や太ももの苦しさを紛らわせた。

道長と久米の間がますます開いてきた。西脇と恭介の姿はもう、ときどき見えなくなっている。

「さあて、難関の前に一服としましょう」

と、ようやく前から西脇の大声が聞こえてきた。

「ここではゆっくり時間を取りますよ。体を十分休めてください」

生駒たちが追いつくと、西脇がひとりずつ顔色を見ながら、安心させるようにいった。

「今、九時半。休憩は二十分くらいでいいですか
祠から相当長い間歩いたような気がしていたが、まだ十五分しか経っていなかった。」

西脇が難関だといったところを目の当たりにして、誰の顔にも少なからず緊張感があつた。

「ここって、さっき下から見えてたところやん！　そうかあ。ここまで来たんや！」

目の前には、神社であれを登るんですかと聞いた絶壁が迫っていた。

「まさか、ここを？」

「そう」

「うええっ！」

「ハッハッハ。登るんじゃないですよ。ま、横切るだけのことですよ。よく見てください。道がついているでしょう」

西脇が指差す先を見ると、確かに絶壁を横切るようにして道がついていた。距離にして約五十メートル。

道といっても、人の手によって切り取られたと思える犬走り程度の足がかりが続いているだけのことだが。

「ここへ来るまでの道は消えてしまったけど、この崖につけられた道は残っていたというわけですな」

西脇は久米や道長に座り心地のよさそうな石を勧めた。

「あれ、恭介はどこにいった？」

久米や生駒もつられて首をめぐらす。

「後ろから来ていたはずなんですけど、あれ？」

西脇が崖の向こうを見やった。多くの視線が崖のほうを向いたと

たん、

「おまたせ！」

と、背後から声がかかった。

振り返ると、恭介がニヤニヤしながら立っていた。

「こら！」

西脇の怒鳴り声に、恭介はパツと後ろに飛びのいた。たじろいだのではない。顔には笑いを貼りつかせていたし、拳を固めてファイティングポーズまでとってみせた。

「すみません。こいつ、まだ、子供なもんで。喜んで興奮しているみたいです」

「違う、違う。トイレ！」

あわてて弁解する恭介を叱りつけてから、西脇がまた謝った。

「ち！」

恭介が石を蹴飛ばした。石はきれいな弧を描いて谷に落ちていった。

「こら！ 下に人がいたらどうする」

「いるはずないだろ！」

久米が小包装のクッキーを取り出して配り始めた。

「この先はどうなってるんです？」

「すみません。私も知らんです。ここから先のことは、どうだったか。子供のころに行ったことはあるようにも思うんですが……。

仙吉つぁんは？」

仙吉も首を横に振った。

道長が恭介に持たせていたリンゴの皮を剥き始めている。

「じゃ、もしかすると、この崖の先で立ち往生ということも考えられるんですの？」

恐れているととられたくないのだろう。道長は一応聞いてみたというように、手元のリンゴから目を上げないでいった。

崖の上に一步を踏み出すときは、やはり腰が引けた。

足を踏み外せば、百メートルほど下の樹林にまっさかさまだ。掴まるものはなにもない。足を滑らせないように、スニーカーの足の裏に、岩のごつごつした感触を確かめながら一歩ずつ進んでいく。風が吹いてきた。やや強い風だ。そう感じただけかもしれない。生駒は心持ち岩肌に体を寄せ、ますます足元に注意を向けた。

「こんなところ、馬も通れるのかな」

後ろから綾の声がした。

「無理とちがう？」

返す優の声が小さい。歩くことに懸命なのだ。振り返ると、優はなびいた髪ごと、麦藁帽子を右手で押さえていた。

「なによお」

「へっぴり腰になってないな」

「あたり前やんか。でもノブも蟹歩きじゃないやん」

「ふん。ちよつと慣れてきたからな。それにしても、とんだアトラクションになったな」

「そう？ おもしろいやん。さ、前向いて」

「最初は足がすくんだけど、歩き始めてみると意外といけるもんやな」

「うん」

「でも、慢心は怪我の元」

「そうそう。ね、ところでさ。蛍が服にとまったこと、気にしてない？」

「おまえなあ、こんなところで言うことか？ 僕が落ちるかもしれんというわけ？」

「ううん。だって、またとまってるもん。リュックに」

「えっ、蛍が？」

「テントウムシ。取ったげようか」

「いらんことせんでええ。ユウがここで落ちたら、お父さんお母さんに会わせる顔がない」

「うわあ。そんなこと考えてたん？」

「冗談。でも、落ちんなよ」

「大丈夫。はい、はい、行って、行って」

あと一步で渡り終える。

崖の先端部は盛り上がり、小さな馬の背状になっている。その上に卵形の岩が乗っかり、アカマツの根がその卵石が転げ落ちるのを防いでいる。

岩を跨ぎこんで、ようやく両足をまともな地面についた。せつかく引いていた汗が、わずか数分でまた噴き出していた。

「あ、これは」

先には明らかに人の手で敷き並べられた丸石の小道が伸びていた。ここにも巨木がうつそうと茂っている。空の只中のような崖を通ってきた目には、心が落ち着く林床の光景。どことなくほっとする空間だ。崖と同様、右下は深く切れ込んだ谷になっているが、木が生えているだけで安心感が格段に違う。鳥の声が周囲に満ちていた。

「なるほど、ここにはまだ道が崩れずに残っていたんですね」

「いよいよですか！」

最後に崖を渡ってきた仙吉が喜びの声をあげた。

「水の音が聞こえる」

道長が下方からかすかに聞こえてくる音に耳を澄ましている。

「わくわくしてくるね」

「うん。わくわくしてきます」と、恭介が手を振り回した。

恭介が張り切って先頭に行く。

幸いなことに敷かれた丸石はしっかりとした造りだったし、勾配

もそれまでに比べると緩い。

しかも空は晴れ渡り、気持ちのいいそよ風が汗ばんだ体から熱を奪っていく。誰の足も軽快なハイキングといった調子になった。

が、隊列はすぐに止まった。

「ここからどうする？」

第 10 章 「アマガハラノ」

林の先端部に来ていた。林の出口というべきだろうか。

眼前には背の高さを超える一面のクマザサがびっしりと生い茂っていた。

「困ったな」

前方はまったく視界がきかない。このまま進むにも、密生する笹を掻き分けていくとすれば、面倒な行軍になるだろう。丸石の小道はクマザサの群生地の入り口でぷつりと消えていた。

「ここじゃないの！」

突然、道長が叫んだ。声が上ずっていた。

「うむ、そうかもしれない」

久米がうなり声をあげた。足の裏の感触はこの地が平坦地であることを知らしめていた。

「いや、そのようだな」

久米が笹に歩み寄る。

「ここよ！」と、興奮した道長が笹の茎を掴んだ。

「そうだ！　ここがアマガハラノだ！」

「栗の木があれば、それこそ決まりね」

優も声を合わせた。

「しかしこれでは、栗の木があるかどうか、わからないな」

橘のぶつきらばうな言葉に、

「とりあえずクマザサの縁に沿って行ってみますか？」と、提案したのは仙吉だ。

「それじゃ栗の木は見つからないんじゃないか？　アマガハラノの中央に栗の木はあるんだろ」

反対したのは、西脇だ。

「じゃ、三手に分かれるというのは？　両側からクマザサに沿って

行く二班と中央突破の班と」

と、木元が珍しく口を開いた。

「言うことがいつもまどろっこしいな。中央突破あるのみだろ！」

言うやいなや、恭介がナタを振り上げ、目の前の笹を切り払った。数本の笹がバサリと倒れた。せっかくの提案を一蹴されて、木元はプイと顔をそらすとまた黙り込んでしまった。コオロギに文句を言われたカブトムシがすごすごと木の幹を黙って登っていくかのよう

に、木元の巨体は議論の輪から離れていった。

「そうだな。三手に別れるのは危険かもしれない。道もない、しかも視界のきかない山の中を離れ離れで行動して、万一迷うことになってしまっちゃあ」

西脇が息子の肩を持った。

「でも、やみくもに突破するといっても」

道長が不安げだ。

生駒もそう思った。なにしろ目標がないのだ。どこに向かって進めばいいのか、見当さえつかない。目の前のブッシュを突き進むにはなんらかの指針となるものが必要だ。

「突破するのがおもしろいかもしれん。話によれば、どうせそんなに広い原っぱじゃないだろうし」

と、西脇が再び息子の案を推す。

「皆で行動して迷ってしもうても、困ることになりはせんかなあ」

「きっちり笹を刈り取りながら進めば、それが目印になるだろ」

軟弱な意見の仙吉を、恭介がうるさそうな目で見た。

ここで久米がはっきりといった。

「みんなで強行突破する案には無理がある」

結論めいた言葉に、恭介の顔は見る間に不機嫌になった。

久米が西脇に向き直った。

「さっきの木元くんの案でいきましょう」

有無を言わさない調子があった。

道もない山の斜面に登り、安全柵もない崖を越えてきて、ようやく目の前にする平原。神の庭・アマガハラノと呼ばれた伝説の原っぱ。

今日の目的地に足を踏み入れる直前になって、久米の気持ちは奮い立っているようだった。

「三つの班に分かれて行動するのも、マスゲームのようでおもしろいわね」

道長がそういつて木元の案に賛成する。もう反対意見は出なかった。

「わかりました。それでは、そういうことにいたしましょう」

西脇の声は少し形式ばっていた。隊長の任を剥奪されたように感じたのかもしれない。

班分けが行われた。

すっかり新隊長気分になった久米に一任された参謀道長が、てきぱきと決めていく。

生駒と優と仙吉は左回り班。橘親子と木元は右回り班。久米、道長、西脇、恭介が中央突破班。

「それでいこう！」

久米が決定を下した。

ところが、浮かぬ顔をして道長の班分け案を聞いていた西脇が辞退を申し出たのだ。万一降り口がわからなくなっではいけないから、自分はここに残ると。

それは大丈夫だろう、と久米が中央突破班に加わるように誘ったが、西脇は万一のためですから、といって動かない。

「全員で中央突破する案でも、もともと私はここで番兵をするつもりだったんですから」

さすがに久米がむっとした。

「じゃ、そうしてくれますか」

と、突き放すように背を向けた。

「うまく栗の木を見つけたら、大声で呼んでくださいよ」

と、西脇がその背中に声を掛けたが、もう久米は応えず、出発の号令をかけてしまった。

「では各隊、進め！」

代わって道長が、任せておいて、と西脇をねぎらった。

「声をかけ合って。大声を出したら届く範囲だから」

原っぱの周囲にはウバメガシが密生していて、草刈鎌を使ってもほとんど前進することはできなかった。

「几帳面に原っぱ沿いに進まなくてもいいやん。大回りして林の中を行こうよ」

優がいうように、その方が格段に進みやすそうだ。隙間なく生えているクマザサやウバメガシを切り払いながら進むより、斜面の歩きやすそうなところを選んで進むほうが楽だ。

振り返ると、すでに橘隊の姿はない。彼らも林の中を行っただろう。

生駒隊は原っぱの登り斜面側にいる。クマザサの大群落から離れて斜面に取りつくと、予想通り視点が上がって木々の間から原っぱを見渡すことができた。

笹原は入口から奥に細長い形をしていた。中ほどに三本の木が立っていた。

笹の葉がなびいて、風の通っていった道筋を示している。風はまるで誘うようにその木々に向かって吹いていくようだった。

「久米さん。どこですかーっ」

「ここだーっ」と、笹が不自然に揺れた。

「木が見えまーす」

「おおーっ、そうかー！」

「そのまままっすぐの方向ですー」

「りょうかーい！」

斜面を横切りながら進むにつれて、笹原の形状がはっきりしてきた。

緑に遮られて奥の端部は見えなかったが、人為的に造られたかのように整った半月形をしている。奥行約三百メートル、幅は百五十メートルといったところだろう。水田のようにまっ平らで、クマザサが一面を覆っていた。

「こんなところがあったとは。今まで村に住んできて、知りませんでした」

と、仙吉がさかんに感心している。

生駒達が登ってきた道は、半月の一方の切っ先にあたる。外側の円弧の向こうは、滝のある谷に落ちていく下り斜面。

綾たちは今どのあたりを進んでいるのだろう。いつでも原っぱを視界に捉えながら進めるこちら側と違って、見えない原っぱの下を迷わずに斜面を横切っていくのは骨が折れることだろう。

「ほら、あれ」

優が空を指差した。

「鷹ですな」

「へえ！ はじめて見た！」

深い山の中にぽっかりと開いた広い空間。溢れる緑。透明感のある空気。

生駒は強く息を吸い込んだ。

「気持ちいいわね！」

優がウインドブレーカーを脱いだ。あらわになった肩や胸元がまぶしい。

「連中、苦心惨憺するかと思ったら、案外善戦してるみたいやな」
久米隊の姿は見えないが、不自然にクマザサが揺れている。出発した地点から思いのほか進んでいる。木が立っているところまで、距離にして後五十メートルほどだ。

生駒たちはすでに、半月の弦側の中央辺りに差し掛かっていた。原っぱの中に立っている木々はもうすぐそば。樹形を見た印象では、そのうちの一本はほぼ栗の木に間違いない。ひも状の白いものが木にたくさんついている。花が咲いているのだ。他に二本あり、コナラかクヌギの木のように見える。まだ幼い木のようにだ。

「こりゃあ、間違いなく栗ですな」

仙吉がうれしそうにいった。

「そうなん？」

「お嬢さん、この臭い。ほら、するでしょ」

優が顔を心持ち上げて、空気に混じった臭いを嗅ごうとする。すっと空気が動き、一気に濃厚なその臭いがしてきた。

「あ、する。これ、栗の花の香り？　なんか変な臭い」

「なんの臭いに似てる？」

生駒の問いに仙吉は無関心を装っている。

「うーん。なんやろ」

「人の精液」

「げーっ。しょうもないこと言うな！」

このまま半月のもう一方の端部まで行ってみる必要はなかった。クマザサを突っ切っていても、久米隊よりも早く栗の木に行き着くかもしれない。

「橘さーんっ！」

生駒は大声をあげた。

「こちらは、原っぱの中の木のー、すぐ横に来ていまーす。ここか

ら原っぱの中に入りまーす」

すぐに声が返ってきた。

「りようかーい」

木元の声だ。

「そちらもー、一旦戻ってえー、久米さんたちの後を行った方がいいですよー」

「りようかーい」

今度は橘の声だ。次は中央突破隊に声をかける。

「ほーい」

「そのまま、まっすぐ進んでくださーい。後残り、三分の一くらいです。大体五十メートルッ」

「わかったーッ」

生駒は腰につけていた草刈鎌をケースから引き抜いた。

「ほんとにジーパンを履いてきてよかったわ」

優は、まるで試合開始のホイッスルを聞く直前のように、麦藁帽子の中の髪を直し、口を真一文字に引き結んでから、肩を上下に大きく動かしてにこりと笑った。

「よっしゃあ！ 行くかあ！」

生駒は斜面を駆け下り、クマザサ群落に突っ込んでいった。

しかし相手は思いのほか手ごわかった。鎌を使うまでもなく、手で掻き分けながら進めるかもしれないと考えていたが、自然の強靱さを過小評価していた。クマザサの太くて硬い茎が行く手に密生していた。

久米が買い揃えていたステンレス製の安価な草刈鎌は、手ごわいくマザサの茎に比べて非力な道具だった。一振りでざっくりと刈り取れるわけでもなく、何度もたたきつけるようにして、ようやく数本の笹を倒すことができるという程度の代物だった。

「こりゃあ、久米さんの方が早く着くかもしれないな」

「代わりましょう」

見かねた仙吉が生駒の前に出た。

さすがプロの道具は違う。腕力も違う。コツもあるのかもしれない。

生駒の数倍もの速さで笹を刈り取っていく。

中央突破班には恭介がいる。彼もそれなりの道具を持っている。これは競争になりそうだ。

「仙吉さん、競争じゃないんやから、そんなにがんばらなくても」と、優が仙吉を気遣った。

「いやあ、勝ってみせますよ」

仙吉はますます張り切ってしまった。

それにしても視界がまったく利かない。

すぐ近くに木が生えているはずだったが、一旦笹群落の中に入り込むと、その梢さえのぞむことはできなかった。

「磁石を持ってくれば良かったな」

「でも、まっすぐ来てるよ。ほら」

優が後ろを指差した。確かに、今通ってきた跡がまっすぐ山の斜面から伸びている。

「なんや、まだこれだけか！」

「うん。あの木と後ろのあの高い木を結んだ線に沿って進めばいいねん」

「なーるほど。おまえ、意外と賢いな」

仙吉と交替しながら、十五分ほど笹と格闘したところ、久米の大声が聞こえてきた。

「あったぞー！ 栗の木だ！」

「もう少しで僕らもそっちに行きますーっ」

生駒と仙吉が同時に声を返す。

「くそお。遅れをとったか」

生駒隊の方でもようやく目指す木が笹の穂先越しに見えてきた。

「あと少し」

「まめができた」

「サバイバルには向かないね」

「ほっとけ」

目の前の屏風のようなクマザサをなぎ倒したとたん、急に笹の背丈が低くなり、視界が開けた。前方に整った樹形の木が見えた。

地面すれすれまでに垂れ下がった枝の隙間から久米達の姿が見える。

「やあ、お疲れさん！ やはり栗の木だったよ！」

高さ十メートル、葉張り十五メートル。形のいい大木だった。大きな細長い葉を茂らせ、たくさんの花をぶら下げていた。

生駒は水中を歩くように両手を広げ、草を掻き分けながら木に到達した。木の根元には草は生えておらず、地面が見えていた。道長が地面に直接座って、足を投げ出していた。

「やあ、早かったんですね！」

垂れ下がった枝先をくぐり抜けて木の下に入った。

「へえ！」

「すごいでしょ」

道長が軍手をはめた手で地面を叩いた。

「石が敷いてあるのか」

木の幹を中心にして、ちょうど葉張りの広さの地面に、人頭大の自然石が敷き詰められていた。

自然に堆積したものではない。ほぼ同じ大きさの自然石が、ちゃ

んと平たい面を上にして隙間なく敷き詰められていた。

「雑草が生えないようにしてあったのね」

「なるほどね。それにこの方が落ちた栗を拾いやすいし」

栗の木に触れてみた。幹周りは直径で五十センチほど。立派な木といていい。

「聞き耳頭巾でこの木の話聞いてみたいね」

優がそういつて幹を叩いた。

「あ、それ、いいわね」と、道長も顔を輝かせた。

「昔、霊験あらたかな山伏が佐吉に植えさせた木か、あるいはその子孫なのか、わかるわよ、きっと」

「ハッハ、そうでんなあ」

仙吉も相槌をうった。

「石碑のようなものはありませんねえ」

生駒はあたりを見回した。

「あ、あれは？」

栗の木から少し離れたところに、切り石で井桁に組まれた構築物があった。

「井戸みたいよ」

「へえ！ こんな山の中に」

木の板で蓋がしてある。しかし腐ってしまつて、隙間から中が覗けた。階段状になっているようだが、暗くてよくはわからない。相当深く、湿った空気が淀んでいる。声が反響した。

「これが神の庭・アマガハラノの証拠。まさか私たちがここまで来れるとは思ってなかったけど」

道長が微妙に笑って、また敷石を叩いた。並んで座り込んだ久米も頷いた。

「明らかに人の手で創られたものだ」

「でも、落ち葉とかが降り積もっていないのは不思議ですね」

「そうよね。ま、そもそも不思議なアマガハラノの、これまた奇怪な栗の木なんだから」

「そうそう！ 理屈っぽいこといわないの」

と、花の匂いを嗅いでいた優が顔をしかめた。

優と道長が梢を見上げている。

「ここは幻の原っぱなのよ。不思議な原っぱ……」

急に風が強く吹いて、笹を揺らした。道長の説明に賛意を表したかのように、栗の木が葉擦れの音をたてた。

「でも、私達はこうして……」

道長は思い詰めた顔をしていた。

「綾ちゃんが聞き耳頭巾を持ってきたから？」

道長は自問している。

「どうということなんです？」と、優が問いかけた。

「佐吉以外は誰も、アマガハラノに行き着くことはできても栗の木は絶対に見つけられない。笹原の中を迷った挙句にいつのまにか外で出てしまう。そういう言い伝え……」

「へえ！ いわゆる、迷いの原ですか」

道長はフツと表情を崩した。

「そうなの。でも、それじゃ後世の人が困るから、何か特別な道具が仕掛けがあったんでしょね。もし、ここが本当に迷いの原なら、私達がこうして栗の木を見つけたのは綾ちゃんの頭巾のおかげかなって」

「ほう」と、久米が溜息をついた。

「ふと、そう思ったのよ」

「へええ！ ここ、そんな怖いところだったんですか！」

怖がってはいるところか、楽しくてしかたがないというように優が笑った。

「知りませなんだ」と、仙吉も感心する。

「これかな？」

優が取り出したもの。

「ほら、ノブ、これ、吉野山で買ったんだ」
携帯電話のストラップ。

「ん？」

「あ、忘れてるんだ！ 不動明王のお守りやん！」

「おお！」

久米が喜んでユウから受け取ったストラップを眺めた。

道長も陽気な声を出した。

「佐吉の話、実は続きがあるの」

「へえ！」

「采家のお話に続いていくのよ。昨日、西脇さんがおっしゃったように、その栗の木のおかげで采家は栄えたという結論は同じなんだけど、その理由が二通りあってね」

「はい」

道長が久米に眼を滑らせた。

久米は笹原を見つめ、聞こえてはいるが聞いてはいないという風だ。もう知っている話なのかもしれない。

「ひとつは佐吉が采家の先祖だという説」

「ええ」

「もうひとつは、その栗の木の不思議を聞きつけた庄屋が佐吉の家からその権利を奪い、代々栄えたという説」

ユウは元気よく頷いている。

「采家の呪われた歴史なんて話が出たけど、案外、そんなことかも」
「ありえますね！」

「今と違って、昔は身分の違いなんでもっとはつきりしていたし、強いものはますます強く、弱いものはいつまでも虐げられたままだったから」

「佐吉はきこりの息子、でしたよね？」

「そう」

「やっぱり、庄屋ってのは悪者なんだ！」

道長が声をあげて笑った。

「三条さん、時代劇の見すぎ」

「へへ」

「滝の財宝なんていっても、実はお宝でもなんでもなく……」

久米が急に立ち上がった。道長は、それを見て、

「あ、要らないこと喋ってしまったかな」

と、可愛く舌を出した。

「滝の財宝！」

優は無頓着に目を輝かせている。

ふと、仙吉が声を上げた。

「恭介くんは？」

そういえば、姿がない。

「また、どこかに行ってしまったんですか？」

「もっといいナタを親父に借りてくるって。引き返していったんだが……」

久米が心配そうな顔になって、笹原の道を見透かした。

「ちょっと遅いわね」

道長も気になってきたのか、アマガハラノ伝説の解説は打ち止めとなった。

「いづごろ別れたんです？」

「そうねえ。貴方の声が聞こえて、しばらくしてから。彼、やけに張り切って」

腕時計を見た。

「あれから、かれこれ二十分か。別れてから十分くらい？」

「うーむ」と、久米が唸り始めた。

「僕の声が聞こえなかったのかな。そういや返事がなかったな」

見たところ、久米隊が進んできた道も生駒たちのルートと同じように大胆に笹が刈り取られている。若い恭介なら、このにわか作りの小道を迷わず飛ぶように往復できるだろう。

「茎が刺さって、足の裏でも怪我をしたかな」

「あ、来ましたよ！」

笹原の中に人影が見えた。

しかし姿を現したのは橘だった。続いて綾、そして木元と続いていた。

「おーい！」

橘が派手に手を振ってきた。

「よーおっ」

久米がぎごちなく手を振り返した。三人はみるまに近づいてくる。

「しっかり道がついていたんで、楽に来れた」

と、橘が枝の暖簾をかき分けて栗の木の下に入ってきた。

「これか！ 伝説の栗の木ってのは！」

中腰になって木の幹に近づきながら、木元が大げさな声を出した。綾は木の周りをくると一回りして、幹に沿って視線をゆっくりと上げていった。

橘たちがひとしきり観察するのを待って、久米が聞いた。

「恭介くんに会わなかった？」

三人が顔を見合わせた。

「ん？ そういや、西脇さんは？」

久米が叫んだ声が聞こえておれば、橘たちより早く到着するはずだ。久米がますます心配顔になったが、橘はあっさりしたものだ。

「さっきのころにはいなかったな」

「いなかった？」

「来てない？ てっきり俺たちより先に」

「うーむ……」

久米の顔がゆがんだ。

「マムシにでもやられたんじゃないか」

橘が冗談めかしている。

「きっと、そのショックで気を失っているんだな。あるいはどこか、地面に亀裂でもあって、落ち込んだとか」

「橘さん！」

道長が、このぶしつけな男をきつと睨んだ。

親子ふたりが同時にそんな目にあうはずがない。生駒たちは木の下を出て笹原を見つめた。

先ほどまでと同じように、風に吹かれて笹が揺れていた。そして、あたりはしんと静まり返っていた。

突然、仙吉が大声をあげた。

「恭介！」

耳を澄ました。返事はない。

「利郎さーん！」と、仙吉が再び叫ぶのと、

「西脇さーん！」

と、道長が叫ぶ声が同時に笹原を渡っていった。

しかし、応えるものはない。

「おかしいな」

不安が大きくなってくる。

「戻ってみましょう」

最初の地点、アマガハラノの入口にも、西脇の姿や恭介の姿はなかった。

また仙吉と道長がふたりの名を大声で呼ぶ。森もアマガハラノも静まり返ったまま……。

「帰ってしまったのか？ それならいいんだが……」

久米が眉間に皺を寄せて、もと来た山道を睨みつけた。

「私たちに黙って？ そんなことはしないでしょ……」

「しかし、返事がないということはそういうことだろ。迷ってしまったとしても、声は聞こえるだろ」

「でも……」

久米と道長が話している横で、仙吉が困り果てたように突っ立っていた。そして、「まさか」と、小さくつぶやいた。

「まさか、なんです？」

久米に聞きとがめられて、戸惑った仙吉は、

「いえ、どっちかの具合が悪うなって、急いで村に帰ったのかもしれないと思うて」

と、うつむき加減にいった。

「声もかけずにか？」

久米が怒り出していた。応えようがない道長と仙吉に代わって、橘がブスリと吐き捨てた。

「ふん。気に障ったんだろ。やつら、親子揃ってご推薦の中央突破案が不採用になって」

「ええっ？ そんなことで？」

ありえない、と道長が首を振った。

「手分けして探しましょう」

ここで漫然と待っていても、らちがあかない。

「そうだな。しかしどこを……」

久米は急に気弱な声になり、座り込んでしまった。

「とりあえず、もう一度、栗の木のところまで戻ってみましょう。途中でなにかわかるかもしれない」

不吉な予感が始めていた。

こんな人の通わない、道さえもない山の中で忽然と人が消えてしまった。しかも親子ふたり。

生駒の耳朶に、老婆の声がよみがえってきた。神の庭に足を踏み入れたことを不動明王がお怒りに……、まさか。思いつきを振り払うと、栗の木に向かって歩き始めた。

道長が搜索班の行動をてきばきと決めた。

「今、十時五十五分です。ふたりが見つかればそれでよし。もし見つからなくても、十一時十五分、今から二十分後には一旦ここへ戻るということにしましょう」

生駒と仙吉と道長は栗の木へ戻り、優と綾は山の斜面から、橘は谷の方へ、木元はもと来た道に戻り、久米はアマガハラノの入口で待機、ということになった。

笹の葉を揺らしていた風が止んでいた。

空は快晴。太陽が天中あたりに差し掛かり、陽光が生駒たちの顔に容赦なく降り注いでいた。

栗の木まで往復してもなんら手がかりはなかった。優や橘や木元も首を振るだけ。

「しょうがない人たちだな。戻りますか……」

久米が疲れきった声を出した。

伝説の神の庭・アマガハラノを見つけたという感激は薄れてしまっていた。

第 11 章 「波になぶられて」

「ちょっと疲れた。皆さん、先に行ってください」

崖を横切ったところで、優が弱音を吐いた。

「じゃ、休憩しましょうか」

久米が立ち止まりかけたが、道長は、

「西脇さんと恭介さんが心配、早く村へ戻りましょう」と、足を止めようとしなない。

「ごめんなさい」

優が日陰の草むらに座り込んだ。まさか優がこれしきのことで根を上げるはずはない。なにか考えがあるのだ。

生駒は軽く手を振った。

「僕らはちょっとここで休んでから戻ります。帰り道はわかりますし」

道長がようやく足を止めて振りかえった。

「大丈夫？」

「ええ。暑さでちょっと立ち眩みがしただけですから」

仙吉が申し出た。

「皆さん、お疲れでしょうから、わしが一足先に下ります。山歩きはお手のものですから。それで利郎らを探してみます。皆さんはどうぞごゆっくり、怪我しないように降りてきてください」と、返事も待たずにさっさと駆け下りていった。

みるまに仙吉の姿は見えなくなる。橘や優でも、あのペースにはついていけないだろう。

「どうぞ久米さんも先に戻ってください。僕らはここで少し体を冷やしてからゆっくり戻りますから」

と、生駒も優の横に座り込んだ。

仙吉のおかげで、全員がここで小休止ということになったら優の芝居は水の泡だ。

道長はちよつと逡巡したが、結局は歩き始めた。

「じゃ、お先に降りますね」

久米や橘も続く。

綾が何度も振り返った。そのたびに優は手を振った。

草はしつとりと冷たくて気持ちがいい。

「尻が濡れるぞ」

「すぐに乾くわよ」

一行の姿が完全に見えなくなると、優はリュックからペットボトルを取り出し、ゆっくりと口をつけた。そしてクッキーの袋を開ける。いつでも自由に食べられるように久米がリビングに置いてくれているものだ。

「今まで食べる機会がなかった。これ、おいしいねん」と、渡してくる。

時間を使ってここで休憩し、前を降りていった一行と安全な間隔を空けようというのだ。

「やれやれ。ここまでしなくても、また別のときにでも来ればいいのに」

「フフ、さすがノブ」

滝を見に行こうというのだ。

「恭介くんが、行き止まりにしてあるって言ってたやん。きっと、よほどのもの」

なにがよほどなのかわからないが、勝手な想像を膨らませているのだろう。

「滝のお宝、お宝」

「それより西脇さんや恭介のことが気になるな」

「そう？　ふたりともいい大人なんやから。それにこの山のことをよく知ってる。きつとなにか、急いで降りていく用があっただけのことよ」

「黙って？」

さつきからこの繰り返しだ。

「ねえ、ノブ」

「ん？」

「アマガハラノ。迷いの原」

「ああ」

「不思議なところやったね。根元の石畳もそうやけど、原っぱ全体がまっ平らで」

「うん」

「考えてみたんやけど、呪術師の村の跡かも。井戸もあつたし。それで、誰も近づかないように結界を張ってあつて」

「呪術師ってなんやねん！」

「例えばやん」

そんな話をしていたときだ。

「あれ？」

西脇が山道を登ってくるのが見えた。息を切らせて半ば走るように登ってくる。

「ほうらね。やっぱり用事があったんや」

西脇も生駒たちに気がついた。一瞬歩みを緩め、小さく手を挙げ、また足元に目を落としてぐんぐん登ってくる。たちまち声が聞こえるところまで近づいてきた。

「いったい、どうされたんです？」

生駒は立ち上がって声をかけた。

「すみません。ちょっと急に思い出すことがあって」

「だからって、黙っていなくなってしまわなくてもいいじゃないですか」

声が思わずきつくなる。西脇がごまかすような笑顔を作った。

「申し訳ない」

西脇は目の前まで来ていたが、立ち止まらずに通り過ぎようとする。

「ちょっと、西脇さん！」

「皆さん、まだ上におられるんでしょう？」

振り返りもせずに行こうとする。

「いいえ。で、恭介さんは？」

ようやく西脇が足を止めた。

「は？」

「一緒じゃないんですか？」

「恭介がどうかしましたか？」

当惑顔になった。よほど早足で歩いてきたのか、髪が濡れていた。作業服も水を浴びたように染みができている。

「あっ、血が」

脛の下で作業ズボンがかぎ裂きになり、赤い斑点ができていた。

「転びましてな。それより、恭介がどうかしましたか？ 皆さんと一緒にじゃないんですか？」

首に巻いたタオルで頭を拭いたが、微妙に指先が震えていた。

「姿が見えないので」

「え？」

「それにあなたもいない。なにかあったのかと、皆であわてて降りて来たところです。いったい、どうしたんです？」

「恭介が……。あれ？ 生駒先生はこんなところで、どうされたんです？」

「休憩ですよ。暑くてたまらないんで」

「はあ……」

「久米さん達は先に降りていきました。会いませんでした？」

「いえ……」

言葉を搜しているような短い沈黙の後、西脇が照れ笑いを浮かべた。

「実は、その、皆さんが原っぱに入っていかれた後、急に、もよおしましてなあ。まさか、神聖なお庭で、その、するわけにはいきませんので、少し下ってからしよう……」

今度はタオルで手を擦り始める。

「はあ？」

「お恥ずかしい話なんです、どうも腹を壊したようで。その、まあ、手や尻を洗おうと」

生駒とユウは思わず顔を見合わせた。

「それでまあ、いつまでもよおすかわからんもんですから、しばらく様子を見まして……。そんなことより、恭介がどうしたっていうんです？　なにか皆さんに不届きなことを？」

生駒は不愉快になった。

下痢はしかたないとしても、山の中で引率者が同行者に黙って消えてしまうとは。

「こっちが聞きたいですよ！　あなたと同じようにいなくなったんです！　原っぱの周りも探したんですけどね」

「は？」

「さては彼も下痢かな？」

西脇は生駒のいやみにも気がつかないほど、うろたえ始めた。

「笹原の入口で待っている間に、恭介さんは戻ってきましたか？」
優が聞いた。

「いや……」

「そうですか。じゃ、とりあえず村へ帰ってみましょう」
生駒は立ち上がった。

「あの、もう上にはいないんでしょうか？」

「大声で何度も呼んだんです。でも返事がない」

「はあ……」

西脇はまだ登って行きたそうに崖を見ている。生駒はリュックサックを肩に掛けた。

「僕たちは降りますよ」

「はい……。では、私も一度村へ帰ります」

三人は黙って山を降りていった。

西脇が先にたってどんどん下っていく。アマガハラノで栗の木が見つかったかどうか聞いてこない。息子のことが心配で頭が一杯なのだろう。

祠のところまで降りてきたとき、すでに生駒の息は上がっていた。西脇が気づいてスピードを緩めた。

優が声をかけた。

「西脇さん、山歩き、慣れてますね。速い！ 体を洗ったっておっしゃったけど、まさか神社のところまで降りて、また戻って来られたんですか？」

「いや、それはいくらなんでも無理です」

「じゃ、どこかに水場があるんですか？ 滝とか？」

「それは」

西脇が振り返った。顔が歪んでいる。息子のことが気になっているのに、つまらないことを聞くなといわんばかりだ。

「あっちに小川が流れてまして」

と、祠の上の斜面に視線を向けると、また猛スピードで歩き出した。優が目で合図を送ってきた。

（どうする？ 見に行く？）
（行っとうどうする。戻ろう）

屋敷の松の間で寝そべっていた久米と道長と仙吉に、西脇は同じようなやり取りを繰り返してから、あたふたと出ていった。

「ふん。息子の方も、どっかで昼寝でもしとるんじゃないか」

仙吉が毒づく。すでにTシャツに短パンという涼しげな格好に着替えていた。

生駒も着替えていたし、優は離れでシャワーを使って寛いでいた。

「仙吉さん、西脇さんの家に恭介くんはいなかったんですか？」

「家は原田の町でしてな。利郎さんは昨晚、村の集会所に泊まったんです」

集会所は覗いたが、誰もいなかったそうだ。自宅には電話してみたが、誰も出なかったという。

「ま、恭介はああいう変わった性格ですから。子供っぽいというか、ちょっと突っ走ってしまふところがあつて。親はそんな息子にべつたりですしな」

と、親戚の無礼な行動を弁解した。

「時々あるんですか。ふらつといなくなるようなことが」

「さあ、どうですか。いつも近くにおりませんから。ま、そのうち、ひょっこり出てくるんでっしゃろ」

「集会所で寝泊りできるんですか？」

「そうですよ。なにせ過疎の村ですし、元村人ですから。さて、わしもこれで失礼します」

立ち上がろうとする仙吉を久米が押しとどめた。

「木元くん、弁当を買ってきてくれるように頼んであります。食べいてってください」

西脇が姿を見せたことで、笹原での漠然とした不安はずいぶん後退していた。

仙吉がいうように、恭介はニヤニヤ笑いながら今にも顔を見せて、周りの人間の反応を楽しもうと思っているのだろう。そんな気がしていた。

生駒だけではない。久米もいつもの朗らかな顔に戻っていて、もう一泊していくようにしきりに勧めるのだった。

「もうしばらくしたら失礼します。夕方までには出るつもりです」

「そうか。残念だな。じゃ、それまでゆっくりしてってください」
そういうながらもそれほど残念がっていない。いわば恒例のやり取りなのだ。

仙吉や木元は昼食を取るとそそくさと帰ってしまい、ゆるゆると午後の時間は過ぎていった。

「ちょっと例の広場の井戸を見にいきます」

三時のお茶を飲み終わったとき、車に乗り込む前に生駒は散歩でしようという気になった。

「どうです？ 一緒に」

「うん。行こう」

久米が道長を誘った。しかし、

「ちよっと電話を待っているの」と、道長は縁側から腰を上げなかった。

屋敷を出て村の中心部に向かって下っていく。猪背川の川面が陽光を反射していた。

「今度来るとき、釣り道具を持って来るか」

「お、ノブ、それいいかも。なにが釣れる？」

「ヤマベくらいかな」

「トキさんが取ってたってやつね。どんな魚？」

前を歩いている久米が手を叩いた。

「そうだ。今度は釣り大会をやってみるか。どう？ 生駒さん」

久米は新しい企画が気に入ったようだ。

そろそろ鮎釣りの季節だし、仙吉さんにでも教わって、などと、はしゃいだ声を出した。

前から三人の男が歩いてきた。先頭は赤ら顔の老人で、よれよれの野良着に麦藁帽子をかぶっている。あとのふたりは村ではあまり見かけない服装だ。くたびれた黒いズボンに開襟シャツを着ている。

「久米先生！」

「こんにちわ、佐古さん」

佐古と呼ばれた老人が駆け寄ってきた。額に玉の汗をかいている。

「大変なことになりました！」

息を整え、声をひそめていった。

「健治さんが亡くなりました」

「えっ」

「川で」

「えええっ！」

「それで警察が来ています」

開襟シャツの男が進み出た。

「久米荘一さんですね。京都府警のものです。少々お話を伺いたいですか」

「はあ」

「今からどちらへ？」

「散歩を……」

「でしたら、集会所までご足労願えませんか。そこに寺井という警部がおりますので」

「はあ」

「それから、采健治さんが泊まれた部屋を見せていただきましたんですが、よろしいですか」

「どうぞ……、屋敷に今、道長という人がいますので……」

生駒たちは急いで村の中心部まで降りていった。

集会所の前に数人の村人の姿があった。仙吉が駆け寄ってくる。

集会所のエントランスにも村人らしからぬ男が立ち、村人たちの動きに視線を当てていた。

「で、どういうこと？ 川で？」

「はい。釣りに来た人が見つけたらしいです」

今日の昼過ぎ、村から二キロほど下った浅瀬で、打ち上げられた健治の死体が発見されたという。

死亡時刻は司法解剖を待たないと正確にはわからないが、数時間前。

西脇を除いて、采家のものへの事情聴取は終わったのだというのと。

たまたま通りかかった橘も仙吉と一緒にいろいろなことを聞かれたということだった。

「事故ですか？」

「さあ。それはまだ……」

「どんな様子で？」

仙吉は一呼吸置いて、小さな声でいった。

「私も健治の亡骸を確認したんですが……、後頭部がバツクリ割れていまして……」

「なんと……」

「川に落ちたときにできた傷かどうか……、なんとも無残な姿で……」

「お気の毒に」

と、久米がその場に居合わせた全員の心境を代弁した。

「昨日と同じ服装でした。朝、山に行く前に、何か家に取りに戻る途中だったんでしょなあ」

「なにをでしょう」

「さあ」

と、仙吉は言いよんだが、すぐに、

「ですが、佳代子さんの写真を持っていたとか」と、呟いた。

「佳代子さん？」

「はあ、胸ポケットに……」

「そう……ですか……」

久米がうなだれた。

「それにしても、えらいことになりました」

「そのう……、このたびは大変なことになり、お悔やみを申し上げます」

あ、いえ、どうも、と仙吉も改めて頭を下げた。

久米は厳しい顔をしていた。悔やみの言葉を口にしながら、一年前の事件の悔しさを思い出したのかもしれない。

生駒たちはまさしく井戸の脇に立っていた。

丸石で縁取りされた直径一メートルほどの井戸。古びた木の板が数枚掛け渡され、コンクリートブロックの重石がしてある。しかしすでに興味は失せていた。

「あ、来た」

集会所から刑事が歩いてくる。久米は名乗ってから生駒を振り返った。

「どうせ生駒さんも聞かれるのでしょ。一緒にいかがです？ 彼

らの手間も省けますよ」

変な誘いだとは思ったが、生駒に異存はない。刑事もだめだとは言わなかった。

集会所は十二畳の畳敷きの主室がひとつとミニキッチン、シャワー室、トイレがあるだけの小さなプレハブの建物だった。

そこを警察が臨時詰所にしていた。畳の上にブルーシートを敷き、数脚のパイプ椅子が乱雑に置かれてある。

その真ん中に、いかつい顔の男が座っていた。

「や、お手間を取らせます」

と笑みを浮かべて立ち上がり、自分の前に座るようにと手招きした。

「久米さん、その節はどうも。京都府警の寺井です。こちらのお二方は？」

久米の紹介に、寺井は無表情に頷いてから、健治が発見されたいきさつを織り交ぜながら質問を始めた。

警察としては、健治の死を他殺とも事故とも自殺とも、まだ断定できない状態らしい。

「昨晚は何時ごろお休みになられましたか？」

「そのときの状況を詳しく教えていただけますか？」

「采健治さんの様子に変わったところはありますか？」
といった恒例であろう質問がなされた。

佳代子の事件について口にはしないが、関係付けて考えてはいるのだろう。

「死亡原因ははっきりしないということでしたが、やはり溺れたということになるのでしょうか？」

生駒からの質問だ。

言外に佳代子の死因と同じように、という批判的な意味が含まれていたかもしれない。

「わかりません。ただ、後頭部に、致命傷に近い大きな傷がありました。川に落ちたときにできたものか、別の要因でできたものか、今はまだわかりません」

寺井がまた久米に顔を向けた。

「昨晚、お宅であった集まりのことですが」

さらりとあいまいな聞き方をしてくる。

「ちょっとした夕食の会です」

「参加していたのは？」

久米が参加者の名を挙げた。自分自身も疑われているのだ、という当たり前の事実に気がついて、生駒はかすかな緊張を覚えた。

「あなたとのご関係も教えてくださいませんか？」

久米は少し恐れたように唾を飲み込むと、生駒を横目で見やった。「親しい方々とのパーティだったということは伺っています」

寺井はなにをどこまで知っているのだろう。久米がああ屋敷で週末を過ごすようになったいきさつは知っているはずだ。

岩穴の中でどんな話が出たのかということとは？

生駒は、寺井のあばただらけの浅黒い顔と、久米の白い顔を見比べながら、ふたりのやり取りを聞いていた。

「生駒さん。あなたと采さんとのご関係は？」

生駒にも質問が飛んできた。

「たぶん、会ったのは昨日で二回目です。以前、地鎮祭のときに」

「ふむ。三条さんは？」

「え、私？ もちろん初めて。ここに来たことも」

「わかりました。じゃ、また久米さんにお聞きします。道長さんと

坂井さん、このおふたりと采さんとの関係はいかがです？」

「さあ。なんともいえませんが、たぶん、生駒さんと同じく、以前会ったことがあるとしても、親しくはないんじゃないでしょうか」

「うむ。で、今朝はなにをされていたんです？」

寺井が次々に質問を展開してくる。

久米は戸惑ったように一旦開いた口を閉じた。強い冷房がきいているのに汗をかいている。

生駒は助け舟を出した。

「近くを散策しようということになって、ちょっとした山登りをしました」

どんな目的で山に登ったのかも、この男は知っているかもしれない。昨夜のことを仙吉から聞いているのだから。神の庭・アマガハラノを探しにいったことも聞いているかもしれない。それを伝説の話も含めて、初めから説明するのは面倒な気がした。それに、すでに生駒は、この寺井という男がなんとなく嫌いになっていた。

「なるほど。ただ、今は久米さんにお聞きしているんです」

寺井は生駒の顔を見ず、久米に視線を当てたままぶつきらばうに告げた。久米が怖気づいたようにこっくりと頷く。

「では、その山登りの行き先とメンバーを教えてください。出発時刻と帰ってこられた時刻も」

「はあ、行き先といいますが、岩代神社を抜けて裏山にちょっと登ってみただけのことです。昼過ぎには戻ってきました。屋敷出たのは朝の八時半です。メンバーは私とこのおふたり、道長先生、橘さん親子、西脇さん親子、大葉仙吉さん、木元くんです」

「フルネームでお願いできませんか？」

久米が慌てたようにひとりずつ名前を挙げていった。

「西脇恭介さんは昨晚の宴会の参加者ではありませんな」

はあ、と久米が手の平で汗を拭った。

「今朝、西脇利郎さんが連れてこられました」

「で、坂井さんという方はどうされたんです？」

「仕事があるからって、大阪に帰りました」

「何時に？」

「朝八時半ごろ。八時四五分のバスに乗るといって」

「で、采健治さんは？ ハイキングに行くメンバーに入っていないか
つたんですか？」

「はあ、彼も行くと思っていたんですが……。朝から姿が見えなく
て……」

寺井は久米の口元を凝視していた。

「出発の予定時刻になっても戻って来なかったので、なにか急に行
けなくなった事情があるんだろうと……」

「つまり、采健治さんも今日のハイキングに参加する予定だった。
ところが現れなかったと」

「はあ」と、久米が悪いことをしたかのように身を縮めた。

「もう一度お聞きしますが、出発は八時半ごろ、お帰りは十二時過
ぎですね。で、全員一緒に？」

「あ、いえ、それは……」

「もう少し正確にお答えいただけませんかね」

「す、すみません」

「で？」

寺井に畳み掛けられて、久米がしどろもどろになりかけていた。

それでもなんとか、仙吉が先に、そして久米と道長らが山を降り、
三十分ほど遅れて西脇と生駒達が戻ってきたことを説明する。そし
て、山から降りてきて生駒が戻ってくるまで、自分や道長は離れや
岩穴を覗いていない、母屋から一歩たりとも外へ出ていない、と付

け加えた。

「橘さんや木元さんはどうされたんです？」

「橘さんとは屋敷の前で別れましたが、木元さんはちょっと後片付けを手伝ってくれて、弁当の買い出しを頼みました」

「ふむ……。で、降りてくるのがそんなにバラバラになったのはどういうことですか」

久米がそのときのことをありのままに話し、生駒が補足をした。

寺井にとって新しい情報がようやく手に入ったようだ。

眉間に皺を寄せ、考え込んでいる。健治の死に事件性が出てきた、と思い始めているのかもしれない。

生駒は改めて昨夜の健治の様子を思い出そうとした。

張り切ったとうとうと屋敷の自慢をしていたときの声はまざまざと思い浮かべることができる。

表情やしぐさは？ 会の途中までは特に変わったことはなかったが、綾が西脇にくっついてかかったときはどうだったろう。

ただその直後、奈津が現れてからは存在感がまるでなくなってしまったのだった。

「健治さんが自殺するなんて考えられないよね」

優が生駒の思いと同じことを声に出していった。寺井がすっと目を細めた。

「なぜ、そう思うんです？」

「だって、健治さんは楽しんでたから。ほら、部屋割りをじゃんけんで決めたときも」

生駒も、今、思い出していたことを話した。

しかし寺井が興味を持ったのは離れの部屋割りの方だった。

「久米さん、あなたは采健治さんがどの部屋で寝ていたか、ご存知でしたか？」

「いえ」

「では、采健治さんがどこで寝ているのかを知っていたのは、生駒さんと三条さんと木元さんだけということになりますな」

「なんか、疑われてるみたいー」

優が口を尖らせる。

「いや、状況を確かめているだけのことです」

「でも、離れの座敷はどれも縁側に面していますから、外から見ているのなら、誰がどの部屋かというのは簡単にわかりますよ。しかも奥の座敷は縁側からしか入れませんし」

「うむ。いいでしょう」

と、寺井がその話を打ち切った。

「生駒さんと三条さん、ちょっと席をはずしてもらえますか。ただ、あなたの方とも、もう一度お話ししたいので、外で待っててもらえますか。申し訳ないが」

念を入れようというのだろう。ひとりずつ聞くということは、万一他殺だったとき、これからの証言は重要なものになるということだ。

寺井が口の隅で微妙な笑みを作っていた。

第 12 章 「狂人と佳代子」

外で待てといわれても、集会所の玄関のベンチには難しい顔の警察官が立っていて、居心地のいいところではない。

生駒は集会所を出た。刑事の目があからさまに背中を追ってくるのを感じる。まだ数人の村人が集会所の前にたむろしていた。仙吉もまだ井戸の脇で佐古と話し込んでいる。

生駒は肩をすくめてみせた。仙吉がこわばった笑みを寄こし、集会所に目をやったが、窓にはカーテンが引かれていて中の様子は見えない。

「西脇さんはまだ？」

「奥さんに聞いたたら、一旦は家に戻って、恭介の立ち回りそうなところを捜しに出たそうです」

「なんとなく心配ですね」

と、とりあえずは言ったものの、恭介が気になっていたわけではない。健治の死の原因がはっきりしない今、漠然とした不安が村全体を覆っているように感じて、それを口にしたまでのことだ。

「いったい、ふたりともどうしたっていうんや」

仙吉がいらついた声を出した。心配しているのだろう。

ふと仙吉の視線が生駒の背後に向いた。

振り向くと、奈津が歩いてくる。近づくにつれ、老婆の目が仙吉と生駒と優を順に見ていった。

「奈津さんの事情聴取も終わったんですか？」

小声で聞いた。

「はあ、一応は。でももう歳ですんで、簡単に済ませたようです」

奈津が目の前まで来た。明るい日差しの中で見ると、暗い夜の明

かりの中で見るのとはまた違う凄みがある。

赤銅色をした顔には無数の深い皺が刻み込まれている。昨夜の振り乱した髪とは違い、今日は白銀の髪を茶色の紐で後ろにぴったりと束ねている。着物は昨日と同じ濃い緑色。神社で見かけたときと同じもの。幅広のえんじの帯を縛り上げ、背筋を伸ばしている。

厳しい表情。

しかしこれが普段の奈津の表情なのか、生駒にはわからない。細く開けたまぶたの中の灰色の小さな瞳が、ぴたりと仙吉に据えられている。

そこには九十を超えた人とは思えない強い意思の力が垣間見えているような気がした。

横真一文字に引き結んだ小豆色の薄い唇が動いた。

「おめえ、今朝、どこへ行っておった」

「山だよ。ばあちゃん。この人たちと一緒に」

仙吉がやさしく諭すようにいった。奈津の目に入らないところで、佐古が小さくため息をついた。やれやれというように。

奈津の瞳が動き、生駒を捉えた。生駒は硬くなって言葉を待った。しかし奈津はくると背を向け、もと来た道に戻り始めた。生駒の耳に、崇りじゃというかすかな声が忍び込んできた。今、奈津がそう言ったのか、昨晚の言葉が耳朶によみがえってきたのか、わからなかった。

小さな後姿が民家の裏に消えると、佐古が近づいてきた。

「あの婆さんは、この仙吉つあんが面倒見てやらにゃあ、とうの昔にあの世に逝ってるだろうに。なんの感謝の気持ちも持ち合わせておらん」

「いやあ、どうせうちのやつが作るもんをたまに持っていくだけのことだ」

「だいぶもうろくしとるな。千寿婆さんと一緒に老人ホームに行きやあよかったのに。それくらいの金はあるだろうに。いや、すまん。差し出がましいことを言ってしまううた」

「いえ。ご心配をおかけしとります」

生駒は村の中での奈津の立場がわかったように感じた。

村一番の長老として、また村の名家として代々名をはせてきた采一族として敬っているわけではないようだ。粗末にしているわけではないだろうが、少し気のふれかかった老婆として、距離を置いて接しているのだろう。しかも、他人である村人だけではなく、采家の人たちも。唯ひとり、仙吉を除いて。

入れ替わるように、ひとりの女性が姿を現した。ふわふわしたものの上を歩くような足取りで近づいてくる。

佐古は、ちょっと家に帰ってくる、と逃げるように立ち去った。

「あの人を知ってます？」と、仙吉が聞いてきた。

「お会いしたことはあります。采美千代さんですね」

「あ、そうでしたな。婆さんが残してくれたガラクタをもらいにいったとき」

「ええ。それ以前にも何度か」

「そしたら、あの人のおつむが、そのう、ちょっとだめになっているのはご存知ですね」

そのときの出来事はよく覚えている。まだひと月ほど前のことだ。

納屋の隅から四つの古い木箱を見つけたのは生駒だった。

みかん箱ほどの大きさで、蓋は丁寧な真鍮の釘で打ちつけられていた。蓋の中央には、ナツ、ハナ、フサ、ケンゴと墨書されていた。千寿の妹や弟の名である。箱の中身はわからなかったが、名が記されているものをそのまま捨てるわけにはいかない。それぞれ名

前の本人に渡すことになった。

采家の兄弟姉妹は、上から千寿九十四歳、奈津九十二歳と続く。三番目を大葉ハナといい、その息子が仙吉だ。次が西脇房で利郎の母。そして最後の五番目が健吾。ひとり息子を武雄といい、その嫁が美千代。この間の子が宮司の健治ということになる。ハナ、フサ、健吾は故人である。

四つの箱を玄関に並べておいた。久米が丁寧に埃を払ってある。朝一番に奈津とハナの箱を取りに来たのが仙吉。西脇がフサの箱を持って帰った。

生駒はそういった人の出入りに注意を払っていたわけではなかったが、ひとりだけ、強烈な印象を残していた人物がいた。夕方遅くになってから健吾の箱を取りに来た美千代だ。

「お嬢ちゃん、山の祠に行ってはだめよ。化け物が住みついているからね」

美千代は木箱を抱えて庭に出て、綾を見つけるなりそう声をかけたのだった。その場に居合わせた生駒は、美千代の放つ雰囲気違和感を持った。

美千代の顔が引きつったかと思うと、

「絶対に行っちゃだめよ！」

と、金切り声をあげたのだ。

異様につり上った目には涙が浮かんでいた。

生駒は美千代の思いもかけない剣幕に、冷たいものが背筋を走ったように感じた。しかし綾は平気な顔で、わかってるわといって、美千代を安心させるように微笑んでみせたのだった。

「空っぽの箱をありがたがって崇めたりするから、中に化け物が住

みついてしまうのよ」

そう言い残して美千代は屋敷から出ていった。この間、すぐ近くにいた生駒には一瞥もくれなかった。

以前会ったときの美千代とはまったく変わってしまった。

初めて会ったころの美千代は澁刺とした女性で、笑顔がすがすがしい人だった。どこことなく都会的な雰囲気のある人だが、田舎の暮らしにも違和感なく溶け込んでいるようで、もんぺ姿もさまになっていた。

生駒ともごく自然に接し、つい最近まではこの庭で餅つきなどもしていたんですなどと、世間話もしたものだ。

まるで別人だった。顔にも以前の生気はまるでなく、うつろな目をさまよわせていた。

精神を病んでいる。すぐにそれがわかった。

生駒はショックを受けたが、この出来事以来、美千代の姿を見たことはなかったし、彼女の心の変化について誰かと話をしたこともなかった。

仙吉があいまいに頷く。

「生駒先生もご存知のように、あの人も以前はああではなかったんです。一族の中では一番の嫁だと言われてたんですけどなあ」

仙吉はそういつてぼんやりと歩いてくる美千代を見つめる。

「わしは、綾ちゃんにああいうものを持たせるのはいいことやとは思いませんなあ」

「ああいうもの？」

「ほら、あの頭巾。婆さんも懲りない人で」

「はあ？」

「美千代も、今の綾ちゃんみたいに聞き耳頭巾を借りてよく使っていたんです。婆さんは自分の眼鏡にかなった人にあれを使わせるん

ですな。でも美千代はあぁなってしもうた。わしは綾ちゃんが心配で」

「……」

「あの頭巾を使ったからあぁなっただ、というんではないのかもしれないけど。ただ、どうも薄気味悪いもんやと思いませんか」

美千代がすぐ近くまで来ていた。生駒だけでなく仙吉とも目を合わそうとしない。焦点がどこに合っているのかわからない瞳で、じっと前を見据えながら通り過ぎていく。健治、と唇が動いているように見えた。

仙吉がため息をつく。美千代はまっすぐ集会所に入っていく。

「先生、聞こえましたでしょう」

生駒は頷いた。

「息子が死んで、彼女もさぞ辛いでしょね」

「そうでしょうなあ。でも、あの人にとって、死んだんは、そのう、恋人なんです」

「え？」

「健治のことを、自分の昔の恋人やと思ってるようなんです」

あまりのことに生駒は声が出なかった。母親が自分の息子を恋人だと思い込むなど、そんな悲しい狂気があるものだろうか。

「理由はわからないんです。絶対に病院には行かんと言うんです。健治も強いて連れていこうとはしてないみたいでしたし」

仙吉が悲しそうにゆるゆると首を振る。

「夫の武雄は癌で、もうずっとあんな状態でしょう。ここ数年、美千代は健治一筋で来たわけです。ところが健治が佳代子さんに惚れた。愛する息子を取られたショックがあったのかもしれないなあ。少なくともきっかけにはなったんやろうと……」

「いつからなんです？」

「数ヶ月ほど前ですかなあ。ある日突然ということではなかったけど。いつの間にかという感じで……」

幸い、生駒たちの声が届くところに村人の姿はない。しかし生駒と仙吉は押し殺した声で話した。

「佳代子さんが死んだことと、なにか関係があるんでしょうか？」

なにかその……、健治さん以上に佳代子さんが死んだことがショックだったとか」

「さあ。むつかしいもんですね。でも、佳代子さんが自殺する直前に、ふたりは恋人の関係を解消したみたいで……。いえね、美千代からそう聞いたことがあるんですよ。でも、そのことが美千代になにかこう……、いや、わしらにはわかりませんがねえ」

「はあ」

「それにしても驚きました。佳代子さんが利郎さんの嫁の連れ子やっただけのは。健治もそれを知らなかったようやし、なんともはや……」

生駒はしんみりした気持ちになった。

「思い通り一緒になった方が幸せやったかもしれないのに。どうせこんなことになるんやったら」と、優がいう。

仙吉も、そうですねあと、とつぶやいた。

美千代が集会所から出てきて、またよろよとした足取りでもと来た道に戻っていく。

「もうこれで三度目です。家とここをいくら往復してもねえ。いてもたってもおれないんでしょうが」

生駒は仙吉と別れて、大きなネムノキの木陰に移動した。広場から少し離れた空地で、警察のものであろう車が数台停まっている。

積み上げられた丸太に腰を下ろした。集会所の人の出入りや広場の様子がよく見える。警察官がこちらの様子を見るとはなしに見ていた。

仙吉が広場からいなくなった。やがて他の村人達の姿も消えた。

「もしかすると今日は帰れないかもしれないな」

「私はいいよ」

生駒は独り者だし、建築家といっても、たったひとりで設計事務所を開いているだけのことだ。仕事の段取りは比較的自由につけることができる。

「明日、例の滝でも見に行くか？」

「うん。行きたい。でも」

「その前に健治のことが解決してたらな」

「そう。でも、ノブが帰れないかもって思ったってことは、自殺でもなく事故でもないと思ってるわけやね」

「ま、そうかな」

健治に自殺するような思い詰めた様子はなかった。それに偶然の事故なんかであろうはずがない。生駒は漠然とそう感じていた。

「ね、この村であったことを教えてよ。特に一年前のこと」

「地鎮祭のとき？」

「そう。佳代子さんっていう人が死んだんやろ」

「あのときなあ……」

あまり話したいことではない。雑談のネタにするには重過ぎる。

「昨日の夜、健治さんはものすごい剣幕やった。それに、佳代子さんの写真を持ち歩いていたんやろ。美千代さんのこともある。だからさ」

「聞いてどうする？」

「わからない。聞いておかなければいけない。そんな気がするだけ」
「そうか……」

生駒は気が進まなかったが、事情聴取の番が来るのを待つだけというのも退屈だろう。

「じゃ、かいつまんで」

「かいつままなくていい。詳しく」

久米への事情聴取は続いている。いつの間にかネムノキの木陰が少し東に移動していた。

「ちょっと長い話になるぞ」

佳代子の水死体が発見されたのは、朝の九時過ぎ。二十四時間から三十六時間前に死んだとされた。つまり地鎮祭の前夜から直前までの間ということになる。

地鎮祭の前夜、佳代子に会った人はたくさんいる。当日の朝、見かけたものはいない。したがって、深夜から地鎮祭当日の早朝の間に死んだ、と推測されていた。誰かと揉みあった形跡は見られず、着衣にも不審な点はなし。

佳代子は泳げなかった。自殺ではないかとされた。

佳代子は自分の生い立ちを語らなかった。二十四歳、独身。

生駒が久米から聞いていたのは、中学卒業後、大阪でウェイトレスをしていたが、数年前にここへ来たということだけだった。

生駒にとって、佳代子の存在は表面的には、いわば得意先のお手伝いさんというものだったが、この遠い村へ出向くひとつの原動力になっていたことも否定できない。彼女の顔を見ることは楽しみのひとつだったのだ。

はじめて村を訪ねたときのことが印象に残っている。

佳代子は久米に指示されて、村の入口で生駒の到着を待っていた。

溪谷を渡る風が、橋の欄干にもたれて川面を見下ろしている佳代子の長い髪をなびかせていた。白いブラウスにブルージーンズが山の緑に映えていた。

また別の日、雪が降った朝、訪れて来る久米や生駒のために、白い息を吐きながら石段に積もった雪を箒で掃いていた。

この陽に焼けた老人ばかりが目立つ閑村風景の中で、佳代子はひとときわ輝いていた。

真っ白な美しい素足にサンダルを履き、わずかに茶色に染めた長い髪を風になびかせながら村の道を歩くとき、なんの変哲もないさびれた村が突然映画のロケ地になったかのように、ある種の違和感を漂わせた。

村人たちはまぶしいものでも見るように、佳代子の立ち居振る舞いに好奇の視線を集めていたものだ。そして、そんな視線の中で悠悠々としているさまは、彼女の芯の強さを物語っていた。

久米が屋敷を借りるようになる以前は、屋敷の主である千寿の世話をしていたという。

こんな田舎で、足腰のおぼつかなくなった老婆の世話をするには、優しさとか思いやり以上に、強い意思の力が必要だろう。しかしそれを表には出さず、あくまで自然に、淡々と老婆との日々を繰り返していたという。

生駒が知ってからの佳代子は、屋敷の守りをしながら町のスーパーマーケットでパートとして働き、買い物をして帰り、屋敷の掃除をし、久米の来訪を待つという繰り返し。

なんとなくふんわりとした暮らし。

村人たちがそうであったように、彼女の周りでも時間がゆっくり

と流れているようだった。久米や生駒が屋敷を訪れたときでも、彼女のそんなペースは変わることはなかった。のんびりしながら、でもいつのまにか用事はきちんと終えているというようなペース。

生駒はいつでも、佳代子の自然な笑顔や、声を出して笑うときの口元のかわいらしい変化を思い出すことができた。

そんな佳代子と、盛砂から出てきた黒猫のむごたらしい頭部は、生駒にはどうしても結びつかないのだった。

警察の見立てによれば、千寿の老人ホーム行きを自分のせいだと責めていたという。

そして久米による屋敷の借り上げとアトリエ新築計画。佳代子にとっては自分のなすべきことがなくなってしまった上に、身の置きどころがなくなってしまふと感じていたというのだ。

そこで久米に工事を断念させることを狙って、切り取った猫の首を地鎮祭の盛砂の中に隠しておくという仕掛けを施した上で、自らは死を選んだというのだ。

そんな説明がどれほどの説得力を持つというのだろう。生駒にはとても承服できるものではなかった。

佳代子が自殺したのだとすれば、もっと別の理由があるはずだった。

彼女の抛りどころである千寿が老人ホームに入所することになった。人が住まなくなった家はたちまち朽ちてしまう。

千寿は久米に屋敷を貸すことを認めたものの、信用していなかったのか、屋敷を守ってくれと佳代子に頼んだのかもしれない。佳代子はその頼みを断りきれなかったのかもしれない。

佳代子は管理人として屋敷に住みながら、久米の登場を待った。やってきた久米は、そのまま佳代子の存在を受け入れ、頻繁に屋

敷に泊まりに来るようになった。それどころか知人たちも押しかけてくる。行楽がてらのボランティアたちだ。彼らは千寿の残していったものを徹底的に片付け、久米が画家としての暮らしを営めるようにスペースを確保していった。

そんな状況の中、佳代子が潮時を測りかねている間に、久米の留守宅の管理人の立場に移行してしまったのだ。

佳代子は久米に雇われることになった。そして久米がアトリエを建てると言い出し、またたくまに地鎮祭の予定が決められたのだった。

もともと久米が村に出入りすることも、久米の知人連中が村の中を闊歩することも快く思っていない村人は、アトリエの新築工事の着工にますます怒りをエスカレートさせた。

そしてその怒りの矛先は佳代子にも向けられたのだろう。久米や生駒と同じように、佳代子も村人からよそ者という目で見られていたのは間違いないのだ。村人全員がそうではなかったとしても、幾人かの村人は彼女に冷たく接していたに違いない。

もともと佳代子は久米と組んでいたのではないか、千寿を老人ホームへ追いやり、久米が我が物顔で村を歩き回れるように仕組んだのではないか、とまで言う村人もいたかもしれない。

そうして心無い村人は猫の首を仕込み、いたたまれなくなった佳代子は死を選ぶ……。

生駒はそう考えたりもした。警察は、著名な画家である久米や村人の気持ちをあえて逆なでするような発表をしなかったということなのだ。

佳代子ひとりに原因を押し付けておけば、万事が丸く収まると。

他殺という線も含めて一応の捜査はされたが、結局は自殺という安易な解決に向かったのだった。

あんなおぞましいことを自分のしたことだと決めつけられて、佳代子は暗く冷たい土の中で色褪せてしまった唇をかみ締めているに違いない……。

しばらくして、久米は工事の中止を正式に決めた。

ただ、周囲の予想に反し、村に行くことをやめようとはしなかった。納屋を改造してアトリエにするという腹案があるという。

今度は管理人は置かず、身の回りの手伝いは仙吉に頼むことにしたという。生粋の村人を引き入れることによって、村人との緩衝材にもなるだろうというのだった。

仙吉に対して、久米は常に感謝の言葉を口にした。

生駒には、その口ぶりが上の立場のものが下のものにかけるねぎらいの言葉のように感じられたが、仙吉に不満はないようで、あれこれと久米に使われているのだった。

仙吉にも、屋敷を守れという千寿の意向が働いているのかもしれないなかった。

「後追い自殺、かなっ？」

優が眉を指先でちょこっといじりながらいった。

「……」

「可能性やん」

「まあ、絶対ないとはいえないな」

「同じ川で。入水自殺ってやつ」

優はそんな軽薄な推理を口にしつつも、まったく同意できないという顔をしている。

「事故というのは？」

「……」

「そういや、健治さんの家はどこなん？」

「村の真ん中。さっき美千代さんが出てきたあたり」

「じゃ、どこで川に落ちたか」

「考えられるのは屋敷のすぐ近くだけかな」

屋敷からしばらくは川沿いの道で、ガードレールもない。

「誤って転げ落ちたらイチコロかも」

「そんなに酔ってたかな」

「家に帰ったとしたら朝のことやろ」

「なんで？」

「なんとなく。布団が敷きっぱなしやったし」

「そかー。ということは事故の可能性はほとんどなしと。じゃ、殺された？ 佳代子さんの方はどうなん？」

「どっちも信じられないというところやろうな」

「じゃ、崇り」

「あのなあ」

「さっきも、あのおばあさん」

「そうか。やっぱり」

空耳ではなかった。優が生駒の顔を覗き込んだ。

「これも可能性としてはあるんとかう？ どう思う？」

「ないやろ」

崇りというからには、霊的存在によるなんらかの意図があるということだ。

この世には人の目には見えない世界が存在していることを、信じてはいないまでも、頭から否定することはできないと生駒は思っている。

平行世界というようなものではない。人の目には見えない存在のことだ。神と呼ばれるもの、霊と呼ばれるもの、中には仏と呼ばれるものもある。

それらと同列ではないのだろうが、八百万の神と呼ばれる一群も

ある。また、魑魅魍魎といった悪意のある霊、妖怪の群は無数にありそうだし、言霊というもののさえあるかもしれない。

精神世界の中を見通す力を持つ人には、いわゆる実態としての肉体のないそれらの存在を感じ取ることもできるのかもしれない。

しかし凡人には、それらがなんらかの物的な仮の肉体あるいは拠りしろ、または偶像を得て、目に見える存在となる。この村にもそういうものがある。注連縄を巻かれた獅子岩と呼ばれる巨岩や祠や権現さんの石像など。他にもたくさんあるだろう。

奈津は何々の崇りだとは言っていない。

ただ、何らかの霊的存在が復讐しようとしている、あるいは懲らしめようという意図を持っている、ということ伝えてようとしているのだろう。

「崇りかあ……」

優が、推理をしようとしているのか、単に噂話をしているだけなのか、判然としない調子で同じ言葉を繰り返した。

「崇りねえ……」

第 13 章 「五右衛門風呂の底」

久米が集会所から出てきた。かれこれ半時間近くも寺井と向き合っていたことになる。

生駒に軽く手を挙げ、疲れた足取りで帰りはじめる。呼び止める間もなく、寺井が出てきて生駒の名を呼んだ。

「今からお屋敷を見に行くんですが、ご一緒できませんかな。お話は道々お聞きするとして」

と、寺井が久米の後姿を見ながら促した。

三人は並んで歩き、ひとりの刑事がついてくる。寺井は久米にやり取りが聞こえない程度の間隔を取りながらゆつくりと歩いていく。質問は簡単なものばかりだった。生駒や優の年齢や住所や職業といった基本的なデータと、久米との関係の再確認。

寺井の目が一軒の家を注視した。

采武雄と表札が架かっていた。美千代と健治が住む家。

これまで生駒は気にしたことがなかったが、なかなか立派な屋敷だった。采の本家とは比べものにならないが、それでも他の民家とは明らかな差がある。敷地も広いし瓦葺の蔵を備え、門構えも立派だ。この家だけが村で唯一の二階建てだということにも気がついた。

寺井は急にぎくばらんな調子になって、

「建築の設計というのはいまどきのご時勢、なかなか大変なご商売ですな」

などと、世間話を仕掛けてきた。

これが寺井の手法なのかもしれない。そのうちに核心をついた質問をしてくるのだろう。

果たして、川面を眺め渡せるあたりに差し掛かったとき、寺井は

すつと後ろを確かめて、

「ところで、久米さんがこのお屋敷を借りられた真の目的はなんだとお考えですか？」

と聞いてきた。

そう問われて、生駒は今まで真剣に考えてみたことがなかったことに気がついた。

単にこの山里で誰にも邪魔されずに創作活動をしたいからだと思っていた。

しかし改めて考えてみると、それだけでは弱いというようにも感じる。ここが特別に風光明媚なわけでもなく、なにより暮らしているには不便すぎる。

各地の別荘地の中にはもっといい物件があるだろう。大阪に近くて便利で管理人がいて、そして静かで自然に囲まれた物件が。

久米の自宅からここへは車で三時間、鉄道とタクシー利用で四時間以上、バスならなおさらだ。あまりに不便すぎないか。

寺井が立ち止まった。

視線をめぐらして猪背川に眼をやった。

生駒が無言でいると、自分の方から久米の印象について話した。た。

「どうもあの人、なにかに怯えているような感じがしたんですけどね。実は昨年にもこのお屋敷の人が死にましてな。お手伝いさんだったんですが」

「ええ」

「あの日、猫の首が出て、悪質ないたずらだということで、警察も一応は調べに来たんです。ところが、主人である久米さんが、我々が到着する前に現場を離れてしまわれましてな。そして翌日、女性

の水死体が上がった。我々は大阪まで出向いていってお話をお聞きする羽目になってしまいました。でも久米さんの潔白は証明されましたし、あの場合は自殺ということでしたから、そんなに……」

寺井が言葉を選んでいる。逃げ帰らなくてもよかったのに、とても言いたいのだろう。

「そんなに驚いて雲隠れする必要はなかったでしょうに。や、雲隠れという言い方は適切じゃありませんな。まっすぐ自宅に帰られてましたから」

生駒は久米を弁解してやりたくなった。

「久米さんが大阪に帰った時点では、佳代子さんのことはまだ誰も気がついていなかったわけだし、雲隠れという言い方はおかしいですね。逃げたわけじゃないんですから。それに、あのときは猫の首という、とんでもないものが盛砂に隠されていたわけです。しかもそれを掘り出したのが当の久米さん。そりゃあ誰だって、仰天してパニックになるんじゃないですか」

寺井は黙って耳を傾けていたが、生駒の言葉が途切れるや否や、すっと視線を向け、

「では、今日のことは？」

と、聞いてきた。

「今日？」

「なんといいますか、恐れているというか、なにかを隠しているような。あくまでさっき受けた印象ですがね」

「そりゃあ」

言いかけて生駒は、久米が恐れるようなことを思い巡らしてみた。奈津の祟りという言葉が尾を引いていることは間違いない。そして恭介の行方不明、健治の死と続く。

しかし、それらが久米の怯えの原因なのだろうか。彼らは久米と

はいわば無関係な人達だ。奈津や恭介とは初対面のようなだったし、健治にしても、知人ではあってもさほど親しい関係ではないだろう。悲しみはあっても恐怖を抱くようなことではない。

あるいはアマガハラノの不思議？　これとて恐れの対象であるはずがない。

佳代子の死についてはどうか。

ふたりの関係はどうだったのか。

生駒の印象では、佳代子の自然体に比べて、久米のよそよそしさが目にはついた。やさしく接してはいるのだが、必要以上に親しくはしないという意思が見えていた。ただそれは、久米の若い女性への配慮だし、村人からあらぬ疑いをかけられないよう慎重になっているのだと思っていた。

確かに久米はその後、がっくりしたような時期もあったが、それも一時のことで、現に、以前にも増して村に通ってきている。とても大きな恐怖を抱いたとは考えにくい。

ふと生駒は重要なことを思い出した。

今日は地鎮祭の日からまさしくちょうど一年。

佳代子が死んだ朝からきっちり一年後の朝に、健治が死んだということになる。もしかすると、まったく同時刻なのかもしれない。

崇りじゃ、と奈津がさっきもつぶやいた。

連続して起きた佳代子の死と健治の死は、同じ根元を持つと示唆しているのかもしれない。すなわち健治の死も、起きるべくして起きたものだというのだ。

ということは、昨晚の時点で、奈津は一年後の今朝、再びその祟りが襲うということを予見していたということにならないか……。

電柱に蜘蛛の巣が掛かっていた。

「佳代子さんが死んで、ちょうど丸一年ですからね」

生駒の言葉は、寺井の質問への答えにはなっていなかったかもしれない。

しかし寺井も、そのままの姿勢で蜘蛛の牙城を見上げながら、「ふむ、ちょうど一年」といった。

屋敷に着いた。

門に表札がかかっている。久米と書かれた表札と並んで采の表札もある。

久米が千寿を気遣って、そのままにしているのだ。呪われた采家の歴史か……、生駒は首を振った。

寺井は奈津の言葉を伝え聞いているのだろうか。

しかし、奈津の言葉を伝えるのは自分の役目ではない。

村人の奈津への視線を考えると、あの行いを告げ口するのは気が進まない。それに、祟りや呪いなどという言葉は、警察にとってなんの益もない情報だろう。

事情聴取はこれで終わりのようだった。できればまだ村から出ないで欲しい、と要請して寺井は門をくぐっていこうとする。

生駒は気になっていたことを頼んでみることにした。

「健治さんが持っていた佳代子さんの写真、見せてもらえませんか」
単に、彼女の顔をもう一度脳裏に蘇らせておきたかったのだ。

それは屋敷の庭で撮影されたものだった。

コートを着込んだ佳代子が平石にもたれて笑っている。他に誰も写っていない。

生駒は写真を見るなり思い出した。

「あ、この写真、見たことがある」

「ほう」と、寺井が目を光らせた。

「確か、お屋敷のリビングに飾ってあったものです」
片付けをしているときに見かけたものだった。木製のごてごてした額に入れられて、カップボードの上に置いてあったという記憶がある。健治が見つけて、とっておいたのかもしれない。

生駒は写真を刑事に返しながら聞いてみた。

「警察はどう考えているんですか？」

「まだなにも」

「まさか、二人揃って自殺したんだと？」

「ではないと？」

寺井が振り返り、ちらりと優を見やって、思いがけないことをいった。

「生駒さん、あなた、宅見佳代子さんに？」

「は？」

「いえね。そう言った人がいるもんですから」

「ちょ、ちょっと待ってください」

「ええ、違うんでしょう。こんなに素敵なお嬢さんを連れておられるんだから」

「……」

「でも、采健治さんは佳代子さんを愛していた」

「どういう意味です？」

「警察はすべての可能性を追求するということです」

生駒は戦慄を覚えた。

疑われている！ 寺井がじつと生駒の目を覗き込んでいた。

しかしそれ以上はなにも言わず、くるりと背を向けると母屋に向かって歩き出した。

生駒は警察官が母屋に入っていくまで、その場に立ち尽くしてい

た。

自分でも理解できない感情がこみ上げていた。悲しみではない。ふたりの若い命が無残にも散ったことにやりきれない思いがしたのかもしれないし、自分も疑われていることが腹立たしかったのかもしれない。

優が袖を引いた。

「ん？ いや、あれは言いがかり……」

優の視線を追って、生駒はぎよつとした。門の陰に道長が立っていた。

マサキの枝を手で押さえながら出てくると、

「あなた、事件をややこしくしようとしてない？」

厳しい顔でそう言うと、威圧するように立ちはだかった。

「立ち聞きしてたんですか」

「夕刊を取りに来ただけ。そんなことより、あなた、どういうつもり？」

「なにが？」

生駒の胸に浮かんだ怒りが一気に膨張していく。

「佳代子さんのことと今回のことを結びつけようとしていたわね」

「違う？」

思わず語気が強くなる。

「おもしろがってあれこれ想像して。それに」

「おもしろがる？ 言いがかりを聞く気はないな」

「そう？」

「じゃ、あんたは、どう思う？」

「私が言いたいのは、あなたが首を突っ込むことじゃないということ。警察に余計なことを喋って、変な方向に捜査を捻じ曲げないで、ということ」

生駒はなんとか理性的な自分を保とうとした。道長はといえば、

落ち着き払った目で生駒を見上げている。

「盗み聞きするような人に言われたくないな」

「あらまあ」

道長はくると背を向けると、母屋に向かって足早に戻っていた。

玄関の前から、刑事が今の様子を見ていた。

「ふう！ さ、どうするか」

生駒は心を静めようと、植え込まれたサツキの葉に触れた。咲き遅れた赤い花がまだ残っていた。

「教授、なんだかいらついてるみたいやね」

「ふん。あのお婆はん、なにが言いたいのか知らんが、偉そうに」

「なにかあったんかな？ 久米さんと」

「さあな」

「どうやったんやろ。久米さんの事情聴取。ね、聞きにいこ」

しかし久米は自分の寝室である鶴の間へ直行していた。部屋の中央に置かれたベッドが盛り上がっていた。

玄関の上がり框に座った生駒と優は、急に手持ち無沙汰になった。「これ、食べてもいいかなっ」と、優が勝手に食器棚から取り出したチョコレート。甘さが口の中に広がり、先ほどまでの腹立たしさが収まってきた。

生駒はここに住んでいた千寿のものが残されていたときのことを話した。橘が木元をからかったときのこと。

「へーえ。聞きしにまさる、すさまじいボランティアやったんやね」「毎週来たわけじゃない。さすがにそんな暇はないやろ」

靴脱ぎのスノコの上の壁に、絵が掛けられていた。

暗い背景に真っ赤な楕円形の物体がぽかりと漂っている。久米は試しにやってみた構図だと話していた。

その脇にロープがぶら下がっていた。

「あれ、梯子はどこにやったのかな？」

生駒は意識して雑談っぽくいった。幸い、優は佳代子に対する生駒の思いを聞いてはこない。

「梯子？」

「以前、ここに梯子がかかってたんや」

「ふうん。このロープは？」

「なかなか鋭い観察やな。あれを引っ張ると天井が開く。広い屋根裏部屋があるんや」

「へえ！ 面白そう！ やってみてもいい？」

「ああ。本当は禁止やけど」

優が柱の釘に巻きつけてあるロープを解き、ゆっくりと引き下ろし始めた。

「へえ、意外と軽いんや」

玄関の天井板全体が音もなく動き始めた。入口のほうを軸にして、座敷側の端が持ち上がっていく。天井裏に仕込まれた大小の滑車が組み合わされて、小さな力で大きな天井板をまるで風呂の蓋でも取るように軽々と持ち上げることができるのだ。

「うわあ。すごお！」

天井板が完全に開ききり、母屋の棟木があらわになった。

「ロープを離すなよ。そっと戻せよ」

「へえええ。上はどうなってるん？」

「物置」

「なにが置いてあるん？ なあ、な、どっかで梯子、探そう」

「それはやめとけ」

「なんやあ」

「フフ」

「なにがおかしいのん」

同じような会話を以前ここでしたことを思い出していた。その出来事があったてからしばらくの間は、この玄関を通るたびに思い起こしていた、半ば習慣となった少々甘い記憶だった。

屋敷を片付けていた頃のこと。

秋、山の紅葉が日一日と進み、急速に冷え込んだある日、生駒が佳代子を若い女性として強く意識した出来事だった。

生駒は庭の清掃作業に使った鋏や鍬や箒を洗っていた。

庭の井戸から水を汲み出しているポンプを新品に交換してからというものの、蛇口は冷たい水を大量に吐き出すようになり、外回りの作業はずいぶんやりやすくなっていた。

「うわあ！　すごい、すごい！」

玄関から綾の弾んだ声が聞こえてきた。その楽しそうな様子に誘われて見にいくと、佳代子と綾が天井を見上げてはしゃいでいた。

「うお！　屋根裏部屋だ！　格好いい！」

「そうね！」

「ねえねえ、なにがあるの？」

「行ってみる？」

「うん。行く！」

「よし！　さ、登ってみて」

佳代子が綾を押し上げた。綾は躊躇することなく、梯子をするすると登っていく。

「生駒さんもお覧になります？」

と、佳代子は微笑んで、ロープを柱の釘にしっかりと括りつけた。

「佳代子おねえさん。早く！」

上から弾んだ声が降ってきた。佳代子は、

「ほら、このロープを引くと天井が開くんです」

と、括りつけたロープを指ではじいてみせた。

「おもしろいね！」

天井板が跳ね上げられているせいで、ロープはびんびんに張っていた。

「じゃ、お先に」

と、佳代子の薄いピンク色のショートパンツが生駒の目の前を登っていった。

白いくるぶしがリズムカルに動いて、長い髪が左右に大きく揺れた。生駒も続いた。

「へえ！」

梯子から屋根裏部屋に顔を出したとたん、驚きの声が漏れた。

明り取りの窓から陽光が射し込み、思いのほか明るい。びっしりと降り積もった埃の上に、綾と佳代子の足跡がついている。立って歩ける十分な高さがあった。ここも例に漏れず雑多なものが押し込まれていたが、部屋の中央にいやでも目を引くものがあった。

整然と並べられた三本の長持。中央のものだけが鳳凰の模様が彫り込まれた朱塗りのもので、他は無地のヒノキ。いずれも年代ものだった。

「中には何が」

「さあ。開けてみたことはありませんから」

綾が叫んだ。

「きっとミイラよ！」

「ウヒョー！」

佳代子もまさかあ、と輝くような笑い顔を返す。

「おもしろいものがたくさんありそうですね」

「この部屋も整理なさるんでしょうか？」

佳代子は少し心配そうだ。

「さあ。もしかすると久米さんは、ここにこんな部屋があることを知らないんじゃないかな。蔵は手をつけないでおくようにと言われているから、たぶんこれもそうなるんでしょう」

佳代子が、それはよかった、と微笑んだ。

「ねえねえ、開けてみよう」
綾がせかした。

「よし！」

三人がかりで鳳凰の長持の蓋を持ち上げた。ブリキの板で内貼りがしてあった。

「さあて、なになかな？」

と、蓋を持ったまま覗き込んだ。

「あつ、なんだ！ 空っぽ！」

結局、三本の長持のうち、手前の一本には何に使うのかわからない木製道具。もう一本には書類がびっしり詰まった木箱がたくさん入っていただけで、興味をそそられるものはなかった。

久米は屋根裏部屋の存在を知らなかった。そしてやはり、そこに上がることをできれば遠慮して欲しいということになった。

それ以降、生駒の知る限りでは、ロープを操作して天井の板を跳ね上げてみることはあっても、梯子に足を掛けるようなまねをするものはいなかった。

ただ、この家の住人であった佳代子だけは別格で、ときには綾とふたりきりで屋根裏部屋で話している声が聞こえてきたりした。

「ふうん。そうなんや。残念やなあ。私も上がってみたかったなあ」
「そんなに残念がるなよ」

「だってさ、せっかくこんな古いお屋敷に来たんやから、隅から隅まで探検したいやん」

「じゃ、案内してやろうか」

「でも、蔵と屋根裏部屋は入れないんやろ」
「しつこいな。僕の家とちがうんやから」

生駒は母屋の各部屋に優を案内していった。
最後は角座敷の裏を回りこんで裏庭に出た。そのまま奥に進むと、
昨夜の会場、岩穴がある。

「その先には？」

「畑。というより、もう湿原になってしまってる」

「行ってみよ。ミズバショウとか咲いてるかも」

「そんなしやれたもの、咲いてないけど」

岩穴の中に寺井と道長が座っているのが見えた。無視して放棄された畑に向かう。ブドウ園の脇を通り、竹林を抜けた。

「ほら、なにもないやろ」

「ほんとやねえ。なんとなく寂しいところ、あ、これなに？」

「五右衛門風呂」

「あ、板を踏んで入るやつ？　へえー、初めて見た」

湿原の脇に錆びついた鉄の浴槽が放置されていた。

畑がまだあったときには、水か肥を貯めておくために再利用されていたのだろう。

優が鉄風呂を覗き込んだが、

「ぎゃ！　これ！　ウゲエ、気持ちわるー」

と、飛び下がった。

中には、干からびて骨と皮だけになった獣の死体があった。

「落ち込んで、出られなくなっただんなかな」

「ん？　こいつ、頭がないぞ」

黒い毛をした獣だった。

猫ほどの大きさだ。尻尾が長い。

「まさか、これ」

「あの猫か？」

首を切り落とされた猫の死体……。

「変なもの見つけてしまった」

母屋の庭まで足早に戻った。

「ノブウ、祟りがあるかもおー」

「そういう変なことを気にするから、祟られるんやぞ」

「ヒャー。こっちに振ってこないでよ。私はあの猫、見たことないんやから。ノブなんか、頭とか撫でたこと、あるんやろー」

「こら、いやなこというな」

「私は名前も知らないし」

「僕も知らんよ。真っ昼間でよかったな。これが真夜中やったら、縮みあがってしまうところや」

「真夜中でなくても怖いよお」

「ふうー、やれやれ。それにしても、あんなところに捨ててあったとはな」

離れでは警察官が歩き回っていた。

健治が寝ていた部屋にも何人かいて、かがみこんでなにかを探している。生駒と優は平石にもたれかかって彼らの動きを目で追いながら、猫の話をしていた。

平石は冷たくて気持ちがいい。手の平に石のざらついた凹凸が当たって痛い。

「誰が捨てたんかな」

「ノブは佳代子さんと思ってないんや」

「当たり前やろ」

「ねえねえ、この石造は？」

「ん？」

「あ、権現さんの石像？」

「そうかもしれないな」

「座るのにちょうどいいね」

「やめとけ。罰が当たるぞ」

道長と寺井はまだ岩穴部屋から戻ってこない。

「事情聴取、長いな」

今日はこんなふうにしてダラダラと過ごすことになるのだろう。
寝てしまった久米に黙って帰ってしまうのも気が引けるし、警察から食らった足止めはいつ解除されるのだろう。

「やれやれ」

「さっきから、やれやればっかり」

「退屈。そういっちゃ、死んだ人には悪いけど」

「冷たい」

「というより、実感がない」

手の平についた砂粒を払った。

砂粒が押し付けられていたところに小さな窪みができていた。手の平を擦り合わせて痛みを拡散する。

「佳代子さんが西脇さんの娘さんってことは知ってた？」

「いいや」

「誰も知らなかったみたいやね」

「ああ」

「佳代子さんが住み込みのお手伝いさんになったことは、そのことと関係あるんやろうね」

「ん？」

「だってさ、ちょっと不自然やん。若くて美人やったんやろ」

優の言うとおりかもしれない。

あの人にとって、ここで千寿の世話をすることになんらかの意図があったのだろうか。しかしその意図は、たとえば千寿の遺産を狙ってというような黒々とした目的に向かったものではなかったはずだ。佳代子の清々しい印象は、そんな想像とはかけ離れていた。

生駒の心を読んだように、優がつぶやいた。

「見かけによらず、ということも」

生駒は、彼女に限って、とは反論しなかった。

佳代子を知ってはいたが、親しくしていたのかというとそうでもない。生駒は彼女をひとりの女性として好感を持って見てはいたが、ただそれだけのことだった。彼女がどんな考えを持っている人物かと問われれば困ってしまう。その程度の付き合いだった。

「ねえねえ、西脇さんのことはどう思う？ あの状態は？」

「それが変なところやな。いくら妻の連れ子で嫌っていたとしても」

「そう。変なのは佳代子さんというより、むしろあの男」

「なにかを企んでいた、とか？」

「なんとなく」

第 14 章 「ネムノキの元で」

「その石には触らないほうがいいわ!」

急に背後から声をかけられて、ひそひそと話していた生駒と優は飛び上がりそうになった。声の主は、いつの間にか後ろに立っていた綾だった。

「うわあ、ぶっくりした!」

優が使った子供言葉を綾は無視して、

「昔、サヨと吾一という恋人たちがいた。しかし、サヨは山賊の人身御供に。サヨを助けようとしてた吾一が見せしめに焼き殺されたのは、その石の上。祟りを恐れた人達が土をかけて地中に埋めてしまった。これは呪われた石」

まるで本を棒読みするようにいう。思わず生駒は突いていた肘を浮かせた。

「えっ、なんなん?」

「頭巾でこの石の声を聞いてみようかと思ったこともあるんだけど、やっぱり恐ろしくて」

綾がくすりと笑った。

「脅かしてくれるじゃないか」

「へへ、ごめんなさい。でも、本当のこと」

岩穴で奈津が話せと言ったのは、この石にまつわる話だと綾はいった。

「お疲れのようね」

目を開けると、道長が枕元に座っていた。

いつのまにか、うとうとしていた。生駒は石像の間に寝転がっていた。この座敷は小さめで、前に立派なマキの木があるおかげで適度に視線が遮られ、気兼ねなく寝転がることができる。

体を起こした。門のところでのやり取りを忘れたわけではなかったし、道長への怒りがきれいに霧散していたわけでもなかったが、寝顔を見られていたのかと思うと少し照れくさい。

道長はさっきのことはすっかり忘れたかのように微笑んでいる。他人の寝顔を覗き込むなどというぶしつけなことを平気でする道長に、また違う意味で少し腹が立ってくる。

「昨日から今日にかけて、いろいろあったものね」

と、庭に眼をやった。外からは優と綾の笑い声が聞こえていた。

「あなたともやりあったし」

それに応える適当な言葉はすぐには見つからなかった。

「散々よね」

「寺井警部は？」

「帰ったわ」

「他の刑事も？」

「全員帰ったわ。でも、離れはそのままにしておいてくれて。ほら」

離れの建物全体に、進入禁止の黄色いテープが張り巡らされていた。

「事情聴取、どうでした？」

「どうって、なにも話すことなんてないのにね」

「でも、道長さんに疑いが持たれているということはないんでしょう？」

「当然でしょ。ま、私の場合、元は村の出身者ということで、客観的にどう思ってたって、いろいろ聞かれたけど」

「警察は掴んでいたんですね。さすがに」

「そうね」

道長が一級品の笑みをみせた。

「こんな暑い日はかえって熱いものもいいのよ」

と、熱い紅茶を入れてくれた。

香りと程よい甘さで、リラックスした気分になった。眠気も飛んでいく。道長も、疲れたと繰り返しながらも落ち着いた顔をしていた。

「しばらくは村にいてくれって。今日中に帰るつもりなのに」
「やっぱりそうですか」

「いつまで足止めする気なのかしら」

「聞くべきことを聞いたなら、もう用はないはずなんだけど」

「そうよね。帰ってしまおうか」

「ええ。そうしましょう。駅まで送っていきますよ」

「ありがとう。でも、もうしばらく様子を見てから。それに、あなたはトンズラしない方がいいかも」

紅茶の湯気の向こうから、道長が屈託なく笑ってみせた。

「本当にとんでもない言いがかりをつけられたもんです」

道長がなおも生駒を見つめている。この人の癖のひとつ。瞬きしながら人をじっと見る癖。

「さっき、変なものを見つけてしまいましたね」

視線を避けるために、生駒は猫の胴体を見つけたことを話した。

「気持ち悪いわね。それ、久米さんには言わない方がいいかも」

そんな言葉を交わしていると、当の本人が姿を見せた。

「久米さん、まだお休みになっていてもかまいませんよ。まだお顔の色が本ものじゃないみたい」

道長が久米にも紅茶を入れてやった。

「いやあ、申し訳ない。みつともないところを見せてしまった。でも、もう大丈夫」

頼りない男だ。いや、図太いということなのか、鈍感というべき

なのか。あるいは、警察との応答はすでに考慮済みということか。

生駒はふと自分の心の中に、久米がもしや、という仮説があることに気がついた。仮説といっても白昼夢のように愚にもつかない考えだが、一旦心の中に入り込んでしまうと、なかなか追い出せなくなってしまう性質のものだ。

健治さんも気の毒なことになりましたなあ、などと久米と道長が話し始めている。

もうその話は飽きた。思わず生駒の口から出た言葉は、さつき綾から聞いた話がきっかけになっていた。

「庭の平石、あれ、なぜ掘り出したんですか？」

この石を久米が西脇工務店に命じて掘り出させたのは、地鎮祭のふた月ほど前のことだった。

「ああ、あれ？ 立派な石が埋まっているというんでね。えーと、誰に聞いたのかな？ うん、そう、佳代子さんだ。それで掘り出してみたならガーデンテーブルにちょうどよかった」

「へえ、佳代子さん」

「由緒のある石だとかなんとか言ってたな。掘り出してはいけなかったのか？」

久米がにこやかに聞いてくる。

「実はですね……」

生駒は逡巡した。久米が聞いてうれしい話ではない。しかしすでに遅かった。

「呪われた石なのよ！」

と、縁側の外から綾の澁刺とした声が飛び込んできたのだ。

「呪われた石？」

久米の顔色がすーっと変わっていった。

「昔ね、昔といってもそんなに遠い昔のことじゃないわ」

綾は縁側に腰をかけると、久米の反応にはまったく無頓着に話し始めた。

優が綾の後ろに立って久米の顔色を見つめている。生駒もはじめて聞く話のように黙っていた。このまま最後まで綾に話をさせようと思った。

ひとつの考えが帰来していた。

奈津が言った祟りとはこのことだったのではないだろうか。平石の呪いによって、愛し合っていた佳代子と健治は死んだ。奈津はそう伝えたかったのではないだろうか。こんなものを掘り出したせいと。

しかしそうだとすれば、これで平石の祟りは終わったのだろうか。生駒は理由もなく血の気が引くような思いがした。

「その大きな石というのが、あの石のこと。だからあの石に近づくなんて言われているんです。村の人は誰も石に触ったりしません」綾はそういつて話を締めくくった。

しばらく誰も口をきかなかった。道長がハンカチでそっと額の汗を拭い、その隙に久米の顔色を盗み見た。

久米がふらりと立ち上がった。ショックを受けていないはずがない。それでも久米は、大切な話をしてくれてありがとう、と綾に礼をいった。

「ちよつとそこらを散歩してくる。警察の動きも気になるし」と、屋敷を出ていってしまった。

夕方が近くなり、昼間の暑さが嘘のように、肌寒い風が吹き始めていた。

「この集落、今は大西と呼ばれてるけど、昔は単に西と呼ばれてた

の」

道長がぼつりと言った。

「生駒さん、久米さんがなぜこの村をアトリエに選んだか、お聞きになった？」

生駒は首を振った。

「久米さんの先祖は、東村の出身」

「え！」

綾の話に出てきた東村。

「太平洋戦争の頃まで、この先に小さな集落があつてね。猪背川の向こう側の谷の奥に、数軒ばかりの家がポツポツと。そこが東と呼ばれていた地区。しかし一軒二軒と村を離れていって、ついには廃村になった。ちょうど私たちが生まれる少し前の時代」

道長がゆっくり話し出した。

「実は久米さんだけでなく、坂井さんのご先祖もそう。彼らはそういう繋がり。私は西村だけど」

生駒は初めて聞く話に興味を持った。久米がアトリエとしてこの村を選んだのはそういう理由があつたのか。

「二人ともこの山奥で生まれたわけじゃないけどね。久米さんと坂井さんのご家族は、村を出た以降もお付き合いをされていたようね」
「幼馴染だったんですか……」

「そういうこと。久米さんがこのお屋敷を借りることができたのは、坂井さんのおかげなの。坂井さんのおじいさんもお父さんも、そして坂井さん自身もとても義理堅いお人だね。ずっと盆暮れの挨拶も欠かさず、村とお付き合いを続けてこられた。それで、自然が豊かで静かなところにアトリエを持ちたいと久米さんが相談したとき、真っ先にここを紹介したというわけなのね」

「へえ」

「ね、道長さん、その東っていう村はまだあるんですか？　　というか、今はどうなっているんです？」

優の質問に、道長がほっとしたように笑った。

「探検にでも行くの？　　まだ、村の名残はあるんじゃないかな。でも、よく知らないわ。道も廃れてしまつて。実は私、正確な場所を知らないの」

「久米さんは行ったことがあるんでしょうか」

「さあ。そんな話、聞いたことないわね」

久米が仙吉を伴つて戻ってきた。たまたま屋敷の前で出合つたのだという。

仙吉は明るい色のシャツとジーンズに着替えている。健治が死んで沈んでしまつた雰囲気は少しでも華やかにしようとするかのように、朗らかな声を出した。

「や、皆さんおそろいですな。晩飯の用意、どうされてるかいなと」「いつもお気遣いありがとうございます。でも私は、もうそろそろおいとましようかと」

久米は道長と仙吉のそんな会話を無視して鶴の間に引っ込み、襖を閉めてしまつた。

「生駒先生はどうされます？」

仙吉が聞いてくる。そのとき、屋敷の前で急ブレーキをかける音がした。

「警察か？　　やっぱりまだ帰るなということかな」

違った。

門をくぐつて入ってきたのは西脇だった。足早に近づいてくるなり大声で切り出した。

「すみません。皆さん、お願いがあるんです！　　恭介を探しに行くんですが、ご協力いただけませんか」

顔がほてっているように赤い。

「まだ帰ってなかったんですの？」

道長が平石の呪いが肩にとまってでもいたかのように、何度となく肩を回した。

西脇が額の汗を拭った。いまだに今朝のいでたちのままだ。作業ズボンの裾には泥がこびりついているし、血の斑点もそのまま。ずっと恭介を探し回っていたという。

「はい。あれからあいつの行きそうなところを回ってみたんですが、どこにもおりませんで……。もしかすると、やはりあの原っぱにいるんじゃないかと」

「それはご心配なことですね」

「はあ、もう心配で。それで皆さんにも一緒に探しに行っていただけたらと」

生駒達は顔を見合わせた。

「警察へは？」

「ええ、まあしかし、あいつも二十の男ですし……。探しに行ってみつからなければ搜索願でも出そうかとは思いますが、今はまだ……」

「いえ、そうじゃなくて、西脇さん、健治さんが死んだことはご存知？」

「は？」

「警察はあなたにも昨夜のこととか、聞きたいそうよ」

「はあ？」

「集会所が臨時の捜査本部になっているわ。行ってみられたら？」
「健治が死んだ？　　いったいどうして。それは……」

西脇が絶句した。そして一旦は尻のポケットに突っ込んだタオルを引っ張り出して首に巻きなおし、そわそわと後ろを振り返る。離れに張り巡らされた進入禁止のテープが風に震えていた。

「川に流されて。ずいぶん下流で見つかったそうよ」

「そうなんですか……。いや、そんなことより、すぐに恭介を探しに行かないと。もたもたしてたら暗くなってしまう」

「でも、警察はあなたのことを捜していると思うわよ」

「私の話を聞いてどうするというんです？　なにも話すことなんてありませんよ。あいつが死んだって……。いったいどうして死んだんです？」

自分の息子のことで頭がいっぱいのようだ。

「さあ。まだ決め手はないそうよ」

道長が状況を説明してやる。仙吉も西脇を促した。

「警察が探してる。事情聴取ってやつ」

「どうせ通り一遍のことを聞くだけやろ。それより恭介の方が心配や。皆さん、お願いします」

と、面食らうほど深々と頭を下げた。

西脇の頼みにすぐに返事をするものはいなかった。

西脇が何度も頭を下げている。もう土下座でもしそうな勢いだ。やがて仙吉が立ち上がった。

「じゃ、少し待っててくれ。支度してくるんで。さあ、生駒先生もあっけにとられた生駒にかまわず、

「綾ちゃん。ごめんやけど、ということで、わしら五人は恭介を探しに行ったって、うちの嫁さんと佐古のおじさんに言っといてくれるかな」と言い出す。

「は？　私もですか？」

道長も驚いた。

「ええ、できましたら。人数は多い方がなにかと。で、えっと、他に誰の耳に入れておいたらええやろ？」

道長が立ち上がった。生駒は驚いた。

「行かれるんですか！」

「行きましょう。久米さんに話してきます」
そういつて、久米の寝所に入っていた。

「懐中電灯を持っていた方がええな。救急用具も納屋にいくつかあつたと思う」

仙吉が納屋に向かって走り出していた。

恭介の死体が山の中の笹原、アマガハラノの中で発見されたのは、もう陽が落ちようかという時刻だった。

第 15 章 「画家の無駄話」

恐ろしいことが起きていた。

地鎮祭の盛砂に猫の首が入れられ、宅見佳代子が死んでからちょうど一年後、その元恋人采健治が死んだ。そして同じ日に西脇恭介が殺された。

鶴の間の襖は開け放たれ、手前の松の間に生駒、優、道長、西脇、橘、綾、仙吉が押し黙って座り込んでいた。寝込んでしまった久米は高熱を発しているという。寝返りを打つたびにベッドがきしみ、そのたびに道長が目をやった。

車座になった生駒達は白々とした蛍光灯の元で警察からのなんらかの連絡を待っていた。

部屋の隅には折り詰め弁当が積まれていたが、まだ誰も手をつけていなかった。

優がペットボトルから人数分の紙コップに茶を注ぎ始めた。

「綾、横になってもいんだよ」

橘が気遣ったが、綾は首を横に振った。

「じゃ、お弁当を食べようか」と道長も気遣ってやる。

「ご飯食べないと元気が出ないものね。私たちも頂きましょう」

綾が頷いた。道長が畳に手を突いて疲れた体を立ち上がらせた。

夜の十二時を回っていた。恭介の死体はすでに山から運び下ろされ、司法解剖のために運び出されていた。

リビングに臨時の捜査本部が置かれていた。そこで寺井が部下に指示を与えている。現場遺留品の搜索は明朝から再開される。場合によっては、このうちの誰かに、あるいは全員に現場までご足労願

うこともあると聞かされていた。

今朝、山に登ったメンバーのうちで殺された恭介と木元だけがこの場にいない。警察は木元の行方をまだ掴んでいない。

木元は独り者だ。しかも木元の店は昨日今日と定休日。誰も行き先を知っているものはいなかった。気ままにバイクを走らせてどこかに出かけたのだろうが、明日の朝には店を開けるはずだ、と橘が警察に伝えていた。

西脇はすっかり憔悴しきり、空耳でもするのか、時々狼狽したように周りを見回していた。

縁側に若い娘が顔を出した。

仙吉の娘、彩香だ。顔にはまだあどけなさが残っているが、若者らしく清潔そうな化粧をして、染めていない髪をポニーテールにしている。

仙吉譲りの少々彫りの深い顔はエキゾチックな雰囲気で美人の部類に入る。父親譲りは顔立ちだけではない。いわば囚われの身となった生駒達になにかと役に立とうと動いてくれるのだった。熱いコーヒーや蜂蜜入りのホットミルクを作ってくれたのも、弁当を買ってきてくれたのも彼女だった。

「あれ、皆さん、早くお弁当、食べてくださいよ。お刺身が傷んでしまいますよ」

「彩香さん、ありがとうございます。今から頂きます」
道長が申し訳なさそうにいった。

「お風呂沸かしときましたから、順番に入ってください」

「なにからなにまで、本当にお世話になります。あなたももう帰ってお休みになってくださいな」

道長が頭を下げた。生駒達もそれに倣う。

「いいんですよ。これも親孝行ですし。せっかく村に来ていただき

たお客様ですもの」

彩香はにこやかにいって、網戸をきちんと閉め直してから姿を消した。

「明日、授業はいいんですか？」

仙吉が娘を見送ってから、道長に声をかけた。

「お昼からのコマですから、なんとか間に合う時間に帰らせてくれるとありがたいんですけどね」

めいめいが折り詰めを蓋を取った。生駒は食欲がまるでない。血にまみれた恭介の死体を見つけ、半狂乱になった西脇をなすすべもなく眺め、寺井にひとりずつ尋問を受けてから、まだほんの小一時間しか経っていない。しかし、口にもものを入れると少しは落ち着いた気分になった。

改めて空腹を感じ始める。喉が渴いていることにも気がついた。

ビールを取ってこよう、と生駒が立ち上がったとき、

「不謹慎なことを言うようだけど、木元さんが言った呪われた家とこのは本当だったのかもしれないわね」
と、道長が誰に言うともなく口にした。

生駒は西脇の反応を窺った。しかし、息子を殺された父親は気にするふうでもなく、黙って下を向いてもくもくと箸を動かしている。上の空なのかもしれない。

縁側に出ると、夜の涼しい風が顔を撫でた。

立ち話をしていた数人の警察官が目を向けてくる。見張られている居心地の悪さを感じてキッチンに急いだ。

「なに！ 川に落ちたときの傷ではないというんだな。確かだな！」
リビングの横を通り過ぎるとき、寺井の声が耳に入った。

部屋に戻ると久米が起き上がっていた。

「寄る年波には勝てませんなあ。申し訳ない。ホストとして皆さんをちゃんとご接待しないといけないんだが」

「熱は？」

道長が心配した。

「もう下がったようだ。や、ビールですか。いいですね。喉が渇いてたんだ」

と、久米が早速ビールに口をつけた。

「ふう！ 生き返った気分！」

西脇が久米を睨みつけた。さすがに気分を害したようだ。

息子が殺されて、事件関係者として警察に外出を制限されているものたちが、生き返ったなどといって、ささやかな酒盛りを始めようとしているのだから。

しかし生駒もかまわず缶ビールの栓を引き抜く。いつまで待たされるのか、皆目見当もつかない中で漫然と座っているのは辛かった。ビールの冷たさで磨り減った神経をわずかでも癒したかった。

久米が弁当についていたペーパータオルで顔を入念に拭ってから口を開いた。

「さっき目の隅に入っただんですが、ここに来た若い女性、どなたですかな？」

「わしの娘でして」

「ほう！ いい娘さんですなあ」

「いえ。道楽娘でして」

「なんの。自分で学費を出して専門学校へ通っておられるそうじゃないですか。アルバイトしながら。なかなかできることじゃありません」

「いやあ、それは親に甲斐性がないだけのことです。本当は行きたい

大学があつたようなんですが、ちよつと資金的に無理な面がありまして。あの子にはすまないことをしています」

「そういや、息子さんもたいしたものじゃないですか。大阪のお店、何度か寄つてみたんですよ」

「あ、そうでしたか。それはどうも」

仙吉は頭を下げたが、顔色は冴えない。長男、次男共に自慢の息子だし、久米が来店したのならもっと喜びそうなものだが。西脇に気を遣っているのだろう。

「先週も行つてみたんですが、閉まってましたけどね」

「はあ」

定休日だったということでもないようだ。

「なかなか……」

と、いつて仙吉は口をつぐんでしまう。

久米は急に元気が出てきたのか、食欲旺盛だ。

仙吉の息子の店がどんな店だったのかを披露しながら、弁当のおかずを肴にたちまち缶ビールを二本空けた。

西脇が立ち上がった。

「嫁さんの持参金はまだあるやろう」

立ち上がりざま、仙吉に毒づいた。

しかしそんな揶揄する言葉にも、仙吉はあいまいに頷いただけ。

息子の商売はうまくいつてないのだろう。

「そんな話はどうでもいい」

西脇が投げやりに宣言した。この状況でよくビールなんか飲めるものですな、とは言わなかったものの、場に不似合いな無駄話をする久米に対する批判が顔に出ていた。

妻の様子を聞いてきます、と吐き捨てるように言つて出ていつて

しまった。西脇の妻の圭子は失神して、病院に運ばれていたのだ。

批判を受け止めたのか、久米はしばらくの間、宙を睨んでいた。しかしまた口を開いた。言おうとしていることを頭の中で整理していただけなのかもしれない。

「お気を悪くせんでくださいよ。仙吉さんのお宅は……」
と言いかけて、言葉を選びなおす。

「仙吉さんのお母さんというのは、確かハナさんでしたかな。三番目の娘さんだと聞いていますが、なんでも先代がお妾さんに生ませた子だとか。東村のご出身ですか」

「はあ」

「なにか、皮肉なものを感じてしまいます。その、なんて言いますか、采さんの本家とどちらかといえば遠い存在であっただろうハナさんの息子さんである仙吉さんやその娘さんが、こうして采家を取り仕切っている」

「取り仕切っているなんて、とんでもない」

「その言い方がおかしければ、采家を守っているでもいいましようか」

仙吉は再びとんでもない、と首を横に振った。

それにしても久米はおかしなことを話題に出したものだ。

そんなことをここで言い出して、どうしようというのか。仙吉を持ち上げるつもりなのだろうが、采家の一族である健治が死に、恭介が殺された日にするような話題ではない。まだ意識が朦朧としているのか、久米はよろめいた足で立ち上がると、縁側に出ていき、夜の風にあたり始めた。

「だってそうじゃありませんか。言い方は悪いですが、当主の千寿さんはひとり息子のご家族を交通事故や病気で亡くされてからとい

うもの、身よりもなく今や老人ホーム暮らし。奈津さんもお元気そうではありますが、同じようなものです」

久米が話し続けている。それつが回っていないというわけではないが、声はどことなく生気がなく、仙吉に向かって話していながら、独り言のような響きがあった。

「四番目のフサさんのご家族はといえば、西脇さんの会社は倒産寸前。奥さんの圭子さんも、原田のパチンコ屋の店員だったということを引き目に感じておられるのか、結婚してかれこれ二十年も経つというのに村や采家になじめないでおられる」

道長がハラハラしたようにその様子を見つめていた。

「そして連れ子だった佳代子さんが死に、あろうことかご子息さえも失ってしまわれた。末っ子の健吾さんのご一家には、癌で入院されている武雄さんと少々頭のおかしくなった美千代さんがおられますが、こちらも息子の健治さんが亡くなってしまわれた。本当にご愁傷さまだと思います。お悔やみ申し上げます」

仙吉はなにか言いたげではあったが、黙って頭を下げた。

「それにしても」

と、今度は橘が口を開いた。

誰しも、食べるものを口に入れて、少しは気持ちの余裕ができたのだらう。先ほどまで気まずい沈黙だけが支配していた松の間に人の声がするようになった。とはいえ、健治や恭介のことを雑談の話題にするには、まだはばかりれる。

「美千代さんっていうのは、どういう人だ？」

橘が話題にした人物も、健治の母親という意味では渦中の人ではあるが、事件そのもののことを避けているような話題だった。それでも、久米のさっきの話と同様に、不自然な感がするのは否めなかった。

「本当に頭がおかしいのかねえ？」などという。

仙吉は今度も困った顔をして応えあぐねている。

美千代は気が狂ってしまったとしても、今のよう聞き方をされて、しかもこれほど多くの人の前で、従兄である仙吉が彼女は氣違いだと断定できるものでもないだろう。

そんな仙吉の戸惑いが目に入らないのか、あるいははなからそういう感受性を持ち合わせていないのか、橘は、

「俺はあの人、偽装狂人だと思うな」

と、場にそぐわないこと平気で言い始めた。

「目を見りゃあわかるよな。前に山の中でばったり会ったとき……」

さすがに久米がたしなめた。

「まあまあ、こんなときに言うことじゃない」

ところが、その久米自身が采家の悲劇を再びとうとうとしゃべり始めた。呪われたという言葉はさすがに使わなかったが。

誰も彼も疲れていた。肉体的にも精神的にも。

でも、眠ってしまうわけにもいかない。もちろん、楽しい別の話題で盛り上がることもできない。

こんなときは、誰かが愚にもつかないことをダラダラとしゃべり続け、それを耳にするともなく聞き流し続けるしかないのかもしれない。なかった。

生駒は妄想した。

采家の不幸は誰か個人の、健治や恭介を殺した犯人ひとりの仕業ではなく、この屋敷にとり憑いているまがましいものを源としているのかもしれない。

その気で見て回れば、その抛りしろが見つかるかもしれない。封

印された蔵の中や屋根裏部屋、床下や土の中に。あるいは黒光りする梁の上や節穴の開いた戸袋の中に。あるいは塗りこめられた土壁の中や、軒先のずれた瓦の隙間に。

その怨念の象徴として、沈黙を続ける平石が庭の真ん中に居座って、松の間に集ったものたちに汚れた目を向けているような気がする。

生駒はこの屋敷の闇に潜む存在を感じ、おぞましいと思った。

久米が西脇家を話題にしていた。

「西脇さんの弟さん、徳次郎さんとおっしゃるのかな、村に寄りつかないんだとか」

仙吉がしかたなく頷いて、場繋ぎのためだけの話題に耐えている。「金のことでもめた兄弟であっても、こういうときには力を合わせて乗り切らなくては」

誰にとっても反応のしようない話だった。周囲の反応がないので、久米はむきになっているのかもしれない。自分で自分の話の收拾がつかなくなったかのように、今度は西脇工務店の窮状を訴え始めた。

数年前までは羽振りはやかったが、ある工事で重大な欠陥が見つかり多額の損害賠償を求められたらしい。

社員をすべて辞めさせ、残っているのは西脇利郎と息子だけ。高級外車を乗り回していたものが仕事兼用の軽トラ一台。

一旦落ち込んだ業績はなかなか戻ってほこない。しかも原因が信用問題に関わることなら、なおさらだ。それに百姓をしようにも畑もない。もうとつくの昔に原野に戻ってしまっているし、しかもほとんどが千寿の土地だった。

そこまで言って、久米は縁側に目をやった。さすがに言葉が過ぎ

たと思ったのだろう。ひととき大きな声を出して、お気の毒に、僕たちもできるだけのことはして差し上げないといけません、と宣言するように言って、ようやく失敗の連続だった話題を締めくくった。

気の毒な仙吉が、ほっと小さく息をついて、やっと缶ビールのプルタブに指を掛けた。

ふと見ると、平石の上を一匹の蛍が飛んでいく。

生駒は、さつき山を降りてきたとき、岩代神社で蛍が舞っていたことを思い出した。その時、一匹の蛍が仙吉の服にとまりそうになった。あわてて仙吉はその光をはたき落とした。誰かの霊だと思ったのかもしれない。

「どうしたん？」

優が小声で聞いてきた。

「いや、ちょっと、考えごと」

生駒はこの場で言うべきことを思い出した。

「健治さんは川に落ちて死んだんじゃないようです」

反応はない。唯一、仙吉だけがため息をついた。

「さつき、リビングで寺井さんが話しているのが聞こえました。正確に言うと、川に落ちてできた傷じゃないと。たぶん後頭部のことでしょう」

久米や道長がうつろな目を向けてきたが、やはりなにも言わなかった。

恭介の死が殺人であると明らかになった以上、口には出さないまでも、健治も殺されたのだと誰もが予想していた。

「木元は？ まだ見つかっていないのか？」

橘が、生駒に聞いているようで、そうでもないような口ぶりで問

いかけてくる。

「それは知らない」

ただ、生駒はあの太っちょのことなどどうでもよかった。犯人の可能性があるとは思っていなかった。

木元は橘と綾の親子と共に、谷周りでアマガハラノを探索したグループだ。生駒が栗の木に向かっていくと大声で呼びかけたとき、橘と木元が声を返してきた。そして栗の木のところには三人同時に姿を現した。当然、橘親子と行動を共にしていたはずだった。

西脇が戻ってきた。

「皆さん。今日はもう休んでもいいことです。ただし、明日また用があるかもしれないので、今から大阪に帰ってしまうということは遠慮して欲しいということでした」

それを聞くなり、橘が両腕を挙げて伸びをした。

この寡黙な男は、こんなとんでもないことに巻き込まれても顔色ひとつ変えない。ただ、このときばかりは解放された安堵感が素直に態度に出たのだろう。大きなあくびを出す。そして、やっと家に帰れるか、と口にした。

それが西脇の気持ちを逆撫でしたようで、橘をぎろりと睨みつけると、

「屋敷に泊まらない人は、どうするのかを警察に言っておくように」と、命令口調で念を押した。

「奥さんはどんな具合？」

道長が西脇を気遣った。

「今は落ち着いているようです。ご心配をおかけしました」

そう言いながら、西脇はまだ橘を睨んでいた。

久米が生駒と優と道長の泊まる部屋を決め、道長には風呂に入るように勧めた。仙吉もお疲れが出ませんように、と言って立ち上が

る。

西脇が苦々しくいった。

「あの木元というやつ、警察は、あいつが恭介を殺したと睨んでいるようです。さっき福知山市内で拘束されたそうで」

そして、立ち上がった橘の背中に向かって、

「おい。ところで、あんた、なにか隠してないか？」

と囁み付いた。けんか腰だった。

一旦は安堵感が漂った部屋の空気が一変した。

しかし橘は半ば振り返り、落ち着き払った目で西脇に視線を返す。

「あんた、木元と一緒にやったんやろ。あそこで」

西脇が迫った。

「おい。なんとか言ったらどうや！」

綾が心配そうな顔で父親を見ている。久米も立ち上がった。

掴みかからんばかりに憎悪を噴き出させている西脇と、泰然と腕を組んでいる橘の間にその巨体を割り込ませた。

「ずっとじゃないさ」と、橘が首をすくめた。

「なに！」

西脇の顔がみるみるうちに赤黒く変わっていく。

「途中で少し別れたのさ」

「ふん。そんなことだろうと！」

生駒の顔に、久米や道長の顔にも驚きが広がっていった。

「そうだな、この人の声が聞こえてから」と、橘が生駒にすばやく視線を流した。

「どういふことなんだ？」

久米が落ち着いた声を出した。

「こういうことさ。あのとき、木元は自分も栗の木のほうへ直行するってね。でも途中で引き返してきた。あきらめたんだろ。この人らと違ってこっちにはその木がどこにあるのか見えなかったから。俺と綾が原っぱに入った頃に追いついてきたのさ」

「なにい！」

「もう一度説明しようか？」

「あいつはひとりきりになったんだな！」

西脇の目には息子を亡くした悲しみや怒りだけではない、かすかな狂気の光が灯っているように見えた。

「おい！　なぜそんな大事な話を黙っていた！　おまえ、もしかすると！」

橘が西脇の言葉を遮った。

「刑事にはしたさ。仙吉さんと一緒に事情聴取されたときにな。しかし、あんたにする機会はなかった。なにしろ、あんたも姿をくらししていたんだからな。俺はその理由を知らないが、一応、警察にはそのことも伝えておいた。彼らがどう受け取ったのか、聞いてみたらどうだ」

「きさま！」

「あんたが息子を溺愛しているのは有名だからな。もうひとつある。あんた、今朝、事前踏査に行って来たといったな。本当かな？　俺は見えていたんだよ。あんたが軽四から重そうな荷物を下ろして、それを背負って山に行くのをな。あれはなんだ？　毛布に包まれていた荷物だったよな。息子の方も何か持っていたよな。リュックに入れた荷物だよ。親子揃って何を運んだんだ？」

「このやろう！」

「ふん。百姓の朝は早いんだよ。これは警察に言っていないが、今に思えば妙なことだな」

西脇が橘に掴みかかった。

しかし怒りに任せて振り上げた手は、冷静さを保っている橘の胸ぐらさえ掴むことができず、空を切る。

橘はさらりと身かわし、にやりと笑った。あわてて久米と仙吉がふたりの間に割って入った。

「お、話す手間が省けたな。警察のお出ました」
寺井が縁側から、今の様子を窺っていた。

久米が宣言するかのように大声をあげた。

「今日はもう解散ということにしましょう。橘くん、今日はうちに泊まっていてくれたらいい。綾ちゃんも疲れているだろうし、どうせ今から帰って風呂を沸かしてというのもなんだから。仙吉さん、今日も大変お世話になりました。礼を言います。それから西脇さん、本当にご愁傷さまでした。なんと申し上げてよいのか、言葉が見つかりませんが、どうかお気を落とされずに……。奥さんの病院に早く行ってあげてください」

久米がそう言い終わるのを待っていたかのように、寺井が部屋に入ってきた。

「その前に、少しだけ皆さんにご報告があります」

仙吉が生唾を飲み込んだ。寺井は後頭部の傷が川に落ちたときにできたものではないと説明した。

「しかも、このお屋敷の下の道で血痕が発見されました。そこでなにものかに鈍器で殴られ、川に突き落とされたようです」

「道に血が……」

仙吉が肩を落とした。

西脇と橘の格闘も終結した。

西脇はそこから魂が抜けていったかのように口を開けている。

久米は座り込んでしまい、橘さえも神妙な顔を作った。

「わずかに草が生えているところがあります。そこで血液反応が出ました。犯行後、犯人は飛び散った血を洗い流したようです。昨夜の雨で道がまだ濡れていましたので、我々は気がつかなかったようです」

「鈍器というのは？」

「調査中です」

「離れの部屋ではなにか……」

道長が小さな声を出した。

「布団に入ったのかどうか、押収したシーツやパジャマなどを詳しく調べています」

「恭介の件は？」

黙りこんでしまった西脇に代わって、仙吉が聞いた。

「木元勝を現在、取調べ中です」

何人かの口からため息が漏れた。

「それで申し訳ないが、山に持っていかれた鎌やナタなどをお借りしたいんですが」

血液反応を確かめたいという。

今朝、久米の草刈鎌を借りたのは、久米自身以外には生駒と木元だけだ。納屋にあるのでどうぞご自由に、と応えた久米の顔が青ざめていた。

「帰って来られてから、それらをどうされましたか？」

「洗って……」

「どなたが？」

久米と道長が顔を見合わせた。

「木元くんがまとめて……」

「ふむ。それから念のために、ご自分のを持っていかれた方はどなたですか？」

仙吉と橘、そして西脇がおずおずと手を上げた。

「では申し訳ないが、お持ちになっっているものをすべてお借りできますか。今から刑事が同行しますので、渡してください」

突然、西脇が息巻いた。

「おい！ 俺が息子を殺したというのか！」

「すみません。確認させていただきます」

「ばかなことをいうな！」

「ご理解ください」

「ふざけるな！」

と、押し問答は続いたが、結局は西脇が折れることになった。

「生駒さんにお聞きしたいことがあるんですが。いいですか？」

生駒は寺井について庭に出た。

「シーツに体毛が残っていました。パジャマも着たようです。つまり、普通に寝た形跡はあるんですが、少し気になる点もあります。まだ断定はできません。確認させてください。昨夜、あなたは風呂に入りましたか？」

「風呂？ え、ええ」

「采さんはどうです？」

「……入ったとは思いますが、わかりません」

「四人の順番は？」

「木元君、三条、私、采さんの順です。僕が風呂から出たとき、采さんに声をかけました」

「なるほど。で、そのとき、采さんは？」

「返事はあったと思います」

寺井が唸った。

「そのとき、雨はまだ降っていましたか？」

「雨？ どうか、停電だったけど……。ん、そうだ。止んでたと

思います」

生駒は手探りで縁側を戻ったのだが、途中、タオルを手すりに干したことを思い出した。

寺井が頷いた。そして、一段と声を低くした。

「誰にも言わないでください。今お聞きしたことも。いいですね？」
頷くしかない。

「風呂から出るとき、湯を抜きましたか？」

「えっと、ええ。抜きました」

「なぜです？」

「そりゃ、他人の入った後の湯は気持ち悪いかなと」

「ふむ。そんなもんですか」

「はあ？」

「こちらに来てください」

黄色いテープを潜っていこうとする。

「どこに行くんです？」

「ですから浴室です」

「湯がどうかしたんですか？」

「湯は入っていません。ですが、うちの係員が今日の昼間に見たところ、床が濡れていたんです。もう時間が経ったので今は乾いているかもしれませんが。それで、もしかすると采健治さんは朝方にも風呂に入ったのかと。母親に聞きましたら、彼は朝風呂派ではないということなのですが、念のため。浴室の中が生駒さんが出られたときのままかどうかを見てもらいたいんです」

「ああ、それなら、意味はないです」

「というのは？」

「山から帰ってきて、三条がシャワーを使ったからです」

「あっ」

寺井がなんとなく肩を落として照れ笑いをした。

「そうでしたか。わかりました。お手数をかけました」

寺井は健治がいつ屋敷を出たのかを絞り込もうとしていたのだった。

浴室の床の濡れ具合から、健治が朝風呂に入ったのではないかと仮説を立てたのだ。

生駒は寺井にひとつの情報をやろうと思った。

「昨年の猫のことですが、胴体がどこにあるか、ご存知ですか？」

「ん？ あの黒猫の？」

「そうです」

「いえ」

生駒は説明してやった。期待していたわけではないが、やはり寺井は関心を示さなかった。

第 16 章 「聞き耳頭巾」

「寺井さんとなに話したん？」

今夜の寝床である塔の間に落ち着くなり優が聞いてきた。

「口止めされた」

「あ、また私に秘密を作るつもり？」

「またって、なんやねん」

「佳代子さんのこと」

「う、あれは」

「うそうそ。気にしてるようで気にしてない」

「うにゅ」

「はい。じゃ、教えて」

生駒は寺井との話を聞かせた。

「ふうん。ね、少し考えてみようか。ノブも疑われているんやしね」

「ふぁー、疲れたなあ。それに、もう疑われてないやろ」

「そかな。で、恭介くん殺しは木元くんではぼ決まり、かな？」

「まあなあ」

「健治さん殺しは？ それも木元くんっていうこと？」

生駒は首を捻った。木元がなぜ健治を殺す必要がある？

それをいうなら、なぜ木元は恭介を襲ったのだろう。もし健治殺しの犯人も木元だとすれば、その動機は恭介殺しと無関係であるはずがないが。

「木元は恭介より少し先輩や。なのになにかにつけて年下の恭介にいびられていた。羽振りがよかった頃の西脇工務店のひとり息子と、貧しい大工の息子という関係。子供のころに一旦出来上がった関係なんて、大人になってもなかなか変わるもんじゃないからな」

優はちよつと首を捻ったが、なにも言わなかった。

「だから今でも木元は恭介に頭が上がらない。しかも木元は思い詰めるタイプ。恭介はといえば、甘やかされてお坊ちゃまのまま大きくなっている」

「まあねえ」

「恭介は卒業後も今に至るまで、ずっと木元に対して偉そうに振る舞い、木元は怨みを募らせていたのかもしれない。たまたま知り合った橋に誘われてここへ顔を出すようになったけど、なんと、またそこに恭介が現れた。そして、いつもと同じように周りのことをまったく考えない行動を見せつけ、しかも、人前で侮辱された。ほら、アマガハラノで」

「うん。あれはちよつとびっくりしたなあ」

「いつもおまえの言うことはまどろっこしい、とかなんとか」

「つまり、長年の怨みが積もり積もっていた、と」

「でも、ひとつ気になることがある」

「なに？」

「なぜ、アマガハラノで恭介を殺したのかってこと」
優が頷いた。

「あそこで恭介がひとりで、原っぱの入口に戻るなんてことは、誰にも予測できなかった。それにあの班分けも、あのとき決めた。計画の立てようがなかったはず」

「突発的な犯意？」

「犯意？　なんやミステリーみたいな言い方をするやんけ」

「気にしない、気にしない」

「ん、ま、つまり、日ごろから隙あれば狙ってた」

「木元くんが犯人やとしたら、そうとしか考えられないということやね。生駒論では」

しかしそうは話しながら、生駒はなんとなく納得できなかった。

「あんなこともあったし」

と、優がにやりとした。

「あんなこと？」

「あのふたりは私に関心を持っていた。気づいてた？」

「関心っていうのは大げさやろ」

「へへ。たとえば、彩香さんに対しても」

「ハハ、想像力全開！」

「恋のライバル。そんなに美しいもんじゃないか」

「木元はあのとおり無口で、女の子の喜びそうなことのひとつも言えるようなやつじゃない。それにあの肥満」

優がまた大きく頷いた。

「対して恭介はいわば天真爛漫。悪く言えばお調子者。彼女くらいの年頃の娘は、どちらを選ぶかっていうと、小っちゃくて可愛くてお調子者の方かもしれない。一緒にいて楽しいからっていうだけの理由で」

「一般的にはそうかもね」

「うん」

「私は違うけど」

優の目がずっと細くなって笑った。

しなやかな右手の中指が顔の上を滑っていき、耳たぶを擦り上げ、右から左へと眉毛に触れていった。考え込んだときの癖である。化粧がけない優ならではのしぐさだ。その後、顔の中央を落ちてきて唇に触れるときもある。生駒には見慣れたものだ。

「でも、少し弱いよね」

生駒は大きなあくびをした。まだ神経がぴりぴりして眠れそうにないが、まぶたはすではれぼったい。

「彩香さんてしっかり者やんか。自立してる。金銭的な面でも考え方の面でも。恭介くんを選ぶかなあ。彼、ちょっと変なところもあったし」

優が気ままに喋っている。

積年の怨み説からいつのまにか恋のライバル説にすり替わってしまっていた。

「うん。逆かもしれない。つまり恭介くんの方が、木元くんが邪魔でしうがなかった。木元くんの方が年上やし、まがりなりにも立派なひとつの店の主やんか。いわゆる大人。それに比べて自分は、あの一見破天荒な父親に溺愛され、いわばぼんぼん育ちであることに一種の引け目を持っていた。彩香さんをめぐって分が悪いと……」

こんな話をしながら、優も眠たくなるのを待っているだけなのだ。生駒も優もすでに畳に寝転んでいた。

「沈黙考やけどちょっと怖いところもある木元か、表面的には軽くても根に劣等感を持っている恭介か」

「うんうん」

「じゃ、健治殺しの方は？」

「佳代子さんよ」

「佳代子を取りあって？　まさか。木元と健治じゃハナから勝負にならない」

「なんで？　健治さんが圧倒的有利ってこと？」

「木元二十一歳。対して健治は三十六歳。佳代子は当時二十四歳」
「そんなことが恋の勝負にならない理由になると思う？」

「いや、ならない」

またあくびが出た。今夜はぐっすり眠れそうだ。

「木元が健治を殺す理由は……」

「命日の日に……」

「でも、恭介殺しが彩香を巡ってのことで、健治殺しが佳代子を今でも慕うあまりにということだとしたら、木元はやけに気が多い男ってことになるぞ」

「男の人の気持ちはわからない」

「それをいうなら女の気持ち」

「お、やっとノブもそれに気づいたか」

「関係ないこと言うな。いずれにしろ、競争相手を殺してしまうほどの恋愛を、同時並行でするような男には見えないけどな」

「燃えるような激しい恋じゃなく、心の中に深く潜行した恋する感情だけ、やったかもしれないやん」

「なんとも、ややこしい表現やな」

「ううん、単純な話よ」

「あ、そか。これや！ 木元はその恋のライバル説で健治を殺した。それを恭介に見られていた。で、口封じのために」

「こら、ノブ、もっとまじめに。そんなシーンを恭介くんが見ていたんなら、ホイホイ一緒に山登りになんか行く？」

まぶたが落ちてきた。

こんな思いつきをいくら並べても、犯人を追い詰めるような推理が出てくるはずもない。

「ノブ、ところでさ、健治さんの事件ではチャンスという意味では誰でも似かよったものやんか」

「うん」

「視点を変えてみたら？ なぜ健治さんは出ていったのか。いつ出ていったのか」

「誘い出されて出ていったのか、自分から出ていったのか。朝なのか、夜のうちのなか……」

「健治さんは殺されたとき、昼間の服装やった。ということは、朝になってからか、風呂に入る前って可能性が高いけど、木元くんが健治さんを誘い出すとしたら、なにも朝まで待たなくてもいい。それに殺すなら、やっぱり朝より夜やし」

「まあ、そうやろな」

「ノブが風呂上りに声を掛けたとき、返事は確かに健治さん？」

「たぶんな」

「つまり、木元くんが健治さんを誘い出したのは、健治さんが風呂を沸かしなおしている間か、風呂に入っている最中ってことやね」

「決め付けたな。ま、ユウ、おまえ、夜は冴えてるな」

「は？ 夜だけかい！ でもさ、今のは木元くんが健治さんを誘い出したとした場合」

「そう。木元が犯人と決まったわけじゃない。でも、パターンとしては誰が犯人でも同じようなもんやろ」

「うん。じゃ、ノブ、ケーススタディやってみて」

生駒はぼんやりした頭をゆるゆると回転させながら、考えたことを順に口にしていった。

「健治は朝になってパジャマをボストンバッグに突っ込んでから出ていった。これがひとつめのケース」

「ほーい」

「次のケースは、普通に朝まで寝ていたが、木元に呼び出されたという場合」

「自発的にではなく、という違いやね」

「そして最後は、夜、誘い出されたというケースと自発的に出ていった場合の四通り」

優が座りなおした。

「もっと掘り下げて考えてみて」

「ああ。まずひとつめのケースは、健治を待ち伏せしていたという

ことになる」

「でも、待ち伏せはあまり意味がないかも。変質者の仕業なんてことは考えないでみると、健治さんが朝早くに出かけることを知って、いなくちゃいけないんやから。そもそも朝早く出かけていく理由ってどんなことがある？」

「散歩にでも出かけたのか、自宅に山登りの道具を取りに戻ったのか。あるいは家でどうしてもしておかきゃいけないことがあったとか」

「あるいは、佳代子さんの写真を取りに」

「うーん。それ、どんな意味が？」

自分で言っておきながら、優は「関係ないか」と可愛く笑った。生駒は腕を伸ばし、人差し指で優の頬に触れてから唇に持っていた。優は唇を尖らせて、その指にくちづけた。

「朝一番のネットニュースを見るのを日課にしてるとか、朝ごはんを作る当番やったとか？」

「うんうん。あるかもしれない」

「でも、それはない」

「そう。それならなにも、この屋敷に泊まる必要はなかったから。健治は家に帰れないほど酔っ払っていたわけじゃない。しかも家は歩いて五分もかからない。あえてここに泊まることはなかったはず。毎朝同じコースを散歩するっていうことなら、あるかもしれないけど」

「散歩にこだわってるねえ。でも、今から山登りに行こうっていうのに？」

「朝の待ち伏せ説は、とりあえずはボツか」

「やっぱり、誰かに呼び出されたという方が説得力あるよね」

「うん。でも、早朝に誘い出すって、あるか？」

「健治さんが起きてくる時間なんてわからないし、それに、そんな

時間なら他の人も起きてくるかもしれない。この人は皆、朝早い。人殺しのために誘い出すにはどうもね。ということで朝のケースはいずれもボツ」

「ということは、犯行は夜ということになる」

「お風呂を沸かしなおしている間か、入っている途中に……あれ？」
優が首を傾げ、指を眉にもっていった。

「おかしいぞ。警察の見立てでは、布団には寝た形跡があるし、パジャマも着ていた。ということは、犯行は朝……あ、なんや。まだ誰も起きてこないとんでもなく早い時間に犯人に叩き起こされたんや」

「そんな時間に起こされて、きちんと着替えた？」

「そういう習慣やったら」

「お布団は敷きっぱなしで？」

「う、ま、それも習慣か」

「他人の家で、しかも自分で敷いたのに？」

「まだ寝ている僕らに遠慮して、布団は上げなかったとか」

もう優は反応しない。さっきから眉を撫で通しだ。

「わかった。もうひとつある。健治は寝たふりをする必要があった、
というのはどうや？」

「は？」

「つまり、実際は寝ていないのに、あるいは真夜中か未明に出ていったのに、普通に朝まで寝ていたように見せかける必要があったとか」

「どんな意図があって？ 被害者なんやで」

「くそ！ まどろっこしいな。要するに、健治はすぐ戻ってきて布団を上げるつもりで出かけた。例えば朝の散歩とか。犯人はその習慣を知っていて」

「散歩はもういいって」

「こういうのもある。必ずしも家に帰らなくてもいいような用事。簡単な用事ではなく、朝方までかかるようなことなら、一旦寝て、着替えて……」

「深夜に？ ノブは健治さんに悪意があるん？ それって犯人の行動みたいやん。ハハーン、さてはノブも健治さんを恋敵として恨んでたんやね」

「だ、か、ら、それは違うって」

生駒は眠たくて思考が深まらず、もう頭がこんがらがっていた。

「ということは。ん？ なに話してたんやった？」

「こら。でも、惜しいところまでいったやん」

「ほえ？ テストしてたわけ？」

「ううん。ディスカッション」

「どっちでもいいけど……」

生駒は立ち上がって布団を敷き始めた。

「こら、自分の分は自分で敷け」

優は天井を睨んだまま、動かない。

「いい線までいってるような気がするんやけどなあ。だから、寝るのはまだよ」

優は転がって布団を敷くスペースを空けた。

「今のは、パジャマを健治さんが少しでも着てた場合のことやん。まったく着ていなかった場合は少し違うと思う」

「まだやるんかいな。寺井さんはパジャマは……」

「断定してた？ 健治さんの皮膚の断片でもついてたん？」

「屁理屈とちがう？ ほら、どいた、どいた」
布団はなんとなく湿っぽかった。

「最後まで聞いて」

「はいはい、聞きますよ」

「パジャマに袖を通していなかったんやとしたら、健治さんが出ていったのは私たちが寝た直後ということになるやん。つまり、ノブがお風呂に入っている間、健治さんは服のまま布団に寝転がって順番を待っていた。そしてノブに返事をし、新しい湯を入れようとしたときに誰かに呼び出され、湯は入れずに出ていった。あるいは風呂に入っている間に呼び出され、犯人が健治さんを殺してから舞い戻り、風呂の湯を抜いた。ちょっとこっちのほうは無理やりつて感じがするけど。ちなみに、私が昼間にシャワーを浴びたときには、浴槽は空だったよ。そして犯人はパジャマをあたかも健治さんが着たかのように見せかけるため、ぐちゃぐちゃにしてポストンバックに放り込んだ」

思わず生駒はまたあくびが出た。

「長い解説、ありがとう。でも、それはさっき聞いた話の延長。もう寝たほうがいい。冴えてると思ったけど、もう、おまえもだめ」
生駒は布団の上に寝転がった。

「根本的な抜けがある。もし、パジャマを着なかったとしようか」
「うん」

「いいか。健治は僕に返事はしたけど、そのまま着替えずに朝まで眠ってしまった」

「あっ……」

優がぽかんと口を開けた。

「おまえみたいに、みんながいつもきちんと着替えて寝るっていうわけでもないし、必ず風呂に入るってもんでもないぞ。横になった瞬間に、風呂どころか、着替えも忘れてコテンと寝てしまう人もいるんやから」

「う、信じられない」

「それに、健治の風呂の順番のとき、もうずいぶん時間が遅かった。だいたいおまえが、後の人のことも考えずに長風呂するからやぞ。僕さえ、もうあきらめて寝ようかと思っただくらいや」

「ごめん」

「いずれにしろ、あんまりいろんな場合を考えても、しかたないということ」

「ちょっと待ってよ。ということは、パジャマに袖を通していた場合は、朝の散歩のときに襲われたということが考えられて、パジャマを着ていなかった場合は……」

「朝の散歩、夜中に誘い出された、風呂に入る前に誘い出された。なんでもあり」

「結果にそれほど違いはないというわけ？ どうも納得できないなあ。だって、警察はお風呂やお布団やパジャマに関心を持っているんやろ」

「さあな」

「きつとなにかあるはずやと思う。健治さんがお風呂に入った時間に関係するなにかが」

「へえへえ。そういうことにしておこう。明日、考えよう」

「飲みにいったら、こんな時間はまだまだって言うくせに」といいつつも、ようやく優も疲れた顔を見せた。

意気込みが空振りに終わってしまい、ため息をついて、床の間に架けられた絵を眺め始めた。老婆の肖像画。千寿だと聞いたことがある。着物姿の老人が、リビングのソファに座ってほのかに微笑んでいる。久米のサインがあった。

「肖像画に見つめられて寝るのは、なんか気持ち悪いね」

母屋は静まり返っている。どうやら起きているのはふたりだけのようだ。

「今から風呂入るか？」

「当たり前やん」

「じゃ、湯を張ってきてやろう」と、生駒は立ち上がった。

「サンキュ。立ったついでに窓を閉めて。ちよっと寒くなってきた」
「了解。ん？」

平石の脇で影が動いた。監視の警察官か？ それにしては体の線が細い。

「あ」

見ると、綾が平石に頭を押しつけていた。聞き耳頭巾をかぶっている。

「うへ、呪いのかかった石に」

「どこ？ あ、ほんとや」

「明日の朝、なにが聞けたか聞いてみよう」

「ちよっと心配」

「うん」

「美千代さんの例もあるやん」

「ん」

「行ってみよ。そばにいてあげた方がいいかも」
優が生駒の手をとった。

綾の横顔がふたりを捉えた。

真剣な顔にゆっくりと笑みが広がる。そっと耳を石から離すと、生駒達に向き直った。

「どう？」

綾が頭を小さく横に振った。

「なにも」

「こんな恐ろしい石を相手に、挑戦しなくてもいいやん」

「ううん。気になってたことがあって」

「なに？」

「少し前に、ホトトギスが話しているのが聞こえたの。石がもろくなってきた。割れそうだって。それに大変なことが起きるって騒いでた。それで、どういふことかなと思って」

この平石が割れるというのか。大変なこととはいったいなんだろう。

生駒はとんでもないことを想像してしまった。

とても口に出しては言えない。大音響と共に、バツクリ割れた平石の中から出てきたものは……。

「ねえ、おじさん、試してみてくださいませんか。石の声は聞いたことがなくって。私には聞こえないけど、おじさんなら聞こえるかもしれないから」

生駒はのけぞりそうになった。手を握っている優の力もぐつと強くなった。

よりによってこの子はなんということを出すのだ。ただでさえ薄気味悪いこの真夜中に、呪いのかかった石の声を聞いてみたくれというのか。

生駒は綾の頼みに直接応えず、橘はどうしているのか、と逃げた。

「寝ちゃった」

「お父さんは、綾ちゃんがこんなことをしているのを知ってるのかな？」

「うん。喜んではいないみたいだけど」

父親も了解のことなら生駒がなにと言うことはない。

しかし、この石の声を聞けという頼みはなんとしてでも断らなくてはならない。

自分に備わっているかもしれない灵力のかすかな片鱗が、この石にとり憑いた吾一やサヨの呪いに満ちた声を聞こうとすることによって、あらぬ方向へ開花でもしたら泣くに泣けないではないか。

「なぜ、僕にそんなことを言うん？」

「だって、山に登ったとき、祠のところで変な顔してた。感じる力のある人だなと思って」

絶句してしまう。この子はそんなことまで気がついていたのか。

「僕にはそんな力はかけられないよ。まったくだめ。それに」

綾が生駒の逃げ口上を遮った。

「誰もがそう思っているの。でも本当はみんなが持っているんだよ」

綾の瞳は、常夜灯の光に照らされて輝いていた。

「力はあるの。感じたことを自分は今感じたとわかるというのかな、ちゃんと感じたことを捕まえることができる力。これが人によって違うのよ。おじさんはそれがある人だと思う。だから祠の前で、感じたことが顔に出てたんだと思う」

まずい。

綾は完全にその気だ。毅然としていて、しかも小学生らしからぬ説得力だ。

だめだ。少なくともこの石は。

と、その思いが口から出てしまった。

「他のものならいざ知らず、呪いのかかった石なんて」

「じゃ、お宮さんに行こう」

「神社？」

「そう。さあ」

綾が生駒のもう一方の手を取った。

「げっ、今から？」

「うん。社殿の火事の時も焼けなかったっていうクスノキがあるの。なんでも知ってるそうよ。でも、あの木もなかなか話してくれないの」

「うえっ！ 本気？」

綾がコクリと頷いた。

すらりとした綾は生駒の前に立つと、優と同じくらいの背丈だ。

生駒に抱きつかんばかりに見上げている。

魅入られそうなほど美しい瞳だった。

眠たいからというのでは納得しないだろう。どうせ夜しか木の声は聞けないのだから、と言われるのがおちだ。

断る理由を探しあぐねていたとき、救いの神が現れた。

離れの玄関から黒い影がふたつ近づいてきた。警察官だった。目の前まで来て、生駒たちの顔を一通り眺め回すと、低い声で、

「なにかありましたか？」

と、聞いてきた。やはり彼らは屋敷の人の動きを警戒していたのだ。「ちよっと涼みに。じゃ、おやすみなさい。綾ちゃんもまた明日ね」生駒はようやく綾の誘いを振り切り、塔の間にとって返した。

「あの子、小学五年生にしては強いというか、なんていうか、とても変わった世界の中で生きてるみたい」

優の声にも驚きが溢れていた。

「変わっているというより、むしろ恐ろしいよ」

「さすがのノブも手が震えだしそうやったね」

「いや、もう、ほんとに震えだしてたよ」

「石の呪いって、信じてる？」

「信じるも信じないも。ああいうものに係わり合いにならないこと。変に恐れたり、かといって逆に強がったりしないこと」

「じゃ、やっぱり信じてるんや」

優は興奮冷めやらぬという態で、繋いだ手を放そうとせず、生駒を縁側に引っ張っていくと、夜の闇に浮かび上がった平石を見ながらぽんぽんと言葉を吐き出した。

綾の姿はもうなかった。

「呪いかあ」

「盲目的に信じるとか、頭から信じないとかじゃなくて、あり得ることとして謙虚に構えておかないと」

「よかった」

「ああ。もう少しでひどい目にあうところだった」

「そうじゃなくて、私の感覚に近くて」

「はあ？」

「祟りとか呪いなんてことを口にするとき、ホラー映画の見すぎとか言う人がいるやん。オカルトチックやとか。ちよっと違うのになって、思うねん」

「感じ方は、人それぞれやからな」

「ねえ、あの聞き耳頭巾って本物やと思う？」

「どういう意味？」

「だから、本当に木の話なんかが聞けるんかなってこと」

「人によっては聞けるんやろう」

「やっぱり！」

「きっと、その人は頭巾がなくても聞けるんや。聞き耳頭巾というのは作り話やろ。いわば、木の話や鳥たちの声を聞きなさいという教え」

「なるほど」

「そのための一種の小道具。その気にさせるための」

「そうなん？」

「そう」

綾がかぶっていた頭巾は相当の年代ものらしく、あちこちにほつれた糸を修理した跡があり、得体の知れない染みで汚れていた。代々その教えのために伝えられてきたものだろう。

「あれに、実際にそんな秘められた力が宿っている、なんてことはないのかな……」

「くだいな。だから、ないとは言いきれないって。霊的な存在も、そんな不思議な道具もなんでもあり」

「なんでもありか……」

「ああ」

「じゃ明日、試して」

「あ、の、なあ。そんなに言うんなら、おまえが試してみろ」

「綾ちゃんはノブやから貸してくれるねんで。今もノブにしか貸そうとしなかったやん」

「お断り！」

第 17 章 「久米と仙吉」

翌日の昼下がりまでは手持ち無沙汰に過ぎた。といっても、久米の畑仕事を漫然と手伝いながら、楽しめないでいたという方が正しい。

警察に拘束されているわけではないので、気晴らしがてらに下のコンビニまでアイスクリームを買いに行ったりしても、とやかく言われるわけでもなかった。

まだ聞きたいことがあるかもしれないのでここにいてくれ、という寺井の言葉はまだ生きているのだろうが、離れのあたりで所在なげにたむろしていた警察官も、十時過ぎには姿が見えなくなっていた。

道長はといえば、警察官がいなくなるや否や、タクシーを呼んで帰ってしまった。久米も、もう大阪に戻ってもいいのでしょうか、などと云ったりしていた。

生駒も畑仕事で火照った体を休めたら引き上げるつもりだった。

ただ、昨夜、思いのほかぐっすり眠ったおかげで、事件への関心はまだ持続していた。特に優は推理をやめようとしなかった。

生駒と優は、寺井からいくつかの情報を得ていた。

健治のパジャマには布団と同様、上下共に体毛が付着していた。鑑識の結果待ちではあるが、健治がパジャマに袖を通したことは間違いないだろうということだった。きちんと畳んでポストンバッグに入れてあったという。

健治が襲われたのは屋敷の下の道でカーブになっているところ。屋敷から下民家から死角になっている地点に間違いないとい

う。舗装のコンクリートからも血痕が発見されていた。

木元は完全に否認しているらしい。

「パジャマに毛がついていたけど、それだけでは着替えた証拠にはならないやん。洗濯したけど取れていなかっただけかもしれないし、犯人が広げて布団の上を擦っておいたのかもしれないし」

などと未練がましく優がまくし立てている。

コンビニまで買い物に行った帰りだ。村の中を生駒はゆっくり車を進めている。

「まだ、風呂に入る前に誘い出されたという説にこだわってるんな」

車が屋敷の下のカーブに差し掛かっている。

道幅は車一台分。横には五十センチくらいの幅で草が生えている。ところどころに木が立っているし、灌木が川面への視界を遮っているが、この数メートルの間だけはまるで絶妙なトラップのように裸地で、足を踏み外せば川面までまっさかさまだ。ガードレールもない。

道の反対側は屋敷の石垣だが、この辺りは石垣の上まで五メートルほどもあり、見通しはよくない。

道路と石垣との間には水路が走っていて、豊かな量の水が駆け下っていた。

犯行現場だというそれらしい印は、舗装に描かれた丸いチョークだけ。

空は昨日と違ってどんよりと曇っている。もういつ梅雨に入ってもおかしくない時期だ。

裏の空地の雑草も、ぐんと背丈が伸びてきた。生駒はその中に車

を乗り入れた。

「ね、下着さ。ノブは寝るとき、パジャマの下になにも着ないやん。朝になってから新しいパンツをはくやんか。それって一般的？」

「人それぞれやろ」

先ほど、優は寺井に健治の下着はどうだったのか、と質問したのだった。

「それにしても寺井のおっさん、自分の都合でしか答えないなあ」

「そりゃ、そうやろ。僕らは一般人なんやから」

「もっと詳しく話してくれたら、こっちも考えるのに」

「そうやね、可愛い探偵さん」

「ふん。あ、あんなところに門が」

空地に面して屋敷の裏木戸があるが、それが開かれるのを生駒は見ることがない。

いつも、空地に車を停めると一旦道を下り、石段をまた登りなおしている。

「あそこから入れば近道なのにな」

「もしかして、あの門って」

「かもなあ」

人身御供となったサヨが通っていった門かもしれない。

「お風呂場、見にいこ。気になってたことがあるねん」

離れの立ち入り禁止もすでに解かれていた。

一見したところ、なにも変わった様子はない。生駒はそう感じた。しかし優は、ふふんと唸っている。

「靴がない」

「誰の？」

「やっぱりあれば、健治さんの靴やったんや」

「ん？」

「昨日さ、シャワー浴びたとき、玄関に革靴が一足あったんやけど、今はない。警察が持って帰ったみたい」

「それがどうした」

「健治さんの靴やん。あの人、暑いのに革靴履いてきてた。今度、寺井のおっさんに確かめよう、次はこっち」

昨晩は使われていないので、浴室は完全に乾いていた。優はここではがっかりした声を出した。

「変化なしか」

「なんじゃい」

「これ」

シャンプーとリンスの袋。ボトル式のものではなく、一回分の袋入りのものを、久米は人数分用意して洗面化粧台の上に置いてくれている。

「おまえ、いったいなにを喋ってるんや？」

「昨日の朝さあ、シャンプーしようかなって」

「こんな山奥まで来て、そうまでせんでもええがな」

「ほっといて。でもさ、できなかった。シャンプーがなかったから」

「ん？ ちゃんと四つあるぞ」

「昨日の朝のことよ。シャンプーとリンスの空袋が、三つしかなかった」

「空袋？ 三つ？」

「洗面化粧台の上にも下にもない。ゴミ箱の中にもない。浴室にもない。縁側や廊下にも落ちてなかった。ノブ、使った？」

「ひとつはな」

「木元さんも使ってた。私がお風呂に入ったとき、空袋、あったから」

「なにが言いたいねん。もともと四人分あったんか？」

「あったよ。リンス、二袋使おうかなと思ったんやけど、きっちり

あとノブの分と健治さんの分しか残ってなかったし。山から下りてきたときもちゃんと四個ずつ用意されてたから」

「夜は二袋使って、朝は朝でまた髪洗うんかい」

「だから、ほっといてって。おかしいのは三個しかなかったってことやん」

「警察が押収していったんやないか？」

「ちよっと！ 人の話、聞いている？ 昨日の朝って何回言わすん？ 警察がここに来る前！」

「へえへえ。しかし、ということは……、うーん、どういうことになるんや？」

「犯人が持っていたに決まってるやんか！」

「へ？ 空袋を？」

昼の弁当を食べ終えたとき、新しい動きが起きた。

「事件は解決に向かっていているようです」

仙吉が顔を見せるなり報告した。

「やはり木元が」

久米が決めつけた。

「警察が尋問しているみたいです。ところが健治の方は……」

もったいぶったわけではないだろうが、仙吉はここで詰まった。

「利郎さんが警察に呼ばれましてなあ」

「えっ、西脇さんが？」

「はあ。自分はやってないと言ってるそうなんです。わしには、なにがどうなっているのか……。実は……」

「差し支えなければ、話してください」

仙吉が途切れながらに語り始めた。

「昨日の朝早くのことです。うちの畑、川の向こう側にあるんですけど、山に行く前にひと仕事しておこうと思って、隣の畑の人と喋

りながら草抜きなんかをしておったんです。実はその畑からこの前の道がよく見えるんです。で、ふと目を上げると、利郎さんが車を屋敷の裏に停めて山に登っていくのが見えました。ははぁ、律儀に下見でもしに行くんかいなと思っただけで、そのときは気にもとめなかったんです。ところが、しばらくすると今度は息子の恭介が父親の後を追っていくのに気がついて」

仙吉は、警察に事情聴取を受けたときに、この話はしていたのだという。

「橘さんも荷物がどうって、妙なことを話してましたし。いったいどういうことになったんでっしゃろ。どういうわけで利郎さんが犯人扱いされることになったんか……」

「理由について、なにか聞いていないんですか？」

「はぁ。それが、どうも……」

仙吉は縁側に座り込み、冷たい麦茶を飲み干した。しばらく迷っていたが、やがてぼつりといった。

「健治は利郎さんを恨んでいたんかもしれせん」

そしてまた黙り込んでしまう。

「佳代子さんのことで？」

久米の言葉に、仙吉はそうだとも違うとも言わずにうつむいている。

生駒は、昨夜は眠たさと疲れのおかげで、まともな考えが浮かばなかったが、今はあらゆることを事件に結びつけて考えるスタンバイ状態ができていた。

それは生駒だけではない。今、西脇利郎という名を聞いて久米がすぐに佳代子の名を出したように、健治、西脇、佳代子の三人の間に存在するきわめて明快な構図に誰もが気付いていた。

事件が起きたのは、佳代子と西脇の関係が、岩穴で綾の一言によって暴かれた夜のことなのだ。

「返り討ちにされたんじゃないかというようなことでして……」

とぼけていてもしかたないと思ったのか、仙吉が仕入れてきた言葉をポロリと披露した。

「返り討ち？」

「はあ」

健治は佳代子が西脇の妻、圭子の連れ子だということを知らなかった。それを知り、佳代子との恋愛が成就しなかった原因が西脇にある、と考えたのだ。もしかすると、西脇が彼女を殺したと思ったのかもしれない。

久米も好奇心が大きくなったのだろう。

「実は一年前、佳代子さんが死んだ後、健治さんが遺体はどうなったのかと聞いてこられましたね。それで葬式のときに、彼にだけは声をかけたんですよ。で、まあ、健治さんが、なんというか、とても悲しんでいましたね。それで僕は、ああ、彼は佳代子さんを愛していたんだと」

仙吉は目を落とした。

「違うでしょうか？」

久米は仙吉に話をさせようとしていた。

「そうですね。わしもそうかなとは……」

しかし仙吉はまた口をつぐんでしまう。うかつなことは言えないと思い直しているのだろう。

仙吉にしてみれば、西脇の嫌疑がさらに深まるようなことを言いふらす必要もない。

「その後、考えたんですが、佳代子さんが自殺したのは健治さんとの間で揉め事が、つまり佳代子さんに結婚できないような理由があったからじゃないでしょうかね。それを彼女は悲観して、と思った

りしてたんですよ」

久米はあくまで健治と佳代子、そして西脇の関係を前提に話そうとしている。

「はあ」

仙吉は、結果として殺人にまで至ってしまった親戚同士のいさかいやプライベートを、部外者に話したくはないだろう。あいまいな返事を繰り返している。

ただ、久米は執拗だった。

「仙吉さんも、佳代子さんが西脇さんの娘さんだということをご存じなかったようでしたが」

「お恥ずかしい限りで」

「なぜ、西脇さんはそれを隠していたんでしょう」

「それは……」

「おっしゃってください。たぶん僕に関係することなんでしょう？
大体の察しはついています」

仙吉が久米を上目遣いに見た。

「お気を悪くせんでくださいよ」

「もちろんですとも」と、久米が大きく頷いた。

「ねえ、仙吉さん。村の皆さんやご親戚の方々が、僕のことをどう思っておられるのか、知りたいんです。親しくしていただいている仙吉さんなら、そのあたりのことも話していただけるだろうと思っています」

「わしの想像ですけど……」と、仙吉が気弱に念を押した。

「ええ、それで結構です」

仙吉が意を決したように背筋を伸ばした。

「なんで利郎さんがそんなことを隠していたんか、あの晩はあの人の考えていることがわかりませんでした。今は、うすうす思うと

ころがあります。利郎さんは、久米先生の建築の仕事を請け負いた
いと考えていたわけでした……」

恐縮至極という顔になって、意味もなく久米に頭を下げた。久米
がそれは知っていました、と頷き、

「初めから、西脇さんの会社にアトリエ工事を発注しておればよか
ったですね。せっかく、地元にちゃんとした工務店があるのに」
と、逆に恐縮してみせた。

ちゃんとしたかどうかは別にして、久米が屋敷の改装などの小工
事を、すべて西脇工務店に発注していることを生駒は知っていた。
もちろんそれは久米の采家への配慮であるし、同時に村への配慮で
あると考えていた。

仙吉は久米の反省の弁に安堵したのか、気持ちを吐露した。

「わしでさえ、少し不愉快な気分になりました。あ、いえ、工事の
ことやなく、利郎さんが佳代子さんのことを黙っていたことに対し
てです。きつと健治もそんな気持ちやったんやろうと思います。と
いうか、健治の方は、もっと違う思いがしたんでっしゃろう。佳代
子さんを好きやったんですから」

仙吉は早口に言い終えると、ほっと一息をついた。

「そうですね。それで健治さんは西脇さんに詰め寄ったということ
か。あるいは襲ったと。仙吉さんもやはりそう思われますか。で、
返り討ちに」

久米が納得したように、結論めいたことを口にした。

「はあ。わしの想像ですけど、朝早く、健治は集会所に利郎さんを
訪ねたんやろうと思います」

あのカーブのところで、健治と西脇が対峙している様子が眼に浮

かんだ。

もう、そこでどんなやり取りがかわされたのか、容易に想像することができた。

生駒だけでなく、優も久米も仙吉もそうだったろう。

仙吉はうなだれて縁側の板の目を見つめていたし、久米はそんな仙吉を見つめていた。そしてこういった。

「佳代子さんか……。しっかりした、いい人だった」

「葬式は久米さんが出していたんだんですか……。知りませんで、お手数をおかけして……」

「警察署に長く安置されたまま、誰も引き取りに来ないということだったので、僕が。町の葬儀場で……」

「ほんとにそれは、申し訳ないことで……。で、あとう、お墓は？」

「町営墓地に」

「あとう、後で場所を……」

「ええ。行ってあげてください」

久米がずっと庭に眼をやった。生駒はどちらに聞くともしないにいった。

「宅見というのは、西脇さんの奥さんの旧姓だったんですね」

仙吉はうつむいたまま。疑問を解いてくれたのは久米だった。

「いや、違うようですね。佳代さんは親戚の養子になっていたそうで。だから大阪に」

なるほど。だから西脇は自分の子ではないと強弁することができたのだらう。そして誰にもその関係を知られることがなかったわけだ。

「養子に行った人がなぜ戻ってきたのか、ということまでは知らないけど。その養子縁組は建前的なものだったのかもしれないね」

岩穴座談会で綾が叫ぶようにいった言葉。

おねえさんは寂しかったのよ、悲しんでいたんだよ。

生駒は佳代子と話すことはあっても、そして、ほのかな好意さえ持ってもいたが、そんな彼女の心の内まで理解することはなかった。気づこうとさえしていなかった。

人とは、いかに表面的な付き合いだけで満足してしまう生き物だろう。

生駒は、自分にはなにもできることはなかった、とは思いつつも、心の中で佳代子に謝らずにはおれなかった。

「さびしい葬式でした」と、久米がうなだれた仙吉に話しかけている。

「健治さんと僕だけでね。仙吉さんにも声を掛ければよかったですなあ」

「はあ」

「村の人たちへは、なんというか……、その、ちょっと僕から声を掛けるのは、やめておいた方がいいように思いましたねえ」

久米の当時の心境としては、そうだろう。

久米にそう感じさせるそんな環境は、今もたいして変わっていない。

「それでまあ、仙吉さんに声を掛けたら、仙吉さん自身が辛い立場になるかと遠慮したわけなんです……」

なぜ、実の母親である圭子という女性は、娘の佳代子の遺体を引取りに来なかったのだろう。生駒は疑問に思ったものの、仙吉にそれを問うわけにもいかず、答えは見つからなかった。それだけ西脇が恭介だけを愛し、圭子に対して締め付けていたのかもしれない。

しかし、そんなしんみりした話題は中断となった。

ひとりの女性が門をくぐってきた。そして縁側の人たちの姿を認めると一目散に駆け寄ってきた。はじめて見る人だった。

と、女性は仙吉に掴みかかった。

「うう、うう！」

泣いていた。

力なく仙吉の肩を揺すった。

「うちの人はどうなるの！ 助けてよ！」

「圭子さん……、このたびはお気の毒なことになって……」

仙吉は女の腕をそっと掴んで引き離そうとした。しかし圭子は逆に力をこめて仙吉に抱きつく。そしてますます激しく泣き出す。

髪を振り乱し、首を強く振りながら、助けてよ、と繰り返した。

一年前に娘が自殺し、息子は殺され、夫が殺人の容疑で警察の調べを受けている。

仙吉にむしゃぶりついて泣きじゃくる圭子の姿は痛ましかった。

久米も生駒も声の掛けようがなかった。

優が眉間に皺を寄せて、圭子が仙吉の胸に顔をうずめているのを見ていた。

仙吉はしばらくの間、圭子が泣くに任せていたが、やがて体をやさしく引き剥がすと、黙って久米や生駒に頭を下げ、圭子を引きずるようにして門を出ていった。

「さ、そろそろ、引き上げるか」

今から出れば、大阪には宵のうちに着くことができる。塔の間で荷物をまとめ始めた生駒に、優が気のない返事をした。

「そうねえ」

「どうした？ 元氣ない声、出して」

「明日、仕事、忙しい？」

「いや、別に。ん？ おい、もう一泊しようってか？」

「せっかくここまで来たんやから、丹後半島をドライブでもしたら
どうかなって。気分もスカッとしたいし。明日は快晴みたいやし」

「はあ？」

「いや？」

「本気か？」

優は事件の成り行きを見届けたいのだ。

「西脇と木元。彼らが自供するまでいるつもりか？」

「ううん。違うと思うねん」

「そりゃ、変やとは思うよ。ふたつの別々の事件でしたって、言わ
れてもな」

「そうやんねえ！ 絶対おかしい。きっと犯人は今どこかでほくそ
笑んでいると思うねん」

「ほくそ笑んでいるか……。誰やと思う？ 目星は？」

「全然」

「じゃ、ただ漫然と、なにかを待つんかい！」

「そういうことでもないけど」

優が平石に眼をやった。

「あ、もしかして聞き耳頭巾で新しい情報を、なんて考えているん
じゃないやろな」

「うん」

「おいおい、まさか、夜中に平石の声を」

「そう」

「あ、の、な、あ、勘弁してくれよ」

「ハハハ。平石は無理にしても、せめて神社のクスノキ」

「おい！」

「でも、そんなことだけで事件解決の鍵を得ようなんて期待してないよ」

「当たり前や！」

「うまく言えないけど、なにかあると思えへん？ この村に。この屋敷に……。それがなんなのか、わからない。もっと大きな、ひとつの意志に基づいた流れが」

「なんか、たいそうで、漠然とした話やな。でも、久米さんはどうするって？」

「久米さんは喜ぶよ」

「なぜ、わかる？」

「だって、綾ちゃんから平石の話を聞いてからは、とてもひとりじや寝られないって、さっき言ってたから」

「あ？ もう、泊まるって伝えたのか？」

「へへ」

「やれやれ」

「さ、そうと決まれば、ノブの大好きな散歩に出発じゃー」

「さんぽお？」

「下見よ」

「はあ？」

「だから、し・た・み」

「神社？」

「そそ。でも、もうちょっと先まで」

「滝か。しつこく興味があるんやな」

「ノブはない？」

「もうない。」

滝だけではなく、この屋敷にさえ関心がなくなりかけていた。

これまで、この村のひなびた風景を美しいと思っていたし、家々の佇まいも郷愁を誘っていた。

また、この屋敷の建物プランやさまざまな設えは、建築家としての興味をかきたててくれてもいた。

しかし今はもう、そんなものは遠くかすんでしまっている。

久米には悪いが、釣り大会にも関心はない。もっと言えば、この村や屋敷を訪れることはもうないかもしれない、とさえ思い始めていた。

「あんまりな」

「ちえ。ま、いいやんか。そうと決まれば、散歩じゃー、さ・ん・ぽー！」

優がぽんと立ち上がり、生駒の両脇に腕を差し込んで立ち上がらせようとした。

「泊まらない。でも、散歩は行こう。最後の散歩や」

生駒も立ち上がった。

「でも、その前に」

寺井に電話を掛けたが、靴の件は優が想像したとおりだった。

健治は素足に草履だったという。離れの縁側の靴脱ぎ石に置いてあったゴム草履だったらしい。

シャンプーとリンスの袋の件は、寺井は唸っただけだった。

第 18 章 「バケツとコンロ？」

「圭子さん、お気の毒やったよね」

生駒と優は、神社への道を辿っていた。

「仙吉さんとはどういう関係かなあ」

優は夫の従兄弟に対する態度ではないという。小さい頃から一緒に育ったわけでもないのに、あんなにしっかき抱きつくのはおかしいと。

「仙吉さんしか頼れる人がいないからじゃないか？」

「そうかもね。ま、こんなこと詮索しても意味はないか。それより、健治さんの身の回りで起こったことをおさらいしてみようか」

関心は薄れかけていたが、かといって異存もない。

「一番最初から話して。久米さんがこの村に来るようになった頃のことから。坂井さんと久米さんの関係は道長さんから聞いたから、その後ろ辺りから」

「発端は、久米さんが坂井さんの紹介で、采千寿という老婆と屋敷のリビングで面会した、今からかれこれ五年前にさかのぼる。というあたりからでいいか？」

生駒は、ほとんど想像ばかりだし、それに昨日今日の思いつきレベルだが、と話し始めた。

村人の中で、ここにアトリエを建て、将来は芸術村のようなものを夢見ているという久米の言葉を知らないものはいなかった。中でも、この話にもっとも大きな興味を持ったのが西脇利郎だった。

いまや倒産同然だとささやかれている西脇工務店。

その社長である西脇にとって、久米は大切な見込み客だった。久

米の人脈と、世間での人気の高さに、西脇は関心を持った。大きな仕事に繋がっていく金の卵。

最初の大きな仕事であるアトリエ新築工事を、是が非でも受注する必要があった。しかし西脇工務店は田舎の落ちぶれた零細企業。簡単に受注できるほど甘くはなかった。

時は遡るが、かねてから千寿の資産を当てにして、西脇は佳代子を屋敷に送り込んでいた。千寿は西脇のこの申し出を不審がることなく受け入れていた。

妻に佳代子という連れ子があることを知られていなかったのが好都合だった。万一、ばれることがあっても、千寿のことを思ってしまったまでのこと、と言ってしまえばいいのだ。

そして千寿が老人ホームに移り、佳代子だけが屋敷に残り、西脇の思惑通りにことは進んでいった。

佳代子が屋敷に住んでいるという実績は着々と積み重なっていく。それに加えて、西脇にとって千載一遇のチャンスが転がり込んできたのだ。やってきた臨時の屋敷の主が久米だったのだ。

西脇はこのアトリエ工事という久米のお土産に、どうしても食いつきたかった。そこで一計をたてた。佳代子から久米にさまざまなことを勧めさせた。

井戸の補修や屋根の点検、浴槽の入れ替えやキッチンの改修などの小修繕の数々。久米はそれらをひとつずつ実施していった。いずれも久米がこの古い屋敷で、近代的な暮らしを気持ちよく営むために必要なことだったからだ。

それらは結構な金になった。しかも、最後の大物であるアトリエの新築工事を受注するための実績作りにもなる。そのはずだった。

「ちょっと待って」

「なんや。せつかく調子に乗ってるのに」

「ねえ。平石を掘り出すことも進言させたのかな」

「そりゃわからんさ。久米さんが佳代子からその話を聞いて、その気なっただけかもしれないし」

「わかった。続けて」

「オーケー。西脇になりきって話してみよう」

久米のアトリエ構想は順調に進んでいった。

生駒という設計者が現場を訪れた。

近々、見積もり依頼が来るだろう。

ところがある日、久米からではなく、大阪本社のある大手建設会社から電話がかかってきた。大西村でアトリエの新築工事を受注したが、西脇工務店で人夫を出せるかという問い合わせだった。

西脇は意気消沈した。元請けとして受注するのと、下請けとして受注するのでは、金銭的に天と地ほどの開きがある。そして将来にも繋がらない。

地鎮祭の日取りが迫ってきた。受注した下請け仕事のひとつに地鎮祭式場の設営というのがあった。

西脇は考えた。一か八かやってみよう。

この工事が一時的にでも中止になれば、再度営業攻勢をかけるチャンスも生まれてくるかもしれない。そのときは改めて采家一族のものとしてアプローチしてみるのだ。幸いにも久米は地元に溶け込むことに気を遣っていると聞く。その点を上手に衝けばまだチャンスはあるはずだ、と。

西脇は野良猫を殺し、胴体は裏の畑の五右衛門風呂に捨て、首を盛砂の中に埋めた。

思惑通り、地鎮祭は混乱のうちに幕を閉じ、工事は中止となった。

久米はアトリエの新築工事はもうないと言っているが、そのうち気持ちが悪ければ再開するかもしれない。そう考えて工務店の西脇としてではなく、今後は采家の西脇利郎として久米に近づいていこうと考えた。

一方、西脇は、受注に失敗した原因は佳代子の情報不足だと責め立てていた。もともと可愛がっていた娘ではない。結局、苦しんだ佳代子は自殺してしまったが、いまさらあれは妻の連れ子で、自分が千寿に紹介したものだとは知らせる必要もない。どうせフライングは失敗したのだから、黙っているほうが得策だ。警察からは、遺体を引き取るようにと言ってきたが、無視しておればいい。

「ノブ、なかなか感じ出てるわよ。でも、そろそろ現在形の話になってくる？」

「ここからな」

岩穴座談会。

西脇はいつものように久米を喜ばそうとしていた。

しかし、予想もしなかったことが起きた。佳代子が妻圭子の連れ子であることを暴露されてしまったのだ。

そして思わぬところから反応が出てきた。健治だ。

朝、山に事前調査に行こうと屋敷の前を軽四で通りかかったときのことだ。

健治とぼったり会った。車を降りるなり健治がくっついてかかってきた。

「今から集会所に行くところでした。ちょうどよかったです。聞きたいことがあるんです。あれはどういうことなんですか？ 佳代子がおじさんの娘だったというのはい！」

西脇は健治の剣幕を怪訝に思いながらも、かねてから考えていた

とおりの言い訳をした。

千寿婆さんの身の回りの世話をさせるのに全くの他人よりはいいだろうと思っただし、親戚の人たちからなにか下心でもあるのかと勘ぐられたくなかった。だから、おおびらにはしなかったのだ、と。

「佳代子を嫌っていたというのは？」

嫌っていたわけではない。今言った理由で、日常的には距離を置いていただけのことだ。小学生の女の子の目には嫌っていたというように映ったのかもしれないが、と。

健治の目に、うつすらと光るものがあることに気がついた。西脇は事情が飲み込めた。健治は佳代子を愛していたのだ。その思いを今こうして自分にぶつけているのだ。

「しかし佳代子は死ぬほど苦しんでいた。距離を置いてなんて、それはあなたの勝手な都合でしょう。佳代子は人形のように操られていただけ。そういうことだったんじゃないですか。違いますか！」

痛いところを衝いてくる。そのとおりだ。

西脇は、他の男が圭子に生ませた佳代子を全く愛していなかったし、楽な仕事を世話してやったくらいにしか思っていなかった。むしろ、アトリエ工事の受注になんの役にも立たなかったことを、今でも恨んでいるくらいだった。

「僕は考えていたんですけどね。地鎮祭のときの猫の首。あんなこと、いくらなんでも佳代子ができることじゃない。おじさん。あなたでしよう。ああして、工事の着工を妨害しようとしたんだ。僕にはだんだん見えてきました。あなたは佳代子を使ってあの工事を取ろうと考えていた。ところが、できなかった。で、佳代子を責めた」「あんたが代わりに慰めてやってたんじゃないのか」

突然、助手席から声がした。

恭介が健治の話を遮り、

「それとも、慰め方が足りなかったのかな？」

と、にやけた笑いを向けた。

「なにだと！」

健治が恭介に殴りかかった。三人でもみ合いになった。恭介が荷台に載せてあった鉄の道具箱を手にした。

「やめろ！」

と、西脇は止めようとしたが、一瞬遅かった。

恭介が力任せに振り下ろした箱は、健治の後頭部を一撃し、血をほとばしらせて健治はその場に崩れ落ちた。

後頭部の傷は、素人目にも致命的なものだった。

助からない。とっさにそう判断した西脇は、すぐさま健治を下の川めがけて突き落とした。

そして恭介に、集会所のバケツで道の血を洗い流してから追いかけて来るように命じた。自分は屋敷の裏に車を停め、石段を駆け上がった。いった。

誰にも見られていないはずだが、屋敷の様子はどうかだろう。誰かが健治が出て行ったことを知ってやいないか、と思ったのだった。

幸いなことにまだ屋敷は静まり返っていた。みんなまだ眠っている。

離れに入り、健治が寝ていた部屋を探し当てた。ここにも健治が自分に会いに行ったというような印はない。

西脇はほっとした。しかし、なんとしても息子の犯行を隠し通さねばならない。そう思い詰めていた。

誰にも気付かれていないという安心感と、息子を守りたいという一心が、ここで西脇に意外なことを思いつかせる。

浴室に入り、シャンプーとリンスの空袋をひとつずつポケットに入れた。健治が風呂に入らなかったことにしようとしたのだ。犯行時刻を朝ではなく夜に。捜査をかく乱させることができるかもしれない、と。

門を出ると、恭介がバケツを持って走ってくるのが見えた。道の横を流れている水路の水を汲め、と身振りで指示してから、自分は血の付いた道具箱を水路で洗った。そして山に向かい、予定通り朝の八時前には采屋敷に何食わぬ顔で戻ってきたのである。

「うおおっ、ノブ、絶好調やん！」

「ま、そういうこともあるかと」

「じゃ、私も少し想像を膨らませて」

「おおっ、ユウもいくか」

「岩穴座談会のあった夜、健治さんは恭介くんに電話を掛けた。ほら、電話を貸してくれて、言ってたやん」

優がアレンジ版を披露した。

「私のは健治さんと恭介くんの視点から見たバージョン」

健治は、村の誰もがまだ寝ているような時間に起きだした。

恭介が自分のことを嫌っていることは知っていた。自分は采家を名乗り、東京の大学を出て宮司という職についている。つぶれかけた会社の跡取りである恭介にしてみれば、うっとおしい存在としか映っていないに違いない。健治にしても、恭介と会いたいと思ったことなどなかった。しかし、今日は恭介に確かめておきたいことがある。

待ち合わせの場所は屋敷の下。

石段を降りると恭介のバイクがすでにとまっていた。恭介がまだ暗い川面を眺めている。

こんな時間に会うことになったのは恭介の指定だった。六時に父親と会う約束がある、というのだった。

挨拶抜きで単刀直入に聞いた。

「恭介。佳代子はおまえの姉さんだったって、ほんとうか？」

恭介は驚く顔をするわけでもなく、そうだというようにあごを引いた。健治の顔を見ようもしない。バイクのガソリントankをさすっている。

「なぜ今まで隠していた」

「さあ。それは親父に聞いてくれ」

健治は佳代子が圭子の連れ子だったということが、どうしても信じられないでいた。

圭子は心のどこかに暗いところのある女で、西脇と一緒にになってからも、村のものとは全く交わろうとしない。年に何度かある行事にも、来るのは西脇だけ。采家の集まりでも、おもしろくない顔をして隅っこに座っているだけ。

村人や采家のもので、圭子に親しみを持っているものはいない。

健治もそうだ。むしろ嫌いだった。西脇も好きな叔父ではなかったが、最近はますます疎遠な存在になっていた。

それが、こともあろうに、佳代子があの子の娘だったとは。昨夜、健治は驚きが去ると、愕然とした思い、やるせない思いにとらわれて眠ることができなかった。

こうして恭介を呼び出したのは、事実を確かめておきたいという思いだけだったが、しらけた顔でバイクのハンドルをいじり始めた恭介を目の前にして、とんでもない怒りが胸の奥底から噴き出して

くるのを感じた。

一年前、佳代子は死んだ。

その死の原因は健治にはわからなかった。

ふたりは愛するもの同士として付き合っではいた。

しかし、その関係は恋人同士というには、あまりにも希薄だった。

健治が恋焦がれるほどに、佳代子は超然としていた。佳代子はあの写真のようにいつもふんわりと笑いかけながらも、するりと体かわして逃げていった。健治の前には、目に見えないほど細く、しかし強靱な一線が引かれてあるようだった。健治はそれを超えることができなかったし、佳代子も超えさせようとはしなかった。やがて実りのない恋は最悪の終末を迎えることとなった。

佳代子が死んだとき、健治は自分をどれほど責めたことか。

佳代子ほもっと真剣な求愛を待ち望んでいたのではないだろうか。

彼女の目には、自分の行為や気持ちが生中途半端なものに映っていたのではないだろうか。

自分は父の病気をその中途半端さの理由にしてはいなかっただろうか。

そして、佳代子はそのせいで自ら命を絶ってしまったのではないだろうか。

そんな悔やんでも悔やみきれない、そして情けない思いが健治を責めさいなみ続けていた。

しかし今、わかった。

自分の愛を佳代子が受け止められなかった理由が。

健治は奥歯を噛み締めた。

あの人は圭子の子であることを隠し、この屋敷に何らかの目的を

持って勤めていたのだ。それは千寿の遺産目当て、そして久米に近寄りたいという西脇の身勝手な目的のためだったのだ。

そんなことのためにあの人は身や心を縛り上げられていたのだ。

しかも、彼女の死の本当の理由は、圭子や西脇や、そしてこの恭介との関係に根ざしていたのだ。西脇は佳代子に辛く当たり、彼女はそれを悲しんでいた。そして西脇が口走った許しがたい言葉。いや、もしかするとあの男が……。

健治は激しい怒りがすでに全身に充満していることを悟った。その暴発を止められるのは、もう理性と強い意思だけであることも。「おまえんところの親父、どうせ、やましいことを考えていたんだろう」

怒りをなんとか抑えて、健治は静かに聞いた。

ここで恭介からなんらかの追悼の言葉が聞けていたら、事態は別の展開を見せていただろう。

しかし、恭介は、

「ふん。マザコンのやつに詮索されたくはないな」と、口の端から言ったのだった。

もはや怒りを抑えこむことはできなかった。

「なに！ もう一度いつてみる！」

「息子に惚れ込んでいる女でよかったじゃないか。なにもあんな女にちよっかい出さなくても」

「きさま！」

健治は恭介に掴みかかっていた。

しかし、恭介は鮮やかに身を翻すと、

「ふん。やるのか？ おまえ、うざいんだよ！」

と叫んで、道の脇に置いてあったバーベキューコンロを造作なく振

り上げた。

前もって準備してきていたのだろう。はっとして身構えるやいなや、コンロが風切り音を上げた。

健治は避けようとした。しかし、恭介の腕の振りの方が早かった。コンロが後頭部を打ち砕く鈍い音。全身の感覚を一瞬のうちに破壊してしまう痛み。

意識は急速に遠のいていった。

恭介は自分なりに考えていた。

采家の富は田畑や山林を始め、そのほとんどを千寿が所有している。ただ千寿はもう永くはない。子のいない千寿の遺産は兄弟姉妹に相続されることになり、我が家でも分け前に預かれるだろう。ただ、その取り分は多い方がいいに決まっている。どうせ健治の父親も先は長くない。しかも母親は狂人だ。

「恭介じゃないか！」

声をかけられて、恭介の心臓は縮みあがり、もう少しのところで駆け出しそうになった。しかし振り返った目に映ったのは父親の姿だった。

「おまえ、なにしてたんだ。待ってても来ないから、先に行こうと……。あっ！」

西脇がバイクの後ろに倒れている健治に気がついた。

駆け寄って健治の息がないことを確かめた。そしてさっと辺りを見回し、誰にも見られていないと判断すると、

「早く！」

と、健治の体を引き摺り、川への斜面の上まで押し出した。

健治の体はどこにも引っかかることなく、そのまま川面に向かって落ちていった。

「親父！」

「後で聞く!」

「後是一緒」

「よくもそんな、恐ろしいでたらめな思いつきを並べられるな」

「お互いさま」

「それにしてもなぜふたりとも西脇ではなく、恭介が実行犯なんや?」

「んー、なんとなく」

「こんな村のことやぞ。きつとみんな朝は早い。誰にも見られていなかったとしたら悪運が強いとしか言いようがないな」

「そうやね。ね、ノブの想定ではバケツに汲んだ水で血を洗い流したことになるけど、集会所のバケツ? 取りに戻るより、お屋敷の方がずっと近いけど?」

「誰か起きだしてるか、わからない」

「そんなこというなら、民家の間をバケツ持って走るほうが、よほど怪しまれるけどなあ」

「どこのバケツでもいい。たいしたことじゃない。おまえこそ、バベキューコンロはないだろ。前もって用意してきたんなら、鉄パイプとか」

「山登りに行くんだから」

「ないない」

「でも、西脇さんも恭介くんも大きな荷物を運んだって橘さんが。

バケツとコンロ」

「バケツはともかく、コンロは却下!」

「まあね。いずれにしろ、今のふたりの推理はでたらめ。完全な思いつき」

「言い切ってくれるやないか」

「西脇犯行説……」

優は立ち止まって、眉をそつと撫でた。

「鍵は佳代子さんの事件」

「工事が取れなくて、かっとなった西脇が、佳代子を殺したって説か？」

「うん。岩穴座談会るとき、奈津さんの出現でうやむやになったけど、あのとき、健治さんは西脇さんに、なにかを言いかけてた」

「ありえないことではないよな」

「そうだとすると、健治さんが西脇さんに復讐しようとしたこともありえない話ではないし、今のふたりの推理も現実味があるんやけど」

「そうやな。でも、工事が取れなかったからって、娘を殺す動機としては弱いような気がするよな」

「うん。たとえ妻の連れ子だとしてもね」

雨が額にあたった。

「あ、降ってきた」

「おい、明日は快晴とちがうんか」

「へへ」

「こいつ」

「うーん、やっぱり、どうもしっくりこないなあ。それに、もうひとつ。西脇さんと山の中で出会ったときのことも気にかかる。あのとき彼は、下痢をして手を洗いに行ったといった」

「ああ」

「急に下痢というのも不自然やけど、そう言われてしまえば、そうでしたか、としか応えようがないしねえ。でも、よりによって息子が殺されようとしているときに、たまたま用を足しに、その場を離れていたというのもおかしい話やんか」

「単に運がなかっただけとか？」

「でも、釈然としない。それに、ズボンの血」

「こけた、というのも、なんかなあ」

「健治さんの血？ まさか息子の血？」

「朝食のとき、ズボンは破れていなかったし、血もついていなかったと思う。それにアマガハラノから村まで降りて、健治を殺してからまた登ってきたとも考えられない。例の山伏じゃあるまいし。それに時間的に合わない。健治が殺されたのは、もっと早い時間帯……」

「とにかく、事件は解決、という気にはどうしてもなれない、というところよね」

「そうやな」

「ま、それは置いといて、次は、アマガハラノで恭介くんが殺されたときのことを再現してみようか」

「あいつの場合は簡単。木元が犯人だとして」

「うん」

「恭介は久米さんや道長さんと別れ、父親の元へと急いでいた。と、目の前の笹が、急にザワザワと動いて、恭介はビクツとして足を止めた。笹の中から姿を見せたのは木元だった。驚かされて気を悪くした恭介は、罵声を浴びせかける。このイノブタやろう、うろちよろするな、とかなんとか。こう言われて、普段から怨みを抱いていた木元が切れた。持っていた草刈鎌を振りかざす。逃げる恭介の背中に一撃を」

「そうね。その間にひとりでいた時間があつたのは、西脇さんと木元くんだけ。やっぱり、それでいいのかな。あ、ヤバ！」

「げ！」

突然、猛烈な雨が落ちてきた。

「引き上げろ！」

生駒は、もと来た道を駆け出した。

「あっ、滝は！」

「ひとりで行ってこい！」
「もう！」

第 19 章 「クスノキが語ったこと」

懐中電灯に照らし出された山の木々には、彼らの聖域に紛れ込んできた人間を糾弾しているような圧迫感があった。

深い闇で、その懐を覆い尽くそうとしている。威嚇するようにザワツと動き、聞き耳頭巾で聴くまでもなく、出ていけと言っているようだった。

生駒は以前は山登りが好きだった。緊急の場合にと、いつもザックに入れていたヘッドランプの世話になったことも一度や二度のことではない。なんとか里まで降りようと、頼りない明かりひとつを真つ暗な山道に落としながら慎重に歩くときの心細さは、経験したものでないとわからない。

昼間の山は賑やかで、そこかしこから鳥や虫の声が聞こえ、美しい木々の葉や野草などが目を楽しませてくれる。木漏れ日の中を吹き通る風の匂いも気持ちいい。

しかし陽が落ち、暗闇が山を支配するようになると、絵本のページをめくるように世界は一変する。祖先から受け継がれた闇への恐怖がこれほどまでに強いものだったのかと思ひ知らされることになるのだ。

しかも、これからますます夜が更け、異次元の世界に棲むものたちの時間になるのかというときに山に入ろうというのだ。人身御供にされたサヨが通った道を辿って。

先頭に行く生駒は、懐中電灯の光が照らす地面に気持ちを集中しようとするが、その光が照らし出していない闇の方へと、どうしても意識が向いてしまう。

後からついてくる綾と優の息遣いや足音を聞き逃すまいとした。

連日の雨のおかげで地面が湿っている。じつとりとした三人の足音をかき消すように、せせらぎの水音が闇に響いていた。

風もなく蒸し暑い。生駒は、なんだか気持ち悪いな、という言葉飲み込んで振り返った。

綾が微笑みかけてきた。

少し緊張はしているが、うれしくてしかたがないという面持ち。

父の橋は出かけていき、今夜は帰ってこないという。

生駒と優を訪ねてきた綾は、真っ黒なTシャツに黒いジーンズといういでたちだった。夜の闇に溶け込む黒という色が、聞き耳頭巾を使うときの彼女なりのこだわりなのだろう。

事件から二週間が経っていた。

梅雨空の中を、生駒と優はすべての予定をキャンセルして大西村を訪れていた。

久米から、健治と恭介の葬儀がある、という連絡が入っていたからだ。

捜査は進展していた。

原田の町はずれにある西脇工務店の資材置き場から、血液反応のある鉄パイプが発見されていた。健治の血液と一致し、西脇利郎が容疑者として拘留されていた。

また、屋敷の納屋から押収した草刈鎌のひとつからも血液反応が出ていた。こちらは恭介の血と一致。木元が拘留される決め手となったものだった。

この間、優はありとあらゆる推理を展開していた。

しかし、どれも決め手に欠けていた。

いつも最後には西脇、木元犯行説は受け入れられない、という漠

然とした結論になってしまい、自分たちの情報の少なさを悲観するのだった。

もう二度とあの村に足を踏み入れることはないだろうと、生駒は思っていた。しかし日が経つにつれ、少しの懐かしさと心残りが生じていたのも事実である。

優は違う。単に葬儀に出席するという目的だけではなく、情報収集のために少しでも早く行きたいというのだった。

ふたりは葬儀の前日に屋敷に落ち着いた。

久米は今回はお構いをしないが、離れを自由に使ってくれたらいいといってくれた。おかげで、再びさまざまな現場を検証して回ることができた。

ただ、健治が寝た部屋や木元の部屋はすでにきれいに片付けられて新しい発見はなかったし、猪背川にも降りてみたが、ここを落ちたら無事ではすまないなと思っただけでなにも見つからなかった。

川向こうの畑からどう見えるのかも確かめてみた。屋敷がよく見えた。犯行現場は木々に遮られているが、屋敷のすぐ前の道も、裏の空地も見通せた。そこなりの視力があれば、誰が歩いているかも十分判別できる。ただ、それだけのことだった。

集会所も覗いた。たまたま通りかかった佐古に頼んで倉庫の鍵を開けてもらおうと、「防火」と書かれた赤いバケツが十個重ねられてあった。数が減っていませんかと問うても、佐古は首を傾げるだけで、それ以上の発見はなかった。

神社まで再び行ってみたし、滝を探しにも行った。そこでは予想に反する光景が生駒と優を驚かせたが、アマガハラノまで行く時間はなかった。

あの場所まで西脇や恭介や木元の気持ちになって歩いてみることに

によって、あいまいな時間の概念がはっきりしてくるかもしれないのに、と優は残念がった。

そして今、いつの間にか連絡を取り合っていた優と綾の手はずによって、無理やり引っ張られるようにして、深夜、三人は神社への夜道を辿っているのだった。

「奈津さんはときどき、夜にいないことがあるん？」

綾に聞いてみる。自分の声に、久しぶりに人の声を聞くような気がした。

気持ちが紛れ、緊張が少しほぐれた。

「ううん」

聞き耳頭巾は綾のものではない。

普段は奈津が持っている。綾はそれをいつでも気が向いたときに借りることができるという。今晚も奈津の家に借りにいったのだが、奈津はおらず、綾は鍵のかかっていない扉から家に入り込んだのだった。

「勝手に持ち出してもよかったん？」

「うん」

「でも、奈津さん、どこに行ったのかな。こんな遅い時間に、いなって」

優の声は、ほっとするような温かみのある声だった。

「千寿おばあさんのお見舞いじゃないかな」

「こんな時間に？」

「うん。泊まってくることもあるんだよ」

「へえ」

奈津の家は、ある意味で生駒の想像を裏切った。

生駒は、粗末で狭く、ものが溢れかえった小屋のようなあばら家を想像していた。

生駒達が奴隷部屋と呼んだ采屋敷の裏手にある季節労働者のための長屋と比べても、さらに侘しい住まいかもしれない。本家と分家の違いという生易しいものではなく、采家の人々が出戻りの娘にいかん辛くあたったのかということがわかるかもしれない。しかも奈津はあの性格だ。仙吉が助けているとはいっても、限界があるだろう。貧しさと反目の中でどんな暮らしをしているのだろうか。そう思っていた。

しかし、違った。

千寿の住んでいた屋敷とは比べるべくもないが、明るく伸びやかな斜面に、おおらかな平屋建ての家が建っていた。女性が長年ひとりで住み続けてきたにしては広すぎる家だし、しっかりとした造りの蔵が一棟、納屋が三棟、こざっぱりした庭に並んでいた。

やがて山道の勾配が緩くなった。石の鳥居の前に立っていた。

頭上を覆っていた樹冠が後退し、空が見えた。

細い月の明かりが暗い空に青さを与え、梢の輪郭を目でなぞることがができる。その青みが境内をほのかに照らし出している。

鳥居は闇の世界と光のある世界のまさしく結界の役目を果たしていた。

三人はめいめい懐中電灯の光を鳥居に投げかけた。

丸い黄色い光が、なにかを探しているように石の表面を舐めていく。

「あっ」

紐のようなものがぶら下がっていた。

三メートルはあろうかという大きな蛇。目が合った。

鳥居の鴨居に体を巻きつけた青大將が頭をぶらりと下げ、訪問者に顔を向けていた。三つの光の丸が重なり、蛇の頭を照らし出す。ちょうど生駒の眼の高さ。

まったく無表情だが、光で目を射られて興奮したのか、ブルリと体を揺すり、ちろりと舌を見せた。

「通してくださいな」

綾が声をかけた。そしてこともなげにその頭の下をくぐっていく。蛇はそれが合図だったかのように、するすると後退し、頭を持ち上げていく。そして鳥居の一番上の梁に体を横たえ、まだ下にいる生駒と優を監視する体勢をとった。

鳥居をくぐらないでも、脇の草むらを通って神社の境内には入っている。それでもなぜか鳥居をくぐらなければならないような気がして、生駒と優は蛇を見上げた。

綾が再び声をかけた。

「通してあげてくださいな」

綾に頼んでもらって、生駒と優は心持ち頭を下げて蛇のおわしませう鳥居をくぐったのだった。

「この木」

綾が一本の木の前に立った。

「クスノキ？」

生駒が木の葉に触れようとすると、綾があわててとめた。

「木がびっくりするわ。それにもっと小さな声で話してね」

綾の懐中電灯がふっと消えた。生駒と優も倣ってスイッチを切る。なにも見えなくなった。

境内中央部の平地には月の光が落ちているが、この大木の下までその光は回りこんでこない。全くの暗闇が、特別な気体が木の間に淀むように溜まっている。

手の平さえも見えない。体がまっすぐに立っているのかどうかさえわからない。

めまいがしそうになる浮遊感。

足の裏の感覚は確かに土の上に立っていることを伝えているが、それさえも徐々に薄れていく。

生駒は足を少し動かし、感覚を呼び戻すと同時に、つま先を開いて休めの姿勢をとった。

衣擦れの音がした。綾が頭巾を取り出したようだ。

「気をつけて」

優の声がかすかに震えている。

綾はこの暗闇の中でも目がきくのだろうか。華奢な体が動いたことを感じる。

生駒はじっと暗闇の中を見つめていたが、依然としてすぐ目に前にいるはずの綾の姿も、クスノキの幹もその形を表してこない。

目や耳や肌の感覚を総動員して前方に注意を向けた。

虫の声が急に意識に昇ってくる。弱々しい小さな音が瀬音に混じっていた。夏前のまだ小さな虫が懸命に送るメッセージ。

今までも鼓膜はその音を捉えていたのだろうが、脳はそれを取るに足らないものとして意識に昇らせることなく無視していたのだ。それがようやく、頭の中に響いてくる。

しかも単に虫の声というだけではない。それらが数メートル離れた位置で鳴き交わしていることも、一方の虫が単調に鳴いているだ

けなのに、もう一方が徐々にいらだつようにピッチを速めてきたことに気がついた。

こうして感覚を研ぎ澄ますことを、もうどれくらい前から経験していなかっただろう。

生駒は肩の力を抜いて、夜の山の気に全身を委ねようとした。単に蒸し暑いだけだと感じていた谷あいの空気の中に、苔や草々の発する気が独特な臭いを混じらせていることを鼻や肌が感じ取った。

川の流れが、水の動きが、あたりに小さな飛沫を散らし、湿り気を帯びた空気のかすかな動きを作り出していることも肌は感じ始める。

快感だった。

徐々に目がものの形を捉え始めた。

黒一色の世界から、かすかな濃淡の違いが見えてきた。

書割のような輪郭だけの世界が、月明かりの反射を受けて浮かび上がってきた。

綾が木に触れんばかりの位置に立っているのが見えた。

それは自分の吐く息が届きそうなほど間近な位置だった。

まだ頭巾はかぶっていない。わずかに足を開き、頭を垂れて瞑想している。

生駒は息を殺して見守った。

やがて、綾は手に持っていた頭巾を丁寧に被り、そのまま体を木の幹に寄せていく。ゆっくりと横を向くと、頭巾を被った左耳を幹に触れさせる。

生駒の目は暗さに慣れ、もはや綾の表情さえも見分けられるよう

になっていた。

綾は目を瞑っている。

唇をゆるく閉じ、まるで死んだ人のように血の気の引いた顔をしていた。やわらかく笑っているようにも見えるし、神妙な顔をしているようにも見えた。

生駒は綾が今まさしくこの木と交感しようとしているという確信を持った。

すでに木の声を聞いているのかもしれない。右耳を押さえている小指がかすかに震えていた。

と、急に綾が目を開けた。

そして頭を木から離す。綾の顔は先ほどまでのうっとりとしたものから、厳しい非難の表情に変わっていた。

どうしたのだろう。

しかし、声を出して聞くことはためらわれた。

綾の視線は生駒の後ろに向かっている。生駒は振り返った。しかし、漆黒の闇が広がっているだけ。

綾が生駒の袖を引いた。

三人はクスノキの後ろに身を隠すと、息を殺して、鳥居をくぐってくるものを待った。

依然として真っ暗闇の中、なにものかの形も光も、そしてどんな物音さえ聞こえなかった。

じりじりとしながら、生駒は綾を信じて、身を固くして待った。

やがて生駒の眼が、ふたつの明かりが木々の間にちらつくのを捉えた。

耳が瀬音や虫の声ではない音を捉えた。
近づいてくる。

生駒は急に現実的になった。

こんな深夜に小学生の女の子を連れて、山の中で木の声を聞いているのだといって、誰がまともに取り合ってくれるだろう。村人なら誰もが綾を知っているだろうし、彼女と聞き耳頭巾のことも知っているかもしれない。

だが、だからといって、生駒に対する冷たい視線は避けられないだろう。警察ならなおさらだ。

しかし、ふたつの懐中電灯は、綾を探しているふうに動き回るわけでもなく、ぴたりと山道を照らしながら進んでくる。

鳥居でも立ち止まることなく、どんどん近づいてくる。

輪郭が見えてきた。男のようだ。ひとりは大きな荷を肩に担いでいた。

男たちは生駒達が隠れている木の前を通り過ぎていく。

と、思わず生駒は声を出しそうになった。

久米と橘だった。久米が橘を従えて、しっかりとした足取りで不動明王の祠の前を横切り、せせらぎを渡り、山への道を登っていく。

ふたりの懐中電灯の光が遠のき、木立に隠れてほとんど見えなくなった。

生駒が木の後ろから出ようとすると、綾にまた袖を引かれた。みると、今度は小さな点のような光が神社に入ってくる。

異様な成り行きに生駒は固唾をのんでその小さな光が近づいてくるのを見守った。

光は生駒達が隠れているクスノキの前まで来て止まった。

「綾ちゃん。出てきなさい」

聞き覚えのある声。それは美千代の声だった。

「はい」

美千代は、先に行った久米と橘の後を眼で追っていた。

生駒達が暗闇の中を木の根につまづきながら出ていくと、ようやく三人に顔を向け、生駒と優をかわるがわる品定めするように見た。

「お屋敷のお客様……」

生駒が挨拶をしようとする前に、綾が小さな声で、しかしするどく「はい」と応えた。

美千代が、その短い綾の言葉にかぶせるようにいった。

「木の話は聞けた？」

綾は黙っている。

美千代はその様子をじっと見ていたが、ふっと笑ったような声を出した。

「そうか。それはまた聞きましょう」

「はい」

「あのシデの木はおしゃべりよ。今度聞いてみたらいいわ。でも、今晚はもうだめ」

美千代はそういって、久米たちが消えた闇の中を見透かすように目をやった。

「賑やかだから。人が多すぎて。木は、今晚は何事が起こったのかと、驚いていることでしょう。また別の日にやってみなさい」

そういって美千代は再び生駒と優に視線を合わせてから、くるりと背を向けた。

再び、男たちを追っていくようだ。

「おばさん。どこに行くんですか」

綾の声に、美千代が足を止めた。

振り返り、顔をゆがめた。

口が開いた。

生駒は耳をふさぎたい衝動に駆られた。恐ろしい言葉が美千代の口からほとぼしり出るような気がしたからだ。

しかし、美千代の口は開いたまま、迷っているかのように、言葉はなかなか発せられない。やがて出た言葉は、とっさの想像とは違っていたが、それでも生駒を驚かせるには十分なものだった。

「許せない」

美千代が弱々しいため息をついた。

もう久米達の行方に眼をやろうとはせず、

「さ、帰ろうか」と、綾の頬を撫でた。

聞き耳頭巾をそつと脱がせ、もう一度、綾の頭や肩を優しく撫でた。

生駒は、久米と橘の行動と、美千代のこの行動の意味を知りたかったが、とても問える雰囲気ではなかった。

彼女の反応が怖かったということもある。

それに、綾の手前もある。綾は、自分の父親がこんな夜更けに山に登っていったことの意味を知っているのだろうか。だが、少なくともここでは、父親の前に姿を現したくはなかったのだから。

そして美千代に姿を見られることもうれしくなかったのだから。

しかも美千代は、許せないといった。

その言葉が意味するところは、けっしておおびらにしてもいいこ

とではないだろう。

少なくとも、夜更け、木や動物や物の怪のものとなった山の中を、人目をはばかって久米達は行動しているのだから。

荒れ果てた神社で、気の触れた人から根掘り葉掘り聞き出すようなことではない。

美千代が先頭に立って村に戻り始めた。その後ろを綾が黙ってついていく。そして優、生駒と続く。

鳥居の上の蛇はもう姿を見せなかった。

歩きながら、生駒の頭の中は、今見たことの意味を考えることでいっぱいだったが、それでも、空に瞬く星がやけに近く感じられたし、時折流れてくる谷川の空気が首筋を撫でていくのを感じることができた。

暗闇の中で研ぎ澄まされた感覚はまだ生きていた。

来るときには見えなかったさまざまなものが目に入った。

切り通しの岩に張り付いたシダにとまった夜露や、葉をすぼめた野草の群落が見えたし、妖艶な緑色の羽を持つ小さなカナブンの仲間が灌木の柔らかい葉をむさぼっている音まで聞こえるようだった。

美千代が立ち止まった。

屋敷の裏の空き地。生駒の黒いミニバンが闇に溶け込むように停まっていた。

木の陰に動くものがあつた。

「あっ」

黒い塊がムクリと立ち上がった。

「おばあさん」

奈津は黙って生駒達一行を眺めた。

美千代の顔は奈津に向けられているが、なにも言わない。
奈津も沈黙したまま、三人と向き合っている。

「こんなところでなにしてるの？」
痺れを切らして綾が聞いた。

奈津はそれには応えず、

「今晚、見たことを誰にも言わないことじゃ
と、搾り出すような声で言った。

綾が頷いた。

「そちらの客人もじゃ」

びしりという。

生駒は黙っていた。しかしむっとした。

案の定、優が、

「お話ししていただけませんか。どういふことなのか」と反発した。

奈津は顔を突き出し、眼を見開き、まじまじと優の顔を見つめた。
そして、

「聞きたいか」

と、にやりと笑った。

いや、笑ったように見えたのは一瞬のことで、単に顔を引きつら
せただけかもしれない。

急に不安が襲ってきた。

この老婆や美千代は、もしや、というような不安。

襲ってくる？ 呪い？ 許せない？

生駒は身を硬くした。滲み出したアドレナリン。奈津への怒り。

五人は黙っていた。

生駒の怒りに不遜な気持ちが混じってきた。

美千代は神社からここへ戻ってくるまで一言も発していない。し

かし、奈津がここで待っていることは知っていた。生駒や綾をここまで連れ戻してきて奈津に引き渡し、指示を待っているかのように呆然と突っ立っている。

その美千代に向かって、奈津は、帰れ、というように手を振った。美千代は生駒や綾を振り向くこともなく、そして一言も発することなく道を下っていった。

先ほどはしっかりしていた美千代の足取りが、見るからにふらついたものになっている。

懐中電灯もつけず、月明かりを頼りに歩いていく美千代の後姿は肩が落ち、わびしかった。

そういったことがますます生駒の怒りをかきたてた。

いったい、この老婆はどういう神経の持ち主なのだ。祟りじゃ、などと人を愚弄するようなことを言ったかと思えば、こんな夜中、息子を亡くした母親に人の後をつきさせておいて、それに気づいたものに口止めまでする。

まるで、夜中にうろつきまわる妖怪の類ではないか。

いや、もしかしてもうすでに実態は……。

生駒は奈津の顔に懐中電灯の光を当ててやりたい、今どんな顔で、どんな目つきで自分たちを見上げているのか、はっきりと確かめたいという衝動に駆られた。

「私、なにかおかしいこと、言ったかな」

優が表面的には穏やかにいった。

しかし、明らかに相手を非難する調子が含まれていた。

「あんたらには関係のないことじゃ」

奈津がぴしゃりといった。

「美千代さんが私たちをつけてきたのは、あなたの指示じゃないの？　どういうことなんです？　関係ないこと、ではすまないでしょう」

優の口調はまだ穏やかだ。しかも冷静だ。

美千代が久米や橘をつけていたことは明らかなのに、自分たちをつけてきたと鎌をかけている。

「ん？　あんたらをつける？　ヒヤッ、ヒヤッ、ヒヤッ。ばかげたことを！」

奈津が口を開けて笑った。

ここで綾が声を聞かせてくれないなければ、生駒は老婆に光を投げかけていたことだろう。

「このおじさんもおねえさんも、私が誘ったのよ。とてもいい人たち。おじさんは木の話も聞けそうな気がするの。もしかすると、私よりもっと」

奈津がたちまち真顔に戻った。

「気になっていたの。お父さんは夜中にどこに出かけるのだろう。なにしてるのだろうって。そんなことを考えていると、なぜこの村に引っ越してきたのだろうということもわからなくなって……。それは誰も教えてくれない。村の木やお屋敷の木も、そんな話はしてくれない。おしゃべりな鳥も。だから、神社の大きな木に聞けばなにかわかるかなと思って」

奈津が綾を見つめていた。

「それに、ほかにも気になっていたことがあるの。石がもろくなつて割れるって。それで大変なことになるって。ホトトギスが言った」

老婆の口が、スゥと音をたてて息を吸い込んだ。
なにか言おうとしている。綾が口を閉じ、言葉を待った。

奈津が小さく笑った。

「それなら、獅子岩様の後ろのナラの木に聞いてみるといい。あのふたりがああして何度もあそこを通っているのなら、きっとその行き先を教えてくださいやろうて。が、あのナラに頭巾を使うには、空気のようにならんとだめじゃ。小さな空気の粒のようになって、あの木の中に染み込んでいくような気持ちにならんな。聞こう、聞きたいというおまえの意識がまさってはいかんぞ。それほど難しい木じゃ。クスノキと同じように。しかし、綾よ」

「はい」

「木に教えてもらわなくても、もう気がついたじやろう」

「……」

「あのふたりが、なにをしようとしているのか。じゃが、綾はそんなことに関わってはいかんぞ。そしてこちらの客人も」

「でも」

綾が納得できないという声を出した。

「ん？」

綾はそれ以上は、なにもいわなかった。

どう納得できないのか、整理ができていないのだろう。父親の行動に関わるなといわれたことに納得できないのか、気がついただろうと言われてもなにも思い当たることがないからなのか。

優がまた口を開いた。

「崇りってなんですか？」

「……」

「失礼じゃないですか。あんなこと言うなんて」

「それも、あんたには関係ない」

「じゃ、誰に関係するんです？」

「フフ、聞く耳を持たないものには、どんな言葉も意味がないようじゃの」

奈津はそう言うなり、綾の肩を抱いて優しい声を出した。優は無視された。

「石の件は、良くぞ聞いてくれた」

「お屋敷の庭の石のこと？」

綾が優を気にしながら、奈津に問いかける。

「うーむ。どうじゃろの」

奈津がますます優しい声を出した。

「で、綾、今日はどうじゃった？」

「はい……」と、綾は唸った。

奈津が綾を抱きしめている。

「いつもと同じように、お父さんと久米のおじさん、そして美千代お婆さんがくるって……。木はなんだか不愉快そうで……」

「ハハハハ。綾よ、おまえはもう一人前じゃ。わしにはもう教えることがない。いろいろ、自分で工夫してみるといい。さ、わしは帰るぞ」

奈津はそう言って、すたすたと暗闇に紛れていった。

三人は屋敷の裏手に取り残された。

なかなか動こうとしない綾の肩を今度は優が抱いた。

屋敷は黒い塊となって夜気に佇んでいた。

生駒の車の傍らではサラサウツギが小さな花を咲かせ、綾や生駒の話聞いていた。

生駒はそこに、サヨの人型を見たような気がした。

梅雨明けが近い。
もう蛍の季節は過ぎ去っていた。

第 20 章 「うつろになずむ」

綾は屋敷に泊まっていくという。

生駒も優も綾をひとりきりの家に帰らせる気はなかった。

綾は屋敷に入ってから、思いつめた表情で優の手を握ったままだった。

生駒は三人分の布団を敷いた。

川の字になって寝る。横になって目を閉じたが、さまざまな情景がまぶたの裏に浮かんでは消えた。

「奈津さんと綾ちゃんはどういう関係なん？」

優が綾に話しかけた。

綾もきっかけを待っていたのだろう。堰を切ったように話し出した。

橘が綾を連れて大西村に越してきたのは、数年前の春のことだという。

父、文雄は東京のある消防署の隊員をしていたが、ある日突然、それを辞め、田舎に引っ越すと言い出したという。父と娘は、母親の反対を押し切って、ふたりでこの村にやってきた。

綾はこの山奥の村で、のびのびとした日々を過ごすことになった。村に同世代の子供はいなかったが、村の生活にすぐ溶け込んだ。

多くの村人は無関心を装っていたものの、中には、素人農家を始めた橘に手取り足取り農作業を教えてくれる人もいたし、綾をまるで自分の娘や孫のように可愛がってくれる人もいた。美千代や佳代子もそうだった。なかでも佳代子は、なにかにつけて綾をかまってくれ、勉強を教えてくれたり一緒に遊んでくれたりした。綾は母親

に甘えるような、また、年上のお姉さんにいろいろな面で追いつこうとするような態度で佳代子を慕った。

そして、奈津も綾にとって特別な存在となった。

ある日、綾は奈津に誘われて神社に行った。からっと晴れた日の夕方のことだった。

ふたりは獅子岩の前に腰掛けた。そこで奈津はこういったのである。

「なにか聞こえるかい？」

「セミの声」

「ああ、あれはヒグラシというセミじゃ。それから？」

「川の音」

「ふむ。それから？」

綾はしばらく耳を澄ました。

「風が葉っぱを揺らす音」

「そうじゃな。それから？」

「うーん。あっ、虫の声」

そうしたやり取りを、綾は楽しんでいた。

その頃には都会暮らしより、自然に包まれたこの村で暮らすことが好きになっていったし、畑仕事を手伝うことにも慣れて、土を触ることも、ミミズを掴むことも、抵抗なくできるようになっていた。

たくさんの木々や草の名前も知ったし、それらの利用の仕方も覚え始めていた。

半年も経たないうちに綾はすっかり田舎の娘になっていたのである。

なにが聞こえるかという奈津の問いに、綾はいくつ答えただろう。木の枝がきしむ音、葉っぱが地面に落ちた音、トンビの鳴き声、

シジュウカラの飛ぶ羽の音、蜂の羽音……。

このあたりまでは実際に聞こえたか、目で見た情景から、音を想像して口に出すことができた。

しかし、木が土の中から水を吸い上げる音や、気温が徐々に下がって地面の土が締まっていく音や、何十年もの間に降り積もった落ち葉が朽ちていく音、などになると、もう想像でしかなかった。

というよりもはや思いつきを並べただけのことだった。

やがて、もうなにも思いつかないという頃になって、やっと奈津は問うことをやめ、綾の両頬を手で包むようにして、じっと目を覗き込んだ。

そして両手を綾の耳に動かし、

「おまえにいいものを貸してあげよう」といった。

奈津が手提げ袋から取り出したもの。古びた布切れ。

それが聞き耳頭巾だった。

村に伝わる不思議な頭巾。

これを被ったものは、木々や生き物たちの声が聞こえ、理解できるという。

ただ、誰もがこの頭巾の力を引き出せるということではない。

感受性、とひと言ではいえないが、一種の靈感あるいは自然の力を生あるものとして受け入れることのできる本質的な能力を秘めたものだけが使いこなせるという。

「おまえならこの頭巾の力を、わし以上に引き出せるかもしれん」
う」

奈津はそう言って、使い手のひとりとして綾を選び、頭巾にまっ

わるさまざまな言い伝えなどを話しながら、使い方を教えたのだった。

綾が学んだことは、頭巾の使い方ばかりではない。

奈津の話を聞くことは村や采家の歴史を学ぶことにもなった。

そしてこの大西村を取り囲む山に住む生き物たちについても、多くのことを知ることになった。

あんまり覚えてないけどね、と綾は笑ったが、案外、奈津に続いて村一番の物知りかもしれないかった。

「へえ。すごいやん！ さっき、奈津さんが言ってたやん。一人前って。免許皆伝ね」

優が感心した。

「ううん。そんなことないわ」

とはいいいながら、綾はうれしそうだ。

「でも、綾ちゃんも村の人じゃないやんか。こんなことを言うといけないかもしれないけど、いつかは出ていくかもしれないし。そのときはどうするん？ その頭巾」

「うん。私もおばあさんにそのことを話したの。そしたら、私の好きにすればいいって」

「へえ！ さすが免許皆伝！」

「そんなのじゃないって。私ね、この村を出ていくかもしれない。でもね、そうなくても、いつまでもわたしはこの村の人間なの。そう考えて先のことは気にしないことにしたんだ。それにね、まだ半人前だし。半人前というのも厚かましいかな。時々、木や鳥が互いに話しているのを盗み聞きできる程度だから」

「なるほどなあ」

生駒は心を動かされていた。

奈津という村の呪術師ともいうべき長老に才能を買われ、その後継者に選ばれたことを抵抗なく受け入れた少女。

普通の小学生としての学校生活を送り、父親の畑仕事を手伝いながら、聞き耳頭巾の使い手としての研鑽を積んでいる。

「偉いなあ」と、自然に言葉が出た。

綾ははにかんでいたが、ふと、思い出したようにいった。

「ごめんなさい。さっきは。あんなところまで付き合ってもらったのに、おじさんに試してもらえなくて」

「ううん。そんなに大切なもの、僕が触ってみてもいけないんじゃないかな？」

「いいの。おばあさんもいろんな人にかぶらせてみたんだって」

「へえ。そんなもの？」

「うん」

「美千代さんものそのひとり？」

「うん」

「彼女はもう聞き耳頭巾を使わないの？」

「んーと、たぶん」

綾の口がとたんに重くなった。

優があわてて話題を変えた。

「聞き耳頭巾ってさ、日本昔話では、庄屋さんの庭の大きな石をどける、って話しやったやん。なんか、似てるところがあるよね」

あの昔話も誰かの完全な創作ではなく、もしかするとこの村の伝説が形を変えたものかもしれない。

この村ではおぞましい石だが、昔話の中では、大金持ちの庄屋が他の村人の田に水をいきわたらせないために置いていた石だ、とい

うことになっている。決して村人に幸せをもたらす石ではない。

もしかすると、あのサヨと吾一のおぞましい事件があったからこそ、聞き耳頭巾の使い手の若者が庄屋の娘を嫁にもらうというハッピーエンドの話が作られたのかもしれない、と生駒は勝手な想像をした。

優と綾が聞き耳頭巾の話している間に、生駒は考えてみた。

美千代は奈津に命じられて久米達の後をつけていた。

ところが生駒達を見つけてしまい、久米の後をつけることは断念して引き上げた。

美千代は彼らを許せないといった。

そして綾が聞いたクスノキの言葉。

いつものように……。つまり、久米や橘の行動や奈津や美千代の行動は、今夜だけのことではないということだろうか。

奈津や美千代は以前から監視していたということなのだろうか。

聞き耳頭巾で聞いた情報を頭から信じている自分に気がついて、生駒はひとり照れ笑いを漏らした。

「私、さっき、おばあさんにも言ったけど……」

「なに？」

「お父さんと久米のおじさんのこと」

綾が核心に迫ろうとしていた。

「お父さんは私の喘息のために、空気のいいところを探していたわ。初め、探していたのは、東京の郊外。でも、決めたのはここ。全くの田舎。山奥っていった方がいいところ。しかも東京から遠く離れて。だからお母さんは絶対に反対。経営している学習塾は辞めたくなかったから。でも、お父さんは私のためにはここがいいって」

しかし綾は、今は少し違う考えをしているという。
「お父さんがこの村に決めたのは、久米のおじさんから誘われたからなんだ」

久米は橘親子を屋敷に呼び、泊まらせることがこれまでもたびたびあった。

聞き耳頭巾を試してみようとする夜以外は、綾は佳代子と過ごしていたが、ふたりが寝てしまってから久米と橘はずっと話し込んでいたようだった。

まだそのときは、彼らがなにを話しているのか気にもとめていなかったが。

ところが最近のある夜のこと。

佳代子はもうなく、綾はひとりで寝ていた。その夜は眠りが浅かった。

奈津から平石にまつわるおぞましい伝説を聞いた夜だった。
ふと目が覚めると、夜中の三時だった。

綾は布団を抜け出した。頭巾は奈津から借りたままだ。
窓辺に立った。平石が見えた。

どうしよう、と綾は声に出して言ってみた。

この石の声を聞いてみようかという考えが浮かんだのだ。

奈津が、大きな石や川や滝や古い建物さえも話をするところがある
と話してくれていた。中には、自分の未来を見せてくれる石もある、
と聞かされていた。これがその石なのだろうか……。

庭園灯に照らされた平石。

昨日までは、何の変哲もない大きな庭石のようにしか見ていなかった石が、サヨの物語を聞いてからは、とてつもない憎悪が宿って

いる呪いの石のように見えた。

土の中から掘り出されてからさほど月日が経っていないことで、巨石のわりには苔のひとかけらも生えておらず、洗われたかのような無垢な石の表面は、かえって石が宿している思いの強さを表しているかのようだった。

綾は恐ろしくなった。

自分の思いつきがとんでもないことのように思えた。もしうまく石の声を聞くことができても、なにを聞けるというのだろうか。想像するだけで体が震えてきた。

「やってみる？」

自分に向かって声に出してみることによって恐怖から逃れられるかもしれない、という考えは甘かった。

むしろ、やめておこうというもうひとつの声を発するきっかけにしたようなものだった。

再び布団にもぐりこんだ。

と、そのとき、裏庭からもの音が聞こえた。綾は布団を頭からかぶって震えた。勝手口の扉が開く音がした。

奈津から聞くさまざまな話の中には恐ろしい話もある。

しかし、それらを綾は心底恐ろしいとは思わなかった。

目に見えようと見えなからうと、なんらかの存在自体に、綾は恐怖を抱くことはなかったからだ。暗闇の中を歩くことも平気だった。暗闇に中にいるものは、草木や動物や昆虫などが大半で、もちろんそれらは恐ろしいものではない。ときとして、なにものかの意識を感じることもあるが、それも恐ろしいものではない。妖怪と化したものもいるにはいるのだろうが、そうそう人前に現れるものでもない。しかも闇雲に人に悪いことを仕掛けてくるわけでもない。少な

くともそう考えていた。

綾にとって恐ろしいものは、人の怨念だった。

形を得れば般若や鬼となる精神的存在が、自分の身の回りに漂っているのではないか、と考えることもある。

決して豊かではなかった村で起こったであろう、さまざまな出来事を思うとき、無念のうちに死んでいった村人たちの、何世代にもわたる怨念に満ちた霊が行き場もなく村にとどまっているのではないかと。

幸せに死んだ人の霊は、自由に霊界を行き来しているという印象がある。明るい死後の世界を満喫しているかもしれない。しかし、強烈な怨みをもって死んだ人魂は……、と考えてしまうのだった。

普段の綾はこんなことを思い詰めることはない。

もし考えたとしても、本来、村人でない自分がそれらの霊になにごとかをされるということはありえないと考えるようにしていた。

しかし一方で、奈津の口から、あるいは頭巾によって、さまざまなことを聞かされた自分は、彼らの怨みの対象になるかもしれないという思いも、ときとして心によぎるのだった。

そしてその夜、綾はまさしく平石にとり憑いた人の怨念を恐れていたのだった。

しかし綾は気がついた。

村人の怨霊が物音を立てて扉を開けて入ってくるはずがない。さ
ては、狐や狸の妖怪の類か、と思ったとたん、体の力が抜けた。

久米の声が、続いて父親の声が聞こえてきたからだった。

綾は、自分がなにかを恐れていたことを恥ずかしく思った。

頭巾の使い手になろうとしている自分が、夜中の物音にあらぬことを想像して震えてしまうとは。

綾はここまで話して、子供なんだからしかたないと今では思ってるけど、などと子供らしからぬことをいった。

生駒は応えようがなかった。

綾の話に圧倒されてもいた。

優も、うん、とだけいって綾の顔を見つめている。

「それでね」と、綾は続けた。

朝、目が覚めると久米と父親はすでに起き、何食わぬ顔で新聞を読んでいた。

綾は夜中に見聞きしたことへの自信が揺らいだ。そして、ふたりが綾には黙っておこうとしているようにもみえた。

しかし綾は、そのことを今まで、誰にも言わなかった。ただそれからというもの、久米と父親が夜中になにをしようとしているのが気になって仕方がなくなってしまった。

そしてその思いは最近になってますます強くなってきた。ふたりが出かける回数が増えてきたからだだった。

綾の物語は終わった。

「おじさんに、平石の声を聞いて欲しいと頼んだ日があったでしょ。ほら、アマガハラノへ行った夜。あの次の日の晩も、お父さんは久米のおじさんと出かけて行ったんだよ。だから……」

「へえ」

といったきり、生駒も優もまだどう反応してよいかわからなかった。綾が長い物語をして、自分の弱さをさらけ出していた。慰める言葉が見つからなかった。

優が電灯をつけた。

綾がまぶしい！と、布団に潜り込んだ。優は茶箆笥の上においてあったクッキーの箱を開け、再び電灯を消した。

「でも、もう、綾ちゃんにはわかってるんやね」

優は布団の上にごろんと横になり、クッキーをつまみ出すと、箱ごと綾のほうへ押しやった。

「うん」

だが、綾はためらっている。

「お父さんの秘密を暴くってことやもんね。やっぱり、言いにくい
か」

と、優が慰めた。

「うん、まあね。でも、この話をするために、ここまで聞いてもら
ったんだから」

綾がクッキーを口に入れた。

「さっき、美千代おばさんが、許せないって言ったでしょ。私、そ
う言われて気がついたの。宝ものこと、聞いた？」

「宝もの……。采家に万一のことがあったら、という話かな？」
岩穴座談会での話だ。もう、ずいぶん昔にこのように感じられ
た。

「うん、それ。言い伝えによれば、それは滝壺の中に隠されている
んだって。お父さんたちはそれを探しに行ってるのよ、きっと」

「へえ！」

優が上体を起こした。

「なんなん？ その宝ものって」

「山賊の話の中に鉱山のことがあったな。そうすると金塊、銀塊と
か」

「うーん、滝壺に金塊かあ」

優が俄然、食いついてきた。

「知らんよ。ま、なにか金目のものを、采家の先祖が隠しておいた

とか」

「きつと、そうよ」

「だから奈津さんは、一族のものとして、久米さんらの行動を見過ごせないんや。それで美千代さんに後をつけさせた。美千代さんはああなってしまったけど、元はといえば」

「金塊じゃないと思うわ」

綾がきっぱりと否定した。

「へへ。ごめん。それもそうやんね。金塊を隠すなら、そんなところやなくて、お屋敷の床下なんかに隠すかな。こんなに広いんやし。壺なんかに入れて、あ、屋根裏部屋かも……」

「おい！」

「じゃ、なんやと思う？」

綾はわからないという。

「でも、おばあさんが言ってた。とてもありがたい、尊いものだって」

「とてもありがたくて尊いものねえ」

「仏様みたいなものかなって思うんだ」と、綾は自信たっぷりにいう。

「なんやあ。やっぱり権現さんかお不動さんの像か。村の隅々にまで水がいきわたりますようにって、滝壺に沈めたのかもね」

「この村は水には困らなかったんじゃないかな。あの猪背川の水が枯れるなんて考えられないし」

「揚げ足取り！」

生駒と優は、綾の気を紛らわせようと、あえてふざけた言い方をしていた。

しかし綾にはその必要はなかったようだ。笑みを見せて博識ぶり

を発揮した。

「そうでもないみたい。水には困ってたみたい。猪背川は村の下の方を流れているでしょ。この村の畑は、あの川から直接、水を引いているんじゃないの。滝から流れてくる岩代川の水を引いているのよ。猪背川に流れ込むちよっと手前から」

「ふうん。そうなんだ」

「このお屋敷より少し上のほうに水門があるわ」

「つまりは滝の水か」

「うん」

「岩代川なら水量も多くない。枯れることもあるやろうな」

「川向こうの畑は水不足でいつも困っているんだって」

「あーあ。滝壺に沈められたありがたいものって、神様、仏様、水神様ってこと？」

優がまた、わざとらしくがっかりした声を出した。

「沈められているということは、石像かな。あるいは、霊力を秘めた石とか」

「もしかすると、黄金の仏様、あ、まさか、金の斧」

ハハハ、と綾が久しぶりに笑い声をたてた。

「おまえなあ、さっきから金銀財宝ばかりやぞ」

「失礼ね。久米さんと橘さんの目的に関心があるんやんか。石像なら、そんなに準備万端で頑張る意味がわからないやろ。しかも人目を忍んで。それに」

言いかけて優が綾の顔を窺った。

「それにさあ、殺人事件が起きてるんやから。ふたつも。もしかすると三つも。あのふたりがやろうとしていることが、この事件に係あるのかどうか。それを知ろうとしてるんやんか」

「おい、ユウ。まさか」

生駒は、あのふたりが犯人かもしれないというのか？という言葉を飲み込んだ。綾を慰めるはずが、話は逆効果になりそうな雲行きだ。

「そうは言っていないよ」

しかし綾は、もう、この話の行き着くところを十分理解しているだろう。

目を丸くして生駒と優を見比べている。優も綾の顔をちらちら見ているが、動き出した口は止まらない。

「久米さんや橘さんは殺人事件なんてお構いなしに財宝探し」

しかも財宝だと決めてかかっている。

「健治さんと恭介さんが殺された次の日の夜も出かけた。よほど強い思い入れがあるってことやんか。あるいは焦りかもしれないけど。あるいは、その日でなくてはならない理由があったのかもしれないけど。いずれにしろ、ちょっと普通やないなと思うわけよ。それにもうひとつ、気になることがある。奈津さんと美千代さんのこと。あの人たちの行動も、ちょっと普通とはちがう」

一気にここまで話して、綾の顔を覗きこんだ。

「綾ちゃん。あなたのお父さんが犯人やなんて思っていないよ。でも、私の言いたいこと、わかってくれる？ どこかで財宝探しとこの殺人事件には接点がある。そう思うんだ」

「うん」

頷いた綾の声は、さすがに消え入りそうだった。指が畳の目をいじっていた。

「特に美千代さんのこと。自分の息子が殺されたんよ。そんなときに、あんなふうになくさん達をつけていく、なんてこと、する？」

奈津さんの指示であれなんであれ、あんなことをしていたということは、やっぱり健治さんが殺されたことと関係がある、と思ってるからじゃないのかな」

畳の目を擦る綾の指先の動きが激しくなった。

「おいおい、どうも話の行き先が怪しいやないか。つまり、美千代さんは犯人だと思うからつけていった、ということか？」

「ちよつとちがうねんなあ。真相を突き止めるために、やね」

「また、ややこしいことを言い出したな」

いくら理屈を捻ろうが、久米と橘がもっとも怪しいことに変わりはない。

しかし、ようやく、

「おばあさんと美千代おばさんは殺人犯を追っているつもりじゃない」

と、綾が畳の目を見たまま、小さな声で反論した。

そのとおりだ。宝ものを狙っている男を追っているのだ。

優がわかった、財宝探しの話と人殺しの話は分けて考えるべきね、ごめん、と謝ればとりあえずはこの話を収拾できる。

しかし、優の口から出た言葉に生駒は愕然としてしまった。

「そうやね。でも、ノブも綾ちゃんも、よく、聞いてね。美千代さんのアリバイはあるのかな？」

「お、お、おい。なんてことを言い出すんや！」

「黙って聞いて。親が子を殺すなんて、絶対にありえないこと？」

「そんな無茶な思いつきを」

「無茶って言い切れる？」

まさか優は、綾を前にして、狂人となった美千代の歪んだ息子へ

の愛が、などという生臭い話を聞かせようというのか。

生駒は猛烈に不安になった。慌ててそれを制止しようとしたが、優が綾の頭越しに睨みつけてきた。

「だから、ノブ、聞いてって。私は美千代さんが犯人やとも言っていないよ。その可能性も完全に消すことはできないと言ってるだけ。あらゆる可能性を今は残しておきたいということ。でも、ひとつだけはっきりしていることがある。いい？」

ここで言葉を切って、次の言葉をゆっくり口にする。

「それは、橘さんが木元くんを殺したのではない、ということ。だって、綾ちゃんがずっと一緒にいたんやから」

綾がしっかりと頷いた。

「久米さんと橘さんが采家の財宝を狙っているんやとしたら、奈津さんや美千代さんが、それを阻止しようとしてもおかしいことやない。だから、真夜中にあんなことをしていたとしても、殺人事件とは関係のないことなのかもしれない。でも、それもまだ不確定なことやん。西脇さんのあの日の行動も不可解といえど不可解。わからないことだらけ。だから、よりによって人殺しがあつた次の日の夜中に財宝探しに行く人がいて、それをつけていく人がいるなんて普通じゃない事実を、無関係といって切り捨ててしまっているじゃない。目をつぶってはいけない。すべてのことに注意して、どういう背景があるのか、どういう繋がりがあるのかということ、常に考えていなくてはいけないのよ。今は」

優の熱のこもった演説に、綾は今度もしっかりと頷いた。

そして、

「私もそう思う」と、いった。優がほっとした声を出した。

「綾ちゃんに謝らなくちゃいけないことがあるねん」

綾が首を捻って優の顔を見た。

「今日ね。実は私が頭巾に期待していたのは、綾ちゃんの思いとは少し違ってた。ふたつの事件に関することを、なにか聞ければいいなって思ってた。たとえば、アマガハラノに行った日、誰かがわたしたちの後をつけて来てやしなかったか、とかね」

「うん」

優は暗に、奈津や美千代のことを言ったのだ。

綾にそれは伝わったろうか。頬が少し火照ってはいるが、表情は穏やかだ。しかし返事はなかった。

「結局は、あそこで久米さん達や美千代さん達を見かけることになって、もっと大きな謎にぶち当たってしまったんやけどね」

さっきまでの演説調と違って、優の声も落ち着いたものになっている。綾もすごいが、優もなかなかだ。こんな真夜中になっても、しかもあんな出来事があったにもかかわらず冷静に頭を働かせ続け、しかも議論をリードしていく。

生駒は、自分にはとてもできそうにないと思った。

「ふう」

生駒はため息をついた。

今は事件そのものを考えるべきときなのに、優の熱意の理由を考え始めた自分に気がついて情けなくなった。

そして、そんな自分を情けなく思っている客観的な自分にも気がついて、ますます嫌気がさしてくる。

「ノブもため息なんかついてないで、意見を出したらどう？」

綾が仰向けになり、こくりと生駒の方へ頭を傾けた。

「ああ」

生駒は胸に熱いものがこみ上げてくるのを待った。

佳代子の死への疑問や道長や奈津に感じた怒りでもいい。自分を突き動かす力になるものならなんでもいい。

綾が見つめている。

瞳には庭園灯に照らされた窓の形が映りこんでいる。

まったくなんの曇りもない瞳。信頼の光と安心の色だけを帯びた瞳。

少女が言葉を待っている。

「さっき、ノブも気がついた？」

「ん？」

「人影」

「あん？」

「そか、見てなかったのか。車の後ろに仙吉さんがいた。綾ちゃん
は？」

綾が微笑んだ。

「知ってたよ」

「えええっ」

サヨの人型が見えたと思ったが、あれは仙吉だったというのか。

「仙吉さんも、実は、久米さんの行動を監視してるのかも」

なるほど、それは頷ける。

さすがに女ふたりで行動するのは危険が大きい。シークレットサー
ービスとして仙吉がついているのだ。

「万一、奈津さんと美千代さんが見咎められても、いざというとき、
本当の戦力になる仙吉さんだけは、隠密としておこうっていう作戦
やな」

「そうかもね。単独行動かもしれないけど」

「聞いてみようか」

「やめといた方がいいと思う。たぶん何も話してくれないと思うし、聞けばこっちまで怪しまれてしまう」

「そうやな」

「いざというときになって助太刀を頼む方がいいと思う。というか、私達は外野なんやけどね」

「どんなときや？ いざというときって。ま、しかし、確かにその通りや」

「まあ、そのうちにとってとこかな」

なんとなく歯切れが悪いが、優の言うとおりだろう。

今、こんな話をしているからといって、よく練った上での話ではない。

ついさっき、山に入っていく久米と橘を目撃し、美千代と奈津に会い、そして綾の話を聞いたことによって、事態の輪郭がちらりと見えてきたばかりなのだ。仙吉に話すとしても、なにをどう話せばいいか分からなかったし、それに仙吉はどうに知っていることなのだ。

自分達の立場を説明し、なぜ今晚出掛けていったのかを釈明するだけのことになる。

綾と聞き耳頭巾を試しに行きました、葬式の前日に物見遊山なんです、と。

考え込む生駒に、綾がすっきりした声を出した。

「おばあさんも気がついてたと思うわ。気がつかないはず、ないもん」

その通りだろう。

生駒は話題を変えた。

「さっきのクスノキの話、あれだけ？」

綾の瞳に変化が起きた。

生駒は魅入られたようにそれを見つめた。

少女の瞳にさざなみが立っていた。

涙が溢れてくるのかと思った。

しかし、溢れてきたのは悲しみの涙ではなく、喜びの焰だった。

「うん。あのときはまだ言葉がまとまらなくて」

綾が心の底から笑っている。

「へえ！　そういうものなんか。すごいなあ。じゃ、もう、まとま
った？」

綾は考えるそぶりを見せたが、すぐに口を開く。

「こんな感じ」

ひと言ひと言、確かめるように言葉にしていく。抑揚もつけず、
淡々と文節を並べていく。

うつろに、

なずむ、

子殺しは、

山神の、

裁きを、

受ける、

であろう……

生駒の視線が優と絡んだ。

「なんという……」

思わず心の中で復唱した。

「クスノキはそんな感じのことを言ったのよ」

現に人が死んでいる今、おもしろ半分で言えることではない。

生駒はまた綾の瞳を見つめた。さざなみが覆っていた。瞳が生駒
の反応を待っている。

「山神の裁きか……」

生駒は夜陰に紛れて山に登っていった久米と橘の姿を、懐中電灯に照らし出された不動明王が見つめていたことを思い出した。

大変な言葉を聞いてしまったのだ。

「怖い言葉やな……」

その先が出てこない。

綾の瞳のさざなみが徐々に引いていく……。

「子殺しって言ったん？ 自分の子供を殺すってこと？」

優がさらりと聞いた。

「そうだと思うけど……」

綾がまたこくりと顔を優に向けた。

瞳が見えなくなった。軽い喪失感……。

子供を持つというのはこういう気持ちに毎日満たされるということなのか、と生駒は思った。

しかし、そんな感情をすばやく追い払うと、「それで終わり？」と綾に聞いた。

再び綾の瞳が生駒に向けられた。

「うん。断片的には……」

「言ってみて」

「滝かなあ。水神さま？ そんな感じのこと。それから、間道？

抜け道？ 細道？ そんな意味のことを話していたみたい。ね、ね、

さっきの、「なずむ」ってどういう意味？」

「こだわるっていう意味」

クスノキの声はまるで恐ろしい予言だった。

子というのは誰のことか？　これまでに死んだもののことを指しているのだろうか。

佳代子のことか。恭介か。健治か。

それなら親は……。

あるいは、さらに人が殺されるとでもいうのか。

まさか、綾のことなのか。

屋敷のどこかで柱時計が鳴っている。

「うわ。もう三時。まずい。お父さんたちが帰ってくるかもしれないぞ！」

意識して明るい声を出した。

そして、ぽんと立ち上がり、窓を閉めた。

「さ、もう寝よ。綾ちゃんは明日、学校やろ」

「ううん。創立記念日でお休み」

「へえ、いいな」

「ちよっとお、お風呂は？」

優がひょうきんな声を出した。

第 21 章 「くりのきからすな」

翌朝、生駒が目を覚ましたとき、久米はいつものように、すでに朝食の用意をしていた。

怖い言葉を聞いた後だったが、綾にせつつかれて頭巾をかぶってみた。好奇心があった。というより綾の気持ちを少しでもほぐしてやりたかった。

鳥が様々にさえずっていた。

「どう？」

「んー」

木や石は夜にならないと声はまず聞けないが、鳥や蛙など声を発する生き物は昼間でもいいという。

生駒は庭に出て耳を澄ました。聞こえてくるのは鳥のさえずりだけ。

「ゆっくり」

「聞こうとしないで」

「自然に耳に入ってくるのを待って」

綾が指導してくれる。

聞こう聞こうと力が入ったら駄目なのだ。

生駒は緩く目を瞑り、頭を垂れて体の力を抜いた。そして、呼吸を整え、頭を空っぽにしようとした。

五分、十分と経ったろうか。

「もう少し」

綾のささやく声が聞こえた。

生駒は成功した。

鳥のさえずりが歌っているように聞こえた。

やがてフレーズまで聞こえてきた。

いや、聞こえたのではないのかもしれない。しかし、生駒の意識は確実にその言葉を捉えていた。シジュウカラが何度も何度も同じ歌を歌っていた。

くりのきからすな

「そんなふうに聞こえた」

「もう少し、もう少し」

綾のささやくような声。

しかし生駒はこれ以上は聞き取れなかった。ふっと焦りが生じた途端に、鳥の歌はいつものさえずりとしか聞こえなくなった。

「おじさん！すごい！ それ正解！ 私もいつもそれ聞してる！
すごいすごい！」

「へへ」

生駒はうれしかった。

こんな気持ちになったことは、これまでなかったかもしれない。
大好きな綾の瞳。大切な大切な綾の瞳。信じきり、そして喜びに
溢れた瞳。それがまっすぐ生駒に向けられていた。

「続きはね」

くりのきからすな

くりのきからすな

おいしいこいし

みずのたまった

はりのあなをば
とおりゃんせ
やまあらしは
たくみのゆめ
せんのとがあきや
おぎぶをあてよ
「なのよ！」

もう、綾は飛び跳ねるようにして、喜びを表していた。
「さ、もう一度やってみて！」
「うん」

……ああ、そう聞こえる。

しかし、最後は微妙に違う。
生駒には、せんのとがにや、おぎぶをはずせ、としか聞こえなかった。

それでも生駒は、なんとも言いようのないすばらしい気分に浸っていた。

そしていつしか、生駒のすべての感覚は、虚空に浮遊していた。

第 22 章 「並んだ棺」

式場である集会所の前で綾を見かけた。葬儀ということで、互いに言葉をかけず、笑みさえ見せなかったが、綾は小さく手を振ってきた。

しかし、片方の手は橘に握られている。

今、綾の暖かい手をやわらかく握っているその手が、次の瞬間、なにをしてくすかわかったものではない。生駒はそんな気がして、ふたりを注意深く見守った。

子殺しという言葉が、胸に重くのしかかっていた。

綾が橘の腕に抱きついた。橘は綾の頭を撫で、なにごとかさやく。ごく自然に。仲の良い父と娘そのもの。

小学五年生にもなれば父親と距離を置きたがる娘も多いが、このふたりは辺鄙な村でのふたり暮らしということもあってか、互いに支えあう愛情をストレートに表に出している。

少なくとも綾の表情にはひとかけらの不安もない。

橘に連れられて式場に入っていく後姿に、生駒はひとまず安堵のため息を漏らした。

周りのことに注意を向ける余裕ができた。

暑い中、略礼服を着込んだ久米は、早々と式場に到着しながら、クーラーのきいた部屋には入らず、入口の外に立ってポツリポツリとやってくる弔問客にその巨体を折り曲げている。

村人に対する彼なりの配慮なのだろうが、違和感はある。

久米が葬儀を取り仕切っているわけではないのだ。葬儀の段取りは仙吉だ。殺人の容疑で父親が拘留されている西脇家や、気の触れた母親だけがいる健治の家ではとても葬儀を出せる状況ではない。

「中に入れないんですか？」

「いやあ、僕は本当の村人でもないしね。ここで皆さんにご挨拶するほうがいいよ」

生駒の久米に対する見方は昨夜以降、大きく変わってしまった。

橘が綾をダシにしてこの村にやってきたのと同じように、久米も自分の創作活動を表向き理由として財宝探しにやってきたのだとすれば、生駒もいい隠し味に使われたものだ。

アトリエ新築工事も村人を欺く芝居のひとつだとすれば、生駒はまるでその片棒を担がされたサルみたいなものではないか。

猫の首さえ、工事を中止にするために、久米自身が打った芝居だと考えられないでもない。そう思うと、これまでのように素直に久米と接することはできそうになかった。

生駒は久米の表情を見つめた。

どことなく疲れが見えた。それはそうだろう。あんな夜中に山登りをしているのだから。

「どうかした？」

「いえ」

仙吉が久米と生駒の姿を見つけて近づいてきた。

「どうぞ中に」

「いや、僕はここにいますよ。お申し出はありがたいけど、厚かましいやつだと思われたくないので」

「そんなことはないですよ。さ、どうぞ」

「すみません。遠慮しておきます」

こういうことは一旦言い出すと絶対に引かない。案の定、久米は話題を変えた。

「事件は一件落着とはまだいかないらしい。どうも、木元さんと西脇さんは釈放されるそうですよ。仙吉さん、聞かれています？」

葬式の日にする話題ではない。仙吉の顔が曇った。

「いえ……。わしはなにも」

「府警の寺井警部に聞いたんです。なんでも、西脇さんの方は美千代さんの証言が決め手になったとか。詳しいことは教えてくれませんでしたがね。あつ、仙吉さんに言っただけじゃなかったんだ。村の人にはまだ伝えないで欲しいと言われていたんだ。黙っててくださいよ」

仙吉は特別な人だから耳に入れたというニュアンスを漂わせている。

「そうなんですか。でも、それはよかった」

仙吉がこくりと頷いた。

西脇の釈放はうれしいのだろうが、さすがに葬式場で、喜びの声をあげるわけにはいかない。かすかな笑みを見せただけで会場に戻っていく。

まもなく開式だという司会の声が聞こえた。

「釈放ですか。よかったですね」

「うん。ま、これはよかったと言えるんだろうね。少なくとも、采家から殺人犯は出さなくてすむみたいだから。ところで生駒さん。あなたにだけは話しておきます。僕ね。そろそろ、お屋敷を千寿さんに返そうかと思っているんだ」

「えっ、そうなんですか」

「正直言って、毎週来るにはやっぱり遠いよ。それに、なんていうか、生駒さんも気がついていないと思うけど、僕自身がまだに村の人たちに受け入れられていないようだし。あんな事件もあったしね。でもまだ、これは内緒にしておいてよ」

「はい」

「本当に申し訳なかったね。たいした設計の仕事をしてもらえなくて」

「いいんですよ。そんなことは気にしないでください。十分、楽しませてもらいましたから」

今ここで、新しい設計の仕事を頼まれたとしても、もう身を入れてすることはできないだろう。

ビジネスライクな業務として作業することはあっても、久米の手柄に惚れて、精一杯やってきた今までのような気持ちでは取り組めないだろうと思った。

「寺井さんに会ったんですか？」

「いや、電話したんだ。事件の目処はどうかって。気になるだろ。それに、今言ったように、村を引き上げようと思ってるからね。やはり采家の人たちのことが心配だし、事件が解決してからの方がいいかなと思ったり」

生駒は久米の言うことを言葉通りに受け取ることができなかった。滝壺の財宝を手にいれておさらばするにしても、殺人事件と自分とは無関係だ、ということがはつきりしてから、ということだろうと思ってしまう。

「や、坂井さんも来てくれた」

タクシーが集会所の前につけた。

「このたびは……」

「どうもご苦労さまです。もうすぐ開式です。さ、受付を」

久米が坂井をロビーへ案内していった。

葬儀が始まった。

久米は座敷には入らず、ロビーで立ったまままでいるらしい。おのずと坂井や生駒や優も立って式場を見つめることになった。

他にロビーで参列しているのは、西脇工務店の下請け職人らしい

日に焼けた男数人だけだ。狭いロビーはそれだけで満員となった。

集会所の座敷には座布団が並んでいる。

列席者は三十名ほど。最後列に橘と綾の後姿がある。

正面奥にはふたつの棺が並んで置かれている。焼香台はひとつきり。

奇妙な葬儀だった。

警察の捜査では西脇が健治を殺した事になっていた。優との推理でもその可能性について話した。あるいはもっと具合の悪いことに、恭介が手を下した可能性さえ否定できないでいた。

棺に納められた犯人と被害者が、そんなことには無頓着に仲良く並んで横たわっているのだ。

生駒は遺影を見つめた。

右側に置かれた棺の中に横たわっている恭介が、左側の棺の健治を殺したシーンを優と再現しあったことが、申し訳ないような気がした。

この小さな村で殺人事件が続けて起きたことに、今年の佳代子の死も含めると、一年の間に三人もの若い命が亡くなったことに、漠然とした不安と、やりきれない悲しみが頭をもたげてきた。

恭介の死体を発見したときや、優と推理合戦をしたときや、クスノキの話を綾から聞いたときなどは違って、葬儀という儀式の場ならではの独特な雰囲気の中で、生駒ははじめて悲しみらしき感情を持った。

こちらを向いて笑っているふたつの遺影。香とユリの花の匂い。

僧侶の読経の声。たくさん余っている茶色の座布団。

そういったものの中で、告別の場をロビーから、つまり少し客観的な位置から眺めることによって、村の悲しみ、あるいは采家の悲

しみといったものを感じたような気がした。

葬儀社の社員が、出席者の名を読み上げ始めた。

「ご親族様のご焼香でございます。采千寿殿」

奈津よりさらにひと回り小さな老婆が車椅子を動かそうとする。しかし腕に力が入らない。見かねた仙吉が立ち上がる。千寿が何度も仙吉に頭を下げるのが物悲しい。手が痛々しく震えているのが生駒の位置からでも見えた。

「采奈津殿」

奈津がゆっくりと立ち上がり、焼香台に進んだ。そして小さく正座して丁寧に焼香を済ませると、その場で膝を列席者に向け、凍りついたように静止した。

奈津の視線は久米や生駒を捉え、人々の間をさまよっていく。誰ひとり身じろぎもしない。

奈津の目には、集まった采家の親族や村人の顔、そして久米や自分の顔がどのように映っているのだろうか。生駒はふと前に回って誰がどんな顔をして奈津の視線を受け止めているのか、見てみたいと思った。

奈津は車椅子から下りて畳に座ろうとしている千寿と、彼女を抱えている仙吉に眼を止めてから、ようやく自席に戻っていった。

千寿と奈津。ふたつ違いの姉妹。

初めて見る千寿は、もう歩くことはもちろん、自力で車椅子を動かすことさえままならない。それに比べて、奈津は、背こそ少し曲がってはいるものの、しっかり自分の足を地につけている。

奈津が隣に座った千寿になにごとかささやいている。千寿が力なく頷いた。

生駒は、さつき心ならず盗み聞きしてしまったことを反芻した。
トイレに行ったときのことで。集会所の裏手で、奈津が千寿に詰め寄っていた。

ふたりは采家の財産相続、すなわち千寿の遺産のことについて話していた。

千寿は、皆で仲良く分ければいいの、遺書なんかは残さない、と話していた。そして、利郎がもつとまともな男だったら、佳代子もあんな苦勞をしないですんだのに、と力なくいった。

奈津は自分の遺産は、美千代と綾に譲るという内容の遺書を残してあるといった。采家の兄弟姉妹に遺産を巡る争いが起きないように、千寿も遺書を書いておくと忠告しているのだった。

千寿が悲しみに満ちた声で応える。

私が今まで心の底から信用していたのは、あなたと美千代と佳代子だけ。なのに美千代も佳代子もあぁなってしまうて……。どうしろというのよ……。

意気消沈して抜け殻のようになってしまった姉と、潔癖で気性の激しい妹のやり取り。

奈津は食い下がる。それにあの男をなぜ引き込んだのかと。千寿はこれにもふんわりと応えた。あれで償いになるかねえ……。

夫や子に先立たれ、何十年もの年月を、支えあって生きてきたふたり。

しかし、血の繋がりのない美千代や綾や佳代子しか信用できないとは、ふたりはどんなにか心細く、せいのない毎日を送ってきたことだろう。

しかも千寿は、佳代子が西脇の妻の連れ子であることを知りながら、騙されていてやったのだ。

どんなにか情けなかったことだろう。

その切なさを胸に流し込まれたような気がして、生駒は肌寒ささ

え覚えた。千寿が、それなら私の遺産はすべてあなたが引き継ぐことにしておくから好きにして欲しい、と言ったところまで聞いて、その場を離れたのだった。

次の名が読み上げられた。ようやく喪主の番だった。

「西脇圭子殿」

生駒は少し緊張した。あの日の圭子の狼狽振りが甦ってくる。

家族が死んで平静でいるという方がおかしい。出棺のとき、妻や子が泣き叫ぶ情景は何度も眼にしてきたことだ。

他人の葬儀に半ば儀礼的に参列してのことであっても、遺族のそんな様子を見ると心が痛む。そして、今からそういう情景が目の前で繰り広げられるとなれば、どうしても身構えてしまう。

次々に名前が読み上げられていく。

「采武雄殿」

健治の父親だ。病院のベッドから離れることができないという。もちろんここにはいないが、名は呼ばれた。司会者は事前に欠席を知らされていたのだろう。目を上げることもなく次の名を読み上げた。

「采美千代殿」

再び生駒は緊張する。室内の空気が張り詰める。

美千代はふらりと立ち上がった。

そしてしばらくそのままの姿勢で、前に並べられた祭壇を眺めている。仙吉が再び腰を浮かしかけたが、隣に座った女性に裾を引かれて座りなおす。

美千代の頭が右から左へと動いていく。目が自分の息子の遺影の上に止まる。足は一步も前に出ない。その場に泣き崩れてしまった。女性が近寄って嗚咽を漏らし始めた美千代の肩を抱いた。実の姉

か妹なのだろう。

千寿が手を上げて美千代を呼んだ。奈津が席を譲った。千寿が美千代の腰を抱いた。そして自分の方に引き寄せると、耳元になにごとかささやいた。美千代はそのまま千寿の小さな体にもたれるようにして体を寄せた。そしてそのふたりの姿勢は葬儀が終わるまで変わらなかった。

そんな様子に心を痛めながら、生駒は頭から離れないひとつの考えをもてあそんでいた。

西脇と木元はとりあえず釈放されるらしい。しかし寺井はまだ村の誰にも言うなという。完全に無実だというわけではないからだろう。現時点ではまだ表向きは西脇と木元が犯人だということになっているのだ。

しかし奈津は警察の見解とはまったく違った考えを持っているらしい。

仙吉の話では、奈津の指示で、葬儀をこの形にすることを決めたという。しかし、いくら一族の長老の指示であっても、被害者である健治の両親は納得しないのではないだろうか。入院中の父親も、狂人となった美千代も、もはやそれしきの判断能力さえ失ってしまっているということなのだろうか。あるいは、それほど奈津の言葉は絶対だということなのだろうか。

生駒は考えてみる。

采家の一党は、健治を殺したのは西脇ではない、と信じているのではないか。

むしろ否定する気持ちだが、あえて今日のような葬式の形にさせているのではないか。

佐古が立ったことで焼香が村人に移ったことがわかった。

老人ばかりが続く。座布団の上にうずくまっている参列者が、ポツリポツリと立ち上がっていく。橘と野良着の男が譲り合っていたが、結局は野良着の男ふたりが先に焼香に立った。自分の服装が気恥ずかしかったのか、やたらと頭を下げていた。

誰の顔にも笑顔はなかった。声を荒げるものもいなかった。静かな鳴咽が時折聞こえてくるだけ。

生駒と優が最後に焼香をして、出棺となった。

第 23 章 「混乱」

大阪に向かって車を走らせながら、生駒はもどかしさを感じていた。

優も考えごとをしているようで、助手席の背を浅く倒し、目をつぶって黙り込んでいる。カーステレオのボリウムを絞った。

何度となくシミュレーションした自分達の推理は的を外れていた。警察の捜査もそうだ。

新たな情報も多い。しかもそれらが示すことは、ある一点に収斂しているように見える。しかしその根幹部分を占めている、ひとつの出来事の持つ意味が不安定で、推理の決め手となるどころか、ますます混乱しているだけなのかもしれない。

そして眼に焼きついた様々な光景。

五右衛門風呂の猫の死体、離れの黄色いテープ、もぬけの殻となった健治の寝床、神社の暗闇と鳥居の蛇、獅子岩や庭の平石、権現さんの石像、妖気を発する祠、断崖、アマガハラで見たもの。

そして昨日、生駒のアルバムにまた新しい画像が保存されていた。葬儀の前、村に到着するとすぐに見に行った場所……。

神社に鎮座している獅子岩の脇をすり抜けてみると、かすかな踏み跡がせせらぎ沿いに続いていた。

生い茂る雑草や顔にかかる蜘蛛の巣を払い除けながら、しばらく進むと、小道は右に大きく曲がっていく。振り返ると、すでに獅子岩の姿は溢れかえる緑に隠れていた。そこに石柱があり、立ち入るべからず、と読めた。

両側は切り立った急な斜面。ところどころに大きな岩石が、今にも転げ落ちそうな様子でとどまっている。木々の太い根が、その岩を落とすまいと掴んでいた。

空は梢越しにようやくその一片を覗かせるばかり。

石柱の忠告を無視して角を曲がると、せせらぎは幅をいよいよ狭め、右に左に細かく蛇行しながら延々と続いていた。至るところに現れる小さな落差が水しぶきを上げ、滑りを纏った岩が積み重なっていた。

小道は岩を渡り、瀬を飛び、木の根を跨いで登っていく。骨の折れる登坂だった。生駒と優は何度か休憩を入れつつ賑やかに進んでいった。

かれこれ半時間ほども来たろうか。

生駒と優が滝を諦めかけたとき、視界が変化し、申し訳程度の川原に出た。木漏れ日が水面をきらめかせている。背の低い草が、小石混じりの砂土にまばらに生えていた。

踏み跡はその前で途切れていた。

「どうするよ。もう戻るか？」

「うん。でも、もうちょっとだけ」

「さっきから、もうちょっと、もうちょっとで、きりがないぞ」

「だってえ。ね、次の角まで、ね」

「へえへえ。で、ここを渡れということか……」

流れは十メートルほどの幅があるが、深さはない。

向こう岸は、岩盤が長い年月をかけて水流に削られ、磨き上げられた肌を見せている。

水はその岩の路頭を回りこむようにして流れ下っているが、水中を上流に進むことはできない。丸い巨石が積み重なり、人の通れ

る隙間はなかったし、速度を増した水流が深みを作っていたからだ。

「ちえ。履き替えるものを持って来ればよかったな」

「ノブはまだいいやんか。千九百八十円の革靴で。私なんか、フォーマル用の上等のパンプスが台無しになっちゃう」

「よくいうよ」

生駒は大胆に水の中に足を踏み入れた。

少し大きめの石を伝っていけば、くるぶしまで水につかることなく、なんとか対岸へ渡ることができた。見ると、岩盤に足がかりとなるような窪みが設けられてある。

「あそこやな」

「とんだハイキングやね」

パンプスを脱いでしまった優が、後ろからついてくる。

「文句言うな。おまえが行きたいって言ったんやろ」

「はいはい」

「うわ。ここ滑るぞ。靴を履け。足を怪我するぞ」

次の難関が目の前に迫っていた。岩を登り終えたところにアカマツが太い根を伸ばしていた。

その根を跨いでいくことになるのだが、岩盤がそのあたりで直角にせり上がっているのだ。手を使ってよじ登らなければならなかった。

「やれやれ、せっかくのシャツもどろどろ」

「九百八十円」

「ふん。お、ついに滝はこの先か」

岩の向こうで大きな水の音が響いていた。

「なんや。簡単やん」

「そうあって欲しいもんやな」

生駒は右腕で松の根を抱え、体を岩の上に持ち上げた。

「よっこいせーっのホーイホイと」

顔が岩の上に出た。そのとたん、思わず声をあげた。

「なんや、こりゃ!」

「なに?」

「これが滝か?」

「ちよっとお、手伝ってよ」

「おう」

巨石が川幅を極端に狭くしていた。幅は三メートルもない。

両側には、全体の大きさが想像もつかない岩が、まるで巨大な門のようにそびえ立っていた。渓谷というより、細い関所だ。

上空は濃い緑が覆い尽くし、たくさんのシダがハングした岩からぶら下がっていた。薄暗く、水の飛沫が霧のように立ち込めていた。

しかし生駒が驚いたのは、その渓谷の景觀にではない。

人の胴体ほどもある太い丸太が横に十数本、縦には五本掛け渡され、井桁に組まれて人の侵入を阻んでいたのだ。

井桁には無数の流木が、根を洗い流された姿でせき止められていた。そしてそれらの朽木が枯れ落ちた無数の枝をせき止め、またそれらがさらに小さな小枝を絡め取っている。

すなわち井桁は、それが全体として大きな木製ダムのような様相を呈し、前に立つ者を威圧していた。そして水は、あらゆる隙間から噴出し、巨大な壁泉のようにしぶきをあげていた。

生駒はこの壁泉と化した人止めの柵を美しいとは思わなかった。むしろ痛々しいと感じた。

この美しいはずの渓谷に、ぶざまな柵を立て込み、自然の力に任せて流れていくべき木々が押し留められて、おどろおどろしい姿を晒している。

吹き出ている水の音が川の叫びのようだった。

人が、たったひとつの一族が、あろうことか自分の宝を守るために、これほどあさましいことができるのか、と怒りがこみ上げてきたのだった。

井桁が守ろうとしているもの。

財宝であれ、石仏であれ、それを確かめないと、事件の根幹が見えてこないと感じたのだった。

そしてもうひとつ、確かめてあることがあった。あの日、西脇が体を洗ったという「水場」である。

アマガハラノへの山道とは別に、妖気の祠の前から分岐している踏み跡を発見していた。アマガハラノに行ったときには気がつかなかったし、このあたりに手掛りがあるはずだという確信がなければ見落としそうになるほどの痕跡だった。

辿っていくと、細い流れがあった。最近できた新しい流れのようだった。どこかで溢れ出した水が、林の中をきままに流れていくように、幅も一定ではない。水の中から木が生えているし、本来なら水の中に生えていそうにない草が、流れに身を委ねていた。

「ここか。西脇の水洗便所は」

「変な表現」

「でもそれだけではないみたいやな」

踏み跡は水の流れを横切って伸び、木立の間を縫うように続いていた。

「もしかして滝へ？」

アセビの群落を押し通ってしばらく進むと、前方が明るくなってきた。

やがて崖の突端に出た。

木に縄梯子が括りつけてあり、降りられるようになっていた。崖下には岩がごろごろした狭い窪地があり、丸い池があった。

「降りてみる？」

「冗談やろ。ここは絶対無理」

崖は高さ二十メートルほどだが、岩が庇のように空中に張り出している。縄梯子は引き上げられていたが、空中に放れば派手に揺れることだろう。

「やれやれ。滝は拝めずじまいやな。そうそう簡単にはいかないな。さ、帰るか」

結構時間を食ったせいで、アマガハラノまで行くことは諦めて、村に降りてきたのだった。

そして今、車を運転しながら、生駒は西脇釈放の決め手となった美千代の証言内容も気になっていた。久米がなにを聞いたのかを知りたかった。

大阪に向かう国道沿いのコンビニで車を停めたついでに、寺井に電話を入れた。

その証言とは、アマガハラノへ登った朝、集会所に泊まった西脇が恭介宛の伝言を残していた、というものだった。

メモには「恭介へ。遅いので先にいく。例のところで待っている。六時 利郎」とあったという。そして、ほぼ同様のことを西脇自身が警察に訴えていた。

美千代はあの朝、集会所の掃除当番に当たっていた。ロビーのゴミ箱に、しわくちやに丸められたそのメモがあったという。

警察は、狂人とされる美千代が、そのメモの内容を口頭でしか伝えなかったことで、信憑性に確信が持てなかった。しかし、集会所

の裏の焼却炉から燃え残ったメモが発見されるに至って、警察は美千代の言葉を、証言として採用したのだった。

つまりこのメモが、西脇自身が書いたものであり、内容が正しいとすれば、西脇は六時には集会所にいたということになる。

「無実が証明されたことになるんですか？」

しかし、そのメモの存在が明らかになったとしても、西脇によるアリバイ作りかもしれない。

「ちがいますな。西脇利郎が六時過ぎに犯行現場を通りかかった、という事実の傍証が出たというだけです。つまり、これには別の証言もありまして」

仙吉や橘が、山に入っていく西脇の姿を見たのがその時刻だったということだろう。

「メモにあった例のところというのは？」

「岩代神社だ、ということですね。あくまで西脇の供述によれば、ということですよ。我々もそこまで行ってみました、それを裏付けるものはありませんでした」

「血液反応のあった鉄パイプは、どうお考えなんです？」

「あれは、誰でもそこに置くことができます」

西脇工務店の資材置き場は単なる空地で、出入りは自由にできるのだそうだ。

「で、釈放された」

「これ以上、拘留することができません。凶器が資材置き場で発見されたことのみによって、彼が犯人だと決定付けるわけにもいかないということですよ」

「で、木元も釈放と」

「そうです」

「拘留する理由がない？」

「そういうことです」

寺井は凶器となった草刈鎌のことについては説明しようとしなかった。

アマガハラノで久米の草刈鎌を使ったのは、久米と生駒と木元だ。つまり、木元でなかった場合は久米ということになる。そして班分けからすると、道長が共犯ということになる。

「警察は、久米さんあるいは道長さんを？」

しかし寺井は答えず、

「このことはまだ誰にも言わないでいただきたい。特に村の人や采家の面々には。犯人はまだ絞りきれいていません。正直に申し上げると、事件は一から洗い直しです。何度も申し上げるように、西脇利郎と木元勝の嫌疑が、完全に晴れたわけでもありません」と、繰り返すのだった。

そして、ギクツとするような言葉と共に、情報の見返りを求めてきたのだった。

「生駒さん、昨日今日と、山に何をしに行ってたんですか？ なにか情報がありましたら、我々の耳に入れてください」

監視下に置かれている！ 滝を探しに行ったことを見られていたのだ！

軽い戦慄を思えるとともに、警察捜査というものの愚直さを実感したのだった。

「久米さんも監視されているんですか？」

電話の向こうの寺井は、ふふんと笑ったようだった。

もちろんそうだと言うのだろう。逆に、

「久米さんがどうかしましたか？」と聞いてくる。

久米と道長が共犯だった場合、健治の事件も、恭介の事件も、彼らのアリバイは成立しない。寺井も、当然その点を見ているのだ。

生駒は、久米と橘が夜に山に入っていくのを見かけたから気になって、と応えておいた。このきわどい話をしてしまっても、寺井が久米と橘の行動をある程度は把握しているなら、という安心感も幾分はあった。

ただ、財宝探しの話はまだ早い。

寺井は鼻で笑うだけだろう。少なくともそれが何で、久米たちがどうしようとしているのかを、ある程度は掴んだ上で話さなければ、一蹴されるだけのような気がした。

しかし、奈津と美千代はノーマークのはず。いざというとき、後手に回るのはないか。その不安を、どう伝えたらいいかと考える間もなく、寺井は電話を切ってしまった。

生駒は急に減速し、路肩に車を寄せた。

「どうしたん？ パンク？」

「そう、頭が」

「やっぱり、おばちゃんに会いにくしかないか」

「急がないとな。久米さん、いよいよ決行するみたいやから」

手帳に挿んであった名刺を取り出し、住所を確かめると携帯電話のボタンを押した。

第 24 章 「教授の二の腕」

京都市郊外にある女子大の教授室で、道長は采屋敷で見るときと同じようなラフな服装で、デスクトップのキーボードを叩いていた。

「すみません。急に押しかけて来て」

「とんでもない。うれしいわ。どうぞ、座って。ホットコーヒーでいいわよね」

ひととおり葬式の様子を報告し終わると、生駒は切り出した。

「言い伝えでは、采家の万一のときには助けが来るんですよね？」
「ええ」

「その助けって、なんですか？ というのは、今や采家の一大事です。今も言ったように、被害者と加害者の息子が並んでいるような葬式はおかしいでしょう。采家の人や村の人は、なにか考えていることがあるんですよ、きっと」

「確かに変よね」

道長は口元に持っていたコーヒーマグの湯気越しに生駒の顔を窺っている。

いつものポーズ。生駒もじっと見つめ返した。

「でも、葬式のことと結びつけるのは、唐突じゃないかな」

道長が根負けしたように視線をはずした。

「だって、あれは昔の伝説。いまどき、そんなことを信じている人がいるとは思えないけど。それに、村の人だって、いまさら采家がどうのこうのって、どうでもいいと思うわ」

「奈津さんがいます。彼女は別格でしょう」

こんなやり取りを交わしながら、生駒は頭の中で、自分がなにを

この女性から聞きだそうとしているのかを整理しようとしていた。生駒の胸には、真相は別のところにあるという確信めいたものが膨れ上がっていた。そしてその糸口のうち、もっとも大きなものは久米と橘の行動と、その目的を知っていそうな奈津と美千代、そして仙吉の行動だ。久米と橘の行動は采家の財宝を狙ったのだというの、昨夜の結論にはなった。しかし、その財宝とはなにか、という疑問は持ち越されているのだ。

久米が創作活動のために、自分の先祖の故郷で屋敷を借りた、というのは方便であって、実は財宝を狙ったのだ。この思いはもう確信に近い。

だからこそ、わざわざ東京から、レスキューの訓練を積んだ橘を呼び寄せたのだ。優が言うように、そのターゲットがどこにでもありそうな石の神像であるはずがない。

道長を訪れた理由のひとつは、久米の強烈な意思の源となっているこの財宝がなにか、ということを確認することだ。

深夜の岩代神社で見たことを、道長には言わないでおこうと、生駒と優は打ち合わせていた。道長はかつては村の住人で、また久米とも昔からの付き合いだと聞く。滝壺財宝プロジェクトに一枚噛んでいないとも限らない。

「道長さんはいわば地元の方ですよ。その話、信じてますか？」
「だから伝承だと言ってるでしょう。ありえないことだとは言わないけど」

沈黙しがちな押し問答のような会話に、道長が辟易している。

「仏像とか？」

「そういう人もいるわ。あなたの意見もそうだったわね。でも、正直に言うよね、私は違うんじゃないかなと思ってるの。そんな御伽噺みたいなものじゃなくて」

生駒は身を乗り出した。

「山の奥の鉾山」

「はい」

「普通に米を作ったり、手工芸品を作ったりするだけでは食べていけない人たちが働いていた。自分の体を身売りしたような人たち。そこで働くことは、とても辛いことだったと思う。奴隷労働に近いものだったでしょうね」

「はあ」

「そんな人たちに、食べさせるものや必要な生活物資などを調達していた先が、近くの村々だったんじゃないかな。そしてそれらは、采家を通して行われた。つまり、采家は大西村や近くの村から、食料や燃料などを集めて鉾山に輸送する。代金を受け取り、村人に分配する。貧しい村人は少しの現金収入でも欲しい。鉾山の役人は鉾夫に食べさせるものには無頓着。その仲立ちをする采家には、おのずと富が蓄積される。村人には言えないあくどいこともしていたんだと思う。そのことが、いつしか、采家を助けるものの存在という作り話に変化したんじゃないかな」

「はあ」

「話として自然に変化したというより、采家だけが繁栄していくことを村人に説明する方便として。山や岩や滝などを持ち出して、伝説風に味付けして語ったということね」

拍子抜けする話だったが、半ば予期していたことだ。もし、道長が久米と組んでいるのなら、金銀財宝が眠っているなどというはずがない。

しかし、ありそうな話でもある。

もしそれが本当なら、久米は道長の今の説を信じず、あくまで財宝が隠されていると考えているのだろう。ちょっと考えにくいことだが、奈津や美千代は、采家の昔の悪事が暴かれることを許せない、

と思っているのかもしれない。

「なんやあ、そういうこと？」

盛り上がらないやりとりに、優が痺れを切らして口を開いた。

「鉦山なんて言うから、やっぱり金塊かと思ってたのに。ほら、徳川の埋蔵金って話があるやん」

道長は優の素っ頓狂な問いかけに笑い声をたてたが、冷めた目は変わらない。あの晩のように、生駒社長に飽きられるわよ、などと軽口を言う気もないらしい。

むしろ、あんたたち、そんなことを聞きに来たの？　という苦い気持ち顔に貼りついていた。

しかし、優の戯言は別のことを聞く前触れだった。

「滝をご覧になったことはありますか？」

「ううん」

「皆さんの話では、通行止めになっているんですよね？　今のお話のようなことなら、なにも、そこまですることはないんじゃないかなあ」

道長の表情がかすかに動いたが、考えていることは隠されたままだ。

「あ、そうか。滝を、采家の守り神として神格化していたのかも。それにしても、その神様を拝むこともできない。采家の人たちは村人をまったく信用していなかったということかな。興味あるなあ。ね、ノブ」

無理やりな話の展開に、優が生駒の腕を叩いて、同意を促す。

「そうやな」と、とりあえず応えておくしかない。

「ぜったい見せたくないって感じやったから」

「ああ」

「もしかすると、人身御供のサヨさんの遺体が安置されてるとか」

道長の反応は微笑むのみ。

優が新手を繰り出した。

その質問には道長も驚いた様子だったが、生駒も驚いた。

「アマガハラノで道長さん、佐吉の話の続きをしてくれましたよね。ふたつの説があるって。あのとき、滝の財宝も実はお宝でもなんでもなくっておっしゃったきり、尻切れトンボになりました。あの話の続きをしてください」

優はあっさりそう投げかけると、コーヒーに口をつけた。

「すごいわね、あなたの記憶力」

「でもないですよ。たまたま思い出したんです」

「聞きたい？」

「もちろん。久米さんや仙吉さんのいる前では、話にくいことだったんでしょう？」

「うわ！ そんなことまで覚えてるのね」

道長が大げさに驚いた。優はニツと頬を持ち上げた。

「じゃ、研究者としての意見を言うわね。結論だけ」

「はい」

「佐吉の栗の木は、采家の先祖に奪われたという考えよ。滝の財宝の話というのは、もともとは、佐吉の家族を沈めた、というのが正解じゃないかな」

「あ」

「それで人を寄せ付けないようにしたけど、長い年月の間に采家を助けるものの存在、という話にすり替わってしまった。意図的にであれなんであれ」

「うーん」

「後世になって、財宝の話になったり、滝そのものが神格化されたりして、ますます史実は闇の中に」

「なるほど、ですね！」

「実をいうとね、私もなにが真実なのか、わからなかったわ。でも、綾ちゃんが見せてくれた頭巾。あれが実際に存在するものだということを知って、今の結論になったの。といっても、あくまで私の胸の中の結論ということであって、正解かどうかは保障しないわ。ね、あなた達、綾ちゃんから聞き耳頭巾の本当の秘密を聞いた？」

生駒と優は顔を見合わせた。

「いえ、秘密というほどのことは……」

「佐吉の家は代々、鳥や木の声を聞くという頭巾の使い方だけでなく、本来の隠された用途を伝えてきたのよ」

「本来の使い道……」

「あれはね、アマガハラノの栗の木へ迷わずに行き着くための、ただひとつの道具。あの日、綾ちゃんが持っていたからこそ、私達は栗の木を見つけることができた……」

道長がため息をついた。

「貴方の携帯ストラップのお不動さんのお守りの効き目も、少しはあったと思うけど」

「はい！」

「お屋敷の屋根裏部屋から収集した古文書に、頭巾のことが書かれていたのよ。まさか本当に存在するものだとは思ってもみなかった……」

「あ、屋根裏部屋！　ずるいんだ！」

「登ってみたい？　いいじゃない。久米さんの目を盗んで。でも、生駒さんは嘘のつけない人だからね」

道長が優に合わせて、ずいぶん砕けた調子になっていた。

しかし生駒は優のように、心の内を隠して快活な素振りを見せることは不得手だ。にやりと口元を歪めただけで黙っていると、道長がまた優に話しかけた。

「記憶力のお嬢様、ほら、坂井さんの話では、行者様はどう言った

？」

「あ！ 不動明王の被っていた紫の頭巾ね！」

「さすが。そう。行者は佐吉に、不動明王の力を借りてアマガハラノの栗の木へ行けと言った。あれがないと、迷ってしまうのね。それが本当の頭巾の力なのよ。信じがたい？」

生駒と優は首を振った。

「私はね、信じられなかった。でも、今は信じられる」

「なぜです？」と、生駒は聞いた。

「今も聞き耳頭巾として実在しているから。飾り物じゃないのよ。実際に手にとって使えるもの。それがまがい物だったら、こんなに長い年月の間、伝承され続けるなんてことはないでしょうから」

「ああ、そういう論拠の立て方もあるんですね」

「綾ちゃんに聞いてみたわ。頭巾は代々采家に伝わるものかって。奈津さんはどう説明してくれたって。そしたら、奈津さんも村人の誰かから授かったんだって」

「ええ、そう言ってました」

「ということわね、頭巾は采家のものじゃなかったということ。采家のものだったとしたら、一族以外のものに渡ってしまうかもしれない伝承方法なんて、考えられないでしょう？ 屋根裏部屋の文書もそれを裏付けているわ。頭巾を采家に差し出すように求めたが、出てこなかったという内容だった。もうわかるわね。采家は佐吉の子孫じゃなく、佐吉の一族から栗の木を奪ったの。しかし実際には行き着けなかったし、頭巾も手に入れることはできなかった」

生駒と優は揃って頷いた。

「ただ、そんな過去は、今の采家の人達まで正しく伝承されてこなかったんだろうと思う。たぶん奈津さんも含めてね」

生駒はまた黙って頷いた。

「でね、頭巾の使い手は、その本当の使い方をきちんと伝えてきたのかどうか。綾ちゃんがあの日、ちゃんと持ってきたところをみると、案外今も、っていう気はするけど、さすがにこれを彼女に確かめるのは、どうかなって思うし」

優が投げかけた質問は、道長の舌をすこぶる滑らかにはしたが、本来聞きたかったことから離れていた。

頭巾の素性やアマガハラノの秘密を聞きたかったわけではない。優もそう感じたのだろう。微妙に軌道を修正した。

「それで、滝の財宝はどう関係するんですか？」

しかし道長は、途端に、それはわからないわ、だ。

「実はご存知なんじゃないですか？ 隠された滝へのルート」

「方法はあるんだと思う」

と、慎重な口ぶりに戻っている。

「誰かに聞いたら、わかるでしょうか？」

「千寿さんや奈津さん？ 絶対に教えてくれないと思うけど」

「仙吉さんは？」

「あの人は知らないと思うわ。采家の一族でありながら、そう扱われていないから」

財宝は何かという点から、滝へのルートへと話は移行しているが、それはそれでいい。今日の訪問目的のふたつ目だ。

つまり、久米の財宝探索ルートないしは方法を知ること。目的の対象とその入手方法を知らなければ、彼らの行動の核心に迫ることはできない。その上で、ふたつの殺人事件の真相に、ようやく近づくことができるかもしれないのだ。

迂遠な話ではあった。

しかし財宝探しと殺人事件の間には、必ず接点があるはず。俺に隠されたものが金銀財宝であれ、佐吉家族や人身御供のサヨの骸であれ、あるいは他の何かであれ。

優が道長に、今度、一緒に探しに行きましょうよ、と誘っている。「ね。久米さんも一緒に。あつ、そうか。もしかするとルートを知ってるかもしれないですね。それこそ采家のお屋敷に住んでおられるんですから。ね、道長さん、行きましょう。ノブ、久米さんに聞いてみてよ」

強引過ぎて短絡的な優の言葉に、生駒は冷や汗が出る思いがした。しかし、気持ちを奮い立たせて、

「よし。善は急げやな」と、携帯電話を取り出す。

「もう、村を出たかな。電波の届くところにいればいいけど」

生駒が繋がらないと言うと、道長はふうっと弱いため息をついた。

「やっとわかったわ。あなたたちが訪ねてきてくれたわけが」

生駒は携帯を耳に当てたまま、道長に目を向けた。視線がまともにぶつかった。

「最初から、そう言ってくればいいのに。それとも、私もあの私たちの一味だと思っているの？」

ストレートに鎌をかけてきた。

「あなた方、財宝より久米さん自身を詮索しているんじゃない？」

彼がなにかおかしいことをしているのを、見たんじゃない？」

道長の目元は笑っていたが、瞳には困惑だけが広がっていた。

応え方に迷った。そうだといえば、それは久米のどういう行動かと聞いてくるだろう。できればそれは道長の口から聞きたい。

生駒は黙って見つめ返した。

「あの人達、いったいなにをしているのかしら……」

そうはいいつつ、自分から久米の行動がおかしいと思っているのかと聞いた以上、思い当たることはあるのだ。

「あの人達って、久米さんと誰のことですか？」

優がいいところを突いた。

「あら。尋問を受けているようね」

しかし、コーヒークップに目を落とすと、

「ね、ざくばらんに話しましょうよ」と、くだけた調子でいった。
「いつまでもこんな調子で話していたら疲れてしまうわ」

道長がパソコンの電源を落とした。立ち上がって窓にカーテンを引いた。

「訪ねてきてくれるのはうれしいわ。これは本当の気持ち」

声から警戒心が消えていた。

「まさか、お葬式のことを報告しに来てくれたわけではないでしょう？ 久しぶりについていうほど、会ってなかったわけでもないし。当然、事件の話があるのかなとは思っていたけど」

そういつてデスクの角に腰を下ろし、コーヒーを飲み干した。

「だいたい察しがついたわ。ねえ、生駒さん。もう一度聞くけど、私も財宝探しの一味だと思っていない？」

生駒はぐっと詰まった。しかし、もうその言葉についていくしかない。

「まあ。可能性はあるな、と」

今日初めて、道長があの手顔を見せた。

「そうよね。実をいうとね、私、反省しなくちゃいけないの。もともと、ことの起こりは、私が久米さんに吹き込んだことなのよ」

「はい？」

「彼が、どこか田舎の一軒家にアトリエを、と考えていたのは本当のこと。そこへ坂本さんから耳寄りな話が出た。互いの出身地である大西村に、つてを頼って話をつけることができるかもしれないという話がね。でも、初めのうち、久米さんは乗り気じゃなかった。いくらなんでも遠いよって」

生駒は黙って頷いた。

「でも、私が例の話をしてしまったのね。もしかしたら、山中には金塊が眠っているかもって。ちよつとした冗談のつもり。出来心よ。今から思えば、しなければよかったなって思うけど」

道長がデスクからチョコレート箱を出した。一粒つまむと、箱ごと滑らせてくる。

「そしたら、彼、ロマンがあるじゃないかって、俄然、興味を持つちゃって。ちよつと大げさに言いすぎたのよって言っても、後の祭り。一旦その気になると、引かない人でしょ」

「滝は見たことがない、というのは本当よ。でも、見に行こうとしたことはあるの。とうせんぼされてて行けなかったけど」

優が微笑みを返す。

「とにかく一度、現地を見に行こうということになって、三人で村に行ったの。まるでハイキングにでも来たみたいな格好でね。国土地理院の地図には滝のマークが出ていたわ。で、小川に沿ってどんどん歩いていくと、なんと」

道長がいたずらっぽく笑った。

「実際に、自分の目で見たほうがいいわね。いや、本当はもう見るのかな」

昨日、見た人止めの柵は、生駒の眼に焼きついている。連続する殺人事件、葬式の違和感、綾が聞いたクスノキの予言、そういったあらゆる疑問を解くには、滝の秘密を暴かなくては、という気持ち

にさせる光景だった。

「ただ言えることは、それを見て久米さんはあの村に決めたということ。ねえねえ、まさかあの人達、本気で財宝探しなんか、やっているんじゃないんでしょう？　どうなの？　あなたたち、なにか知っているんじゃないの？」

矢継ぎ早に迫られて、生駒がどう応えようかと迷っていると、
「そして、一番大事なこと。なぜおふたりが、久米さん達の行動に関心を持っているのか」

道長が、袖の中に手を入れて、二の腕をさすり、

「もちろんそれが、今度の殺人事件に関係があると考えているからじゃない？」

と、核心に迫ってきた。

生駒は、すべてあなたの言うとおりだと言おうとした。しかし、
優の反応の方が早かった。

「さっきから久米さん達って、誰のことをおっしゃってられるんですか？」

「橘文雄さん。じゃないの？」

道長はもうあっさり応えを返してくる。

生駒も、もう隠すことはしなかった。

不審が払拭されたわけではないが、情報を得るために、あるいは場合によっては道長の嘘を暴くためにも、彼女の懷に飛び込んでいかなければ始まらない。

生駒は、深夜に神社で見た光景を話した。

「そうなの……。もし本当に金目のものが沈んでいたんだとしても、
今まだそこにあるなんて、考えられないのに……。村の人なら誰でも知っている話なんだから……」

道長が後悔の念を口から吐き出した。

「采家の力がとうの昔になくなってしまっているのに、財宝だけが眠っているなんて。本気にしてどうするのよ」

眉間を寄せて目をつぶった。

「でも、誰もがそう思ってるけど、実は、なんてことはないですか？」

「そうね、そういうこともあるかな。美千代さんが後をつけていたってことは……」

眼を閉じたまま、考え込んでいる。

やがて「まさか、あの人達……」と、時計に目を向けた。

生駒はすでに居てもたってもいらなくなっていた。

様々な不安が膨れあがっていた。この事件は健治と恭介を殺すことがエンディングであるはずがない。

今夜も雨が降らなければ、久米は橘と山に入っていく、滝へのルートを行くのだろう。もしかすると、あの縄梯子を降りていくかもしれない。

奈津や美千代も監視の目を緩めていないはず。

仙吉は彼女達を守るだろうか。

そして今日か明日にも西脇と木元が釈放されるかもしれない。彼らはどう動くか。少なくとも、西脇はあの縄梯子の存在を知っていると考えた方がいいだろう……。

そして最も大切なこと。

綾は不安がっていないだろうか。

「今から村に戻ります。ちょっと気になってきましたから」と、生駒は立ち上がった。

道長からたいした情報は得られていなかったが、不安が生駒を突

き動かしていた。

「えっ、今から？」

道長は驚いたようだったが、なぜか、とは聞かなかった。

「ご馳走さまでした」と、優がふたり分のカップを揃えた。

生駒は、ぶしつけな質問をして申し訳なかったと謝った。

「ううん。いいのよ。ちょっと待ってね」

道長がチョコレート箱をポケットに入れ、クロゼットの扉を開けた。靴を履き替え始める。見たことのあるスニーカー。

そして、

「いいニュースよ」といった。

「西脇さんと木元さんが明日の朝、釈放されるんですって。嫌疑不十分っていうやつよ。どうせ釈放するのなら、お葬式に間に合うようにしてあげたらいいのにね」

「そうですね。でも、誰から聞いたんです？」

「久米さん。さっき電話があってね」

意味ありげな笑みを見せた。道長は久米が今夜も屋敷にいることを知っていたのだ。さっきの臭い芝居は見透かされていたのだ。

「お待たせ。さ、私はいつでも出発できるわよ」

「え？」

生駒と優は道長に背中を押され、教授室を出た。慣れた手つきで名札を裏返し、またあの笑顔を見せた。

第 25 章 「少女に手を取られて」

「ねえ、道長さん」

「なあに」

「子供のときに見た幻では、大人になって、どうなっていたんです？ 大学の先生？」

「どういうこと？」

「権現さんのお供えを食べようとしたトキさんは、その瞬間、自分の将来の幻を見たんでしょ？」

「……」

「道長さんのことじゃない？」

車に乗り込むなり、優がした質問だ。

「え？」

「は？」

道長も生駒も、虚を突かれて声が裏返りそうだった。

「そうかなって」

「なんで、そんな話が出てくるんだ？」

助手席の優が、後部座席の道長を振り向いて、ニッと笑った。

「以前から、ちょっと気になっていたんだけど、道長さんの二の腕に、痣があるでしょ」

生駒は知らなかったが、道長がそつと、そのあたりに手をやったところを見ると、あるのだろう。

「それってさ、権現さんに掴まれたときにできたものじゃないんですか？」

「すごいわね、あなたって」

京都から、まっすぐ車を飛ばせばもっと早くに着いたのだろうが、途中で夕食をとりながら意見のすり合わせをしたことで、村に戻っ

たときにはすっかり夜の帳が下りていた。

念のためにと、三人分の懐中電灯や水を買ったり、優が歩きやすい靴やリュックサックを買ったりしたこともある。関係者は逃げることはないし、深夜にならなければ行動を起こすことはないだろう。そして警察も久米を監視しているはず……。

当たって砕けろ作戦である。

生駒は久米に会おうとしていた。

ただ、生駒達が村に舞い戻ってきたことを、できれば村人に知られたくはなかった。

「ええい。厄介やな。なんとも都合のいいところに建っているもんや！」

この時間はまだ久米は屋敷いるはず。しかし、村の中をライトをつけずに走ることとはできない。

「普通に乗リつけるしかないんじゃない？」

道長は平然としている。

「じゃ、どうします？ 何の用で来たことにします？」

葬式のあった夜に、三人も屋敷に遊びに来たと知ったら、村の人はどういう顔をするだろう。

「忘れ物でもしたことにしたら？」

「忘れ物ねえ。それに道長さんは？ 一緒に連れだって、というのもおかしいでしょう？」

「私も忘れ物。原田の駅前で偶然会ったのよ」

「そんな」

「大丈夫。誰も氣にとめないわよ」

「そうかなあ」

「さ、しのごの言っても、しかたないからね。正々堂々と乗り込みましょう」

言われなくてもそのつもりだった。

張りつめた気持ちを紛らわすために愚痴っていただけのことだ。
躊躇なくハンドルを切り、村への橋を渡り始めた。

ここからはまだ村は見えない。橋を渡り終わると道は川沿いに右に折れ、すぐ大きなカーブを描いて左に曲がる。そこが村の入口となる。

生駒はゆっくりと車を走らせた。

村に入って一番初めに建っているのは、崖の下に貼り付いているようなみすばらしいトタン屋根。大葉家。仙吉の家だ。灯がついて、人の気配がある。集会所にも誰かいるようだ。采家の親戚が泊まっていくのかもしれない。健治の家にも明かりが灯っていた。

屋敷の門灯はついていて、生駒は、いつも駐車している裏の草むらに車を乗り入れた。空地に面したりビングの窓からも光が漏れている。

生駒は胸が締めつけられる思いがした。

今からここで、自分たちがやろうとしていることに不安がないといえば嘘になる。

関係者を集め、完璧な準備の上で犯人を名指しする、なんて芸当はできそうにもない。それらしい動機を述べたて、状況証拠を突きつけるということが、今できる最大限のことだ。

もちろん久米には、また村に戻るという連絡を入れていなかった。しかも道長も一緒なのだ。きっと驚くだろう。歓迎の言葉と裏腹に、迷惑そうな表情が眉間の辺りをかすめるかもしれない。それでも、いつものように泊まっていくように勧めるだろう。

そして、ここへ来て、道長が同行していることが心の重荷になり始めていた。彼女の真意がどこにあるのか、まだ見えなかったのだ。今夜、この屋敷で展開されるだろう事柄を想像するだけで、気持ちが重くなってくるのだった。

道を登ってくる車はない。尾行がついているわけではないのだろう。ただ、屋敷の物陰では刑事が張り込みをしているかもしれない。そう思うことで、生駒は弱気を吹っ切り、ボタンと大きな音をたててドアを閉めた。

門はいつものように開いていた。

久米は自分がいるときは、常に門を開け放している。朝夕と限らず、深夜でも。それは、いつでも誰でも訪ねてきてくださいという村人へのメッセージだと聞いている。

ナンテンの脇の庭園灯が、新しく敷き詰められた砂利を照らしている。いつのまにか母屋の壁に、大きなブラケット照明が取り付けられていた。そこから発する強く黄色い光が、平石に降り注いでいた。

玄関の扉は、予想通り大きな音をたてた。この戸も、門と同様、久米は施錠することはない。

「久米さん」

返事を待つ。

傍らに天井を跳ね上げるロープがぶら下がっている。空気が流れているのか、わずかに揺れている。

「久米さん」

再び呼びかけてみた。

優がロープをいじりながら天井を見上げて、返事を待っている。

やはり応えるものはない。

「上がらせてもらいますよ」と、靴を脱いだ。

道長が離れを見てくるといつて出ていこうとした。道長をひとりにさせたくない。優が、私が、と先に飛び出していった。

母屋の各部屋を覗いて回った。いくつかの部屋には照明がついていたし、そのほとんどが開け放した状態だったので、今にも襖の後ろから、うたた寝をしていた久米が眠たげな目を擦りながら顔を出すような気がした。

しかしどの部屋にも、浴室やトイレまで覗いてみたが、久米の姿はなかった。

「いない？」

優が戻ってきた。

「一応、裏の方も見に行ってきたんやけど」

「岩穴は？」

「真っ暗。気持ち悪くて中には入ってない。蔵にも電気はついてないし、納屋も奴隷部屋も真っ暗」

「こんな時間に、そんなところに用があるとは思えないな」

「じゃ、誰かの家へ行ったとか？」

道長が眉間に皺をよせた。

「可能性があるとすれば、橘さんか仙吉さんのところか。あるいは総代の佐古さんのところか」

そういう、優の声にも戸惑いがある。

「集会所？」

生駒は遅すぎたのかもしれないと思い始めた。

道長が緊張をほぐすように、二の腕を撫で始めている。そして、意を決するように、

「行ってみましょう。山へ」と、いった。

「しかし滝への道は知りませんよ」

あの縄梯子を下りていけば行き着くのもかもしれない。

しかし夜、あれにしがみついて降りていくのは気違い沙汰だ。それに、自分達はそのルートを知っていることを、道長にはまだ伏せておきたかった。

「ここでぼんやり待っていても始まらないわ」

「そうよ、ノブ。行けるところまで行こう」

「わかった。でも、その前に橘さんの家だけは覗いていこう」

三人は屋敷を出て道を下り始めた。

久米が今夜も滝に行くことは確信していた。葬儀の後、久米はすることがあるから今夜は屋敷に泊まるといい、そのくせ屋敷に戻るなり、昼寝を始めたのだ。明らかに夜に備えて睡眠をとっていたのだ。

今夜のうちに一気に財宝を手に入れようとしているのかもしれない。

焦ってきた。つい急ぎ足になる。なんらかの事件が起きてからでは遅い。久米に翻意を促したい。そして、できればその話し合いを事件解決の糸口にしたい。

「まだ八時なのに」

優がぼつんといった。

「こんなに早く行くとは思わなかった」

「いよいよかも」

「そうね」

そんな会話を交わしながら道を下っていくと、前からひとつの影が近づいてくるのが見えた。

「あ、綾ちゃん」

「おじさん！」

走りよってきた。

「よかった。ねえ、お屋敷におばあさん、来ていなかった？」

「奈津さん？ ううん、いなかったよ」

「そう……。おかしいなあ。いつもこの時間は家にいるのに」

「いないの？」

「うん」

「老人ホームへ行ったんとちがう？」

「ううん。今日は千寿おばあさんは、集会所に親戚の人と一緒に泊まってるから」

集会所にもいなかったという。

千寿は、実家が目の前にありながら、久米に遠慮したのだ。

久米は今日、采家の面々とどんなやり取りをしたのだろう。どう説明して、千寿ははじめとする采一族の宿泊を断ったのだろう。ふと生駒は久米の慇懃無礼な態度を想像した。

「鶏に餌もやっていないし、夕方ごろからずっといないみたいなんだ」

いつになく綾は取り乱している。

「お父さんは？」

「久米さんと……」

「もう？」

「急ぎましょう」と、道長がするどい声で促した。

「追いつかなければ。綾ちゃん、お父さんは何時ごろ出ていったの？」

「んーと、一時間くらい前かな」

「そんなに早く！」

そう言うなり、道長はもう引き返し始めている。

道長は、なんの道具もなしに、あの井桁に組まれた人止めの柵を乗り越えていこうとしているのだろうか。

そう思ったとき、綾が大きな声を出した。

「そうか、おばあさんも滝に行ったんだ！ 私、行き方、知ってます！」

「えっ」

「たぶん」

「よし、じゃ、行こう」

生駒は思わず綾の手を取った。

「ちょっと待って」

道長が向き直った。

「綾ちゃんを連れて行くつもり？」

手綱を強く引かれた馬のように、生駒はその場にがくんと立ち止まった。

そうだ。

久米と橘が滝壺に行き、それを奈津が止めようとして姿を消したのなら、向こうでどんな出来事が待ち受けているか知れたものではない。それがどんなことであれ、綾には聞かせたり見せたくないことに違いない。優も首を横に振っている。

握った綾の手が暖かい。その柔らかい手に力が入った。

「私、行きます！」

はつきりとそういった綾の、つり上がった目尻に、強い意思が漲っていた。

「お父さんがなにをしているのか。おばあさんがどうしようとしているのか。私、だいたいわかっています。だから、行きます！」

生駒は決めた。

この少女にとって、今すべきことは、家でじっと待っていることではない。

「よし。みんなで一緒に行こう」

綾が今とるべき行動は、自分の父親や身の回りの人たちの消息を確かめることではないのか。

ありのままを、自分の目で見て、自分の耳で聞いて。

たとえ、夜の山の中であっても、真っ暗闇の抜け道を通っていく滝壺であっても。

彼女にはそこを突き進んでいく精神力がある。大人である自分達の務めは、むしろ、当事者であるそんな彼女を補助することではないか。

生駒は綾の手をしっかり握り返した。

道長と優が黙って後ろをついてくる。

「美千代さんはどうしてるかしら」

屋敷の石段の下まで来て、やっと道長が声を出した。

「今日は親戚の人が泊まっていくのかも」

「家にいるよ。さっき行ってみた」

綾は奈津の行方を聞きにいったらしい。

「今夜は奈津さんひとりか……」

「じゃ、生駒さん、いよいよ急がないと。綾ちゃんの懷中電灯を持ってくる。待ってて」

と、道長が石段を駆け登っていく。

「雨が降るかもしれない」と、優も続く。

「物入れの中に、合羽がたくさん放り込んであったわね。タオルも

あったほうが安心!」

空には星のひとつも見えない。予報は夜半から下り坂。

「もろくなってる石って、庭の大きな石のことじゃないみたい」

門の中に道長と優が姿を消すと、綾が話しかけてきた。もう落ち着いた声をしていた。生駒は綾を抱きしめてやりたい衝動に駆られた。

「じゃ、どこの石？」

「さあ。おばあさんは知ってるみたいだったけど」

「こっちです」

綾は気負うことなく生駒達を案内して、あの日アマガハラノに向かった山道を登っていく。

なんという強い子だろう。

改めて生駒は思う。彼女は今、生駒達が殺人事件の解決のために、滝壺まで行くこうとしていることを知っている。優の演説はつい昨夜のことなのだ。

ただ、今こうして案内している綾の気持ちは、奈津の身を案じて、という一心かもしれない。また、自分の父親が財宝探しに明け暮れている現場を、自分の目で見ておきたいとも考えているのかもしれない。いや、もっと言えば、自分の喘息を治すためにというのが口実だったことを、確かめておきたいとさえ思っているのかもしれない。

深い山の中を、懐中電灯で足元を照らしながら前に行く少女の細い背中に、生駒は声をかけてやりたかった。

しかし気の利いた言葉は出てきそうにない。昔見た屋根裏の長持のことでも話そうか。場違いかな、などと思いつらしながら暗闇の

中を登っていった。

「ちえっ、降ってきやがったな。そろそろ梅雨明けかちゅうのに」霧のような細かい雨粒が顔にあたっていた。振り返ってみても尾行はなかった。

「本降りにならなければいいのに」

綾は、一片の迷いもなくどん登っていく。

屋敷にあった百円ショップのビニール合羽は、かろうじて破れずに持ちこたえているが、襟元から入り込んだ水滴が、すでにシャツを濡らし始めていた。

予備の電池を持ってくるべきだったのではないかと思い始めたとき、ようやく綾が、そろそろこのあたり、と立ち止まった。

四つの懐中電灯の光が、周囲の様子を窺うように飛び交った。そしてひとつの光が道端の石碑を照らし出した。

それは、あの日、悪寒がしたところに立っていた石碑だった。

「やっぱり、ここか……」

縄梯子はこの先にある。

「あそこから降りられるはずなんです」

しかし綾が懐中電灯で照らし出したのは、まぎれもなくあの祠そのものだった。

縄梯子を降りていくなどという、とんでもない危険な行為ではなかったが、別の意味で自分の勇気が試されることになるとは思ってもみなかった。

道長も優も黙り込んでいる。

雨粒が懐中電灯の黄色い光に照らされ、輝く細い線となって落ちていく。

四人は見つめ合う。

雨の中に立ち尽くす白い半透明の合羽を着た姿は、出来損ないの彫像のようで、気持ちを萎えさせるものでしかなかった。

潜んでいる危険を探しだそうとでもするように、四つの懐中電灯の光が、林の中を、またさまよった。

第 26 章 「祠に潜むもの」

祠は闇の中で、人が近寄ってくるのをじっと待ちかまえている。おぞましい世界に違いのない別次元の空間への入口のように。

近づいていけば、祠に宿ったまがましいものの息吹が感じられるかもしれない。ずっと懷中電灯の明かりは落ち、どこからともなく黒い光が灯り、雨粒を不気味に光らせることだろう。そして生贄となる人の足を呪いで縛り、血塗られた祭壇へといざなうのだ。

闇の祭壇の扉が、音もなく開き、そこから流れ出た漆黒の闇があたりを覆いつくすとき、暗黒に呑み込まれた人はもはや抗うこともできず、引き摺られるようにそのものが支配する空間へと足を踏み入れる。

一歩進むごとに闇は密度を高め、耳や鼻や、ありとあらゆる全身の皮膚から体内に侵入し、やがて重く黒い泥水を体中に溜め込んだかのように思考を麻痺させ、手足の動きを鈍らせることだろう。そしてやがて、人はもはや人ではなく、外道となり果てるのだ。

生駒はそんなことを考えながら、雨に濡れて黒光りする祠を睨んでいた。

懷中電灯の光がひとつ、足元に落ちた。綾が一步を踏み出していた。

「こっちです」

猛烈と茂った草が綾の足にまとわりついている。

それを懸命に掻き分けている細い体から、強烈な意思がほとばしっている。いつの間にか、綾は頭巾をかぶっていた。

「僕が先に行く」

生駒は大胆に草むらに足を踏み入れた。

足元を気にしてはいけない。なにを踏みつけようが、窪みに足を取られようが、臆している場合ではない。祠に憑いたなにものかに打ち勝たねばならないのだ。強い精神力を維持し、気持ちに隙を見せてはいけない。ふと、美千代の言葉が脳裏をよぎる。

「道長さんと優は、僕が呼ぶまでそこで待っていてくれ」

生駒は綾の手をとって、前に出た。

祠は生駒が近づいても、黒い光を放つことはなかった。化け物の息吹が聞こえることもなかった。それでも、皮膚に突き刺さるようなおぞましい気配が止むことはない。

胸に突き上げてくる吐き気をこらえながら、綾にいった。

「祠に触れたらだめだ！」

「う、うん」

祠の正面に立つ。腐臭を含んだ風が髪をなびかせるのを感じる。鼓膜を突き破ろうとする声にならない声が、強い力で耳道の中を渦巻いているように感じる。

全力で綾に気持ちを集中しようとする。

声を絞り出した。

「で、どうするん？」

「わからない！　どこかに降りるところがあるはずなんだけど！」

綾の声は、はっとするほどしっかりしていた。大きな声だった。生駒は意識が甦ってくるのを感じた。

目の前の祠をじっと見据える。
観音開きの錆びついた鉄の扉。

格子になっていて、祠の中に苔の生えた地面が見えている。その奥にはなにが祭られているのだろうか。が、懐中電灯を向けてみる気にはなれない。

扉の下三分の一はすでに錆びて崩れ、蝶番も長い間、回ったことがないように、錆が層を成してこびりついている。大きな錠前がぶら下がっているが、これもすっかり錆びついている。叩き壊すしかないようだ。

目を上げてもう一度、祠の全体を見る。

石の壁にも扉にも、なんら文字や印のようなものは刻まれていない。荒削りの石を組み合わせただけの箱に、鉄格子の扉をつけただけのものだ。屋根石の上では、降り積もった落ち葉がいつしか土壌となり、たくさんの草が生えている。

優の声が聞こえた。

「ノブ！ もうそっちへ行っていない？」

「まだ！」

生駒は急に現実に戻されたかのように、自分の声の大きさに驚いた。

しかし振り返ることはしない。化け物に背中を見せるわけにはいかない。

化け物の出現を、その弱い光で食い止めようとしてもするかのように、懐中電灯の光を祠の扉に浴びせかけ続けながら、この鉄格子をどう壊せばいいのかと考えた。

「ぐるっと回ってみよう。どこかに入口があるはずよ」と、綾がいった。

「よし」

祠の右側に回った綾が、力強く生駒の手を引いた。そこではつと

気がついた。

「なんや、ばかばかしい」

生駒は声に出していった。

こんなに錆びついた錠前をはずし、扉を開けて誰かが中に入ったはずがないではないか。

錠前の鍵があつたとしても回せるはずもないし、扉は少しでも動かせば、たちまち原型なきまでに崩れ落ちることだろう。

綾が振り向いた。

「なに？」

「いや、なんでもない」

どうかしていた。

そんなことにさえ気づかないほど、自分を見失っていた。耳鳴りは止み、吐き気も嘘のように消えた。

祠に宿るものを意識するあまり、危うく負けるところだった。強い気持ちとは自分を見失わないでいられることなのに、恐怖のあまり、化け物が仕掛けた妄想の罠にはまるところだった。

生駒は背をかがめ、祠の中を照らしてみた。なんの変哲もない小ぶりな石がひとつぽつんと置かれてあるだけだった。

祠の左右の壁は、板石を建て込んだだけのものだったが、どこにも入口らしき痕跡は見つけられなかった。残ったのは裏側だ。

「こりゃあ、大変やな」

祠の裏には灌木が茂っている。

「なにか道具を持ってくるんやったな」

「ほら、ここ見て」

綾が照らし出したのは、ウバメガシの枝が、ナタかなにかで切られたような跡だ。ちょうど太股の高さにその切り口はある。

「ということは」

生駒はしゃがみこんで、生い茂っている灌木の枝を掴んで引きちぎろうとした。

と、掴んだ枝が固まりごと、蓋が外れるようにボロリと取れた。灌木が生い茂っているように見えたが、裾のほうは切った枝を固めてカモフラージュしてあるだけなのだった。

「なるほど」

手当たり次第に灌木の枝を引っ張ってみる。しかし、引き抜けたのは最初の一掴みだけだ。

「ずいぶん小さいな」

「でも、なんとか通れるよ。おばあさんなら楽勝」

「それもそうやな」

道長と優を呼んだ。

灌木の中を照らすと、地面に穴が開いているのが見えた。

生駒はシャツやズボンが泥だらけになるのもかまわず、腹ばいになって穴の中を覗きこんだ。

「どう？」

「うーん。暗くてよく見えないな。深そうやけど」

「どうなってるん？ トンネル？」

「いや、地面の裂け目のようや」

上から見ると地面に開いた穴のように見えたものは、巨大な岩盤が裂けた隙間の上端部のようだった。岩の裂け目は深く、懐中電灯の光は底まで届いているようだが、判然としない。

「岩に足掛かりがついている。降りていけるんや。でも、危ないぞ」

次に覗いてみた道長が、首を振って立ち上がった。
「だめね、これは。無理をしちゃいけないわ。濡れているし、滑りそう」

しかし綾は、

「おばあさん、こんなところを降りていったのかな」
と、もう腹ばいになって降りていこうとしている。

「危ないよ」

声をかけたが、

「大丈夫！」と、すでに頭だけ地面に出した綾が笑ってみせた。

「夜は無理や。昼間に直そう」

「だから、大丈夫だって。ちゃんと階段になってるから」

声はもうずいぶん下のほうから聞こえてくる。

綾だけを行かせるわけにはいかない。

「そんじゃ、行くか」

と、生駒も陽気に言って、腹ばいになって足から穴の中に入っていた。

最初の岩の窪みをつま先でまさぐり、しっかりと片足で足元を踏みしめると、体重を乗せて体を岩肌から浮かせ、胸の隙間から下を覗き込んだ。左手で懐中電灯を持ち、右手を岩肌に滑らせて手がかりを探す。

両手を広げることさえできないほど狭い階段。

両側から迫っている青みがかった白っぽい岩。岩だけの世界。ところどころに苔が張り付いているだけ。

白っぽい色のせいで、懐中電灯の光を拡散させているが、圧迫感を和らげるほどではない。ただ、岩の窪みは規則的につけられており、降りていくのは、想像していたほど難しくはなさそうだった。

四つ目の窪みにつま先を入れたとき、全身が岩の裂け目の中に入った。

さらに数歩降りて見上げると、道長のスニーカーが頼りなげにふらつきながら、裂け目の入口に見えてきた。ぱらぱらと土が落ちてきた。

「それほど急じゃないんで、窪みに足をしっかり入れていさえすれば大丈夫ですよ」

道長の頭越しに優の足が見えてきたところで、生駒は下の地面に両足をついた。

地面といっても一畳ほどの広さに、今降りてきた斜面から転げ落ちた砂利が堆積しているだけのところだ。そしてその先はいわゆるガレバになっていた。

つまり、岩盤の隙間の底のガレバ、その奥の隅、といったところだ。

懐中電灯の光だけでは、この場の詳細はわからないが、全体像ならかろうじて掴むことができる。両側は岩が露出した崖。ガレバの幅は三人が両手を広げることができるくらい。緩やかな下り。先はもう少し幅が広いようだ。

「お待たせ」

と、優が生駒の横に降り立った。

たちまち砂利敷きの一畳座敷がいっぱいになった。

「奈津さんは？」

「もっと先みたい」

綾の不安そうな声。

この雨に濡れたガレバを、夜、懐中電灯を頼りに越えていくことができるだろうか。

眼前には、一抱えでも足りないような大きなものから、人の胴体ほどのものなど、大小さまざまな岩がごろごろと幾重にも積み重なり、隙間からは冷気が吹き上げている。

左手の崖からは、ところどころ水が流れ落ち、途中の岩のふくらみにあたって、盛大な水しぶきが散っている。まるでシャワーのような水のカーテン。懐中電灯の光は水しぶきに反射して、その先を見通すことはできない。

突っ立った四人は、逡巡したように肩を寄せ合って、しばらくその場に留まり、水しぶきのカーテンを睨みつけていた。顔に当たる雨粒も先ほどより大きくなっていた。

「おい、待て！」

優がガレバの石に足をかけようとしていた。しかし振り向くと首を横に振った。

「ちよつと無理っばい」

積み重なった岩の暗い隙間に滑り落ちればどうなるか、そう考えるだけで足がすくんだ。

さすがの綾も、ガレバに足を踏み入れようとはしない。しかし気ははやっているのか、靴の裏でさかんに岩の表面を擦って試している。

「戻ろう。明日、出直しや」

生駒は宣言するようにいった。

「昼間でないと、こんなところ、危なくて通れないわね」

道長が合羽の裾をたくし上げ、ポシエットからチョコレートを取り出し、「はい」と、配る。

「ね、綾ちゃん、お父さん、アクアラング、できるん？」

「うん。ライセンス、持ってる」

「そう。お父さんが潜る役目ね」

それには応えず、綾は「おいしい」と、微笑んだ。

「さあ、元気を出して帰りましょう。雨が激しくなる前に。それに滝壺のお宝を探すといっても、昼間でないとできないでしょうから。真っ暗闇の中を潜っていったって、なんて考えられないじゃない。奈津さんももうきつと引き上げたわよ。それに久米さんやお父さんは、ここじゃなくて、別のルートを行っているのかもしれないし」

綾を説得しようとしていた。もちろん生駒も、もう戻る気にいる。

ただ、綾はまだ心残りがあるのか、

「だけど……」と、ガレバに光を投げている。そして、

「お父さんもおばあさんも、また、この下にいるかもしれないし」と、安全そうな石に乗った。

「かもしれないけど、もう帰ったと思うわよ」

道長が綾の腕を取った。

綾はその手を振りほどき、「あばあさん」と、呼びかけた。

両手を口にあてがって、今度は大声で叫ぼうとする。生駒はそれを押しとどめた。

「今は、よしたほうがいいわ」

道長も綾を慰める。優の合羽が擦れてざわついた音をたてた。

生駒は綾が叫ぶのを止めたが、ここで奈津や久米や橘の名を叫ばない方がいい理由を、はっきりと認識していたわけではない。ここに自分達が追ってきていることを知らせない方がいいと、衝動的に思っただけのことだ。

しかし綾の目的からすれば、ここで大声で呼びかけるのは当然の行為だろう。

綾、道長、そして生駒と優、三者それぞれ微妙に違う目的。生駒はそんなことを思いながら言葉少なに山を下っていった。

屋敷に久米の姿はなかった。奈津の家にも、綾の家にも誰もいなかった。

七月というのに気温の下がった夜で、雨に濡れた体は冷え切っていた。とりあえずコンビニで温かいものでも買おうということになった。

「私も行く！」

「行き違いにお父さんが帰ってきたら怒られるぞ」

「大丈夫。もし帰って来てたら、頭巾の修行してたっていうから」

「雨の中を？」

「関係ないわ。それにもうあがってるじゃん」

雨はあがっていた。

「よおし。じゃ、行くか」

車の中には重苦しい沈黙が流れていた。

「これでよかったんかな。久米さんを待ってなくて」

と、生駒は缶コーヒをすすりながら口火を切った。

コンビニの駐車場には白々とした光が満ち、賑やかにカーステレオを鳴らした車が入れ替わり立ち代り入ってくる。つい一時間ほど前まで、祠の下の暗闇のガレバにいたことが信じられなくなりそうだった。

生駒は、今から屋敷に戻って久米と橘の帰りを待ち、当初の予定通り、なにをしていたのかを追求しようと提案した。しかし、道長も優もこれといった言葉を返してこない。

後部座席に道長と並んで座った綾は、熱い缶のおしるこを飲んだ

後は、アイスクリームを頬ばっている。

道長に対してもそうだが、綾が傍にいる限り、突っ込んだ話ではできない。

会話は途切れがちだ。綾が木のスプーンで紙カップの底を擦っているコリコリという音がした。

「なぜ、おばあさんは返事をしてくれなかったのかな」

綾はアイスクリームを食べ終えて、一息ついたのだろう。

「どうしてそう思うん？」

「さっき、ガレバでさ、近くに人がいる気配がしてたんだけど」

「えっ、そうなん？」

「うん」

人の気配があったから、おばあさんと声を掛けたというのだ。

この子はやはり特殊な感覚の持ち主らしい。かぶっていた頭巾がそうさせるのかもしれないが。

「ねえ、おじさん」

そして、また変なことを言い出した。

「さっきの祠で、なにか感じなかった？」

生駒が化け物にたぶらかされかけていたことにも、気づいていたよ、と言いたいのだろう。

「確かに気持ちの悪いところやったなあ」

恥ずかしくて、そうとしか応えようがない。

「美千代おばさんは、いつも言うよ。空っぽの箱を崇めたりしているから、変なものが住みつくんだって」

「そうやね」

ということは、実際にあの祠には、美千代という変なものがすでに住みついているのだろう。生駒はふと、美千代が金切り声を上げたときのこと、夜の神社で会ったときのことを思い出した。

そして橘が美千代が偽装狂人だと言ったことも。

「綾ちゃんはどう思う？　美千代さんさあ、お父さんは芝居してるって言ってたやろ？」

綾は困った顔をするかと思いきや、さあね、とシラッという。父親と同じように、案外、この少女もそう思っているのかもしれない。「美千代さんっていい人？」

聞き方を変えてみる。

「うん」

この問いには、綾は力をこめて頷いた。

「とても頭がよくて優しい人。前はよく勉強も教えてもらったんだよ」

「あ、そうや！」

優が綾を振り返った。

「前から聞こうと思ってたこと、思い出した。岩穴で健治さんはこう言ったやん。誰が自殺したんてことをまともにって。あれ、綾ちゃんはどう思う？」

「うん。それにしても、あのときは興奮したなあ。ハハ」

綾が声を出して笑った。

「なんか知ってること、ある？」

「私もそう思うよ」

「やっぱりそうなんや。頭巾で？」

「ううん。おばあさんから聞いたんだ。あれは殺されたんだって」

「奈津さんが……。で、誰にって？」

「教えてくれなかった」

生駒は駐車場から車を発進させた。

「さあて、そろそろ聞き耳頭巾の姫様を家までお送りしましょうか」

とりあえずは屋敷の裏手に車を止めた。久米を待ってみようかということである。

生駒がせっかくここまで来たのだからというのに対して、道長は今日のところは引き上げると主張していた。優は別の考えがあるのか、態度を明らかにしていない。

「財宝を引き上げる現場を押さえた方がいいと思うわよ」

道長は譲らない。しかし、生駒は道長の言葉をそのまま受け取ることができなかった。

「もうそれは間違いないんだから、どこで話をしようが同じことじゃないですか？」

「ううん。そういうことじゃないの」

「じゃ、なにが？」

「私たちの考えが少し甘いという気がするの」

それは生駒も同感だ。

財宝探しをしていたことを久米が認めたからといって、それが健治や恭介殺しとどう結びつくのか。これは、彼らの応答にかかっていたからだ。

彼らに、そのこととは無関係だと突っぱねられたら、それ以上突っ込んでいく材料が手元にそれほどあるわけではない。しかしだからといって、久米への追求を先延ばしにしても、新たな弾が手に入るわけでもないように思う。

「そうは思います。でも……」

「それに、奈津さんや美千代さんに詳しく聞いてからの方がいいと思うし」

それについてもまったく同感だ。しかし、彼女達にそんなことを聞けるものだろうか。話してくれるだろうか。生駒は可能性はないと思っていた。

優がぼそりといった。

「私、思うんやけど、綾ちゃんは絶対に白やん。それがすべての前提」

道長が身じろぎをした。

もう何度も議論したことだ。アマガハラノで恭介が殺されたシーンを、いくつも想定してみたりもしたのだ。

しかし、それはガレバに足を踏み入れる前のこと。事件を覆う大きな背景の中に、今夜、大掛かりで魅力的な場面が新しく付け加わっている。これも含めた全体のストーリーはまだ描ききれてはいない。

「でもさあ、そうするとおかしいことになってしまう」

なぜ今、優がそんなことを言い出すのか、生駒は理解できなかった。少なくともここでする話ではない。綾が白だという前提に立てば、残される答えは……。

当の道長が後部座席で聞き耳を立てているのだ。

「確かに道長さんが言うように、久米さんに直接当たっても、だめかもしれない。もう少し絞り込んでおかないと」

優が、出直しを主張している。

生駒は車のエンジンをかけた。

「わかった。次の機会に持ち越そう」

ヘッドランプをつけた。光の中に母屋が浮かび上がった。屋根裏部屋の明り取りの窓に光が走った。

道長が、照らし出された屋敷に、厳しい眼を向けていた。

ルームミラーの中の生駒と目が合うと、微妙に笑って「さ、戻りましょう」といった。

再び雨が降り出していた。

第 27 章 「供久米」

「どこに泊まる？」

「どこでも」

ふたりだけならどこにでも泊まることができる。国道にさえ出れば、モーテルが距離を測ったように一定の間隔で建っている。

「今の時間からだ、ああいうところしかないわねえ」

ピンク色のネオンサインを、ひとつやり過ぎた。

「三人でも泊まらせてくれるのかしら」

「そりゃ、一部屋いくらなんだから、いいんでしょう」

車の中は程よく暖かった。村から離れるにつれ、緊張感がほぐれてきた。

ひとしきり、ラブホテルに男ひとり、女ふたりで泊まるシーンをおもしろがって話していたが、生駒の携帯が着信音を奏で始めたことで、現実に戻された。

綾からだった。

父親が戻ってきたことを伝えてきた。朝になったら奈津の帰宅を確かめにいつてくるという。

生駒は、結果を知らせて欲しい、明日もまた村に行くつもりだ、そしてもし朝早くから橘と久米が出かけていくようなことがあればすぐに教えて欲しい、と頼んだ。そして最後に、今日のことは誰にも言わないで欲しいと念を押した。

「それにしても綾ちゃん、よく納得してくれたなあ。あの子、ホントに変わってる」

この台詞を耳にするのはこれで何回目だろう。

「自分の父親を監視しておけ、っていうようなもんやからなあ」

「そんなもんやなくて、まさしく監視しておけっていうことやん」
「まったくや。父親をどう思ってるんやろ」

後ろの席から道長が加わってくる。

「そうはとらなかつたんじゃないかな。彼女はあくまで奈津さんのことが心配なのよ。おばあさんが無事に帰ってきたら、それでオーケー。きっと、あの子、お父さんは完璧に信頼しているのよ」

「そうかもしれませんね」

「それにね、綾ちゃんはおなた達のことにも信頼しているわ」

「そんなことはないでしょう」

とはいったものの、生駒もそれは感じていた。そして生駒自身も、綾を信じきっていた。

「ところで、あなた達、久米さんたちの財宝探しと、健治さんや恭介さんの事件とはどういう関係があると思ってるの？ そろそろ私達、きっちり話し合っておくべきときじゃない？」

ついに来た、と思った。

道長が今夜、自分も付き合うと言い出したのは、単に久米の財宝探しを諫めることが目的であろうはずがない。

生駒と優は、そのことについて道長と話すことを避けてきた。

ロードサイドのレストランでも、車の中でも、久米や橘が今どうしているのか、そしてそれを奈津がどのようにして阻止しようとしているのか、ということに限定して話していたのだ。口内炎が三つもできたときのような優の話し方にも、道長を意識する気持ちがありありと表れていた。

さっき、綾は潔白だと断定した優。

その前提に立てば、恭介殺害について橘は圏外となり、残されるのは久米・道長共犯説だけとなる。道長がそんな単純なことに、気

がつかないはずがない。

「道長さんはどう考えているんですか？」

「わからない。まさかとは思うけど……」

「まさかって、どういう可能性があるんです？」

優が道長を攻め始めた。

「可能性というより……、話がずれてしまうかもしれないけど、聞いてくれるかな？」

「もちろん」

しかし、それから道長が話した内容は、生駒を驚かせ、ますます混乱させるものだった。

「平石の伝説には後日談があるの。采家の記録があるわ」

「はあ？」

サヨが山賊へ差し出されてから、数年が経った。

山賊は大西村の山中に鉦山を発見した藩によって成敗された。そして山賊の村は、鉦夫の村に姿を変えた。山賊のうち、投降したものは鉦夫として働かせたが、囚われていた女や子供はどうしたか。

鉦山で働かせることもできたが、元はといえば、山賊が近隣の村から強奪した女とその子である。

山賊集団が解体させられたことは、いずれ村人たちに知れることになる。しかも、食い詰めた村人たちの中からも、鉦山に働きに来るものが出始めている。結局、藩は女と子を鉦山で働かせることをあきらめ、出身の村に返すことにしたのだった。

サヨはそうして大西村、正確に言うと東村に帰ってきたのである。ふたりの子供を連れて。

ひとりは吾一の子、もうひとりは山賊との間にもうけた子だということだった。

村人たちがそんなサヨを、暖かく迎えたのかどうかはわからない。

きつと違うのだろう。

村に戻ってきてからのサヨは、もうその名を名乗らず、供^{くぐめ}久米と自らを呼んだ。サヨの両親がつけたものか、サヨ自身がつけたものかは判然としないが、その名が意味するところは明らかだった。

そして、怨みを忘れない、という意味が込められている供久米という名は、サヨの死後もその子孫に引き継がれていくことになったという。

「記録にあったことは、ここまで。どう思う？」

「まさか……。その名が久米という苗字に……」

「そう。私の考えもね」

「久米さんはそれを……」

「私は話していないわ。でも、彼が知らなかったとしても、千寿さんや奈津さんみたいに古い人は、もしかすると知っているかもね。だって、千寿さんは几帳面な人でしょ。誰だか知らない人に、屋敷を預けたりはしないと思うの」

「うーむ」

「私は、采家としての贖罪の意味があるのかもって、思ってるわ」

「じゃ、大葉という苗字は？　どういう由来です？」

「さあ、それはわからないわ。記録もないから」

車の中に沈黙が流れた。

カーステレオは、今の雰囲気にな似合わない「オペラ座の怪人」のテーマを流している。生駒はステレオの電源を落とした。

「あ、消さないでよ。もうすぐ盛り上がるころなのに。久米さんが知っていたのかどうか。案外さあ」

と、優が持論を唱えた。

「久米さんはそれを知ってて、あの平石を掘り出したのかも」

「そうかなあ。あのときの反応はそんなじゃなかったぞ。心底び

つくりして、恐れおののいたという感じやったけど……」

綾から平石伝説を聞いたときの久米の驚き方が、芝居だったとしたら、それこそファントム並みの役者だということになる。

ただ、生駒は頭の中で、道長がなぜこんな話を披露したのかと疑問に思っていた。

これでは、久米の立場を悪くするだけのことではないか。

「それで、道長さんの考えではどうなるんです？ この事件は」

「わからない。でも、久米さんが財宝を狙っているだけならいいのよ。私はそんなもの、ないと思っているから」

三人は、さりげない声で話しているが、その穏やかさが、話が核心に近づきつつあることを示していた。

「実は財宝探なんて関係なかったとしたら？」

道長が思い切ったことを口にしていった。

財宝探なんて関係ないというのなら、先祖が受けた仕打ちへの復讐を行おうとしていると言いたいのか。あるいは、久米が犯人ではないと言いたいのだろうか。それなら、真相はどこにあると道長は考えているというのだろうか。

どちらとも取りかねたが、道長も自分で言い出しておきながら、わからないと首を横に振っていた。

「それになんだか胸騒ぎがしない？ これまでも人が死んだ。しかもなんとなく、これで終わりではないような気もする。誰が犯人だったとしても、今の状態が、犯人にとって満足できるもの？」

「それは……」

「違うと思う。きっと、まだ序章なのよ。なにも起きてないくらいに」

思い過ごしであって欲しいけど、そういつてかすかに微笑んだ。

サヨの祟り、平石に宿った吾一の呪い。

そんな非現実的なことが、事件の根元にあるというのか。

クレバーで現実的な道長として、受け入れることができるのだろうか。

それとも、権現さんとトキの話をしたときにように、結界を張られたアマガハラノとそれを破る力を秘めた聞き耳頭巾の話をしたときのように、それはそれ、これはこれと、割り切った思考に切り替えているのだろうか。

ルームミラーの中の道長は、対向車のライトに照らし出されて、白い頬を見せていた。一瞬眼が合ったが、すぐに伏せてしまう。

「私、まだあなたたちに信用されてないようね。しかたないとは思うけど……」

優がカーステレオをつけた。クリスティーンのソプラノが車内に流れ始める。

道長がポツリと、久米との馴れ初めを話し出した。十年ほど前に、あるパーティーで紹介され……。

しかし生駒は、もうほとんど聞いていなかった。

脳の回路が、あちこちでスパークしていた。

いろいろな出来事や、言い伝えや、人の声や顔が、暗闇の中で見た光景や音や匂いが、高速で頭の中を駆け巡っていた。

ありとあらゆる脳細胞で、それらが互いに絡み合ったり、反発しあったりしていた。

時が経てば、それらが自然に組み合わされてひとつの像を成すのかもしれないが、今の生駒にはとてもそうは思えなかった。

むしろ、大切なそれらの情報が、いつしか粉々になり、もはや修復さえできないほどの断片に粉碎されてしまうような気がした。

優が質問している。

「あ、そだ、道長さん。くりのきからすなって歌、知ってます？」
「懐かしいわね。知ってますよ。子供の頃、よく歌って遊んだわ」
「じゃ、村の人はみんな知ってるんですね」

「そうね」と、道長は、綾が言った通りの歌詞を、節をつけて口ずさんでみせた。

「いわゆる、あの子が欲しいっていう遊びみたいなものだったわ」

生駒はスピードを落とした。

神経が擦り切れていた。この状態で運転はもう続けられない。

「ここです？」

「いいんじゃない」

「道長さん。申し訳ないけど、今夜はもうなにも考えられない」
道長が穏やかに笑って、頷いた。

「あなただけじゃないわ。私もそう。明日のことにしましょう」
「すみません」

「いいえ」

「ね、ノブ。三人で泊まれるか聞いてみようか」

「あら、冗談よ。あなたたちの邪魔はしないわ。私はひとりで寝ますって」

第 28 章 「キスしよか」

「キスしよか」

優が体を寄せてきた。

「またかいな」

「いやなん？ 私はノブほど感情移入できないから」

「おまえ、いつもそんなこと考えながら抱きついてたんか？」

「ハッ、アホとちがう？ 佳代子さんや健治さんのことやん。ノブはずーっとそればかり考えてるから」

「はあ！ よく言うよ。それはこっちのせりふ」

「ね、ノブの服にとまった蛭、もう死んだかな」

「ほら、また！」

「あれさ、佳代子さんの霊？ ノブに、怨みを晴らして欲しいっていうメッセージやったのかもしれないよ」

「けっ」

「やっぱりにしてらう」

「あ、さては嫉妬してるな」

「冗談やん。佳代子さんのためにも真相を解明しないと、と言おうと思ったん！ そんなこと言うんなら、サヨの白装束にとまった蛭の生まれ変わるか、って言えばよかったかな」

「僕の死出の旅路の、お供をしてくれるってか。あーあ、もう何でもいい。おまえと付き合うのは、ほんとに疲れる」

「じゃ、やめる？」

「付き合いを？ それとも推理か？」

「ほえっ？ 推理？ まだわかってなかったん？」

生駒は驚いてしまった。

さっき優が、やけに元気よく体を絡めてきたと思ったら、すでに

謎が解けていたというのか。生駒は、ガレバの光景や道長の言葉が、頭の中をぐるぐる回っているだけだったというのに。

「わかったんか？」

優はごろんと仰向けになり、毛布を首まで、たくし上げた。

「ヒント、出そうか」

横顔で微笑んでいる。

「ずばり言ってくれ」

「だめ。ヒント」

「生意気な！」

生駒は毛布の上から優に覆いかぶさった。

「あ、やっぱり、またする気やん」

「このやろ」

「はいはい。おとなしくしててね。ヒント出すから」

「ふう！」

生駒は優の体を離し、毛布にもぐりこんで並んで横になった。

「まず、そもそものところやね。なぜ健治さんや恭介さんは殺されたのか」

「財宝探しに邪魔」

優は黙っている。言い直す。

「単に邪魔だったからともいえるし、彼らもまた財宝を狙っていた競争相手やったのかもしれない」

「今のところ、目に見える手がかりからは、それしかないかな」

優が、もう何度も話し合ったことを整理しようとしていた。

「次。また、そもそも論。奈津さんが祟りじゃと言ったやん。祟りというからには、誰かがタブーを破った。つまり、してはいけないことをしたということ。じゃ、そのしてはいけないことって？」

「滝壺に潜ることやろ。おい、ヒントというより、テストされてる

みたい」

「つまらないことを気にしないの。厳密に言うとか、潜る準備をしてあるのを見た、っていう類のことかもしれない」

「ああ」

「じゃ、次いくよ」

優が次々と質問を投げてきた。

「あの岩穴の夜、奈津さんの言葉。タイミング的には、佳代子さんに祟りが降りかかったという感じやった。では誰が、そのしてはいけないことをしたのか？」

「久米さん。あるいは橘」

「佳代子さんは久米さんのところのお手伝いさんやから、祟りが？」

「わからん。このストーリーが正しいとするなら、久米さんは彼女が死ぬ以前から、滝壺の財宝を狙ってなんらかの行動を起こしていた、ってことになる」

「もちろん。わざわざ橘さんを東京から呼び寄せたんやから」

「でも、今の話は正解かもしれないけど、違うかもしれない。答えは保留」

「そういうこと」

「久米さん達を神社で見かけた夜、私が奈津さんに聞いたとき、彼女はなんと言ったか」

「いくら警告しても聞く耳を持たないものには意味がないようじゃな……」

「そう。でもあれ、私に向かって言ったのかどうかは、微妙なところやったね」

「違うだろうな」

「岩穴で奈津さんが口にした、西脇利郎の務め。どういう意味か」
「わからん」

「俺の財宝を守れという意味にもとれるし、崇りを実行するのがおまえの仕事、というようにも受け取れる」

「西脇さんの服が濡れていたのはなぜか」

「それは今日、やっとわかった。ガレバのシャワーをくぐったから」
「うん！」

「西脇も、采一族として、あの秘密の抜け穴の存在を知っているに違いない」

「秘密を代々受け継いでいくひとりとして、千寿さんは奈津さんを、そして奈津さんは西脇さんを選んだという意見ね」

「選んだのかどうかは、知らんぞ」

「では、あのとき西脇さんは、なぜガレバに降りて行ったのか」

生駒は唸った。あのときの西脇の行動の不自然さは、まだ理解できないままだ。

「ガレバの先の滝壺に行かなければならない理由……、財宝を守るためのなにかをしに……」

「それもありやね」

「ん？」

「でも違うと思う」

「なぜ？」

「あんなに急ぐ理由がないから。少なくとも、あのとき、行動を監視する相手である久米さんや橘さんは、アマガハラノにいるのよ」

「うーん」

「むしろ、逆。彼も滝壺の財宝を狙っていたんやとしたら？」

「でも」

優が生駒を遮った。

「わかってる。これも、どうしてもあのとき行かなければならない

理由には、なっていないからね」

「もっと切羽詰ったものがなければ……」

「ねえ、あのとき変わったことが他になかった？」

「健治や恭介がいなくなったこと」

「それから？」

「ズボンに血がついていたこと」

「他には？」

「ん……」

「もっと些細なこと」

「じらすなよ」

「ほら、神社で休憩しているとき、奈津さんを見かけたやん」

「また、奈津の登場か」

「彼女を見たのは私達だけかと思ってたけど、もしかすると、西脇さんも気づいていたのかもしれない。それで、彼はこう思った。奈津さんに見つかったんじゃないかって」

「なにを？」

「財宝を引き上げるためのなにか。それを奈津さんに見つけられたかも、と思った西脇さんは、滝壺まで確かめに行かずにおれなかった」

「仕事柄、いろいろな資材を持っているかも。チェーンソーとか、ウィンチとか、ポンプとか、役に立ちそうなものを。もちろん、ポーターブル発電機も」

「うんうん。いい感じ」

「どういたしました。あ、そうか！ 橘が言ったことはそれか！」

「はい、続けて」

「朝、西脇が重そうな荷物を運んでいくのを見たってやつ！」

「そうそう」

「うーん、有り得るよな」

「でさ、アマガハラノに登っていく途中で、例の祠の前で休憩したやん。あのとき、彼はあの抜け穴に奈津さんが下りていった形跡がないかどうか、観察したのかもしれない。そしてアマガハラノで班分けをしたとき、彼は自分だけ残ると言い張った」

「栗の木はそう簡単に見つかるまい、と」

「その間に、滝まで往復できると踏んだのね」

「でも、意外に手間取った」

「うん。それに、栗の木がすんなり見つかったからね」

「でも、奈津さんと鉢合わせしてしまう可能性は？」

「ない」

奈津はアマガハラノ調査隊と顔を合わさないよう、どこかに身を隠し、やり過ぎたかっただけのことだ。

「しかし、そうすると、久米&橘チームと、西脇単独チームが、それぞれ財宝を狙っていた、ということになる」

「可能性を組み合わせたら、そういうことね」

「もしかすると、三人チームってことは？ なにしろ、西脇は滝壺への隠しルートを知っている、という前提なら」

「それはありえないよ。久米さんチームは西脇さんを仲間にするメリットがあるけど、逆はないから」

「ああ」

「それにさ、もともと采家の隠された財宝。いくらなんでも赤の他人に話すわけがない。久米さんから西脇さんに仲間にならないかって、誘えるものでもない。あんたのお宝をちょうだいするから、一緒にどうかって、なんてね」

「よし。で、次は？」

「一方で、久米さんチームは、どういう方法で滝壺に降りていこうとしていたのか」

「あの縄梯子」

「そうね」

「あるいは、カモフラージュされたあの穴」

「彼らには、あの穴は見つけられなかったと思う。もっと、直接的に降りていく方法を考えたはず」

「あの木造ダムを遡るっていう手は？ それならその気になれば、すぐに決行できるぞ」

「それは駄目。いくらなんでも人目につきすぎる。あそこに柵があることは、村人みんなが知ってるのよ。異変がないかどうか、毎日、誰かが見に行くという掟があるかもしれないし」

「掟かい。たいそうなことやな」

「そう、たいそうなことなのよ」

「でも、いずれの方法にしても、もっと早く、お宝をちょうだいできてたんやないか？ こんなに何年も、かからなくても」

「もともと、道長さんは彼に、滝に財宝が、とは話さなかった。山の中に財宝が眠っているかも、とだけ話したのよ。岩穴座談会でも、采家を助けるもの、という言い方をした。つまり、久米さんの頭の中で財宝と滝が結び付くまで、それなりに時間はかかったんやと思う」

「村人の目もあるしな。さっさとお宝を手に入れて村から引き上げていったら、バレバレ」

「そう、じっくり時間をかけて……、そして、彼らはついに決行しようとしている……」

いつのまにか優の顔がほころんでいた。

「で？」

「なにが？」

「だから、なぜ今なのか？」

「えっ、なに言ってるん！ さっき話したやん。お宝を狙う競争相

手がいる、っていうことに気がついたんやんか!」

村に来た本当の目的を佳代子に知られた久米が、彼女を殺すことは考えられないことではない。

猫の首はアトリエの工事を中止するための自作自演。

健治をなんらかの理由で呼び出して殺すこともできた。理由はやはり財宝探しを知られたから。

恭介を殺すこともできた。道長が共犯であれば可能だ。西脇の実行を遅らせる時間稼ぎの意味か、恭介自身が財宝を狙う実行班だと考えたのかもしれない。

しかも、采家への復讐という要素もある。

サヨの子孫である久米が平石を掘り出したのは、その復讐劇の始まりを高らかに知らせるファンファーレだったのかもしれない。

西脇をも殺すつもりだったはずだ。

しかし、西脇が警察に拘留されてしまったことで、釈放されるのかどうか気になっていた。だから久米は寺井に電話を入れて、それを確認している。

橘は、綾とずっと一緒にいた。恭介を殺すことはできない。ただ、健治の方は可能だ。

道長はどうか。

健治を殺すことはできた。筋力という面ではいささか疑問符もつくが、無理だと断定できるものでもない。恭介を殺すタイミングという意味では久米の場合と横並びだ。

ただ、久米チームのおまけみたいなものかもしれない。黙っていてくれたら、財宝の分け前を渡すとかなんとか言われたのかもしれない。気になってしかたのない道長は、今夜……。

生駒は、頭の中を整理しながら、推論を展開していった。

「ふうん。その推理って現実的なん？」

「まだあるぞ」

西脇利郎はどうか。

「健治については、警察のいう返り討ち説」

「警察というより、仙吉さん情報ね」

「まあまあ、正確にいうとそういうことやけど」

しかし生駒は、話しながら、ゲンナリしていた。理屈を捏ね回してはいるものの、まったく正しい解答だとは思っていなかった。

「しかも、恭介を殺すこともできた。ズボンの裾の血……」

勢いで話しているが、優は目を瞑ってしまっている。

「恭介を殺した理由は父親の歪んだ愛。久米に取り入ろうとしているのに、その目の前で、息子であり西脇工務店のただひとりの社員である恭介が、あまりに子供っぽい醜態を見せたから……。彼の将来と、自分の会社の行く末を悲観して……」

「すさまじい推理やね。聞いてられない」

ついに、優が生駒の話を遮った。

「警察はきつと調べてるよ。ズボンの血が、もし恭介君の血と一致してたら、釈放なんてされっこない、でしょ」

「明日、警察に聞いてみよう」

「絶対に教えてくれないよ。それにさ、自分の息子を殺したっていの？」

「世の中にはそういうことも。おまえもこの前、美千代さんがって……」

「あるにはある。でも今回の場合は違う」

「事実は小説より奇なりというぞ」

「ばかばかしい」

「クスノキの話を忘れたのか？」

「子殺し云々？」

「そう」

「忘れるかい！ はああー。しっかりしてよね！ 全然違う。だって、三つの班が発発するや否や、西脇さんはあわててガレバを降りていったんやろ。さっき、そう想定したやん」

「いや、だから、ガレバまで往復する時間が遅くなってしまったんや」

「息子を殺してたから？ それ、本気？」

「はいはい、撤回しますです」

「話をややこしくしないでよ」

「じゃ、あの血はなんや？」

「ガレバで発電機とポンプを隠した。それは早朝、とりあえず運び込んだもの。奈津さんに見られたら、すぐにばれてしまうところに置いてあった。それを岩陰に移動させたけど、あわてて怪我をした。きっと、それだけのこと。もし恭介くんの手やったら、あのズボンのままで、一日中うろつきまわるはずがないやんか」

「やけに自信があるんやな」

「健治さんが殺されたときのことも重要やけど、恭介くんが殺されたときのことも、きちんと筋道を立てて考えないとね」

「もちろん、同意」

「共犯説もあるけど、単独犯っていうのが普通やん。誰がひとりになっただけか」

「木元」

「それから？」

「あっ、そうか。久米さんや！」

「恭介くんを探してたとき、久米さんはひとりでアマガハラノの入口で待ってた。道長さんが班分けをして。ということとは？」

「橘や木元も！」

「じゃ、そのときの状況を再現してみて。なぜ、恭介くんは姿を見せなくなってる、どこでどうしていて、というようなこと」

「えっと……」

生駒は詰まってしまった。

久米や橘がひとりになった時間帯があり、彼らが恭介を殺す可能性が一気に高まったと思ったが、なぜ恭介が姿を隠し、彼らのうちのどちらかに殺されることになるまで、どこでなにをしていたのかはまったく想像できなかった。

もし、父親を追って滝へ降りていったのなら、アマガハラノでわずか二十分間ひとりでいた久米や橘は、恭介を殺すことはおろか、出会うことさえできなくなってしまう。

「それでノブの推理はおしまい？」

「あううう……」

「なんだ。ぜんぜん見えてないんや」

「どうもです」

「そもそも前提が間違っていたりして」

「どんな？」

「恭介くんが殺された場所の」

「へ？」

「あの笹の中？」

そういえば、あのとき感じた違和感。

西脇の取り乱しように驚いただけではない。笹原の只中に打ち捨てられたような恭介の死体……。

「推理の材料という意味では、だいたいそんなところやけど」
「まだ先があるんか？」

「あたり前やんか」

「まだ他にもいるんか？ 圭子とか仙吉？ ん？ まさか奈津？

あ、美千代か？」

「全然だめ。バラバラに考えても。闇雲に容疑者を増やしても意味なし！」

「ごもっともです」

「正確な時間軸に沿って、なにが起きたのか、をもっと考えないと。人間関係も重要」

優が話し始めていた。

「それに、佳代子さんも含めた三人が死んだことで、目的を達成する人は誰か」

「それはもう何度も話した」

「そしてその人物が、より確実性を狙うなら、これからなにをするか」

「やはり」

「そういう視点も含めて考えないとね」

「まだ、なにか起きるということか……」

「道長さんも、そう言ったでしょ」

「ああ」

「これで終わりではないような気がする。まだ、序章だって」

「そう思う」

「それに、ほら、まだ誰も例の山神の裁きを受けていない。でしょ。さ、それじゃ続き、いこうか」

「よし。でも僕は、山神の裁きもそうやけど、大石小石の遊び歌の方にも興味があるぞ」

第 29 章 「砂塵」

綾から連絡があったのは、朝の六時半だった。からりと晴れ渡った空には、すでに太陽が姿を現わしていた。綾は早口で自分が伝えたいことだけ言うのと切ってしまった。

奈津はまだ家に帰ってきていない。仙吉に聞いても知らないという。今朝、橘は珍しく三人分の弁当を作っていた。出掛けるようだが、でもまだ今は家にいるという。

生駒は綾の元気そうな声を聞いてほっとした。少なくとも彼女の身に異変は起きていない。

八時半には出発した。

今日の主な買出しは、着替えの下着、そして虫よけスプレーと長いロープなどだ。ホームセンターが開くまで、喫茶店で時間を掛けてモーニングセットを食べた。

「やれやれ」

大西村に向かう府道を走りながら、今日も生駒は弱音を吐いた。恒例となった緊張緩和剤みたいなものだ。

「なにが、やれやれなん？」

生駒の葬式用の黒いズボンは、昨夜の雨中行軍でよれよれになり、革靴たるや無残な有様だ。

「うー、まだ中が濡れているう」

「ノブも買えばよかったのに」

道長や優は、Tシャツや綿パンやスニーカーなどを一揃い買い求めていた。

「裾上げはすぐにできないでしょうが」

「短いからね。でも、折り上げたらなんとかはけるやん」

「けっ、いらぬものは買わない主義」

「なら、文句言わない。そんなことより、橘さんは三人分のお弁当を作ってたんやろ。その三人分って誰の分？ 綾ちゃんにちゃんと聞いておけばよかったのに」

「そんなこと言ったって、あの子、あっという間に切ってしまったんや。ふたつは久米さんと橘の分、もうひとつは綾ちゃんのやろ」

「もし、違ったら？」

「まあ、まあ。たぶん生駒さんのいうとおりよ。それより、遅くなっちゃったわ」

道長がロープにたくさんの結び目を作っている。万一の場合、垂らして昇り降りするときに手がかりにするためだ。どれほどの役に立つのか、分らないが。

「おまえが、そのどうでもいい足を入れるものを買うのに、あれこれ悩むからやぞ」

「じゃ、もう金輪際、そのどうでもいい足は見せてあげない」

「はいはい。ふたりとも、トムとジェリーごっこは後でしてね。もし久米さんが出かけてしまっても、追いかけていったらすむことだから。滝壺への秘密の道もわかったことだし」

いつものさわやかな笑顔を見せて、道長がコーヒーを飲み干した。

昨夜、優と話したことで、生駒の気分はずいぶん楽になっていた。優の解説は難解だったが、これから起きるかもしれない出来事を目の当たりにすれば、案外すっきり頭に入るかもしれない。今日は平常心でいられるような気がしていた。

「先に滝壺がどうなっているのか、見ておきたかったな。久米さんがまだ屋敷にいたらいたで、彼に知られずに屋敷の前を通り過ぎることもできないし」

「またノブ、そんなどうでもいいことを言ってる。しつこいよ」

「あれ？」

屋敷裏の空地に、綾が佇んでいた。

「学校は？」

「早引きしちゃった」

「もしかして、待っててくれたん？」

当然だ、というように綾は胸を張ってみせた。

「お昼ごろまでには、絶対来てくれるって思ってたから」

「ごめん。遅くなって」

三人がなんともいえない顔をしていたのだろう。綾はせかすように車の中を覗きこんだ。

「あ、ロープを買ってきたんだ！」

後部座席から引きずり出して、握り具合を確かめている。

「久米さんやお父さんは？」

「みんないない。お父さんは一時間ほど前に出ていったわ。私はいつでも出発準備オーケー」

念のためと思って、奈津や美千代、そして仙吉の家や集会所まで覗いておいた。どこにも誰もいなかったという。

すべての関係者は滝つぼに集結しつつあるのかもしれない。急がねばならなかった。

「奈津さんは昨晚、帰ってきてた？」

「ううん。鶏の餌が入ってなかったから」

綾がたちまち心配そうな顔になった。

奈津はあの雨の中、ほぼ丸一日を外で過ごしたことになる。七月とは思えないほど気温も下がっていた。もしものことがあってもおかしくはない。今から、綾にとって、そして誰にとっても、見たくないものを見ることになるかもしれない。

しかし生駒は、今朝も、綾についてくるなどはいわなかった。

岩代神社の境内で立ち止まった。

「休憩？」

綾は怪訝そうだ。焦りが顔に出ている。

「いや。ここで落ち合うことにしてる」

「えっ、誰と？」

ますます不思議そうな顔になる。もう隠してもしかたがない。

「警察」

綾が目を丸くした。

「二台も三台も、見慣れない車が村の中を行列していったら目立つやろ。十分位したら、来るんじゃないかな。それまでここで休憩」今朝、寺井に電話を入れておいた。犯人を究明する手がかりになるかもしれないから、一緒に来ないかと誘っておいたのだ。

綾は理由を聞いたそうな顔をしたが、なにも言わなかった。彼女にも十分想像できることだ。みるからに、肩に力が入っていた。

「ね、お弁当、三人分って言ってたやろ。誰と誰の分？」

生駒は、そんなことを聞いて、綾の緊張をほぐしてやりたかった。「ひとつは私の。お父さんの分でしょ。もうひとつは久米のおじさんの分じゃないかな」

「やっぱり」

綾はなぜそんなことを聞くのかという顔だ。

会話は途切れてしまった。綾の緊張をほぐす役は、優にバトンを渡す。

「聞き耳頭巾、持って来た？」

「ううん。今日は使うことはないかなと思って」

「そうかあ」

失敗。

「ほうらあ」

と、道長が、生駒のリュックサックの中を見せた。

「うわ！ いっぱい」

「綾ちゃんの分もあるわよ」

本当はない。昼食のつもりで菓子パンやおにぎりを買ったのだが、優の好みで多めになっただけのことだ。

「ハハ、こんなのまで買ってる！ デザート！」

水饅頭のパックを取り出して、綾が笑った。

しかし、その笑顔は長くは続かなかった。

「あ、あれ！」

獅子岩の注連縄に、奈津の着物が挟まっていた。いつもの緑色の着物。きちんと畳まれていた。

「どういうこと。おばあさん……」

まもなく、寺井一行五名が到着した。

全員がラフな格好でズック靴を履いている。とりあえず、署にあるありあわせのものを履いてきたという感じだ。

「生駒さん。もう少し、事情を教えてくださいませんかね。おっしやるとおり、こんな格好で来ましたが」

生駒は「さわり」のことしか伝えていなかった。

確実なことがない以上、寺井に先入観を持って欲しくなかったからだ。久米と橘が夜な夜な、そして今日は朝から滝に行っている。なんらかの目的があるようだ。また、奈津が一昼夜も家に帰っていない。九十二歳の老婆が雨の中を。もともと奈津は、久米の行動に不審を抱いていた。なんらかの事故、あるいは事件に巻き込まれた可能性もある。ということだけを伝えていた。

「詳しいことはまだ言えません。いろいろな可能性があるのです。無

駄足になるかもしれませんが、ついて来て下さい」

「ですが……」

「プロの目や耳が、もしかすると腕力も、必要になるかもしれない。そう思っただけのことです。いやならいいんです。ゆっくりここで話し込んでいる時間はないんです。僕たちだけで、行きますから」

「わかりました。お供しましょう」

寺井は同行の部下に目配せをすると、

「案内してください」といった。

生駒の頭の中を駆け巡っていたさまざまな想像は、優が昨夜繰り出したたくさんのヒントや仮説を繋ぎ合わせることによって、ひとつの形になり始めている。万一、空振りだった場合は寺井に謝れば済むことだ。

「あの祠から下に降りるんです」

「ふむ」

若い刑事が祠の写真を撮る。別の刑事は地図に、なにごとか書き込んでいる。

「一応、私が先に」

と、寺井が草むらに分け入り、しゃがみこんで地面を調べた。

「ここを通った可能性があるのは、久米荘一さんと橘文雄さん、采奈津さんですな。それから生駒さん達と……」

「それ以上です」

寺井はがっかりしたように立ち上がり、祠に近づいていった。生駒達もその後続く。

刑事たちが祠の周辺を、念のためにと調べ始めた。

焦りは募っている。

しかし生駒には、警察がここで何かを発見してくれることに期待

する面もあった。

あたりをぶらつき始めた優が、「ノブ」と、手招きしてきた。
「ほら」

縄梯子に続く踏み跡に、新しい靴跡があった。

明らかに昨夜の雨の後でつけられたもの。進んでいく足跡が多いが、帰ってくるものもある。

「行ってみよ」

振り返ると、道長と綾が心配そうに見ていた。

「すぐに帰ってくる」

靴跡を踏まないようにして、水の流れまで来た。

「ガレバの水はこれやね」

流れを飛び越した。

「商売道具を使って、大掛かりなことをやってたわけや」

「この水量やから、一時的に、川の流れを変えてしまうのもたいしたことやないかもね」

そのとき、

「生駒さん！ 来てください！」と、寺井の呼ぶ声が聞こえた。

刑事が藪の中で血溜まりを発見していた。

「ここか」

生駒も優もさほど驚かなかった。祠からそう遠くないところにあるはずだと考えていたからだった。

「どういことですか？」

「恭介の血だと思いますよ」

「えっ？」

「彼はここで殺されたんです」

「どういう……」

「後で説明します。それより急ぎましょう」

生駒は祠の裏手に回り、枝の蓋をとった。

「この穴を降りるんです」

「なるほど。こういう仕掛けに」

「さ、どいてください。僕が先に降ります」

昨夜と同じように、腹ばいになって足から穴の中に入っていた。雨の中、懐中電灯を頼りに覗き込んだときは違って、幻想的な光景だった。

ガレバは大きく蛇行していた。両側の崖は高さ二十メートルから三十メートルほどあり、帯状の細い空が見えている。まるで天井のない廊下のような空間だ。

「ほほう！」

寺井が生駒の横に降り立った。

「穴を抜けると別世界ですな」

綾が降りてきた。待ちきれないというように、ポン、ポンツ、とガレバの石に飛び乗っていく。

刑事達も降りてくる。

「先に行きますよ」

生駒は、岩によじ登ったり跨いだりしながら進んでいった。ところどころで、シャワーのような水のカーテンをくぐり抜ける。さっきの踏み跡を横切る流れが、このガレバに落ちているのだ。

最後尾の道長が追いついたところで、ひととき水量の多いシャワーに差し掛かった。相変わらず岩の廊下の幅は狭い。これを潜らずには向こうに行けそうにない。

「これで全員ですか？」

「はい。ひとり上に残してきました。万一のときの連絡用に」

寺井が、水のシャワーの向こうを見透かしている。

「さ、行きますよ」

走り過ぎることはできない。滑らないように慎重に積み重なった石を越していく。

したたかに濡れた。綾の髪の手先から、洗った後のように水が滴り落ちていた。

「行き止まりじゃないでしょうな」

百メートルほど先、大きな玉のような巨石が、行く手を遮っていた。

道長が綾にタオルを渡してやる。

「そんなはずはありません」

玉のような巨石の前まで来た。

「こいつはよじ登ることはできませんな」

寺井が石を平手で叩く。そして、慌てて手を合わせて拝むしぐさをした。巨石の中ほどに不動明王のお姿が彫り込まれてあった。

「どちらかに、通れる隙間があるんでしょう」

生駒は右側に回りこんだ。

「ここから行けそうや」

人がひとり、通り抜けることができそうな隙間があった。屈みこんでいかねばならない。

「そっちは？」

「だめです」

左側を見に行った刑事が応えるのを聞いて、生駒は隙間に入ってしまった。

巨石の出っ張りを頭を下げて通り過ぎると、まっすぐ立つことができた。

「狭いけどなんとか」

と、言いかけた生駒の声は途中で消えた。

そして次の瞬間、声にならないグワツという叫び声をあげていた。後ろにいた道長が息をのむ。

あっという間に、綾が横をすり抜けていく。

「おばあさん！」

奈津が座っていた。

巨石と崖の隙間に、横顔を向けた老婆がいた。目を見開いて、怒りに満ちた顔で巨石を睨みつけていた。

「おばあさん！」

綾は、奈津の前でぴたりと止まった。

高さ一メートルほどの石に跨るようにして、奈津は足を投げ出して座っていた。

滝に打たれる行者が着るような、生成りの着物を身にまとっていた。両腕は腹の下で握り合わせているが、足は力なくだらりと垂れ下

がり、その上にロープがかかっている。

脱げてしまったのか、片方しか草履を履いていなかった。

奈津の体は、シルエットとなって、狭い隙間を遮っていた。乱れた白髪が風になびき、光っていた。

「失礼」

寺井が生駒を押しつけて近寄っていく。

そして綾の両肩に手をかけると、

「ちょっとどいててね」

と、前に体を入れると老婆の顔を覗き込む。

奈津の目の前に手をやると小さく振って、口元に持っていく。そして首筋に触れた。

「お亡くなりになっています」

恐れていたとおりになった。

現場保存のために、生駒達は巨石の手前まで押し戻された。

昨夜、無理してでも降りてくれば良かったのかもしれない。後悔の念が胸をよぎる。

綾は、体を硬くして巨石の隙間を見つめている。その肩に優が手を置いた。

しかし、奈津の死は半ば予測していたことだった。

行方不明になってから、雨の中を一昼夜。しかも、獅子岩の注連縄に挟まれた着物。

それにしても、このようなところでなにをしようと……。

刑事たちがぞろぞろと隙間から出てきた。最後に出てきた寺井がいった。

「これといった外傷はないようですが」

「……」

「生駒さん、説明していただけますか」

「そんなことをしている場合ではありません」

「では、どうし……」

寺井の言葉を遮って、生駒はきっぱりといった。

「滝まで行きます。そこをどいてください」

「ふむ」

寺井にも異存はない。もちろん、この先に犯人がいるかもしれないと考えているのだ。

「わかりました。じゃ、少し待っててください」

寺井は若い刑事に指示を出し、生駒は刑事達が奈津を抱えて出てくるのを、体をこわばらせて待った。

「采奈津さんですな」

「そうです」

「で、今この先にいるのは、久米荘一さんと橘文雄さんということですね」

「そうだと思います」

「お父さん……」と綾が呟いた。

刑事がひとりで出てきた。首を捻っている。

「それが、重くて」

「ばかやろう！ 硬直してるだけだろうが！ 見たところ、死後半日ほどだ。それくらいのがまだわからんのか！」

「はあ。それに冷たくて」

「あたりまえだ！」

「はあ。でも、着物が濡れているんです」

「ごちゃごちゃ言っていないで、早くしろ！」

寺井に引き摺られるようにして、刑事が再び隙間に入っていく。生駒と優がその後続いた。

刑事が、奈津の腕の下に手を入れて、抱え上げようとした。力を入れて奈津の体を引き寄せようとするが、びくとも動かない。刑事がさらに力を入れる。

と、ぐらりと奈津の体が、前に倒れてきた。

同時に奈津が座っていた石が動いた。

そして、なんと、ピシッと鋭い音をたてて真っ二つに割れた。

「うわっ！」

刑事が奈津の体から手を放して飛びさがるのと、

「危ない！ さがれ！」

と、寺井が叫ぶのが同時だった。

そして、突き飛ばさんばかりに生駒の体を押し返してきた。

生駒は、岩の隙間に頭から突っ込んで転がり出た。

その刹那、奈津の体が横ざまに飛び、岩壁に打ちつけられるのを見た。

寺井も刑事も生駒の後に続いて隙間から駆け出してくる。

「上に逃げろ！」

と叫び、ものすごい形相で道長を突き飛ばす。

すでに異変は起こり始めていた。

そこにいる誰もが、不動明王の巨石がグラリと動いたことを肌で感じていた。

我先にガレバを登り始める。

飛ぶように石の上を走っていく綾。続く優。

道長も懸命に石をよじ登っている。

生駒も夢中で、両手足を動かす。ひとつめの石を乗り越え、ふたつ目の大きな石によじ登るのに時間がかかったように思った。

それはわずか数秒後の出来事だった。

突然、背後で大きな音がした。

ガシューーン。

岩がぶつかり合う、鋭い音が耳をつんざく。

振り返る余裕はない。無我夢中で足を動かす。

今、なにが起きているのか、はっきりわかっていた。

玉のような巨石も、奈津の座っていた石も、微妙なバランスでこのガレバに止まっていたのだ。互いに接しあって支えになり、この細い岩の廊下に挟まっていたのだ。

ところが、小さいほうの石が割れ、そのバランスが崩れた。

丸い巨石がそれまで接していた岩壁から離れた。そしてガレバを転がり始めたのだ。

ものすごい音をたてながら、岩が転がり落ちていくのがわかった。地面が揺れている。そしてその激しい音に覆いかぶさるように、ドーンと、と鈍い音が岩の廊下に響き渡り、鼓膜を震わせた。

同時に、両側の崖から、ガラガラと岩が剥がれ落ち、ドドドド、ズザーと土砂が落ちてくる音がした。

無数の砂利粒が、生駒の背を襲ってきた。

たちまちあたりは土煙が立ち込め、目を開けていられなくなった。

目を閉じた。祈る気持ちで立ちすくんだ。

「ユウ！」

「ノブ！」

「綾ちゃん！ 道長さん！」

「はい！」

ふたりが緊張に震える声を返してきた。

第 30 章 「はりのあなをば」

やがてあたりに静けさが戻ってきた。

生駒の心に、ふわーと暖かいものが広がってきた。そっと息をした。

たち込めた土煙も徐々に収まってきた。足元が見えるようになって、注意深くさらに登った。

ふたつほど石を乗り越えようと、優が立っていた。

「もっと上まで！ また落ちてくるかもしれない！」

すぐ横の土ぼこりの中から、寺井の声。

「綾ちゃん、聞こえた？」

生駒も叫ぶ。

「はい！」

綾はもう少し前にいた。

さらに登った。

大きな水のシャワーのところで、ようやく周囲が元通り見えるようになった。

振り返ってみると、丸い巨石があったところは、土砂で埋まっていた。奈津の体もろとも。何本かの木が落ちて、岩盤の隙間に引っかかっていた。

ガレバの一番上、砂利の一畳座敷に到達して、ようやく足を止めた。

水しぶきを潜ってきたせいで、顔についた土ぼこりが流され、誰の顔にも奇妙な茶色の縦筋がついていた。

寺井が階段の隙間を見上げた。上にいる刑事と二言三言交わしてから、ほっとした声を出した。

「もう大丈夫そうだな。ここでしばらく様子を見る」

ひとりずつ顔を覗き込み、

「皆さん、無事みたいですな。よかった」

と、顔を撫でて濡れた土埃を塗りたくった。

手の平を擦り合わせ、ホウツと息を吐き出した。

「怪我はないですか？」

刑事が背負っていた荷物から救急箱を取り出した。

「綾ちゃん、大丈夫？ 道長さんは？」

軍手をしてこなかった刑事のひとりが手の平から血を流していた。幸いにも人的被害はそれだけだった。

「危ないところだった」

寺井は安堵の声をあげたが、向き直った顔には緊張感が溢れていた。

「いったい、これはどういうことなんです！」

「それにしても、すさまじかったですね」

生駒は、努めてさりと云ったものの、心臓はまだバクバク状態だったし、声も震えていたかもしれない。

もちろん頭は、予想外のことに空回りしていた。

ここで起きるかもしれないと考えていたことがなんだったのか、自分たちが確かめようとしていたことがなんだったのか、忘れてしまいそうになっていた。

危うく死にかけた恐ろしさだけにだけではない。

奈津の厳しい表情。ずり落ちそうになった亡骸。そして鉄の芯棒……。

それらは一瞬のうちに土砂に埋まってしまったが。

生駒は、

「すさまじい仕掛けが」

といって、今見たものを頭の中で整理しようとした。

さっき、ちらりと見えたもの。

奈津は、石に付き立てられた鉄の芯棒に、括りつけられていたのだった。

石が割れ、芯棒は奈津を括りつけたロープから、カランと抜け落ち、奈津は投げ出されたのだった。

「どういふことなのか！」

再び寺井の厳しい声がした。

生駒は、ハッとして崩れ落ちた土砂から目を放すと、寺井に向き直った。

「説明をお願いしたい」

しかし、なにをどこから話せばいいのか、瞬時に思いつかない。いや、まだ話せなかった。

考えがまとまっていなかった。

事件の全貌は整理できていたはずだが、それが正しいのかどうか、自信が持てなくなってしまっていた。奈津がああいう死に方をしていたばかりか、生駒達までも命を落としかねない事故が起きた。

そしてすべてが土砂に埋まってしまふなどということは、まったく予想の範囲を超えていた。

怒りがこもった眼が睨んでいた。

しかし生駒が発した言葉は、

「財宝を守るために……」

「石が割れて、大変なことになるっていうのは……」

というふたつの短いフレーズだけだった。

寺井が目を剥き、「財宝お！」とわめき始めた。

生駒の頭は、たった今、目の前で起きたことに、まだ支配されていた。

綾がホトトギスから聞いた話……。石がもろくなっている。そして大変なことになる。

奈津はそれがこの石のことだと知っていたのだ。

そして自分が人柱に……。あの鉄の芯棒……。滝の財宝を守る仕掛けなのか……。

刑事が訳知り顔で頷いた。

「仕掛けというより、たまたま、ああなったということかもしれない」

寺井がビシリと否定する。

「ばかやろう！ 鉄の棒を引っ張れば、互いの岩のバランスが崩れて、あの馬鹿でかい石が転げ落ちるという寸法だ！」

「でも、それなら相当の力がいらしますよ。梃子を使うかなにかして……」

刑事がなおも言おうとするのを、寺井は無視する。

「生駒さん、では話は後ほど聞きます。が、今、久米と橘がこの先にいるということで、よろしいんですな」

頷くしかない。

「うむ。そろそろいいか」

と、寺井が崖を見上げて確認した。

刑事をひとり選び、山を降りて応援を頼みに行くよう指示してから、

「ここからは我々が先に行かせてもらう」

と、先頭に立ってガレバを降り始めた。

奈津を飲み込んだ土砂を登り超えると、小さな池が見えた。

この先のガレバは土砂で埋まり、石混じりのふかふかの土を踏んでいく。

すぐに小さな池の縁に降り立った。

周りはやはり切り立った崖に囲まれている。苔やシダが繁茂し、濃厚な緑で覆われていた。

「誰もいませんな」

久米や橘の姿は見えなかった。

「ここが滝壺か」

寺井の自問は聞き流し、生駒は池を覗きこんだ。

テニスコートほどの広さで整った円形をしている。しかし水深はあるようで、泡立った水をすかしてみても底を見ることはできない。さっき巨石が転げ落ちたせいで、相当派手な水しぶきが上がったのだろう。縁からかなり下がった位置に水面がある。

あたり一面が濡れていた。

しかし、滝そのものはない。

「滝ねえ」

「水枯れかな？」

「今年は普通に雨が降ってますけどねえ」

などと刑事は言い合っている。腑に落ちないのだ。

崖に一筋、岩が濡れて黒ずんでいる。本来はここに水が落ちていたのだ。上流で流れる方向を変えた岩代川は、ガレバに落ち、累々とした石の下を通して、滝壺をかすめて流れ下っていた。

道長が、滝壺を覗き込んでいた。

「お宝はあの石の下。きっと、もともと引き上げることなんてでき

なかったのね。いったいなんだったんだろう。それもわからなくな
ってしまった」

綾は黙って濁った水を見つめ続けている。

「あ、あそこ」

優が、水位の下がった滝壺の壁に横穴を見つけた。

「水の溜まった針の穴ってのは、あれのことかな」

昨夜ベッドの中で、村の遊び歌の歌詞を検証してみたのだが、唯
一このフレーズだけ意味がわからなかったのだ。

しかし、そんな昨夜のことさえ、もう何日も前のような気がした。
奈津の死体を発見し、危うく自分達も死にかけ、今はこうして滝
壺を覗き込みながら、なんらかの形で久米や橘の発見を待っている
……。

刑事の声があがった。

縄梯子が落ちていた。

「久米さんらが使ったものでしょう」

ほつれた繊維の切り口が、刃物で断ち切られたような断面をして
いた。

「ボンベがあります！」

また声があがった。

アクアリングのボンベが岩の隙間に挟まっていた。

「ああーっ！」

黙りこんでいた綾が、ついに悲鳴を上げた。

橘の死体が浮かんできた。

口からまだ血が流れ出していた。

優が、真っ青になって震えだした綾を抱きしめた。

久米を見つけたのは、橘を岸に引き上げてからのことだった。
下流、井桁に組まれた人止めの障壁によって作られた、狭い人工
のダム湖。

水から突き出た木の枝に引っかかっていた。体は押しつぶされ、
無残な死に顔を晴れ渡った空に向けていた。

第 31 章 「ノブ、怒りをこらえる」

綾は道長に連れられて山を降りていった。

泣いてはいなかった。でも体の震えは止まらないらしく、両腕でしっかりと自分の体を抱きしめていた。

警官隊はすでに到着し、現場検証を行っている。

事件は最悪の結果に終わってしまった。

「奈津さんも救えなかった」

優がぼつりといった。

「昨日、あそこまで降りていれば……」

自分達の思慮が及ばなかったせいで、奈津を見殺しにし、久米や橘まで死んでしまった。

奈津の亡骸の前で、寺井がこれからどうするかと聞いてきたとき、この先には行かないと応えていたら、どうなっていただろう。

「あそこで、奈津さんを動かそうとしなければ……」

久米や橘は、首尾よくお宝を滝壺から引き上げて、意気揚々と山を降りていったかもしれない。あんな無残な死に様を晒さなくてもよかったかもしれない。生駒は、そんなことをくどくどと考えていた。

優も自分を責めているのだろう。

両手を髪に突っ込み、頭をかきむしり始めた。

「くそ！　なんていうこと！」

しかし、顔をあげた優が口にした言葉は、でも、違う、だった。

そうだ、違う。

縄梯子は、すでに落ちていたのだ。巨石が転がり落ちた拍子に外れたのではない。

誰かに切り落とされていたのだ。

しかし、それがどんな気休めになるというのだ。生駒は頭を抱えた。

「これが祟りだというのか……」

「ううん」

優が、あくまで現実的に、今の状況を考えようとしていた。瞳がきらめき始め、右の小指が眉毛を撫でていた。

生駒と優は、草むらの中の石に腰を下ろして、寺井がガレバから上がってくるのを待った。

「お待たせした。こんなところで話もなんですが、村まで降りていく時間が惜しい。ここでお話を聞かせてくれますか」

「ええ。もちろん。でもその前に。村に警官を配置していますか？」

「何人かはおります」

そうは言ったが、寺井の口ぶりにはどことなく重い。

一旦は釈放した西脇を監視しているのかもしれない。すると今、西脇は村に……。いや、この山のどこかに……。

そんなことを詮索しても意味はない。今から寺井に順に説明していけばいいことだ。

生駒は力なくそうですか、とだけ言った。

「さあ、なんでも聞いてください」

「久米荘一と橘文雄は、采家に伝わる財宝を手に入れるために、滝壺に潜ろうとしていた。亡くなった采奈津は、それを阻止しようとして逆に殺された。ということでもいいですな。采健治や西脇恭介も、同じ理由で殺されたと」

寺井が、苦渋に満ちた顔をしていた。

誤った判断で木元と西脇を拘留してしまい、久米と橘を取り逃がしたばかりか、ふたりとも死んでしまった。しかも、奈津の殺害を阻止することもできなかった、と。

しかし、生駒のこの印象は間違っていた。

「どうも、この村には隠し事が多くて困りますなあ」

胸にふつふつと怒りが湧き上がってくる。

それはおまえがボンクラだからだ、という言葉を飲み込んで、

「違う」と切り捨てた。

「は？」

「まず、久米さんと橘が、奈津さんを殺したのではない」

生駒は冷静になろうと、大きく息を吸い込んだ。

「奈津さんの死体を隠しておくために、あの石に縛りつけておいた、とでも考えているんですか？」

「うーむ」

「久米さん達には、そうする理由がない」

「しかし、侵入を阻むような感じで縛り付けられていましたが」

「違う。そもそも、あんな恐ろしく高い崖を、縄梯子で下りていく方法をとったということは、ガレバのルートの存在を知らなかったから。つまり、そこから人が降りてくるとは、考えもしなかったはず」

「では、こういうことですか？ 奈津が縄梯子を切り落とし、久米荘一と橘文雄を転落死させてから、自分の体をあそこに括りつけたと？」

「それも違う。時間的に合わない。久米さん達は、昼前ごろに村を出ているんです。奈津さんは死後半日ほど経っていたと、さっきあなたは言っただけです」

「うーむ」

「ところで、奈津さんは殺されていたんですか？」

「いや、それはまだはっきりしません。掘り出して正式な検死を試みないことには。ただ、あんなところで、自分の体を鉄の棒にくくりつけて自殺するなんてことは、普通はしないんじゃないでしょうかね」

奈津は殺されたのだと判断している。佳代子は自殺で、奈津は殺された。

このボンクラは。

「しかし、今、あんたは見たんでしょう。奈津さんの姿を」

「ええ、しかしまあ、最終的な判断は」

生駒は唇を噛んだ。

すべてが後手になってしまった。誰一人救えなかった。

目の前の男のふがいなさ、そして自分たちのふがいなさがやるせなかった。あの怨念と不信の塊の仕掛けに惑わされて。

「外傷はなかったように見えたが、まだ詳しくは」

寺井が慎重なものの言い続けている。

生駒の怒りが爆発した。

「現場の指揮官として、あんたの判断はどうなんや！」

「えっ」

寺井の顔がゆがんだ。

「……」

生駒は寺井に、奈津が白装束だったこと、神社の獅子岩の注連縄に自分の着物を挟んでいたこと、を思い出させた。しかし寺井は、まだ納得がいかないのか、こめかみを掻いている。

「こういうことは考えられませんか。つまり、奈津が犯人だと。彼女は財宝を守るために……」

生駒はまた怒りを爆発させた。

「馬鹿なことをいうな！ 奈津さんが、鉄パイプで健治を殺したとでもいうのか！ 奈津さんがバスに乗って、その鉄パイプを原田の町の資材置き場まで運んだとでもいうのか！ いい加減な思い付きを言うな！」

寺井は、事件の全貌が見えていないことを自覚したのか、

「すみません。この事件の背景といいますが、そもそもの発端が、久米荘一と橘利郎の財宝探しだったということはわかりましたが、采健治さんや西脇恭介さんが殺されたときのことを、もう一度、詳しくお聞かせ願うしかないようです」とへりくだって、解説を求めてきた。

「生駒さん、申し訳ないけど、もう一度、あの日のことを順に教えていただけませんか」

「順序が違う」

生駒はつっけんどんに吐き捨てた。

寺井が佳代子の死を自殺であると誤った判断を下し、その理由を捏造したことを忘れてはいない。

「うむう」

寺井の顔に朱が差した。

「ちょっと失礼」

刑事が寺井に耳打ちした。寺井の顔がますます赤黒くなっていく。その報告がどんな内容だったか、生駒は寺井から説明がなくても察しがついた。西脇も美千代も仙吉も、村に姿がないというのだ。

「ご説明いただけるんでしょうな」

寺井が再び高圧的になった。

まるで生駒が隠しごとをしていたおかげで、こんなことになったのだといわんばかりに。

「あんた方は常に後手だ」

怒りを抑えて、生駒は切り返す。

「失礼な」

とはいったが、寺井には続けるせりふがない。

佳代子が殺されたときに、誤った判断をしなければ、一連の事件は起こらなかったはずだ。

生駒は、沸き立つような怒りを抑えるために奥歯を噛み締めた。眼球の周りに血液が集まり、目の焦点が合わなくなっている。体中の筋肉がわななくような気がする。

しばらく声を出せそうにない。口を開けば、目の前の男をまた罵倒してしまいそうだった。

気持ちを鎮めようと、足元に眼をやった。無心な蟻が行列を作っていた。

「申し訳ない……」

寺井の口からこぼれた言葉。

しかし虚勢を張っているのか、胸をそらせ、うつむきがちな生駒に厳しい目を落としていた。

落ち着けというように、優が生駒の腕に手を重ねてきた。暖かさが伝わってきた。肩に頭を寄せてくる。ほのかにリンスの香りがした。

「そもその起こりは、宅見佳代子さんが千寿さんの屋敷へお手伝いさんとして来たことから始まるんです」

生駒は切り出した。

千寿はとても佳代子を可愛がった。

子や孫をすべて亡くした千寿は、自分の遺産の大半を佳代子と美千代に残そうと考えた。

采家の親族は、うすうすそれに感づいていただろう。千寿が老人ホーム暮らしを始めてからも佳代子は屋敷に残っていたのだから。普通なら、高齢の奈津は別にして、甥の西脇、そして世話を焼いてくれる仙吉に、屋敷の管理を任せるだろう。

しかし千寿は、采家のものを、奈津を除いて誰も信用していなかった。当然、一族郎党はおもしろくない。

なにしろ、この村や山のほとんどの土地は千寿のものなのだ。しかも原田の町にも、多くの資産を持っている。屋敷にも価値のあるものが眠っているはず。金融資産も、目がくらむほどあるのだろう。誰もが千寿の遺産の行方に疑心暗鬼になっていたのだ。

そこへ、久米が登場する。

初めから、滝壺に沈められた采家の財宝が目当てだった。采家への復讐という免罪符も胸に秘めていたかもしれない。

しかし、佳代子が屋敷を守るとはいえ、なぜ千寿が赤の他人である久米に、家を自由にさせることに同意したのか。

古の久米の先祖へのむごい仕打ちに対する、贖罪の気持ちがあったとしか考えられない。集会所の裏で聞いた千寿の言葉が、それを裏付けていた。

ただ、千寿のその心境を、奈津以外に知るものはいなかった。

采家の郎党だけでなく、村人の多くは、佳代子と久米を一蓮托生だと考えた。

千寿に取り入り、財産を掠め取っていかうとしていると映ったのだ。ふたりを排除したいと考えても、不思議ではなかった。

そして、佳代子を橋の上から突き落とし、自殺に見せかけることに成功した。そして猫の首事件。

久米の思惑は、瞬時に吹き飛んでしまうはずだった。これで千寿の財産は、当面は安泰ということになるはずだった。しかし、そのもくろみは見事に失敗だった。久米の意志はもっと強かったのである。

そして、健治の事件が起きる。

佳代子の一周忌の日に。

彼女の写真を持って、佳代子と同じように川に浮かぶ。

西脇利郎が容疑者として拘束された。佳代子を巡っての口論の果てに返り討ちにした、という理由で。

「とすれば、佳代子を殺したのも西脇利郎ではないか、という推測も成り立つわけです。あんた方はどう考えていたんです？」

まともな答を期待していたわけではなかったが、やはり寺井の回答はあいまいなものだった。

「いえ、そこまでは」

「なにしろ西脇は、妻の連れ子である佳代子を、自分の子としてみなしていなかった。そして彼女は、西脇の期待に応えられなかった」
生駒は、西脇利郎が佳代子を千寿の世話係として送り込んだ、真の理由を話して聞かせた。

「うむう……」

「警察は、佳代子が利郎の妻圭子の子だということを掴んでいた。どうです？」

「それは……」

「しかし、彼らは佳代子の亡骸を引き取りに来ない。いくらなんで

もおかしいじゃないですか。そのときに、西脇が彼女の素性を隠しておきたい理由に、気がつくべきだったんじゃないか」

「はあ……、なにをおっしゃりたいんです？」

生駒は寺井をいじめて楽しんでたわけではない。寺井にだけでなく、西脇にも無性に腹が立っていたのだった。

「ところで、ふたりが殺された日、西脇の服がびしょ濡れだったことに、気づきましたか？」

警察が西脇をようやく見つけたときには、もう服は乾いていただろうが。

「服？」

寺井は、なぜそのときにそれを教えなかったのか、とはいわなかった。

あの男は、奈津に見られて困るものを隠しに、滝壺まで降りていったのだ。ガレバのシャワーをくぐって。

「ズボンの血は？」

「……」

これにも気がついていなかったらしい。

西脇が隠したもの、それは滝壺のお宝を手に入れるための機材。すでに岩代川はせき止められ、滝に水が落ちてこないようにしてある。後は滝壺の水を抜けばいい。きっとポンプとポータブル発電機だろう。機材には西脇工務店などと書いてあるのだろう。あわてて移動させたおかげで、西脇は足に怪我をしてしまったのだ。

「なるほど、西脇利郎は采千寿さんの遺産を狙っていたし、滝の財宝も狙っていたと」

だから西脇が犯人で間違いなかったのではないかと、寺井はまた思い始めたようだ。

「念のために言っておきますが、こんなことをして得をするのは、

西脇だけではありません」

寺井がおとなしく頷いた。

「次に殺されたのは恭介です」

「……」

「木元には、恭介を殺す動機があるという判断ですか？　でも、同じ日に、別々の事件が？　そんな偶然の一致みたいなことがあるもんですかね。少なくとも、僕にはそうは思えなかった」

「やはり木元も違うと」

あっさりそう言ったところをみると、木元の件は、警察も、確証どころか自信さえなかったのだろう。

しかし、苛ついてきたのか、がさつな声を出して、己の自信のなさをカムフラージュし始める。

「久米でもなく西脇でもなく木元でもない。で、いったい、どうだというんです？」

「いろいろな可能性を潰していつてるんですよ。結論だけ言っても、これを聞いておかないと、あんた方は、また曲解するでしょう」

「うむう」

「警察が考えた健治殺しは西脇、恭介殺しは木元、という推理。可能性としてはゼロだとはいえない答えだった。しかし、釈然としなかった。しかも、彼らの葬式は合同で行われた。普通はそんなことはしない。殺された方の家族と、殺した方の家族が一緒になんて。そうしたのは、彼ら、少なくとも奈津さんは、犯人は別の誰かだと考えていたからです」

寺井が目を剥いた。

この男は、合同葬儀の件も知らなかったようだ。被害者の家族が、警察の捜査を信じていなかったわけだから、もっとショックを受けてもよさそうなものだ。

寺井の目元が徐々に緩んで、

「だから久米が」と言いかけたが、顔を撫でて言葉を飲み込んだ。

「健治が殺されたのは、深夜から早朝にかけてということだったから、誰にでも可能性はある。アリバイのある人なんていない。久米さんも道長さんも含めて」

「……おっしゃるとおりです」

「犯行時刻は何時ごろですか？」

寺井から答えはない。生駒は、かまわず話し続ける。

「朝、シャンプーとリンスがひとつずつなくなっていた。つまり、健治が風呂に入っていないのなら、もうワンペア、使っていないものが残っているはずなのに。空になった袋が三個。話しましたね？」

寺井が小さな声で、はい、と応えた。

「犯人が持ち帰ったんです」

「……」

「こういうことです。犯人は、健治が風呂に入ったと見せかけようとした。そこで犯行後、時刻はわからないが、屋敷の離れに入り込み、シャンプーとリンスの袋を破って中身を捨てた。ところがあの晩は長い時間、停電だった。湯沸しのコントローラーが動かなかったから、健治は風呂に入れなかったはず。僕が湯を抜いてしまったから。犯人は、後になってからそのことに気づき、つじつまが合わなくなってしまうかもしれないシャンプーとリンスの空袋を回収した。まだ使っていないものを取り替えようにも、それは母屋の洗面所にある。取りに行こうにも母屋の玄関は大きな音がする。坂井さんや道長さんの寝ている部屋の前も通らなくてはならない。しかたなく、とりあえずは自分が破った袋だけを持ち帰ることしかできなかった」

寺井が頭を抱え込んだ。

「健治が風呂に入っていた場合には、シャンプーやリンスの空袋を持ち帰る意味がない。だから、健治は風呂には入らなかった。ちなみに、健治はシャンプーもできないくらいに酔っていたわけではない。毎日、シャンプーする習慣がなかったとも考えられない。もしこの点に疑問があっても、もう聞く相手はいない」

「うーむ」

「次に、健治が風呂にも入らずに、朝まで寝ていたとしましょう。この場合でも、犯人はシャンプーとリンスの袋を持ち帰っていることになる。そうすることに、どんな意味があるのか。どうです？」

寺井が少し考えてからいった。

「意味はありませんな」

「そう。朝の犯行だった場合、袋を持ち帰ることに意味はない」

「ふむ」

「犯人はあの晩、僕が風呂から出てそれほど時間が経っていないときに、健治を呼び出し、殺害してから部屋に戻って時間差工作を試みた、ということです。そして、それは屋敷にいた人物、という可能性が高い。健治がどの部屋に入ったのかを見ていた人物。健治がまだ風呂に入っていないということを知っていた人物。ただ、お屋敷は常に開放してあるので、座談会に出ていたメンバーに限定できるわけではなく、忍び込んでいれば、だれにでも可能性はありますが、いずれにしろその人物は、下の道に、鉄パイプと飛び散った血を洗い流すバケツかなにかを用意してから、健治の部屋に行き、誘い出して殺した。あるいは事前に、話があるので何時に出てこいとも言っていたのかもしれない。ちなみにバケツは集会所のものではない。倉庫に鍵が掛かっているので簡単には持ち出せない。屋敷のものだと思う。納屋にいくつか転がっています」

寺井が口をはさむ。

「よくわかります。しかし、それではまだ犯人を絞り込めませんな」
「黙って聞いたらどうだ！」

「……」

生駒は、寺井のイラつきが理解できた。

しかしこの解説は、寺井にだけではなく、自分自身にも、最後の結論を納得させるために必要な手順だった。

「犯人が健治を誘い出した方法とは？ 健治は佳代子さんを愛していた。たぶん、そのことで話があると言っても言ったのだろう。彼女の写真を渡して、信用させたのかもしれない。あの写真は、屋敷に入りしていたものなら手に入れることができた」

寺井が頷いた。

「でも、このことはそれほど重要なことではない。もっと重要なことは、犯人がなぜ、そんな稚拙な時間差トリックを施そうと思ったかということです。端的に言えば朝まで。もちろん、自分のアリバイにとって都合がいいから」

「うむ」

「その点、例えば西脇はどうか。朝に犯行時刻を遅らせたほうがアリバイ上、都合がいいか」

「うーむ」

「彼は、もともと集会所でひとりで寝ていた。山登りに行くために恭介を呼び寄せたが、息子がアリバイを証明してくれるというのか。恭介が来るのは朝六時。陽が昇ってからのこと。それ以前に犯行があったということになれば、意味はない」

「それはなんとも……」

「しかし、今のことは頭に入れておいてください。朝に犯行時刻を遅らせることで得する人物、ということ。そしてもうひとつ、頭に入れておいて欲しいことがあります。犯人は、停電で風呂が沸かないことを失念していた。つまり、焦っていたということです」

「計画的ではなかった、ということですね」

寺井が頭の中を整理するように、何度も頷いた。

「さて、恭介の事件に移ります。確かに木元には十分とはいえないまでも、恭介を殺す動機があった。しかも彼は、一時、笹原の中でひとりきりになっていた瞬間がある。それも、恭介がひとりでいたと思われる同じ時間帯に。あんた方もそのことに注目した。しかし、まだいるんです。単独行動をとった人物が」

「西脇利郎……」

「息子を殺すはずがない。溺愛しているのに。理由がない。しかも彼は、さっき言ったように、ガレバでポンプかなにかを隠すことで頭がいっぱいだった。時間的にもその往復だけで限界だった。まだ、います。ひとりで行動した人物が」

「ひとりだとは限らないんじゃないですか？」

「久米さんと道長さん？」

「……」

「なぜ、彼らが恭介を殺す理由がある？ 恭介とは初対面だったし、あの日、恭介が来ることは知らなかったはず。久米さんが恭介を突発的に殺し、道長さんが見て見ぬふりをした、とでもいうんですか？ とてもじゃないが、納得できるストーリーじゃない」

「でも、西脇利郎も財宝を狙っていたわけで、恭介はその息子……」
寺井は、生駒が睨みつけていることに気づいて、慌てて口をつぐんだ。

「百歩譲って、久米さんが恭介を殺す理由があった、ということにしよう。佳代子さんも、そうだったでしょう。でも、健治を殺すどんな理由がある？」

「うーむ」

「あんた方なら、理由を捏造することはできるかもしれないが、そんな無理なことをしなくても、もっと可能性の高い人物がいるんです」

「ちょ、ちょっと待ってください。やはり久米荘一では。彼は、生駒さんたちが恭介さんを探しにまた笹原に入っていたとき、ひとりでいたということでしたな」

「久米さんだけじゃない。橘もそうだし、木元もそう」
寺井がため息をついた。

「しかもそのときすでに、恭介の姿が見えなくなってから時間が経っている。それまで恭介は、どこでなにをしていたというんです？」

辺りにはすでに夕闇が迫りつつあったが、生駒は山を降りて一息ついてから、という気はなかった。

なぜか、このまがまがしいものが宿るとされた祠の前を去りがたかった。采家の財宝が何であったにしろ、それに人を寄せ付けないための姑息な仕掛け。できることなら今すぐにでも打ち壊してしまいたかった。これがために、多くの人が命を失った。財宝の存在が、人の心を狂わせたのではない。祠や、転がり落ちた玉石や、人避けの柵といったおぞましい仕掛けが放つ妖気が狂わせたのだ、と生駒は思った。

祠に潜むまがまがしいものが、どう聴くかは知らないが、哀れな采家の末路を、今ここで聞かせてやりたかった。

「ご存知かもしれませんが、美千代さんは気がふれていた。ただ、そのふりをしているだけだという人もいた。僕は、彼女が極めて正常で、しかも強靱な精神力を持っているのだと思っています。警察が西脇を釈放したのは、美千代さんの証言を信用したからでした」
「そうです」

「もっと早く僕たちに教えて欲しかった。ま、僕も容疑者のひとりだったのかもしれないが」

「返す言葉もありません」

「美千代さんにとって、その方が都合が良かったからです。彼女が芝居を始めたのは数ヶ月前のこと。ところで警察は、彼女と奈津さんが、強い信頼で結ばれていたことを掴んでいましたか？」

寺井が情けない顔をした。

「想像を交えて話します。ある日、奈津さんか美千代さんのどちらかが、久米さんと橘が滝壺の財宝を狙っているということに気がついたんです。綾ちゃんから、ふたりが夜中に出かけていると聞いたことが、きっかけだったのかもしれませんが。そして彼女達は、佳代子さんが死んだのも、そのことに気づかれたと思ったふたりに殺されたのではないか、と考えたのです。実はこんなことがありました」

生駒は、夜の神社で見聞きしたことの後半を話して聞かせた。

「そこで彼女達は、ふたりの行動を監視することにした。そのため美千代さんは、狂人のふりをすることにしたんです。そうすれば、万一、彼らに見咎められても、言い訳ができるからです。その点、警察の見解はどうです？」

「美千代さんが狂人であるかどうかですか？ わかりません。ただ、その質問に、個人的な意見を言わせていただくと、答えはノーです。彼女は正常だったと思います」

珍しく寺井が、全うな返事を寄こしてきた。

「そうですね。夜中に人の後をつけていくという困難なことを、気がおかしくなった人にできるはずがない。それに、奈津さんがそんなことをさせはしないでしょう。さて、ここからの話は、奈津さんへ視点を移した方が、わかりやすいと思います」

第 32 章 「ノブ、代弁する」

久米と橘が宝を狙っているという証拠や、佳代子を殺したという証拠は、なかなか得られなかった。奈津は、西脇に助力を頼もうと考えた。

滝壺の秘密を知っているのは、千寿と奈津だけ。千寿の子孫が死に絶えたことで、奈津にその秘密が伝えられたのだったが、奈津とて伝えるべき子はない。誰かを選ぶ必要があった。

西脇が久米に取り入って仕事をもらおうとしている点に不安があったが、一族としての自覚に賭けるしかない。

健治も一族という意味では助けになるかもしれないが、秘密は一代にひとりずつ伝えていく習わしになっている。奈津には、健治がまだ頼りないと映っていた。

奈津は、西脇利郎に滝への隠された道を教え、滝壺を守ることを誓わせたのだった。

ある晩のこと。

屋敷に多くの人が集まることを耳にした奈津は、いつものように久米を監視しにいった。

参加者は久米以外に、西脇や健治、仙吉や綾など見知ったものたち。そして橘や生駒、道長や木元ら外部の人間。

それぞれの人間関係や、この村に来る隠れた意図などを観察するにはもってこいの集まりだった。

奈津は、会の最初から岩穴の入口で耳を澄まし、中の様子を窺っていた。そこで思いもかけず、采家の宝のことが話題に出たのだった。もちろん久米は無表情を装っていたが、西脇とて、それを守るという意志を鮮明にしたわけではない。

奈津の怒りは募った。

そしてその直後、怒りに火がついた。

佳代子が圭子の子だったことが暴露され、岩穴座談会は混乱し、あろうことか、西脇が殺人犯だと健治に名指しされたも同然だったからだ。

久米や橘、そして馬鹿なことを言い出した健治だけではなく、頼りにならない西脇にも、はらわたが煮えくり返る思いがした。

そして、久米と橘を呪う気持ちだが、祟りじゃという言葉となって、口からほとばしり出たのである。

同時に奈津は、西脇にはおまえの務めを果たせと迫り、綾には呪いの話をせよと迫った。

サヨの子孫である久米が、平石の伝説を知っているがいまいが、十分な脅しになると考えてのことだった。

ところで、奈津は佳代子の素性に気づいていた。千寿もそうだ。同時に、西脇の狙いにも気がついていた。

彼女達はそれを知っていながら、黙って西脇の思うがままにさせていたのである。西脇のふがいなさや浅ましさにいらだちつつも、それほど佳代子が千寿に気に入られていたということである。

「橘一家について、奈津さんはどう考えていたか。もちろん文雄が久米さんの一味だということは自明です。しかしその娘、綾ちゃんには信頼を置いていた。というよりむしろ、聞き耳頭巾の使い手として慈しんでいたといえるでしょう。子供に罪はなく、希望だけがある。奈津さんは、極めて全うな感覚の持ち主でした」

寺井にする必要のない話かもしれない。

ただ、それを話したのは、西脇への怒りがまた振り返ってきただけのことだったし、生駒自身の奈津への感情が、嫌悪から畏怖へと変化したことを、言葉として残しておきたいと感じたからでもあった。

奈津の不安は募った。

美千代の監視では、まだ久米は滝壺への隠しルートを発見していないはずだったが、別のルートを確保しようとしている。そこで念のため、滝壺の様子を確認しようとした。ガレバを通って滝壺に降りていき、とんでもないものを目にしてしまう。

「ところで、橘がした話。西脇親子が重い荷物を山に運んだという話。警察では、どう検証しましたか？」

寺井が久しぶりに晴れ晴れとした顔をした。

「ええ、本人に確かめましたよ。ポータブル発電機とポンプだということでした」

「で？ 実物を確かめましたか？」

「いや、それは……」

業務上の使用だと言われたので……、という言葉を読み込んでいく。

「奈津さんは、それを見たのです。あのガレバか滝壺で。西脇工務店の名前が入っているポンプを」

奈津は愕然としてしまう。なんと、滝は枯れ、滝壺の水を抜くためのポンプが置いてあったのだ。

久米や橘だけではなく、西脇もが財宝を狙っていることを知ったのだった。

そして健治が殺された。

「美千代さんはどんなに悲しんだことでしょう。悔しかったことでしょう。狂人の真似までして、真相を追っていたのです。警察が頼りにならないから」

寺井がぐうと唸った。

「息子を殺したやつは、佳代子を殺した犯人と同じやつに違いないと思ったことでしょう。彼女も、必死だったはずです。ただ、西脇ではなく、犯人は久米さんだと信じ込んでいたに違いありません。だから、あの集会所で見つけたメモのことを、あんた方に話したんです。そして、西脇家と並んで葬式を挙げた」

「……」

「あの夜、久米さんをつけていった美千代さん。鬼気迫るものがありました。真犯人を突き止めようと……。あんた方は、それをどう感じます？」

寺井の口から、申し訳ないという言葉が漏れた。

「恭介も殺されていた。したがって、西脇が久米さんと組んでいる可能性はない、と奈津さん達は考えた。ところが警察は、西脇を拘束したまま」

「……」

久米は財宝探しの邪魔者である佳代子、健治、恭介と順に殺し、西脇には罪をきせることによって、排除しつつある。計画は着々と進んでいる。

奈津は焦った。美千代の機転によって、西脇は釈放される見通しだったが、それを知らない奈津には、頼れる男がいなくなってしまう。

残ったのは、仙吉だけ。

しかし、奈津は仙吉を一族のものとみなしていなかった。奈津からすれば、仙吉は、父親が東村の女に生ませた腹違いの妹の息子。彼女の会話に、日ごろから世話を焼いてくれている仙吉の名前は出てこなかった。滝壺への道を教えて財宝を守らせる、という発想

は浮かびもしなかった。

「そして追い詰められた奈津さんは……」

「ああいうことに……」

「そうです」

奈津にとって、すでに時間の余裕はなかった。

西脇工務店のポンプは見当たらなくなったが、滝の水は流れを変え、滝壺は池となっている。

そういう状況を示しても、警察が動くはずがない。しかも、佳代子の件も健治の件も、そして恭介の件も、彼女はどんな証拠も掴んでいるわけではない。

もう最後の手段しか残されていなかった。

奈津は、身を挺して財宝を守るという決意を固める。

ふたりの葬式を出し、自分が遺書を残していると千寿の耳に入れてから、山に向かう。

神社で白装束に着替え、ガレバに降りていく。

そして、あの石に座り込んだ。

「なんらかの方策があったのか、あるいは死んで亡骸を晒すことで、財宝を荒らすものを押しとどめようとしたのか。いつの日か釈放されるかもしれない西脇がガレバに降りてくることを見越して、自分の決死の覚悟を、伝えようとしたのかもしれない。あるいは、あの仕掛けを作動させようとしていたのかもしれない。奈津さんは綾ちゃんから聞いて、あの石が割れそうだということを知っていたと思われるからです。しかし、今となっては、奈津さんの気持ちはわからない。ただ、美千代さんをその計画に巻き込むことはしなかった。ただひとりで、出かけていったのです」

鑑識の係員が、祠や血溜まりのあった藪を調べていた。

もう祠は、妖気を発してはいない。これだけの人に包囲され、無関心を見せつけられて、どこかに退散してしまったのだろうか。

二度と戻ってくることはないかもしれない。もうこの先、だれもこの祠を崇めたりすることはないだろうから。

「もともと、僕たちの悩みは、恭介がどこで殺されたのかということだった。彼は笹の中で倒れていたが、争うような声は聞こえなかった。それに、僕らが通っていた踏み分け道にも、争ったような跡や血が飛び散った痕はなかった。警察の現場検証では？」

「おっしゃるとおりです」

「ということは、彼は笹原の中、倒れていた位置で、声をあげる間もなく殺されたことになる。すると、彼はなんのためにあそこまで入っていったのだろう。小便でもするため？　そこではったり木元と出くわして？　一瞬のうちに？　どうも、いい答えではない。もしかすると、別の場所で殺されて、死体を隠すために、あそこに運び込まれたのではないか、と考えれば……」

「それが……」

寺井が、鑑識が群がる藪に眼をやった。

「ところで、恭介の死体ですが、身を屈めていましたよね。あれはどう考えられます？」

「うむ。屈みこんでいるところを、後ろから一撃で仕留められた、と見るべきでしょうな」

寺井が不穏な表現を使ったが、生駒にはそれをたしなめる気力はなかった。ただ、そうですね、と話を先へ進めた。

「恭介は、父親が持っている大きなナタを借りに、笹原の入口まで戻っていった。ところが、父親の姿がない。しばらく待ったが、現れない。おかしい。父親の身に、なにか異変が起きたのではないか。

探さなければ。しかし、どこにもいない。軽いパニックになり、頭から僕達のことが消えてしまうと同時に、彼は思いつきました。父親はあそこにいるのではないかと。滝の財宝を引き上げるために、ふたりで作業をしたところ。滝の水をガレバに落ちるように、溪流をせき止めたところ。そう考えた恭介はアマガハラノから駆け下り、その現場に向かった。しかし、そこにも父親の姿はなかった」

「その現場というのはどこです？」

「その踏み跡を行ったらわかります。水が流れているから、それを遡っていけばいい。ついでにいうと、踏み跡をそのまま進むと滝壺の上に出る。そこに縄梯子が括りつけてありました。さっき、滝壺で見つけた梯子です。ただ、見に行くなら地面に残された靴跡を確認してから」

寺井があごをしやくって、刑事を走らせた。

「そこで恭介は、父親とポンプを運び下ろしたガレバに降りていくとしたわけです。そして、穴にもぐりこもうと屈みこんだ。そのときです。襲われたのは。穴の周りに血が飛び散った痕跡がないか、確認しておいてください。正確な殺害現場はあのあたりです。犯人は数時間後、屈みこんだまま死後硬直の始まった恭介の死体を、あの藪から引きずり出し、上まで運んで笹原の中に放り込んだんです」

第 33 章 「せんのがあきゃ」

「仙吉」

生駒は、無理やり口から吐き出すようにいった。

「は？ 仙吉？ 大葉仙吉さん？」

「アマガハラノに行った日、彼はひとりで先に山を降りた。恭介や西脇が、村に戻っているかどうかを見にいくといって」

「そうでした……」

「不自然な感じがしませんか？ 大人ふたりの姿が見えなくなったからといって、そんなに大げさにすることですか？ しかも彼らは、いわばこの村の住人。あの時点で、彼らを探すために一刻も早く、できれば自分だけで、村に戻る必要があったか？ あるいは、ふたりの無事を確かめてから、また登りなおして、久米さんや僕に知らせてくれようとしたのか？ 村でもふたりの姿は見つからなかったのに、山を登りなおして知らせてはくれなかったし、むしろ彼は、すでに服を着替えてさっぱりしていた……」

生駒は唇を噛んだ。

この不自然さにもっと早く気がつければ、あの日起きたことが、スライドショーのように時間軸に沿って眼前に姿を現したものを……。

「僕はその不自然さになかなか気がつかなかったが、今は違う。つまり彼も不安だったわけです。別の意味でいろいろなことが」

アマガハラノで、西脇親子がそろって姿を消した。

仙吉には、その理由を想像できた。采家の財宝にまつわる件だと。彼は、朝早く西脇が山に登っていくのを見たと言言した。つまり、橘と同じように、彼らが大きな荷物を持っていたことを見ていたは

ず。というより、その荷物が発電機とポンプであることを、見抜いていただろう。軽四から降ろす一部始終を、見ていたかもしれない。いずれにしろ、彼は山に登っていく西脇と息子の動きは警察に知らせたが、重そうな荷物のことは話さなかった。滝壺の財宝に絡んでの事件だと、警察に知られたくなかったからである。

一族のものとみなされず、千寿や奈津から、滝へ至るルートなど、聞く立場になかった仙吉。しかし、一族としての自覚を持っていた。むしろ、強くそう考えていたとも言えるだろう。だからこそ、率先して千寿や奈津の世話をしていたのだし、屋敷に出入し、久米とも接点を持っていたのである。また、滝壺に眠る采家を助けるものを守ることは、采家のものとして当然の行いだと考えていただろう。

仙吉は、一刻でも早く、西脇や恭介が姿を消した理由を確かめたかった。その時点で、すでに、西脇親子が己の欲望のために滝を汚そうとしていることに気づいていたのである。なんとしてでも、それを阻まねばならない。そこで、駆けるように山道を下っていった。

「そして、祠のところ、つまりここまで降りてきたとき、恭介を見つけたのです」

生駒は優と想像しあったことを、あたかも見ていたかのように、一気に話していく。

恭介が祠の後ろに潜り込もうとしていた。

とっさに仙吉は身を隠し、頭をめぐらせた。西脇もこの下にいるに違いない。

祠の裏に、なにがあるのか知らなかった。しかし、容易に想像はできる。滝壺への隠された道ではないか。

草刈鎌を振りかざして、恭介の背に襲いかかった。そして、息子

が降りてこないことを不思議に思った西脇が、穴から頭を出すのを待った。

しかし、西脇は頭を出さない。時間がなくなってきた。まもなく久米達が下ってくる。彼らより先に村に着いていなければ。

あきらめた仙吉は、恭介の死体を藪の中に隠した。

そして、その日の午後、事情聴取が続いている間に、再び犯行現場に戻り、アマガハラノまで恭介を担いで上った。

木元の犯行だと見せかけるために。彼が単独行動をとったことを知ったからだ。しかも、犯行現場が笹原だということになれば、仙吉が疑われることはまずない。

夕刻、なにくわぬ顔で屋敷に姿を見せた仙吉は、また服を着替えていた。昼の着替えは、恭介を殺したときの服だから。夕方の着替えは、アマガハラノまで恭介の死体を運び上げたときの服だから。納屋に向かい、恭介の血をふき取っておいたタオルかなにかで、草刈鎌の一本を擦っておいた。

「これで警察の目を木元に向けさせることができる」

生駒はフウツと息を吐き出した。

寺井に対する怒りは、もう消し炭となっていた。自分が情けなかった。疲れてもいた。山を降り、綾の傍にいてやりたいと思った。

最後の話をしよう。

「木元ではなく、もしかすると、久米さんに罪を着せようと考えたのかもしれませんが」

寺井が、納得できたというように頷いた。

「さて、先ほど僕は、西脇親子が姿を消したことで、仙吉が不安になった理由が、色々あるという言い方をしました。誰よりも早く、

村へ戻りたかったわけは……」

「健治殺しの……」

「そう。仙吉が健治を殺しました。そのことに気づかれたのではないか、と不安になったのです」

「で、西脇を探した」

「そうです。資材置き場の鉄パイプが、そのままあることも確かめたことでしょう。しかし、その前にあることをしました。それをしたかったから、ひとりで山を降りたともいえるでしょう」

「なんででしょう？」

「シャンプーとリンス」

生駒の顔が久しぶりに緩んだ。

この凄惨な事件に不釣り合いな、華奢で頼りない品の名前を連発することになってしまった自分の話のまずさに、自嘲気味に笑ったのだった。

腕に置かれたままの優の手が、励ますようにポンポンと動いた。

「三条は山から降りてきて、すぐシャワーを使いました。そのときすでに、シャンプーとリンスの袋は新しいものに変わっていました。朝、こいつが見たとき、袋は、それぞれ空のものが三個ずつだったのに」

誰が取り替えたのだろう。

可能なのは久米、道長、橘、綾、仙吉。久米と道長は下山後、離れには入っていないと証言している。ここに嘘がないとすれば、来客の世話係としての役柄から、ひとりに絞られる。

仙吉は山から降りると、その足で屋敷の離れに入り込み、シャンプーとリンスを新しいものに入れ替えた。

この行為は、いくら仙吉が気が利くとはいっても、おかしい。健

治や木元や生駒達が、その日のうちに屋敷を辞す予定であり、離れの宿泊客は少なくとも一週間は無い、ということを知っていたからだ。

仙吉がそうした理由。

もちろん、昨夜の失敗の証拠を残しておきたくなかったからである。

空の袋が三個というのは、三条が朝には気づいていたから、空しい証拠隠滅工作だった。むしろ、この仙吉の行動が、生駒と三条の不審の源にもなったのだった。

「思い出してください。朝に犯行時刻を遅らせて得する人物。仙吉には同居の家族があり、朝早くから川向こうの畑に向かった。そこで隣人と言葉を交わし、自分のアリバイを確かなものにした。そこで、たまたま西脇親子の行動を見かけ、自分の運の強さにほくそ笑んだことでしょう。仙吉はどこかに隠してあいた鉄パイプを、西脇の資材置き場に放り込んでから、あんた方が西脇に注目するように仕向けた。それは単に、約束の時間に遅刻してきた恭介が、父親が集会所に書きおいたメモを見て、急いで後を追っていっただけのことなのに。それをあんた方は、恭介が殺害現場の後始末でもしていたと考えたんです。ちがいますか？」

「まあ、そのう……。ところで仙吉の動機は？　その財宝を守ろうと？」

「もう、分ってるんじゃないですか？」

「今までのお話でおおよそは」

「では、もういいですか？」

「いえ、できましたら」

生駒の頭に、頭巾をかぶったときの感触が甦ってきた。

そして、あの鳥の歌。道長はそれが村の子供達の遊び歌だといっ

た。遊び歌を鳥が真似て歌っていたのではなく、鳥の歌が、いつしか遊び歌になったのだろう。

くりのきからすな……栗の木枯らすな
くりのきからすな……栗の木枯らすな
おいしこいし……大石、小石
みずのたまった……水の溜まった
はりのあなをば……針の穴をば
とおoryんせ……通りゃんせ
やまあらしは……山荒らしは
たくみのゆめ……宅見の夢
せんのとがあきや……千（仙）の戸が開きや
おざぶをあてよ……お座布をあてよ

仙吉もちろん、この歌と共に育ったはずだ。

仙吉はいつか気がついたのだろう。

宅見佳代子が村に来てから。山を荒らす佳代子の邪な意図を阻止するため、扉を開けて采家を守るのは自分の役目だと。

生駒はそう思ったかった。

仙吉が、私利私欲のために、多くの人を殺したのだとは思いたくなかった。

自分が聞いた歌の最後の歌詞。

せんのとがにや……千（仙）の咎がにや
おざぶをはずせ……お座布を外せ

生駒は、この歌詞が放つ意味を信じたくはなかった。

仙吉には咎めがあるというのだろうか。あるいは、任せられないというのだろうか。だから奈津は、最後まで仙吉を一族とは見なさ

なかったのだろうか。だから仙吉を、単に護衛役としてしか、扱わなかったのだろうか。

生駒はそうだとは思いたくなかった。

ただ、たとえ奈津がそうであっても、仙吉には自分がやるべきことは分かっていたのだ。栗の木を象徴とする采家を守るのは自分だということが。

仙吉はこれまで、采家の下男としてこき使われながら、あばら家に住み、厳しい貧乏暮らしを耐えてきた。本家が没落してからは、千寿や奈津、そして家屋敷を守るため身を粉にしてきた。

そして、佳代子と久米が来てからは、采家を守るための見張り役を自ら任じ、まるで下人の扱いを受けながらも、彼らの世話を焼いてきた。

しかし、やがてとんでもない計画が進み始めた。久米のアトリエ建設である。これは仙吉にとって、そして采家にとっても屈辱的なものだった。新しい建物が建てば法律的に権利が発生し、実質的に屋敷を久米にのっとられるも同然だったからだ。

仙吉は佳代子を殺し、猫の首を盛砂に仕込んで、これを断念させることに成功した。しかし、久米は村に来ることを止めようとはしない。

ついに仙吉は、気づいたのだった。久米が采家の家屋敷ではなく、財宝を狙っているのだと。そしてそれを、あの歌にあるように、自分が阻止せねばならないのだと。

あの夜、車のそばで身を隠しながら、生駒と奈津のやり取りを聞いていた仙吉の胸の内は、いかなるものだったろう。

采家がこのような状態になっても、自分は認められていない。あくまで東村の妾の孫であって、采一族ではないのだ。

胸が張り裂けそうだったろう。

おのずと、奈津や健治、そして西脇への反感はあったはずだ。しかし、胸の内を隠して、穏やかな村男を演じ続けていた。佳代子は殺せても、まさか身内を殺そうなどとは、夢にも思わなかったのだ。そして自分の役目は、采家を、そして財宝が眠るとされる滝を守る。強い意思で、そう言い聞かせていたはずだった。

あの岩穴での座談会までは。

岩穴で起きた諍い。

佳代子が圭子の連れ子であり、健治は佳代子を愛していたという。そして健治の一言。なんと！　そういうことだったのか！　仙吉さん！　あんたは。

あの言葉は、健治が佳代子の死が自殺なんて信じてはいない、という言葉と、西脇の口からこぼれ出た「せん」という言葉の後に語られたものだった。健治は仙吉に、佳代子他殺説の同意を求めたのかもしれないが、仙吉はそうとは受け取らなかった。自分が犯人だと名指しされた、と感じたのだった。

仙吉は恐れた。と同時に、怒りが湧き起こった。

これまで、采家のために自分がしてきたことの意味もわからず、この若造や西脇利郎は自分が犯人であることを暴こうというのか。今まで感じたことのないほどの空しさ、どこから吹き出てくるのかわからないほどの怒りが、仙吉を包んだ。胸は屈辱にまみれていた。そして、前後の見境もなく、その夜のうちに健治を殴り殺して、川に捨てたのだった。

生駒の胸に、再び後悔の念が押し寄せてきた。

久米と突っ込んだ話をしておきたかった。健治や恭介の事件が起きた日でも、葬儀の日でも。最悪、昨日の夜、あるいは今朝でも。

久米に、仙吉が佳代子や西脇や美千代のことをどう思っているのかを、聞いておきたかった。そうすれば、意外な言葉を聞けたかもしれない。

そして、あの日の夕方、恭介をアマガハラノまで探しに行く前、外へ久米が散歩に出て仙吉と連れ立って屋敷に戻ってきたとき、山から降りてきた仙吉と出会ったのではないかと確認しておきたかった。そうすれば、仙吉が恭介の死体を隠しにいったのではないかと、もっと早く気がついたかもしれない。

そして、財宝を狙っているのが自分達だけではないことに、気づいていたのかどうかも。気づいていたのなら、それが誰で、なぜ知ることになったのかを。そうすれば、岩代川の流れをせき止めた場所をもっと早く見つけ、西脇や恭介が姿を消した理由に、確信が持てたことだろう。

そして、こんなことになる前に、真相に近づけたかもしれない。奈津や美千代、そして久米や橘までが死ぬことになる前に、犯人を突き止めることができたかもしれない。

しかし、もう今や、生駒は手遅れとなった推論を寺井にぶちまけることしかできなかった。

犯人を捕らえることはできるだろうが、なんという空しさか。

「仙吉自身が、財宝を我がものにしようと考えていたかどうか。それは知りません。しかし、少なくとも仙吉は、そんな動きはしていません。財宝を守るために数々の殺人を犯したことは言っても、財宝目当てだったということは立証できません」

「健治を殺したのは、佳代子殺しを暴かれそうになったから。恭介を殺したのは、財宝を守るため、ということですね」

寺井がシラツと言ったが、そんなに簡単に片付けないでくれ、と

生駒は叫びたかった。

生駒は仙吉と話をしたかった。聞き耳頭巾をかぶり、鳥や木が語る仙吉の胸の内を聞いてみたかった。

「どちらも突発的な犯行だった、ということですか」

寺井がひとり合点している。

「突発的に恭介を殺したのは、西脇親子が滝を汚そうとしていることに気がついていたらです。怒りに火がついたのです。仙吉自身は、滝壺への隠された道を知らされていなかったのです。そういう自分の立場の情けなさ。その裏返しともいえる怒りだったのです」

「うーむ、それだけですかね。なんとなく、あいまいなような気がしますなあ」

久しぶりに寺井に反論されて、生駒は戸惑った。

「財宝を手に入れるつもりはなかった。千寿さんの遺産にも関心がなかった。目的は財宝を守るだけっていうのは、どうもねえ」

寺井には、動機がそれだけだというのは理解しがたいのだろう。

警察としては、もっと利に繋がる明確な動機が欲しいのだ。

「大葉仙吉は妾の孫です。ということは、千寿さんの遺産の相続権は、もともとないんじゃないでしょうか。そこらへんの法的なことは、詳しくは知りませんが」

そうはいいつつ、もちろんあるひとつの事実には気がついている。

寺井が薄く笑った。

「こういう事実があるんですが、生駒さんはこれについてどう考えられますか？」

大げさな物言いをして、どこことなく得意げだ。ようやく一矢報いた、という気分なのだろう。

「大葉ハナにも、そして仙吉にも相続権はない。それはおっしゃる

とおり。しかし、嫁の大葉真美、長男大葉秀一郎の妻ですが、彼女は采武雄の娘、つまり健治の妹です」

「そうですね……」

「つまり、健治が死ねば、妹の真美の取り分は倍になる。西脇家に相続人がいなくなればもっと増える。仙吉自身が相続するわけじゃないが、真美を嫁として迎えている大葉家としては、潤うわけじゃないですかね」

にやりとした。知っていたのだ。

真美と秀一郎夫婦は、大阪で居酒屋を経営していた。西脇の言によれば、その資金は真美の持参金でまかなったらしい。しかし事業は失敗……。

仙吉は金が欲しかったのかもしれない。十分なことをしれやれなかった息子や娘達のために。

生駒も、その可能性は否定できないでいた。しかし、それが一連の事件の動機だとは思いたくなかった。

実際、生駒は優と、こんな推論まで議論していたのである。たとえ金目当てであったとしても、仙吉は最終段階として、嫁である真美を殺してしまおうとまで考えていたわけではないだろうと。クスノキの子殺しという言葉が気になった上での話だった。

しかし、もう寺井にそんな話をする必要はない。事件は解決なのだ。

寺井が立ち上がった。刑事の肩からトランシーバーをもぎ取った。もうすぐ仙吉は捕らえられる。

「まだ続きがあるわ」

優の声が、寺井の指示を遮った。

「えっ。そうですか。それもお聞かせ願いますが、取り急ぎ容疑者

の身柄だけは拘束して」

「その必要はない」

優はうつむいたまま、厳しい声を寺井に投げつけた。

第 34 章 「おいしいこいし」

「は？」

「座りなおして」

「しかし」

優が顔を上げた。笑みのかけらもない表情で寺井を一瞥すると、祠に視線をやった。

「私の話は、その後日談みたいなもの。というか、最後の方は若干だけ補足があります。想像ですが」

そういつて口火を切った。

仙吉は、あの穴が滝へ繋がっていることを、今では知っている。

ただ、抜けて行こうとは考えなかった。万一、日々監視を強めている奈津や美千代に見咎められでもしたら、と思うと、とてもできることではなかった。

また、警察の耳にでも入ろうものなら、警察は確実に三つの殺人事件は仙吉の犯行だと暴くだろう。財宝を独り占めしようとした仙吉が彼らを殺したと。

それでも財宝は自分が守らねばならない。どうすればいいか。仙吉は悩んだ。

奈津に許可を得ようにも、彼女が今更認めてくれるとは思えられなかった。

葬儀の日、仙吉は西脇が釈放されるという情報を得た。

西脇はすぐに、恭介が殺された本当の理由を探し始めるだろう。同時に、すぐさま滝の財宝を狙うだろう。西脇もまた、久米が狙っていることに気づいているだろうし、みすみす久米に譲るとは考えられないからだ。

仙吉はあの穴から下へ降りてみることを決心した。

葬儀のあった夕、仙吉は山に入っていた。

ところが先客がいた。前に行く人影。

奈津だった。

後をつけていく仙吉。

岩代神社に着くと奈津が立ち止まった。背負っていた風呂敷包みから、生成りの衣装を取り出して着替え始める。着ていた緑の着物を畳むと、獅子岩の注連縄に挟んだ。そして、膝を折って祈る。やがて立ち上がると、さらに登っていく。

日が暮れた。

奈津は夜目が利くのか、電灯をつけない。ただ、一歩ずつゆっくり歩を進めていく。仙吉は懷中電灯をつけた。奈津に気づかれたら、それはそのときのこと。今の思いを説明するしかない。しかし、奈津は振り返らなかったし、仙吉に気づいている様子もなかった。

祠に着いた。やはり奈津は、あの穴から下へ降りていく。

そのとき仙吉の目の隅に、懷中電灯の光がふたつ、登ってくるのが見えた。

あわてて自分の懷中電灯を消し、近づいてくるふたつの明かりに眼を凝らした。

こちらには気づいていないようだ。久米と橘か、釈放されたばかりの西脇と圭子か。仙吉は草むらに身を隠した。

久米と橘であれば、まず、橘を倒さなくてはいけない。正面を向いて橘と渡り合うのは分が悪い。久米が先に穴に降りていき、橘が後であれば、こちらに勝機はある。恭介と同じように背後から一撃で仕留めれば……。きつと久米は先に穴に降りていく。うまくいく

はずだ。

西脇と圭子だった場合は、西脇さえ倒せばいい。しかし、圭子はどうする？ 殺すしかないのか……。

突発的な怒りで、健治や恭介を殺したときには感じなかった恐れが、体の芯に溜まっていた。

仙吉は悩んでいた。やるしかないのか……。

いつしか雨が降り始めていた。

ふたつの明かりは、もうずいぶん近くまで登って来ていた。

仙吉はナタを握り締め、結論は出ないまま、息を潜めて明かりを見つめた。

しかし予想は間違っていた。

ふたつの明かりは、祠の草むらには入って来ず、アマガハラノへの道に行く。いや、違う。微妙に祠を遠巻きにしていく。いまさら躍り出て、追い掛けるわけにはいかなかった。たちまち気づかれ、ふたりを同時に相手にすることになってしまう。つけていくかとも考えたが、いずれにしろ彼らの行き先は、滝に違いない。仙吉は迷わず、奈津を追って穴を下りていくことに決めた。

ふたつの明かりが見えなくなるまで待って、仙吉は草むらから抜け出し、穴を降りていった。

月も星もなく、濡れたガレバは真っ暗闇だった。

奈津に会えば、誰かが別ルートで行こうとしていると、今日撃したことを話そう。そして財宝を守れという明確な指示を出してもらおう。

そう考えながら、先へと進んだ。ようやく丸い巨石のところまで

来た。右側に隙間を見つけ、慎重に体を入れていった。

あつ、と仙吉は声にならない声をあげた。

顔面をはたかれたのだ。

目の前に奈津がいた。石の上で胡坐を組んで睨んでいた。

仙吉は後ずさりした。

それほど奈津の形相はすさまじいものだった。クワツと開かれた口から、きさまもか！という言葉がほとぼしり出た。

奈津に会えばと、さっきまでの考えは、口から出てこようとはしなかった。

闇の中でも、奈津の瞳は煌々と光り、この世のものではないように見えた。

この先に行くのなら、わしを殺してから行け！　じゃが、この谷から二度と生きては出られぬ！

恐怖が襲った。

白装束の袂から突き出た細い腕は、鋼のように黒々と鈍く光り、逆立った髪は熱気を帯びているのか、雨が煙っていた。

異様な光景だった。崖と巨岩に挟まれた狭い空間。とんでもないことが起きる。

そんな恐怖が仙吉の胸を貫いた。

「ちがう！」と叫ぶと、仙吉はもう後をも見ずに逃げ出していた。がむしゃらにガレバを戻っていった。シャワーをいくつも潜り、やっと仙吉は振り返った。奈津は追っては来なかった。

しかし、仙吉には一瞬の安堵もなかった。

再び縮み上がるようになった。すぐ近くから人の声が聞こえたの

だ。

「おい、待て！」

生駒の声だった。

仙吉は、ほとんど滑り落ちるように岩の隙間に身を隠した。幸いにも生駒達は、探そうとはせず、すぐに引き上げていったが、仙吉は混乱していた。自分ひとりでは役目を果たせそうにないと思った。彼らに話すか。生駒は味方になってくれるかもしれない。しかし道長は久米の……。しかも綾は橘の娘……。おばあさんと呼びかけてはいたが……。それとも美千代に話すか。結論が出ないまま、祠の脇の草むらに長い間留まって様子を見てから、山道を戻っていった。

もう、ふたつの明かりの行き先を、追ってみようとは思わなかった。道がわからなかったし、逆襲される恐怖の方が大きかった。奈津があそこに居座り続けることは、もう確信めいたものがあつた。あのままでは死んでしまう……。一刻の猶予もない。美千代に話すしかないのか……。

翌朝、仙吉はなかなかガレバに向かうことができなかった。

久米が朝早くから、屋敷の裏の空地の隅で畑仕事を始めたのだ。山に行くには目の前を通らなくてはならない。村人を欺く久米のこんな行為に、何度齒軋りしたことだろう。

もはや、財宝を手に入れようとしている現場を押さえるか、あるいは殺してしまうしか手はない。常日頃から胸に渦巻いている怒りが、また頭をもたげてくる。いずれにしろ早く奈津に伝えねば。

綾の話では、奈津は山から返って来ていないという。

仙吉は、川向こうの畑からイライラしながら久米を見守った。昼近くになってようやく橘が現れ、ふたりで山に入っていた。仙吉

は用意しておいたロープやナタを抱えて、後を追っていった。

久米と橘は、ガレバへの穴ではなく、昨夜と同じく迂回路をいく。あのふたつの明かりは、やはり彼らだったのだ。

縄梯子を使って降りていく。まずは久米。次に橘。

今だ！と仙吉は躍り出て、縄梯子をナタで切り落とした。叫び声と共に鈍い音が聞こえてきた。覗き込むと小さな池の縁にふたりが倒れていた。しかしまだ動きがある。

仙吉は祠にとって返し、ガレバを突き進んだ。

巨石を回りこむ。もう躊躇はしなかった。

久米と橘はまだ生きている。奈津を救わねば！

奈津は、昨夜と同じところに座っていた。しかし、もう仙吉に声を荒げようとはしなかった。すでに冷たくなっていたのだった。

九十を過ぎた老婆には、雨に打たれて一晚を過ごす体力はなかった……。

奈津はここで自らの死を賭して、財宝を守ろうとしたのだ。奈津自身が選んだ死に場所だった。

いずれ村に連れ帰ることになるかもしれないが、今しばらくは、あるいは未来永劫、この場所で虚空を睨みつけているのが奈津の望みだろう。仙吉はそう考えて、奈津のむくろに手を合わせた。

奈津の体が、石からずり落ちかけていた。

仙吉は奈津の体越しに滝壺を見た。動くものはない。久米や橘が潜んでいたとしても、出口はもうここしかなく、しかもこちらは坂の上。

ピストルでも持っていたらまずいが、今にも石から滑り落ちてしまいそうな奈津をこのままにしておくことはできない。

仙吉は滝壺に注意しながら、奈津の体をしゃんと座らせ、持ってきたロープで石に突き刺さった芯棒に括りつけた。

「ばあさん、これでいいか？ あんた、最後まで俺を信用してくれなんだなあ」

と、奈津に微笑みかけた。

しかし、その笑みはたちまち凍りつく。

人がガレバを降りてくる。生駒や道長の顔、そして警察だ！

この隙間に、身を隠すところはない。出ていけば見つかってしまう。

仙吉は地面に放り出したナタなどをあわてて引つつかむと、思い切って奈津の体を乗り越えた。ロープの端が奈津の足にかかっていたが、それはもう引き込むことはできなかった。生駒が岩の隙間に入ってきたからだった。仙吉は丸い巨石の陰に身を隠した。

第 35 章 「ノブ、ずるいちゃん」

ため息をついて優が立ち上がる。

「ガレバの土砂をどけてみられたら、奈津さんだけでなく、仙吉の死体がないか、ポンプや発電機などがないかも、お調べになることをお勧めします。さ、ノブ、行こう。綾ちゃんが心配」

そういつて、生駒に手を差し伸べる。

生駒は立ち上がろうとした。

しかし動けなかった。なぜか尻が上がらなかった。

まだ立ち上がるわけではない、という感触もあった。

寺井が優に、胡散臭い目を向けていた。

優もそれに気づいただろうが、彼女とて今の話を証明することはできない。唯一の根拠は、綾があの日、ガレバに人の気配がしたと言ったことだけ……。

トランシーバーが声を上げた。

「土砂から采奈津の死体が発見されました。それから男女の死体も出ました。大葉仙吉、采美千代だと思われます」

寺井が眼を剥いた。

「やっぱり仙吉は、美千代さんに打ち明けたんやね。そして、ふたりで奈津さんを救いにガレバに降りていったんや」

優が目を閉じて、頭を垂れて呟いた。

「打ち明けた？ 大葉仙吉は、健治殺しや恭介殺しを美千代に告白したというんですか？」

「でなきや、なぜガレバまで奈津さんをつけていったのかを話にくいやん。自分の使命を言わなきや」

寺井はその他の可能性を考えているようだったが、もう、それをぶつけてはこなかった。

生駒も優も、どうでもよかった。

殺されたものも、殺したのも、そして自ら死を選んだものも、正当に扱われるのであれば。

「遺産は誰と誰が、受け取ることになるのかな……」

そうは言ったものの、遺産のことなど、どうでもよかった。

ただただ、悲しかった。千津は、老人ホームのベッドの上で、ほとんど死に絶えてしまった一族のことを、どう思うのだろう。

「千寿さんがどうするか、わからないけど……」

「あっ、そうそう。寺井さん。佳代子さんのことやけど、彼女の実の父親が誰かって、お調べになりました？」

「は？ いえ……」

「大葉仙吉」

「ええっ？」

寺井の驚きより、生駒が飛び上がりそうになった。

「クスノキの予言。虚ろに泥む子殺しは、山神の裁きを受けるであろう……」

「あああっ！」

「こんなふざけた財宝話や、神格化された滝やとか、そこに転がってる中身のない祠とか、そんな虚ろなものに拘って、人を殺してしまった仙吉……」

「なんという……」

「あのときの抱きつき方は、ね」

「それを仙吉は……」

「知らなかったんやない？」

生駒は大きく息を吐き出す。

「ふーう。そうであって欲しいよな。でないと、彼女があまりに……」

「西脇さんは知っていたと思うよ。たぶんね」

「そうなのか……」

「だから、岩穴であのとき、佳代子さんのことでもめたとき、仙吉っていう名前を出しかけた」

「健治が過剰に反応した、せん、という言葉」

「うん。でも、それは違った。西脇さんは、健治さん殺しの犯人としてではなく、圭子さんに佳代子を生ませた男の名として、仙吉の名前を飲み込んだ……」

優の視線は、生駒の頭の上を通り越していた。

振り返ると、西脇が突っ立っていた。

いつから聞いていたのだろう。がくりと膝を落とすと、両手を地面についた。

空を見上げた。

夕焼けの空に、鷹が舞っていた。

「綾ちゃん、聞き耳頭巾、ノブにまだ貸してくれるかなあ」
優が話を締めくくった。

大葉という苗字の由来。

平石の上で殺された吾一の子孫は、どんな苗字を自分達につけたのだろう。

吾一の血に染まった平石の下の青しそ、大葉……。

ふたりで想像したその話を、優はしなかった。これ以上、想像を膨らませた話を、警察の耳に入れる必要はない。

すべては終わってしまったのだから。

生駒は、今度は立ち上がることができた。

めまいがした。

意識が吹き飛ぶくらいに激しく、しかし、どことなく待ち望んでいたような安心感のあるめまいだった。

鳥の歌が聞こえてきた。綾の言ったとおりの歌詞……。

視界が暗転し、ぼやけてきた。

と、優の腕が、生駒の体を抱きすくめた。

「ノブ、大丈夫？　顔色悪いよ」

「そりゃあ……悪いやろ。こんな……結末で、今更、なにがわかって……」

気がつくくと、生駒は屋敷の庭に立っていた。

綾の瞳も、不安そうに見つめている。

「ノブ、急に大切な石に座り込むんやもん。罰が当たるよ。石は割れるしさ」

眼を落とすと、生駒は平石の脇の、小さな石に座り込んでいたようだ。

そのトキの石、権現さんの像が真っ二つに割れていた。

「んんん？」

「いったい、どうしたんよ！」

「今、割れたんか？」

「え？　今？」

「いつから座ってたんや？」

「はあ？ なに言うてんのん。たった今やんか！」

生駒は頭巾を取り、綾に返した。

「さあてと、今日の葬式は何時からやったかな？」

生駒は、晴れ晴れとした顔でいった。

「ノブ、もしかして……」

「おおいしこいしの、小さい方の石つてのは、この権現さんの石のことやったんやな」

「はあ？ 聞き耳頭巾で、わらべ歌の歌詞の意味も聞いたとか……」

水の溜まった針の穴とは滝壺の中の横穴のことだろう。

あれを潜り抜けていけば、アマガハラノの栗の木の横の井戸に繋がっているのだ。聞き耳頭巾がなくても、迷わず栗の木に行き着くように設けられた抜け道。自然にできた岩の裂け目なのだろう。

その秘密が、采家を守るものという話になり、財宝の話へと変化していったのだ。

「財宝か……」

アマガハラノで迷うことを確かめた上で、あの井戸を降りていけばその真否は確認できる。

しかし、もちろん生駒にそんな気はない。

「それも、わかってしまったとか？」

優が顔を輝かせている。

生駒はニツと笑った。

たくみのゆめ、は宅見の夢ではない。匠の夢だ。つまり建築家である生駒が見る夢。

鳥が歌った二番の、「せんのとがにや、おざぶをはずせ」は、仙吉の咎や無力を揶揄したものではなく、事実を暴くために、生駒にこの石の上にじかに座れと呼びかけていたのだった。

「わわわっ、ノブ、ずるいやん！ まさか、犯人を！」

「ユウの推理もなかなか」

橘文雄が綾を迎えに来て、相変わらずブスツとした会釈だけを残して帰っていった。

「生駒さん、何もないけど、朝食の準備ができましたよー。急がないと、健治さんのお葬式に間に合わないよー」

松の間から、久米が呼ぶ声が聞こえた。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5402h/>

ノブ、ずるいやん

2011年9月20日03時24分発行